

国民同胞感の探求

—阿蘇における大学生との“合宿教室”から—

大学教官有志協議会
国民文化研究会
共編

理想社

はしがき

いまの日本には、人と人との心のつながりを断ち切ろうとする一種異様な雰囲気がある。すべてのものを矛盾と相剋^{そごく}の姿の中にとらえたり、また現存の秩序に対する憎悪^{ぞうあく}の対立感情をかきたて、それが深刻化しなくては、将来の栄光を夢みることが許されないとするような殺伐な空気が、時代の底を流れている。こうした風潮が生まれた理由が、いま、一世を風びしている階級史観にあるのか、あるいは敗戦による国民的目標の喪失によるのか、それはどうあろうとも、とにかくこのようなことでは、心豊かな社会をつくりあげることは不可能である。

この相剋と憎悪の漂う暗い谷間から、また殺伐な精神の荒野から、われわれはどのようにして脱出するのか。それがどんなに困難なことであっても、その糸口を発見し、その道筋を切り開いていかなければならない。それは戦前の教育を受けた年長者たちの責務か、はたまた新教育のもとに生育した青年、学生たちの任務なのか。いな老いも若きも心を一に結び合って、すべての国民に共通した課題として、それと取り組まなければならぬであろう。

われわれを生み育ててくれた両親は、子どもの心の中に親を敬愛してやまない気持が、いつまでもたたえられていることを祈っている。またわれわれを生み育ててくれた日本の国も、日本を愛してやまない人物の出現を、どれほど待ち望んでいることであろうか。狭い国土にうごめくように生活し合っている国民が、どうしていまのように相剋と憎悪の世界に飛び込んでしまったのか。

もともと自然の風光を心ゆくまで賞でる豊かな心の持主である国民、正義観が強く、貧しく弱く人に涙を流すことのできる国民、年老いたものをいたわり、傷つきたおれたものを慰めずにはおられないこの国民。きのうまでそうでありえた日本国民同胞。その日本の国の中に、お互いに相信し相和するみちが、すっかり影をひそめてしまったとは、われわれにはどうしても思えない。

その道を求めよう。いまから、その道筋を踏み分けていこう。はてしなく続く遠い道程であろうとも——。この美しい国土の上に、いのちのあるかぎり、その道を。

こうした観点に立って、いまの時代を凝視し、失われようとする「国民同胞感」を探求するため、大学教官、社会人有志の合同企画によって、昭和三十四年夏、九州阿蘇山麓に学生を中心とした約百六十名のもの

が、四泊五日の研修合宿を行なった。本書はそのときの記録である。

「合宿教室」と名づけたのは、従来世間によく行なわれる合宿とか研修会とは、内容と趣きを異にしているからである。本書が全国の大学の学生諸君、教授各位をはじめ教育・社会・思想問題などに関心をもたれる方々、とくに日本の将来に深い憂いをいだいておられる各界有識者各位の目にとまり、卒直なご批判を寄せていただければ、主催者であり編者であるわれわれにとつて、これ以上のしあわせはない。大方のご叱正を賜わるよう切望してやまない。

昭和三十五年三月二十五日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき……………一

「合宿教室」誕生の背景……………九

一 現代の国民思想について……………一〇

二 全学連の動きについて……………二二

三 全学連にどう対処すべきか……………二七

四 時代の断層と取り組んで……………三〇

「合宿教室」運営のあらまし……………三七

一 講義と班別討論の関連性……………六六

二 チューターシップ……………三三

三 人生観に裏づけされた諸講義……………三六

阿蘇“合宿教室”の記録……………三五

一 未知の者ここに集う(第一日)……………四七

あいさつ「国家復興の底力」……………野口 恒樹…四七

〃 「積極的平和への道」……………小田村寅二郎…五〇

講 義「人生・学問・祖国」……………川井 修治…五〇

所 見「学生生活に対する要望」……………宝辺 正久…六〇

班別討論……………六四

講師、班指導員による検討会……………六六

二 緊張する心を講義と討論に(第二日)……………六九

講 義「現代と心理戦」……………今立 鉄雄…七三

〃 「学生運動への疑問点」……………植木 九州男…七九

〃 「社会思想の構造とマルクス主義」……………長野 敏一…九六

班別討論……………一〇〇

目

次

講義「學問論」……………	戸川	尚	一一三
班別討論……………			一一五
講師、班指導員による検討会……………			一二七
三 心の揺らぎと青春の歡喜と <small>よろこび</small> （第三日）……………			一三一
講義「陶淵明の詩における東洋的人間像」……………	津下	正章	一三三
〃 「わが国固有の人間観の特徴」……………	野口	恒樹	一四五
大觀峰登山（レクリエーション）……………			一六七
講義「日本人のころ」……………	花田	大五郎	一七一
懇親会（コンバ）……………			一八〇
講師、班指導員による検討会……………			一八三
四 〃時代の断層〃をふみ越えて（第四日）……………			一八七
講義「マルクス経済学の生成と近代経済学」……………	石村	暢五郎	一八九
〃 「畏 <small>い</small> と敬と恥」……………	水野	武夫	二〇六
班別討論……………			二二三
講義「第二次大戦論」……………	中山	優	二三四
臨時講義「この合宿のめざすもの」……………	小田村寅二郎		二四七

班別討論	三六〇
意見発表会	三六一
講師、班指導員による検討会	三六五
五 国民同胞感の生成へ（第五日）	三六九
講 義「歴史なき現代に思う」	木下 彪……三七一
〃 「マッカーサー憲法と国民主権」	森 三十郎……三六八
〃 「平和国家建設の基本的課題」	小田村寅二郎……三九九
あいさつ「国民同胞感のもとに」	川井 修治……三九八
〃 「気宇を廣大に」	花田 大五郎……三九八
はしりがきの感想文から	三五一
あとがき	三六四

”合宿教室”誕生の背景

一 現代の國民思想について

「私は思想のことはよくわかりませんので……」などと、よく口にする政治家が多いことは、その国の政治の低さを示す。「僕は思想問題にあまり関心がありません。趣味はスポーツと健全娯楽です」などと、入社試験の面接で学生が答えると、重役はじめ会社の幹部が、とたんにホッとした表情になる。このような事例は、その国の文化水準の低さを示す。

いまの日本では、思想とか思想問題とかを、何かしら片寄ったものと考えがちである。思想を敬遠する風潮の強いことは、決してほめたことでも、喜ばしい傾向でもない。思想問題というと、右か左かのいずれかということに決めてしまつて、健康で中庸な意識や思考は、思想問題に触れないところに成り立つというような錯覚が、戦後だけでなく、戦前から常識化されてきた。

こうした傾向の強い時代は、思想的変革が政治革命に発展するのに都合の時である。戦時中のように、国体觀念が全國民に徹底、統一されているような外観を呈していても、また現在のように民主主義がすべての行動のウタイ文句になっていけば、それで事足りるように思われても、要は同じである。国体觀念にしても民主主義にしても、真に國民の心に納得たつされていなければなんの役にも立たない。

敗戦直後における日本の変わり方などその好例であった。忠君愛国も、天皇帰一も、思想的確信に立ってそれを口にしていたのではなくて、みんなのいう言葉や思想に同調していれば、それでいいとする安易な人生態度が、それらの言葉を口に出させていたに過ぎない。また人々の愛国心も、長い国民生活の伝統からきた一つの「惰性」で、思想的把握の結果として国民の心の抛り所になっていたとはいえなかった。当時はだれも自分たちの愛国心が、そんな浮薄なものとは思ってもしなかったはずであるが、いまからみればそのように指摘されても仕方がない。なぜならば日本の国体——きのうまで国民がいのちをかけてそれを守ろうとし、また守らねばならぬとお互いに誓い合っていたもの——が瞬時にして変容することを許してしまったからである。

いまの民主主義も、あすは同じ運命の下に、別の政治革命によって消え去らないとも限らない。もしも日本国民が、戦前戦後ばかりでなく、いつまでも同じように思想問題に対して敬遠的態度を持ち続けるならば、敗戦後の政治変革と同様わけもわからぬままに、別の思想をあすからのスローガンに取り替えないとは限らないからである。そのようなことは断じてありえないとい切れるものが、いまの日本に一人でもいるであろうか。断じてそうはさせないと意気込むことはあっても、大勢を未然に防ぎとめる自信があるかどうかということは別問題である。

一 国の将来を予測するには、つねにその国の青年学生の動向をみればよいといわれる。その国の青年や学生たちの志向が、高邁であるか、卑賤であるかは、確かに大きな分岐点であろう。その国

の若人たちの資質が堅実であるか、柔弱であるかによって国の運命が左右されることも、古今東西諸国民の興亡の歴史がよくこれを示している。しかし高邁とか卑賤とか、また堅実とか柔弱とかいう抽象的な比較は、もはや国家の運命を測る尺度ではなくなってきた。卑賤な志や柔弱な資質を不可とする青年学生たちが、決して少なくないにもかかわらず、その人たちの志向するところが、自国の運命の断滅をはかる方向に進む場合には、もっと別な角度からの見方が必要になってくる。思想が国家にとって大切な問題点となってくるのはそのためであり、思想の内容、考え方の方向について、厳密な検討がなされなくてはならない理由もそこにある。思想や思想傾向を離れては、とうてい青年、学生を評価する尺度も整わないし、ましてや国の将来を予測するに、青年、学生の動向をもってすることも不可能になる。思想問題、とくに思想についての判断力の養成を敬遠し、軽視する傾向は、いかに国家の運命に重大な関係があるか。このことについての各界指導層の考え方を根本的に一変する必要があるはしないか。

二 全学連の動きについて

二年ばかり前のことであるが、当時全学連の中央執行委員をしていた一人の東大学生と話し合う機会があった。ぶしつけな質問に対するその学生の答えは、深刻にいまも筆者の耳の底にこびりつ

いている。いな最近、国会乱入デモや羽田空港不法占拠など企學連の運動が、激烈になるにつけ、いまさらのようにそれが思い出されてくる。

「企學連の中央執行委員をしておられるあなたは、共產主義革命実現の理想に燃えておられることと思うが、そのような思想や考え方は、いつごろ、どうして身につき、そして固まっていたのですか」

というのが筆者の質問であった。見るからに聡明そうなまなざし、全身に学生らしい素直さを漂わしていた彼は、すこしばかりためらっていたが、おおむね次のようにキツパリと答えてくれた。

「高校生(新制)のころから私にはいまの日本がずいぶん矛盾だらけに見えてきた。政治家や実業家たちの腐れ縁も新聞をにぎわしていた。上層部の人たちの邪悪が、自分の心をとらえて離さなかった。やがて私はなんとかして世の中を改善する方法はないかと考えるようになった。書物も読みたくなかったし、正義感からくる世の中への憤りも強くなった。その時たまたま、ほんとうに偶然であるが、手にするようになったのがマルキシズムの本であった。そしてそれを教え導いてくれる年長者と接する機会が与えられた。それからというものは、ただひたむきに心をはげませながらそれを学んできた。

しかし、もしも私が高校生のときに、マルキシズムでない別のものに触れ、それを教え導いてくれる人たちに接していたとしたら、私はその方向にまっすぐに進んでいたかも知れない。いま

から考えてみても、その時はそれほど社会悪に憎悪と憤りを感じ、世の中をよくする方法を求め
る気持でいっぱいであった」

そして彼は最後に一言つけ加えた。

「しかしその時はそうであったが、いまとなってはもう考え直す気はなくなっている。よりよ
きものを教えていただければ、それを学ぶ気持を持たないものでもないが……」

と。その終わりの一言だけは、全学連の中央執行委員の一人であることを意識して、つけ加えた不
自然さが感ぜられたが、それにしても彼の語った言葉は、聞くものの胸中をギクリと突きさすよう
なものがあった。それは確かに彼自身の過去を回顧した素直で明快な言葉であった。

青年諸君が現実の社会に対して正義感からする反発を感じないとすれば、それこそきわめて嘆か
わしい事態であろう。彼のような学生が、社会悪に心をとどめ、世の建て直しを志すのは尊いこと
である。しかし最も大切なことは、物心のつく青年期に彼の前に提示されたものが、いわゆる進歩
的文化論やマルキシズムだけであって、なにゆえに基本的な社会観や国民感覚についての常識が、
与えられなかったかという点であろう。彼ばかりでなく、ほとんどすべての学生たちが、同じよう
な道程をたどりながら、社会に送り出されているのが、日本の実情ではあるまいか。自分が生を受
けているこの国土が、平面的な地域社会の一部としてだけ理解されているときには、その国土にし
みこんだ国民の伝統的な感覚も、そこに積み重ねられた先人の人間的労作の成果も、ともにきわめ

て古くさく、値打ちの乏しいものに感じとられるのは当然であろう。これでは新しいものにだけ価値を認めることにもなろうし、日本以外の他国のものをあこがれるのも、やむをえない成り行きではないだろうか。

自由主義国家群と友好関係にある日本の社会悪の原因を求めるに当たって、それが自由主義にあると断定してしまい、それを打破する方策を、それと対立する共産主義に求めるのも、その正義感のはけ口が、ハッキリ示されていないからであろう。国民感覚や祖国への理解について、ほとんど教えられていない現代学生たち。彼らが当然歩まざるをえなかった道程について、この全学連の東大生は、いみじくも的をえた答えをしてくれたようであった。

戦後から今日までのいわゆる「新教育」を受け、現在の大学に通う学生たちが、そのような方向に進まないとすれば、むしろその方が不思議なくらいである。青年、学生には、青年、学生としての天賦[†]の資質があるからして、悪を憎み、善を求める気持が、具体的解決方法を求めていくのは当然であろう。しかしその少年時代に、また学生として大学にまで進むようになっても、それらの学園の中で国民的自覚を教えられなかったとすれば、また抛るべき祖国の伝統や長所が、身につけられなかったとすれば、青年、学生たちが、いちずに社会革命のイバラの道に突入していったとしても、彼らを責めるなんの理由もないと思う。いなむしろ、混濁と邪悪と偽瞞^{まへん}の集積から脱出しようとする正義感と、それを持ち続けようとするたくましい迫力と純潔さの中に、日本民族の正義の血

潮が、変形された形とはいえ、温存されているとさえみることができると思う。彼らの行動が過激化し、常規を逸することは批判されるべきであるが、それは別として、その道に進まざるをえなかったプロセスを見落してはなるまい。知性と青春と熱情と捨身と、それらを殉教的気魄げいぱくに統一し、みずからの信ずる方向に集中する姿、世の邪悪を吹き飛ばそうとする彼らの清新なエネルギーにも、注目を寄せるべきであろう。もちろんその中に、学生や勤労階級を引きずって、革命の野望を実現しようとする少数の策謀家がいることや、また思いついた英雄主義者が、少なくともことは否定できない。だが、全学連に所属しているとはいっても、その中の多くの学生たちには、年長者の世界にび浸している右顧左弁や、利害打算などが、全くかげをひそめていることだけは、われわれが忘れてはならないところだと思う。

立派な日本の青年学生たちをなぜそうした方向に進ましめたのか。問題はそこにある。しかしそうだからといって、彼らに直接の影響を与えたマルキストや、進歩的文化人、またそれに同調してきたマスコミの人たちを、いまここでいたずらに攻撃しても仕方がない。それよりも、それらの人たちに活動の場を与え、青年、学生の指導をまかせてしまった教育体制。それを戦後十五年にわたって傍観してきた世の指導者に対して、この問題を提示したのである。経済の復興に急であつたとはいえ、青年学生に代わる国家の財宝はありうべくもない。この宝を放棄して、どうして祖国の発展が期待できるというのであろうか。

三 全学連にどう対処すべきか

全学連の運動は、過激化の度合いを加え、昭和三十四年十一月二十七日の国会乱入デモ事件に引き続いて、昭和三十五年一月十六日未明には、羽田空港不法占拠事件を起こすにいたった。国民はいまさらのように全学連に驚きの目をみはり、世の識者たちの深い憂いも一段と濃くなってきた。確かに彼らは、目的のためには手段を選ばぬ段階に突入している。平気で、法律条例を無視すると公言し、その行動は現存の法秩序を破壊しようとして、とどまるところを知らぬ有様である。彼らの眼中、すでに法治国民たるの自覚なく、自己の信奉するマルキシズムの殉教者たらんとするだけである。さらにその立て役者たちが、国立の最高学府といわれる東大、京大等の学生であるに及んでは、その思想、行動が青年学生に対する伝播力も、決して過小評価すべきではなからう。それは共産主義運動の拡大、強化について、申し分のない条件を備えているとみるべきだからである。

羽田空港不法占拠事件直後、全学連に対する治安当局の追及はきびしく、また全国の大学当局には文部次官通達が発せられたと伝えられた。それは全学連幹部を大学から除籍せよという通達であるといわれている。もとより、法秩序破壊の行動に対し、法的規制がとられるのは当然で、職業革命家とみられる学生を、授業料を払っているからといって、いつまでも大学に置いてやる必要はな

いと思う。職業革命家の学生服グループは、長い間無秩序のままに放任され過ぎていたのであるから、正當な学園の雰囲気立ち戻らせるためにも、それらのことは効果のある措置となることもあろうと思われる。

しかし問題はそれだけでよいかということである。教育界に対する法的規制には、はじめから一つの限界がある。ましてや、こと思想に関する分野については、法的規制や秩序保持のための行政的措置などは、効果の限界があまりにもはっきりし過ぎていて、そこでこのことについて何が大切であるかを究明して置く必要がある。

一 全学連の学生たちが、その方向に進んだ理由をどこに求めるか、法的規制に先立ってそのことが、明らかにされているかどうか。

——教育を受けている過程にありながら、誤った方向に進んだ学生たち、しかも一人や二人ではなく、多数の学生たちが進んでしまったということは、その学生たちが受けてきた教育による当然の帰結でありはしないか。あるいは教育の面で、その方向に積極的な指導が、なされなかったにしても、その方向に進むことを暗に示唆し、教唆するにひとしいさまざまな講義がなされていることはないのか。

もしそれらの点について、ここに提示した仮定が、全く根拠のないものであるならば、いまの教学のあり方、教授、講師の選任などについての反省や、研究は必要ないと認めてもよい。また

行き過ぎた学生に対する教導的作業を現学園、現指導教授にそのまま託していけばよいと思う。

二 しかしもし前記の仮定が、事実と符合するものであるならば、どのように全学連の学生たちに対処すればよいのか。それを考究しなければならぬ。——教育の影響によってその道に進んだ人々に対して、その方向を転換せしめ得る方法は、法的な規制措置ではなくて、教育そのものによらなくては不可能である。まずこのことがはっきり把握されなくてはならない。次に思想の影響によって一つの方向に進んでいるものに対して、その思想の誤りを悟らせるには、思想そのものによらなくてはならない。この当然の理屈をよく念頭に置くことが絶対必要である。

三 その次に忘れてならないことは、「意志」は「意志」によってのみ喚び起こされ、「精神の改革」は、「精神」によってのみ達成されるということである。

四 このように考えてくると、学生を誤った方向に導いてきた今日までの教育こそ、もっとも大きな反省の対象として取り上げられなくてはならない。教育内容やさまざまな講座の配列もさることながら、直接学生たちに講義し、教育してきた内容がどのようなものであったかが、最も大切な焦点となってくるであろう。個々の教授が、学園内で自由な講義をすることは、もとより学の自由によることであるが、学生たちに教えるにふさわしくない学問なり思想なりに対して、学の自由の名のもとで、祖国に弓を引く道を教えさせてよいわけはなからうと思う。

全学連の問題をつきつめると、このような課題に直面してしまう。しかし大学の学風をどうする

とか、教授たちの思想をどう扱うかというようなことになる、現在の政治家や文教当局者は、全くそれに四つに取り組む自信を持ち合わせていない。まことに遺憾なことだが、事實はまさしくその通りである。従って全学連の問題も、それを教育的見地から、また思想的見地から対処し処理することが必要であるが、肝心のそれが政治家や文教行政当局に欠けている、ということになりそうである。政治家に小言をいってみても、文教当局の怠慢を追及してみても、結局どうという効果をもたらずのものでもなさそうである。いいかえれば、終戦後の日本に立てられた「民主教育」なるものは、看板だけであって、中味は各人各様勝手放題にせよ、といわんばかりのやり方が認められてきた。すなわち、教育についての国家の基本方針にも、具体的内容を欠いていたのであって、いまのままではどうにもならない、というだけのことになってしまったようである。

四 “時代の断層”と取り組んで

現代教育、ことに大学生の教育環境について情勢分析をしてみると、以上のような結論が出てしまう。すなわちいまの状態を本質的に改善する方法として、将来はともかく、現状に即応した方策は立つ見込みもない。政治家個人個人の中にはよい理解者があるうとも、文教当局の内部に良識が残っているうとも、いずれも政治として文教行政として、その方向を整え、国家百年の計としての

教育方針を打ち立てる力が整っていないからである。

いつまでもこれを見過ごしているわけにはいかない。全国民からいえば九牛の一毛にもおよばないわずかな人数であろうとも、何人かの力を合わせてみれば、なにがしかのことはできるだろう。わずかな効果と、ささやかな影響しかないにしても、手をこまぬいてみているよりはました。われわれの力相応のことで、やれるだけのことはやってみよう。こういう気持ちから、この「合宿教室」の企画が生み出されたのである。

主催した二つの団体は、団体というよりも小さなグループに過ぎない。その一つが大学教官有志協議会であり、一つが国民文化研究会と名づけるグループである。前者は九州、中国および関西地方の国、公、私立大学のなかの教授、助教授たちの任意グループで、後者は戦前の学生時代（昭和十五、六年ごろ）お互いにいろいろの研究活動してきたものが、いまま交わりを続け、心を通わせ合っている一かたまりのグループに過ぎない。（いまは大体四十歳前後で社会各層の中堅で働いている。教官もおれば会社員もおり、旅館の主人もおれば、病院の院長もいるし、材木屋もおれば、家業をついだ店主もおり、九州、中国その他に散在して生活している人たちである）

従って、この二つのグループとも事務所などは持っていないし、もちろん一人の専従職員もない。みなそれぞれ定職を持ち、時間の自由を持たない人々である。ただ教育関係者は夏には比較的自由な時間を持ちうるるところから、夏休みを利用して大学生を集め、合宿研修会をやるとうこ

とになったわけである。(国民文化研究会は過去三回にわたり毎年夏単独で合宿を行なってきた)

必要な費用も、持ち寄りだけでは間に合わないの、知人、縁者をたどって寄付を仰いだ。両グループとも、手弁当で三等の汽車に乗って集まっては、合宿準備、運営の相談をしてきた。また国民文化研究会の会員である会社員は、自分に与えられている有給休暇の全部を、それに振り当てることによって、この「合宿教室」が開かれたのである。

ささやかなこの一つの企て、それがいかにささやかなものであろうと、心をこめて、現代を凝視し、多難な時代を切り開こうという念願から、この「合宿教室」が持たれたことは、動かしがたい事実であった。昭和三十四年八月下旬、熊本県阿蘇山麓の内牧うちのみまきに集まるもの約百六十人——ほとんど未知の人たちによる四泊五日の合宿が開始されたのである。

われわれは、この合宿教室で祖国愛、友情の問題をはじめ、さまざまな文化科学、思想問題と真剣に取り組んだ。学生の中に圧倒的な人気を呼んでいる階級闘争理論に対しても、いろいろの角度からその理論的誤りを指摘した。しかし理論的解明だけでは、階級闘争理論の魅力から容易に抜け出し得ないことは明らかだった。このため合宿運営の主眼点として、講義と並行して班別少数者グループによる独特の討論方法——「班別討論」——を採択した。それはイギリスの大学におけるチューターシップに似ているかどうかは別として、参加者たちが、その胸の中にしまっているいろいろの思い——平素は人に語るのをはばかって、容易に外に示そうとはしない意志の表明——を、お

互いに軽い気持ちで吐露し合えるようにするため、班指導員たちの並々ならぬ心くばりが、払われていた。起居をともしながら、人生観や思想上の諸問題を縦横に交錯させて、それらの本質の探求に努めたのである。現実の人間の交わりのなかで、お互いに真実を披れきし合うことの困難さが、改めて切実に痛感された。にもかかわらず、四六時中懸命の努力が繰り返えされたのである。

しかし、このような思想に関する本質的究明と、四つに組んだこの「合宿教室」は、日程半ばで思いもかけぬ大きな難関にぶつかってしまった。主催者側と参加者側の双方が、お互いに真剣さを増せば増すほど、意志の疎通がむずかしくなっていた。両者の間には相互の理解をさえぎる、つかみどころのない空気が、いつしか広がっていったのである。それは戦前に教育を受けたものと、戦後の教育を受けたものの間にある。『時代の断層』と呼ぶべきものであった。単に時代の断層というだけならば、なにも事あらためて大げさにいう必要もないはずである。なぜなら、年輩者と青年層の時代感覚の相違は、世間一般のことであるし、それほど気にもしないで、多くの人々が、家庭生活、社会生活を送ってきているからである。

だが、この合宿教室の場のように、相会する人のすべてが、お互いの人生観をうそ偽りなく吐露し合わねばならないとなると、いいかえれば、時代の断層を要領よく処理していさえすればいい、とする口先きだけのごまかしが、通用しない真剣な場になると、この断層なるものが、どんなに厄

介な代物であるかが、はっきりと浮び上がってしまったのである。たとえば、人生観や思想問題には、必ず登場してくる幾つかの言葉がある。「国家」とか「人類」とか「戦争」とか「平和」とか……。ところが、「国家」という一つのコトバについても、戦前派の人々は、自己の身についた内容と意味を含ませてそれを述べる。一方戦後派の人々は、また同じく自分の理解する意味でそのコトバを聞く。すると前者においては、当然個人の生命財産を保障してくれる集団単位としての国家を意味するものが、後者においては、何も自分の国が滅びたからといって、世界の人々が自分を見捨ててしまうものでもあるまいという、いわば自己の生命財産の保障者としての觀念が、はっきりしないままそれを心にとめる。そこで次に前者の所見に対する後者の質問が出されたとき、二つの異なった解釈のまま、その単語が相互に別々の意味を持ち続けて応答がなされてしまう。かなりの時間の経過のうちに、やっと双方とも、その問答に何かしら基本的な不自然さがあることに気づく、といったぐあいである。戦争を完全罪悪とする前提で、その言葉を口にする者と、そうはいっても戦争の悲劇を乗り越えて、祖国の防護を果たした日本の歴史を心にとめて、それを口にする場合にも、同じようなちぐはぐさが生ずる。また平和をのぞむ熱烈さについては、両者になんらの差異がないにしても、国民の生活に平和を作り出すための国民的義務觀念の把握の仕方に大きな相違がある場合には、平和という用語を中心としての思想の掘り下げは、十分に注意してないと一定の深さ以上には進まなくなってしまう。こうした用語上の理解の差異が、沢山のコトバ、単語、思

惟、感覚の面に交錯してくる。合宿教室の半ばで、みんなが遭遇してしまった難関、つまり「時代の断層」とは、このようなものであった。それは参加者の真剣さだけで突破できるような生やさしいものではなかった。その断層に直面して、身動きできないような重苦しさがまる一日も続いた。

だがその苦悩を通じ、やがて戦前派の人々も戦後派の人々も、すなわちそこに会するすべての人たちが、この断層をなんとか取り除くことはできないものか、といつしか同じような謙虚さと忍耐さをもって取り組んでいた。何かしら冷たく空っぽとした空気が、次第に消え去っていったのは、それからのことであった。そうした状況のなかで、そこに集まっていた青年や学生たちが終始持ち続けた忍耐力や精神力は、確かにすばらしいものであった。年長者たちからみても、同じ国民として後事を託すに足る十分な資質が、そこに再発見されてきた。合宿教室が開かれたときの抽象的な相互信頼の雰囲気、そこでは、はるかに具体的な内容をもつ確信にみちた信頼感となつて、すべての人たちの間に広がっていった。「学ぶ」ということ「学問する」ということは、こういうことなのか、と身にしみて感じ取ったようでもあった。そしてそれは、だれが生み出したというものでもなく、教えるもの学ぶもののわけ隔てのない精神世界、国民としてともにあるという自覚が、そうさせたとみるべきであろう。われわれの長い念願だった国民相互の固い信頼感による同胞としての感覚が、はじめて具体的に現実には生きたものとしてよみがえったようであった。険しいいまの世界の中にも、時代の断層をごまかすことなく、打破する道のあることが、はっきり実証されたよう

あった。ホッととした安らぎの息づかいと、かろやかなほほえみが、老いも若きも男子も女子も、参加者のすべてにひとしくうかがわれたのは、四泊五日の「合宿教室」の終幕近くになってからであった。

合宿教室“運営のあらまし

一 講義と班別討論の関連性

この合宿教室は、思想についての究明を大きな眼目としているが、同時に、思想以前の問題——人と人との心のつながり方についての探求に、最大の関心が払われた。従ってAのイズムを反論してBのイズムを打ち出すとか、知識によって武装するなどというようなことをねらってはいなかった。まして世間によくあるような同種のものが、その会合に参加した人々をその団体に加盟させるというような目的は、はじめから持っていなかった。主催者側は、多くの学生たちがわれわれのグループに参加するといってくれても、その人たちに、あすからどのように連絡を保つかについて、なんの目あてもないし、そのメンバーのだれ一人、そうした時間的余裕を持ち合わせていないからである。とにかく四泊五日間の合宿運営にすべての努力を傾注すればよいのであって、それ以外のことは、すこしも考える必要がなかった。

学内のビラで合宿の開かれることを知り、あるいは友人から勧められて応募した人たちで、合宿教室は、会場の収容能力ギリギリいっぱいになった。このためお断わりした人々も三十人以上におよんだ。カラーの違った二十近い学校から女子学生十一人を含め学生が百二十人、一般会社員と小・中学の教職員が十人、主催側の大学教官有志協議会会員十余人、国民文化研究会のメンバー約二

十人合計百六十人が参集した。

合宿開始に先立ち、百三十人の参加者を六つの班に分類した。これは後述する「班別討論」の趣旨を生かすためで、教育学部学生を二班に、経済学部、法文学部学生を各一班とし、教員と教育学部学生を一班に、そして一般勤労者と実務家の一班、合計六班に分けた。(二班の人員は二十名前後)

各班に班指導員として三人ずつ配置されたが、これは主として国民文化研究会のメンバーが当たった。その三人も、教官と事業家と会社員を組み合わせるなど、長短相補うようにしたが、このことは別にそれほど大きな意味を持ったものではなかった。二十人前後の学生を相手にする場合、やはり三人ぐらゐの指導員が必要であったし、指導員はいろいろの角度からの質問や批判に、十分耐え得るような学力と情意とを、持っていなければならなかった。将来、このような合宿教室が重ねて行なわれる時には、この指導員は学生自体の中から選ばれるのが理想的で、総合的学力を身につけ、人間交友に豊かな幅広い友情をたたえた学生たちが、多数輩出してもらいたいというのが、われわれの念願である。

講義は単なる知識の羅列⁵や、ハッタリのような印象を与えるものは全くなかった。講義の中で問題点を明らかにし、それを全員に示す。そしてそこに示されたものとどのように取り組むか、その取り組み方を正しくするところに、学問の本義があることを考えながら講義が行なわれた。しかし

講義そのものにはおのずから限界がある。聞く人がどのように受け取ったか、という重要な半面が取り残されるからである。このため講義が終わると、質疑応答や全体での討論が持たれた。それでも深く掘り下げることはなかなか容易ではなく、せいぜい「わかった」とか「わからない」とか、「賛成」とか「反対」といったやりとりにとどまるのが普通で、それ以上を期待するのは無理であった。ある人が講義の重点と思ったことが、ほかの人にとっては、全く興味を引かないものであったり、一人がうなずいたことが、多数の者にとって大きな疑問であることもあった。講義の全般について、このようなことが起こる場合もある。また講義の内容が、深い人生観に基づくものであればあるほど、聞く方では勝手に自己流に解釈してしまったり、自分の経験に当てはめて受け取ったりする恐れも出てくる。

こうした事態を克服するところにこそ、合宿教室の持ち味が生かされてくる。それが各班ごとに行なわれた「班別討論」である。従って参加者を班別に編成したのは、集団生活の統制のためではなく、もっぱら班別討論の効果いかんが第一の目標に立てられたためであった。

班別討論は、講義でよくわからなかった箇所を多少補足説明することもあった。だがそれが主要な目的でないことはいうまでもない。講義を聞いたあとで、各人が持った疑問とか肯定とかを卒直に、ありのまま発表することによって、その人の持った疑問のあり方、肯定の仕方そのものが素直

であるか、極端な主観に左右されているかどうかを検討された。口先だけで意見を発表しがちになるのをどうすれば避けることができるか、またどうすれば、心の中に感じ取った思い、胸に響いた感動、また心の底からの反発や、納得しかねる不満などを卒直に述べ合うことができるかに重点が置かれた。

従ってだれもがその発言を通じて各人の持った疑問や、肯定や不満や反論が、果たして正しいものであるかどうかについて、自分で自分の発言をいまだ一度味わい返し、調べ直す機会がそこに用意されていたのである。口先では適当にものをいい、腹の中では別のことを自分だけのものとしてしまっていて、発表しないというような態度は、すぐに他の人々に気づかれてしまう。そうなるとその班における討論は、それだけレベルの低いものとなってしまふ。そして次第にそのような態度を続けていることに、本人自身疑問を持つようになり、また強い反省を試みるようになつていく。こうして学問といわば人との交わりのなかにある自己というものを再発見するようになっていく。こうして学問とか理論とかは、そのようなことと無縁のものでは決してありえないことにも、気づくようになってゆく。

要するに班別討論では、講義に直接関係のないことも出てきたし、日ごろ各人がいだいている疑問が提示される場合も多々あった。こうしたときに、指導員が、もし追いつめるように説得したとすると、かえってその人のあたたかい指導の心持は相手に伝わらなくなる。それよりもむしろ相手

の心の中に広がっている、疑問の中にいっしょにはいつていつてやることが、指導員の大切な心構えであることがはっきりわかってきた。それと同時にこうした自由な課題を出し得る班別討論は、ともすれば単なるテーマの持ち寄りだけに終わる恐れがあるので、そのようなことに貴重な時間を空費していることの無駄なことが、やがてみんなに理解されるようになった。

討論の終わりがころになっても、疑問点や肯定点のいずれが正しいかなどということは、そこでは大して問題にされない。それよりも出された疑問や肯定が、正確で客観性のあるように整理され、深味を加えられた形で、各人に持ち返されるようになったかどうか、討論の眼目であった。このためはじめの疑問が、あとでは肯定に変わり、はじめの肯定が、まったく主観的なとらえ方であった、その人には何もわかっていなかったなどという結果をもたらすことも出てきたのである。確かにプロセスを尊ぶやり方ではあったが、プロセスを尊ぶことに自己陶醉することはきびしく批判されたのである。お互いに意見を交換し合うとか、議論し合うとかいうことは、そもそもなんのためであるかということに、問題点が結びつくよう周囲から細かな配慮が払われたからであった。そこでこの討論は、いわば一つには思想の探求と究明であったし、同時に「友情」とはどのようなものであるかについての、鋭い追求でもあった。

二 チューターシップ

このような班別討論は、この合宿研修会に限られた特異なものではない。幕末明治時代の私塾や藩校などだけでなく、国立、私立大学の創設期をみても、人間が人間を教えるための法則は定まっているというべきである。班別討論は、それが未熟なものであったにしろ、この法則にかなつたものであった。従つて班指導員は、イギリスの大学におけるチューターシップ (tutorship)——個人指導の職——にも一脈通ずるものがあるといつてよからう。チューターの語源はラテン語の *tueri* (不寝番) である。指導員は個々の班員を全人間的につかもうと努力した。それは班別討論の間だけではなく、随時指導員相互の検討を通して続けられた。しかし全人間的につかむことのむずかしさは、指導員の力の限界を越えるほどのものであった。講師と指導員は、毎晩深更まで講義の「反響や班員の理解の度合いなどを検討し、翌日の日程に備えたのであるが、指導員にとって、この検討会は、班別討論の延長といつていいほどの内容を含んでいた。寝もやらず班の運営に心を砕き、そのあげく一様にみずからの非力を嘆き合う指導員は、事実チューターの語源の「不寝番」そのものであったかもしれない。

班別討論における班員の発言は、はじめは、自己紹介だけでもたどたどしく、なかなか自分自身

の心の中をさらけ出してはこなかった。しかし、回を重ねるにつれて、その発言も次第に活発となり、さまざまな感想や意見が出されてきた。「このような講義ははじめて聞いた」「講師の熱心さに打たれた」「今まで習ったことがすべて否定されたような気がする」といった感想から、「講義が一方的である」「どのようにこれから勉強すべきか聞きたい」「日本が今日のようにみじめになったのは過去の精神主義の誤りによるものではないか」といった意見めいたものも出され、また合宿教室の主旨を全面的に受け入れるものがあるかと思えば、中にはことごとく不信を示すものもあった。日程の進むにつれて、班別討論の問題が煮つまり、対立点が明確に印象づけられたとき、これをそのまま放置しては、一步も前に進めないことが、参加者の一人一人に痛感された。このため班員相互の討論も本格化し、概念思弁を越えて自己の信ずるところを、それぞれの確に述べ合うようになった。

だが班員は学生だけではない。労働組合のあり方にいろいろ悩んできた会社づとめの勤労者や、日ごろ農業にいそしんでいる人、日教組の組織内にあって、自由の確保を求めたいと念願している教員たちもいる。この人たちを中心にいろいろの問題に対する具体的な解決策、あるいは国の立場からみた行政措置や経済政策などについて議論が白熱化したこともあった。

また女子参加者は、自由時間と就寝のため別室に起居したが、班別討論では二人、三人と各班に交じた。班別討論の激しい理論々争のさいにおけるさりげない疑問の提起が、対立する二つの議

論に共通する問題を引き出したことも多く、概念の入り交じりとからみ合いの中で女性の直感の鋭さが、班員をシーンとさせ、深い感動をまき起こしたことも再三あった。そしてこのような班別討論を続けていく間に、自然にお互いの心に通い合ってくる微妙な心理の動きを、しっかり身につけるかどうかが最大の課題となった。

すなわち各自が、全班員の心の中に飛び込んでいって、相手の悩みや喜びを、そのまま自分の心の中に受けとめることができる、と感得するようになったかどうか、大きな眼目であった。夜おそくまで続けられた「不寝番」会議でこのような難題と四つに取り組んでしまうので、時間も不足してくるし、真剣に検討し合っても容易に解決の目安は出てこなかった。

しかし班別討論も、この合宿教室の目標や性格も、こうした方向づけに基づいていたので、どのようにしてそこに到達できるかについて、最大限の努力と忍耐が続けられた。かくてお互いに、人の心に飛び込むことができ、その心の中が手に取るようにわかり、心の通い合う人生の歓喜を身をもって体験する時がきた。きのうまでは他人であった一人一人の顔が「友」としての感覚で心に写りはじめ、参加者全員が、同じ国民同胞の一人として、感じられてくるという経験過程も、ばく然としてではあったが、お互いにわかりかけてくるようになった。このような段階に立ち至ったときはじめて、人間としての平等感も、それまで安易に口にしていた人類愛などという言葉も、生命のこもらないうつろな響きとしてではなく、生き生きとした語感をもってよみがえってきたようで

あった。人類愛、人類平等も日本人同士が、信じ相和していく国民同胞としての一つの信につながってこそ、実現の具体性を持つ。そこに感じられた「平等感」は、口先だけでいつてきた「人類の一員であるから」「労働者であるから」あるいは「神の子であるから」といったことから出発する「平等らしさ」とは、本質的に違った切実かつ深刻な、そしてしみじみとした人間味のあふれたものとして把握されてきたのであった。もとより参加者の大部分がそれを感得したにしても、いろいろの疑問を残したままではあったが……。

三 人生観に裏づけされた諸講義

講義は政治学、外交史、経済、憲法、労働問題、学問論、文学、学生運動、人生論のほかに主催者側のこの企てについての考えなどが網羅され、一日平均四講義が行なわれた。それは参加者全員にとって、過酷な頭脳活動を要求したようであった。だが各講師は、そこで自分の知識を展示したのではなかった。ここで講義内容を概括的に述べることは不可能であるが、各講義の内容を大ざっぱにしるしてみよう。

一 国際情勢の分析

この合宿教室は、まず日本がいやおうなく取り組まねばならぬきびしい国際情勢を解明しなくてはならなかった。平和攻勢がやかましくいわれたかと思えば、平和共存が叫ばれる。米ソをはじめ各国の外交上の動きにつれて、いろいろ世界情勢の動きも移り変わっていく。この複雑な動きを表面的にみていけば、われわれは、不安とも疑惑ともつかぬ状態に落ち込むほかはない。国際情勢についての理解力、判断力を養うには、先入観とかイデオロギー的偏見が一番有害であることを知らねばならない。あるがままの動きを見つめることが大切である。自分の国をより善くすることは、まず独立不羈トビの精神に基づいて考究すべきである。世界の主導権を握る米ソ両国は、いつでも現在の自国の立場を有利にするために、一切のことを発言しているのであって、それが外交の常道であることぐらいは知らねばならない。このような常識のことすらあいまいになっているのが、今日の時代である。この意味から冒頭の講義は「激動する国際情勢と日本」と題するものであった。

講師は「現在の国際問題を考えるためには、太平洋戦争前後の米ソの戦略を解明しなければ問題は解けない」と説明した。また、ベルリン問題や朝鮮の三十八度線のできたいきさつを、終戦時の米ソの国家的利益の衝突と調整について解明し「もし終戦の時期がおくれたとすれば、北海道はソ連が占領したであろう」という興味ある観察をつけ加えていた。「平和の呼びかけは心理戦争の強力な武器である」として、国際間の生々しい現実を分析し、平和はみずから獲得すべきものであって、与えられるものではないことが強調された。

二 日中兩國の歴史関係（近代）

日中の関係は、国際問題というよりも、もっと身近な切実な問題である。講義のなかにその歴史の移り変わりが取り上げられたのは当然であった。近代における日中関係の複雑性、さらに日本の対支政策の分裂、満洲国の誕生、戦乱を助長した日支両国内の重要な断面などが、次々に指摘された。これらはすべての国民が知って置かねばならない近代史の重要部分である。過去となんの関係も持たず、全く新しい立場からものをみるといっても、そのような歴史書——その多くはマルクス・エルの図式をうのみにしたものであるが——は、はたして歴史といえるかどうか。大きな疑問のあるところである。

歴史の問題、ことに近代史のことについては、さきの国際情勢の判断力の場合と同じく、事実をありのままに理解できる素直な立脚点が、確保されなければならない。

三 マルキシズムをめぐる諸問題

学生青年をイデオロギーの害毒から守らねばならぬということは、各講師が日ごろ切実に感じているところであった。イデオロギーの枠わに閉じこもって、ほかの一切のものを否定する全学連の諸君は、マルキシズムの研究によってそのイデオロギーを絶対の図式と認めて変えようとはしない。

黑板に書かれる共産主義の図式に基づく考え方が、人間をこれほどまで動かすものではなからう。あの国会乱入デモ事件も、案外イデオロギーと異質のものであるかもしれない。にもかかわらず、みずからあるイデオロギーの枠に局限して満足している。大学生たちの周辺にあるこの弊風を打破することは、それだけでも、自由で伸びやかな世界のあることを、大学生たちに知らせることになる。そうした意味から配慮された講義も用意されていた。その講義は、ユダヤ人であったマルクスが、宗教的圧迫に抗し、反キリスト教の憎悪が、やがて資本主義への憎悪に転換していった心理の経過を詳しく説明した。資本論など各種著書にみられるマルクスのこのようにありたいという願望の要素が、マルクスの理論そのものがすでにくずれ去ったいまでも、なお影響力を残している理由として述べられた。そしてイズムを借りて持ち廻るようなことは、それが善いものだとか、悪いものだとかいうことではなく、いかに浅薄なものであるかが力説された。またマルクスの生み出した理論よりも、マルクスその人を動かしたもの——実は反マルキシズムのもの——の追及の方がより根本問題であることを明らかにした。

四 学問論・人生観

学問論、人生論あるいは日本人の生き方や中国詩人の人生観について、道元や陶淵明らの言葉に含まれる深い味わいが説かれた。日本固有の人生観について、確信をもって学生諸君に訴えた講義

もあつた。ある講師は「日本固有の人間観は、古事記、日本書記に示されている。仏教や儒教の影響を受けても、それをそのままうのみにしたのではない」と述べたのち、戦前における日本の教育に二つの異なつた人生理念のあつたことを指摘した。すなわち、「戦前の小中学校では、日本固有の人生観は教育勅語によって教えられたが、同じ時代の高等学校、大学では、カント流の絶体的価値を有する個人人格を、人間生活の中心理念として教えた。このように二つの異なつた教育が並存していたのは珍しい現象であつた」として、教育勅語に盛られた倫理と、いわゆる個人人格を内容とする倫理の相違との結びつきについて、深刻な問題点のあることを提示した。

五 学生運動の戦後史

当然のことながら、学生運動についても講義が進められた。現実の学生運動の悪い面だけにとらわれて、学生の政治運動を封殺することは、本末転倒であることはいうまでもない。学生運動の実体を突きつめて、その限界を正しく指導する大学当事者の任務が、きわめて重大かつ微妙なものであることも明らかにされた。同時に政治家や文教当局者などが、この問題について自信のある見解を表明していかない実情もはっきりしてきた。全学連の羽田空港占拠事件後、一片の通牒ちようによってその処置を各大学に押しつけてしまつていくことと関連して、学生運動をいかに無軌道な方向に走らせてしまつたかについても、深く考えさせられる問題があつた。学生運動に対するよき助言と指導

が、今日ほど待望されることはない。参加者も学生運動の問題をみずからの問題として、解決しなければならぬことを痛感させられた。

六 憲法・天皇

天皇のことが、現憲法の第一条に「天皇は日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴」と明記されているにもかかわらず、憲法改正に反対する人々は、現憲法の擁護のために、激しい政治闘争をも辞さないといっている。しかしおかしなことには、憲法擁護者たちが、ほとんどきまって現憲法第一条の天皇の規定を、みずから抹殺する言動をほしのままにしていることである。それでは学問的に忠実であるとはいえないし、ましてや憲法遵守の精神に基づいた行動とはいえない。こうしたみえすいた虚偽が、横行していることは、決して喜ぶべき傾向ではないはずである。現憲法を守れと叫ぶ日教組が、学校で国歌を子どもに教えることを拒否し続けていることや、こと天皇に関することは、つねに否定的に教えるよう指示していることなどその顕著な事例である。天皇について言及するとよく右翼的だといわれる。自国の憲法第一条に明記されていることを研究し、正しく学ぶ態度が、どうして右翼的であるわけがあるのか。時流に抗して、その非を敢然と発言することこそ、学問に携わるものの真摯な態度でなければならない。大学生たちの真剣な学究態度は、やはりそれにふさわしい反応を示してくれた。教えねばならぬことを、あえて避けようとする年長者たち

の卑屈さの方こそ、大きな問題であることがはっきりしてきたわけである。

七 国民同胞感の把握

階級闘争を克服する方途として、このようなテーマをいろいろの角度から強く織り込んで講義が行なわれた。最終講義の「平和国家の基本的課題」も、それを中心としてなされた。しかし国民すべてが国民同胞としての相互自覚と相互信頼を取り戻すために、さらに必要な諸問題がある。すなわち、いまの日本とその過去とが、どのように違っているかについても、内容的な説明とその理解が必要であるし、また現代が日本の文化史の上でどのような地位を占めているかについても、立体的な把握が必要である。この講義はこれらに答えて試みられたものであった。日本が外来文化と激しい接触を持った時期を三つに分けて、聖徳太子の時代と明治時代、それに現代を加えて三つの時期とし、それを相互に比較しようとしたのは、いまの時代がどういう時代なのかを若い世代の人たちに知らせたいためであった。また「国家」の把握の仕方についても、国家は世界の一部分だからと、これを過小評価しようとしがちの学生たちに対して、出来るだけわかりやすく説明する努力が払われていた。また、主権が天皇から国民に移ったことについて、多くの人が見逃している点、すなわち天皇は主権者にふさわしい君徳の培養に努めておられたが、いまは主権が国民一人一人に、すなわち一億分の一ずつに分けられている。その一億分の一の主権者は、主権者としての徳性の涵

養に努力しているかということが強く指摘された。戦前の日本の主権といまのそれとが、その内容のみならず質にまで大きな変化を来たしていかないのか、という新しい課題も提出された。とくに現代のような混乱期では、日本の諸問題を概念的な論争だけに終わらせないで、内容的に究明していくことの必要性が強調されていた。

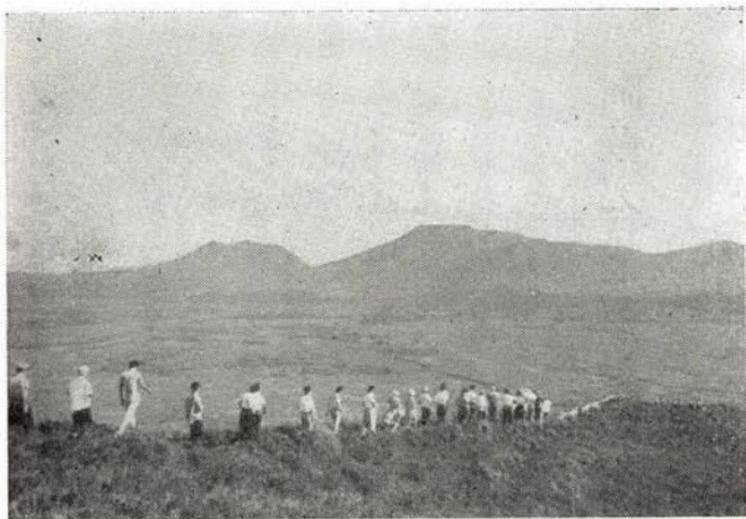
要するにこれら講義は、すべての講師がいろいろの理論構成を展開したというだけのものではなかった。講師たちは混乱した世相の中にあつて、講師みずからが、そこに生きているのだという時代認識と、責任感の上に立って、分析の理論を展開するにも、生活体験の裏づけを伴いながら行なつた。従つて同じ講師が、同じ理論を大学で講義したとしても、かなり違ったものとなつていゝかもしれない。なぜならば、講師の心の底にひそむ現代への憂悶を、学生諸君の前に卒直に披れきしながら、講義が進められたからである。それを聞く学生たちの真剣な態度そのものが、講師たちをして、そのような講義をさらに広く展開させたことも確かであろう。そこに教えるものと、教えられるものとの相関関係の深さが、よく暗示されていた。

講義の全般を通じてみられた特色は、文化科学、社会科学、精神科学としてのそれらの講義が、一貫して、共通の研究方法を示していたところにある。すなわち、学問の自由ということ、旗印にするような講義は一つもなかったが、それぞれの講義内容は、講師の精神の高まりの中に続けら

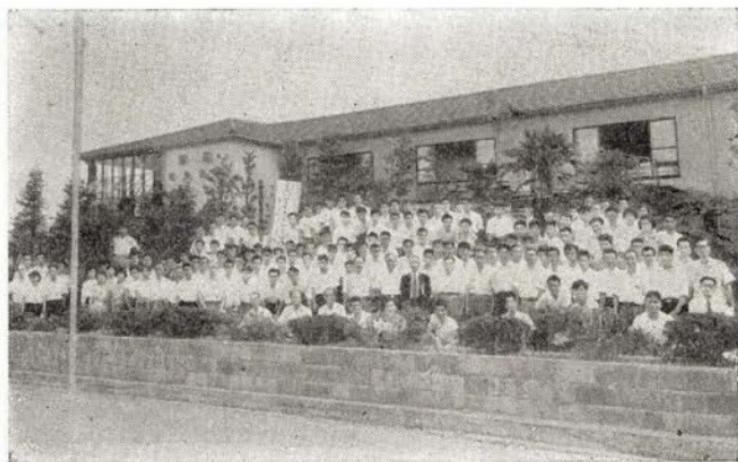
れ、学問の自由とはこのようなものであるということを、体験的に感得させたようであった。さらにいうならば、学問や理論の真のあり方と位置づけが、研究する主体と客体との関係に、なんの分断もなされずに進められていたことを示していた。これは思考と実践に基礎を置く自然科学の研究方法に対して、社会科学の研究手法が、基本的に異なることを立証したものであった。同時に社会科学の研究に対し、自然科学の研究手法を、そのまま適用しようとする唯物史観の根本的誤りを、それに言及しなかった講義も、おのずから指摘したと同様であった。諸講義はいずれも実人生を研究対象とする社会科学のあり方について、学問的態度を明らかにしたものであった。

百五十畳の大広間に、六尺の机が横に三列、縦に十五列並べられ、参加者は班別にまとまって講義を聞いた。長時間の講義の間、たまたま行儀の悪さを注意される者もあったが、私語する者はほとんどなく、講義開始をはじめスケジュールに組まれた時間はよく守られ、集団生活の運営面で主催者側がとくに苦慮しなればならぬことはなかった。自由時間を戸外の散策に楽しむ一団が、講義開始の鐘の合図を聞きつけ、いつさんに駆けてくる姿などはほほえましい光景であった。

阿蘇”合宿教室”の記録



—大観峰より阿蘇五岳を望む—



—参加者全員の記念写真—

未知の者ここに集うつど(第一日)



豊肥線内牧駅から北へ二キロ、阿蘇町の一角に「阿蘇観光会館」がある。ここで大学教官有志協議会と、国民文化研究会の共同主催による四泊五日の合宿研修会が開かれる。東方にそそり立つ阿蘇五岳、四周をめぐらす外輪山の雄大な自然美。そのうえ海拔五百米の高原盆地は、塵界を遠く離れ、朝晩は夏とも思われぬ涼気を感じる。自然と人為のマッチした絶好の環境である。

きょう、合宿開会の八月十九日、早朝から青年学生がここに集まってくる。九州一円はいうにおよばず、三等の夜汽車に揺られ遠くは東京、岡山からも。参加者は百二十人の予定人員をはるかに上回ったが、収容能力の関係から百六十人で、一応募集を中止しなければならなかった。「合宿研修会」という堅苦しい名前にもかかわらず、このように多くの学生青年が応募したことは、主催者一同にとって驚きと同時に喜びであった。

「友よと呼べば、友は来りぬ！」

「新しき時代、そは青年の心情に内在す」

という言葉が、早くも合宿の雰囲気を書きわしている。

前日から泊まり込んで会場準備に当たった、国民文化研究会員や鹿児島大学、山口大学などの学生が、受付に陣取り、参加者をそれぞれ割り当てた部屋に案内する。

予定の午後一時半、ほとんど全員が集まり「開会式」を知らせる鐘の音を合図に、講堂に向かう。正面の日章旗をまん中にはさんで、三つのスローガンが掲げられている。

「混迷の時代に消えざる地熱、祖国のいのち」

「孤立する心を友情交流の世界に投じよう」



「まことの学風をわれらの学園に興そう」

むずかしそうな言葉ではあるが、この合宿の方向を示しているようである。川井修治講師（鹿児島大学助教）の司会で、開会式の幕は切って落された。国歌斉唱に引き続き、大学教官有志協議会の野口恒樹講師（長崎短大教授）と、国民文化研究会の小田村寅二郎講師が、こもごも立ち、心をこめてあいさつした。

あいさつ 「国家復興の底力」

野口 恒樹 講師

敗戦後十数年を経て世の中もようやく落ち着いてきたが、まだ国民生活全体を通じて敗戦の虚脱から抜け切っているとはいえない。もちろん希望をもたせる面もないが、国家復興の底力がつつちかわれているとは決していえない。かつてドイツがナポレオンのフランスに敗れ、チルジットに屈辱的講和を結んだとき、憂国の学者フィフテFichte (1762—1814) は「ドイツ国民に告ぐ」の中で

「ドイツはすでに滅びかかっている。ドイツ文化に価値がないならばドイツは亡びてもよいであろう。しかしながら、もしドイツ文化に価値があるならば、ドイツは決して滅びてはならない。し

かもそのドイツには独自の言葉と文化がある。これを興隆するものは教育であり、とくに青年の教育にかかっている」

という意味の言葉を述べている。大学教官有志の間にも、日本の現状はこれでよいかという声が、期せずして起こってきた。そして同じ志をもつ国民文化研究会の人たちとともに、このような合宿研修会をもつことになった。私は諸君が遊びたい盛りのこの夏休みをつぶし、道の遠きを遠しとせず、かくも多数集まられたことに深く敬意を表したい。いまこうして若々しい諸君の姿を目の前にみて、私たちは国家の前途に希望をつなぐと同時に、私たちの責任の重大さを痛感する。この会場は「君は川流をくめ、我は薪を拾わん」というにはあまりにも至れりつくせりの設備であるが、「同胞友あり、ともに親しむ」気持ちで、これからの五日間を有意義に過ごされるよう望んでやまない。

あいさつ「積極的平和への道」

小田村寅二郎 講師

ただいま野口先生からお心こもるごあいさつをいただいて感銘を深くしている。大学教官有志協議会の諸先生方と、合宿研修会を運営してゆこうとする国民文化研究会は、今から十余年前、戦後の混乱のさ中に、九州の一角に生まれた。その会員は戦前若かりし時、ともに大学高校高専に学んだ友人同士であり、その時以来の友情によって、お互いにつきあいながら終戦を迎えた人たちである。青年時代共通の研究目的のために集まったということは、何にもまして深いきずなに結ばれたといえよう。その間多くの友人を戦場に失い、あるいは

病気で失ってきたが、終戦後もわずかの時間をさきながらこのつどいを続けてきた。やがて一年に一回だけでも学生青年諸君のために役立つようなことをしたいという気持から、このような合宿運営を企て、こととしてすでに第四回目を数えている。しかし私たちのこの国民文化研究会は、事務所を持たず、一人の専従者も持たず、そのうえ三十五歳から四十歳位の会員を中心としており、実社会にあつては多忙の仕事に追われている。しかしながら、われわれは、その中をさいて合宿実現のためにあらゆる努力を傾けてきた。いま第四回の合宿を挙行するに当たり、一、二私の所信を述べてあいさつに代えたい。その一つは現代の日本人の平和観についてである。現代の日本人は強く平和を求めているが、日本人の求めている平和の内容は、アメリカやソ連の求めている平和とはいささか異質のものではなからうかということである。ソ連人やアメリカ人は、世界の平和は自分たちがつくるのだといっている。強国としての自負心と責任感から、平和を生みだしてゆくといっている。そこには創造的、積極的な意志がこもっている。それに比べいま日本において平和を願う人々の声は、そのような主体的なものではなく、何かほかのもの、他の国々に頼つてゆこうとするばかりで、氣迫と内容の乏しいもののように思われる。

私たちはこの合宿を通じて、われわれの持つべき積極的な平和への道は何か、それを検討し生み出してゆきたいと思う。私はこれに関連して十五年前の一つの事実をお伝えしたい。それは大東亜戦争の最中、日本の四人の青年将校が特殊潜航艇二隻に乗り組み、オーストラリアのシドニー軍港の奥深く艇もろとも突入し壮烈な戦死をとげた時のことである。当時日本は国をあげてその忠勇武烈をほめたたえたが、現在の日本人はそのことを遠く忘れ去ってしまったている。しかし当時オーストラリアのシドニー軍港司令官ムアヘッド・グールド海

軍少将は、この四勇士の行動にいたく感激し、これを遇するにオーストラリアの海軍葬をもってした。当時の日本は敵国であったから、当然同国内に反対論が出た。しかしグールド將軍は敢然として

「かくのごとき勇敢な行為は単なる一民族一国家の独占物ではない。それは全人類のものである。オーストラリアの青年よ、鋼鉄の棺桶（特殊潜航艇のこと）に乗って日本の国に殉じた、この四人の青年将校の千分の一の志でよいから、それをもって、祖国のために尽くしてもらいたい」

と訓示し、厳肅な葬儀を挙行した。命をかけて敵陣深く突入した四人の青年将校の真心に感激し、それをたたえたオーストラリア国民の心は、戦争と平和を越えて世界の歴史に長く記録されるであらう。

戦争と平和という概念論に時を過して、その中から何が生まれようというのか。敵とか味方とかいつて、国内を二分する闘争から一体、何が生まれるというのか。すぐれた偉人の言行や、真心の中にこそ、文化を生み出す力がひそんでいるのではなからうか。もし敵味方を越えて、このように互いに共感するものを引き出すことができるならば、それこそは新しい文化の創造となつて、現代の世相も世界も、やがて面目を一新してくる時があると信ずる。日本も自らの国力によつて、また概念的な理屈のいい合いから抜け出し、積極的に世界の人たちと交わつてこそ、はじめて平和への道を見出すことができよう。この合宿がその課題に答える何ものかを生み出すことになれば幸いである。

参加者を代表して鹿児島大学学生湯通堂義弘君が、短い中にも真剣な表情をたたえて次のように答えた。

私たちのためにこのような機会を作つて下さつた大学教官有志協議会と、国民文化研究会の方々に心から感謝する。私は昨年夏佐賀で開かれた国文研の合宿に参加して「人生と学問」について正しいよりどころを与えられた。それは私にとって大きな幸福であつた。私はその感銘を持ち続けて勉強してきた。しかしまだまだ十分ではないので、今回再び参加させてもらった。学問が理論武装にとどまっては、闘争とドグマ主義を生む結果にならう。真摯な心情を交わし合うことよつてのみ現在の混迷を救うものが生まれてこよう。私たちはこの合宿を通じて青年の悩みや願望をお互いにぶつつけ合い、今後とも強い友情のきずなで結ばれたいと思う。

次に地元で宿舎の準備に当たつてきた国民文化研究会の加藤敏治氏（八代市教育委員）から運営上の注意が与えられた。起床、体操、食事、講義、班別討論の要領を説明したのち「限られた期間内に最大の成果をあげるため、外出、玉突き、テレビ観賞を禁止する」と述べ、団体生活の規律を明示した。約三十分で開会式は終わった。

十分間の休けいののち、川井修治講師が最初の講師として演壇に立った。同氏は大学教官有志協議会と国民文化研究会の双方のメンバーを兼ねている。

（旧制松江高校、東大文学部卒、学徒動員で応召しシベリア抑留二ケ年、現在鹿児島大学助教授、西洋史専攻）

人生・学問・祖国

——この「合宿教室」のめざすもの——

鹿児島大学助教授

川 井 修 治

憂うべき国民思想の混迷

まずかかる「合宿教室」が何故持たれるに至ったかについて、主催者側の気持を卒直に述べてみたい。それは一言にしていえば、現在の国民思想の混迷に対する憂慮からである。このまま推移したら日本は将来どうなつてゆくか、それを思うとわれわれはいても立ってもおられない気持がするからである。現在の日本の混迷はまさしく深刻な内部疾患の様相を呈している。最近の経済復興、消費生活の向上には見るべきものがあるが、一たび目を政治、思想に転ずればどうであろうか。国内に三十八度線が形成されているといわれる。一方には信念と実力なくして政權の座にすわる政府与党、他方には非合法手段を用いても日本を支配せんとする人民戦線勢力、この両者の対立相剋が絶えざる動搖を引き起こし、そのゆきつくはては予断を許さない。敗戦による国民的、道義的意識喪失の結果、個我と官能に基調を置く近代主義が、国民思想の全面をおおい、さらにその鬼子とも

いべきマルクス主義が、驚くべき蔓延まんえんを示しつつある現状である。このままでは破局に至るのみである。ここでなんらかの手を打たなければならぬ。それこそ時勢を直視する者が、ひとしく痛感するところではなからうか。

しからばいかにすべきか。根本の問題は、政策や制度の改廃よりも、それらを生かしまる大前提としての国民的自覚の回復と、国民同胞感の湧出わうちゅうが急務である。われわれは年齢世代、地位職業、知識の多寡たかやイデオロギーの相違など、一切の壁を取り去って、ともにひとしく一国民として、お互いの気持を語り合い、勵まし合う交流の世界を築かなければならぬと考える。この合宿のめざすところも実にこれ以外ではあり得ない。わずか五日間の短い日程ではあるが、ここに浄化された意志を集中して、国民同胞生活のヒナ型を形造ってみようではないか。そこに眞の友情、眞の感激が生まれるならば、そこにおいてはじめて眞に人生を味わうことができるかと確信する。

学生運動正常化のために

参加者の多くが学生諸君であるので、とくに学生運動の現況についてすこし述べてみたい。全学連の運動は、三十人の中央執行委員、すなわち共産主義同盟など一握りの半職業的マルキスト学生によって牛耳られている。しかしほとんどの学生が、そのような方向に関心をもたず、内心いやいやながら引きずられていることもまた周知の事実である。一割にも満たない跳ね上がり分子と九割

の傍観者——だが、かかる事態は、諸君にとってなんら名譽なものではなく、むしろ自主性の喪失を示す恥すべき現象ではなからうか。「荒れ狂う内外の帝国主義」に対する反撃勢力の最先端に立って、挺身すべきことを自らの任務と規定し、事あるごとに実力行使のお先棒をかつぎ、学園の秩序を混乱させることをもって、唯一の意志表示の手段とする——このような愚かな行為を理性ある諸君が黙認してよいものだろうか。

彼らはしきりに共産社会を理想化してみているけれども、一体共産治下の学生生活が、いかなるものか知っているのだろうか。そこではマルクスレーニン主義が必修科目とされ（この試験にパスしなければ他の試験は受けられない）教授はマルキスト一色で固められている。（昇進など一切の人事もマルクス主義に対する熱心さの度合に応じて決定される）学生の入学資格は階級的出身によって差別を設けられ、大学自治は有名無実と化している。（学長は選挙であるが政府から派遣された副学長の監視下にある）また研究内容もマルクス主義的にコントロールされ、共産主義的行事には強制動員される等々、完全な教育の権力支配が行なわれている。このような強圧に対してはレジスタンスがあつたと絶えず、たとえば東独では学業を終え、西独へ逃亡する学生は、毎年平均二―十七%に上るといわれる。ハンガリー動乱が、学問の自由を叫ぶ学生によって、口火を切られたのをもみても、思い半ばに過ぎるものがある。このような事実を背を向け、ただマルクス主義の概念用語をうのみにしたまま、革命を夢想するとき軽卒なる狂信と独断に対して、真に中正堅実な学

生の声を盛り上げ、学生運動の正常化に立ち上ることが——他の労組運動に対しても同様——**焦眉**の急務ではなからうか。切に諸君の反省を望みたい。

人生の真義

ここで一つ根本的に考えてもらいたいことは、イデオロギー以前のものとしての人間のあり方、人生に処する基本的態度についてである。現在の風潮は、前述したように個我中心、欲望充足的な近代主義が圧倒的であり、自我を規制する道徳的修練や全体への奉仕献身などは、破れゾウリのよりに捨て去られて顧みられない。まことに露骨な自我の主張、欲望の発散、官能の追求が、太陽族やカミナリ族からエロ文学、またもろもろの社会的墮落現象に示されている。だがこのようなものにどれだけの価値があるだろうか。諸君はみずから内心に問うてみていただきたい。個人そのものは、風にそよぐ草あしのように弱くはかない存在に過ぎない。個我のためにのみ生きようとするのは、社会的全体生活を営んで来た人類の歴史に対する背信行為である。

とはいえ私は個人を抹消せよと主張するものではない。個人はあくまですべての判断、行動の基盤である。しかしそれは動物のように本能のままに行動するものではなく、全体生活の脈絡の中に己を持つという自律性を具有するものである。されば欲望を断滅せよとはいわない。問題はその内容を浄化し純化し、全体と個人を調和させることである。換言すれば、全体生活のつながりを確

認すること、全体に対するきびしい責任感、使命感を持つことである。仏陀がにせよ、キリストにせよ、古典的人格に共通する生き方はこれではなかったか。いな、かかる卓越した人格のみにとどまらず、名もない国民大衆が、すべてこのつながりを自覚した時にこそ、国民生活の充実と発展が期せられるのであり、歴史がハッキリとこれを証明している。

学問の本旨

学問は単なる知識の累積や対象の客観的分析にとどまらない。それは内心に問わるべきものであり、判断力の根源を築き上げるものにはかならない。現代における学問の本旨をここにあげれば

- (1) 自然科学を統綜とさうする精神科学の研究方法（分析綜合↓価値判断↓意志行為）
- (2) マルクス主義のメトードは、あまりにも自然科学的であり、それゆえにかえって即物性を失っている。

(3) マルクスの予言の不適中（マルクス主義では最近の資本主義の変容を説明し得ない）の三つに要約できるのではないかと思う。

マルクス主義のアキレス踵かかとは、民族（国民）問題である。民族（国民）は歴史における最強の生活単位であり、一切の社会的矛盾を内に含めつつ統御してゆくものである。身近な問題として「日本とは何か」が問われなくてはならない。これがこの合宿の最大のテーマとなろう。

三つの提言

われわれは合宿の冒頭に当たって、次の三つの提言を行ないたい。

(1) 道を求めるのに年齢世代、職業立場の区分はない。ここにおいてになっている別府大学学長の花田先生は、大学学長としてではなく、一個の老書生として合宿に参加したい、といっておられる。それは同時にここに集まっているわれわれ大学教官有志協議会の全員の気持でもある。願わくは一国民としての内的平等感の上に立って、人生の生き方と眞の学問の基盤を求めて行きたい。

(2) 合宿から何かつかんで帰ろうという受動的態度をかなぐり捨てよう。そのようなケチな考えを捨て去って、まず自己の殻を破っておのれ自身のすべてを皆の前にさらけ出し、精神交流の世界に身をまかせようではないか。かくしてこそ、単なる講習会とは違ったこの合宿本来の意義と目的が体感されるであらう。

(3) 合宿は次に来る日常生活の出発点であり、決意の結節点であるにすぎない。一時の感情の高揚に身を任せることなく、今後自分はどうかという問題を絶えず念頭から離さずにおいてほしい。

約一時間にわたって行なわれた川井講師の講義は、参加者の緊張した受講態度を、さらに引き締めるものが

あった。ただ講義内容に比べ時間を過ぎたため、十分理解されず、また最初の講義としては、いささか強烈過ぎたきらいがあったかも知れない。それに遠隔の地からやと着いて、旅装をとくいとまもなくはじまつた最初の講義だけに、聞く人たちにとっては少なからぬ精神的疲労をもたらし、この合宿の目ざすものが生やさしいものでないことを周知させたようだ。二、三真剣な質問も出たが、まだ本格的なポイントをつくまでに至らなかったのは、合宿第一日としては無理からぬところであろう。

次いで宝辺正久氏が登壇、意見発表を行なった。同氏は、実業に従事している自分自身の体験を中心に述べた。そのため川井氏の講義で疲れを覚えた参加者の表情にも、ほっとした明るいものがかがわれた。

（旧制山口高校、東大文学部卒、学徒出陣で応召復員後、家業をついで石炭
商経営、下関市）

学生生活への要望

国文研会員 宝 辺 正 久

大学を卒業し就職してくる人たちに社会が期待するものは何か。それは大企業組織内での独創、中小企業の因習打破など、学問を通じて訓練された合理性、計画性などであろう。しかしそれがいわゆる才知というような個人的能力だけを意味すると、諸君が受け取るならば、それは大きな間違いである。戦後の日本の経済的復

興は、深い感謝と喜びをもって見直すべきことであるが、この復興のかけにあつた国際的要因は、しばらくおくとしても、それは決して国民一人一人の個人能力だけによるものではない。すなわち、戦後の急激な変化にもかかわらず、明治以来の議会政治、産業制度など全般にわたる経験が、そのまま生きて現代日本人の社会的活動の支柱になっていることを、断じて見過ごすべきではない。この生きた伝統に身を託しながら、さらに日本の向上、発展をめざして積み上げられた勤勉さを驚異的な復興の最大原因である。

先人の経験を学びつつ着実な進歩を願ひ、秩序ある革新を希求することが、多くの同胞の良識であつた。しかし一方では革命を夢想し、明治以来の民族的諸経験を覆滅、否定し去ろうとする考え方が広がり、それが因となつて、今日の思想的混乱を招来したのである。理論で武装された概念が、人生経験に乏しい若い人たちをとりこにするのは、やむを得ない点もある。また社会全体が、無意識のうちに味わつてきた経験や、人間の生死そのものに関する敵愾な運命に思いをはせることが大切である。にもかかわらず、これらの問題をあまりにもないがしろにしてきたきらいがある。そのことは、現代知識人の欠陥として、深く反省すべきところである。擲取なき社会を実現するものは、革命だけだというのがマルクスの資本論、階級闘争論である。しかし現実の世界は、健全な労働組合の発達に伴ひ、不断の改革によつて、徐々に是正されていることも事実である。大きな労働擲取を必要としている共産国家の現実も、それと対比して考えてみなくてはならない。理論を通じてものをみれば、表面の矛盾につまずかねばならない。矛盾と対決するのに、否定の原理だけをもってするのは、はたして正しい考え方であらうか。

フランスの哲学者ベルグソンは「人間には空間概念でものを考える癖がある」と指摘している。ベルグソン

のいうこの「人間の癖」が、世の中の混乱や国家滅亡の悲劇に関連していないとはいえない。だが、近代科学の中にこの癖をみることができるのは悲しむべきことである。すなわち、自己を含めて国民の道德的決断や行為のごとく、そこに至る心的変化や心的経過を探求することが大切な事柄についても、これを単なる世の中の一つの事象として固定化し、研究対象にしてしまう悪い癖が、その中であつたようである。科学の対象としての「事実」が、その経験的内容を固定化したり、「事実」から内容が抜き去られて、最終的な形骸^がだけが、そのすべてであるかのように扱われるならば、そうした科学には、すでに、はじめから一つの限界があるといわねばならない。近代科学の対象とした国民生活も、それが生成しつつある「事実」として扱われねばならないし、それを経験しつつ学ぶところに、学問がより正しくなる道があると思う。このような学問と取り組むことが、学園生活の真の姿でなければならぬ。今日の社会活動の支柱となつているものも、目に写る社会相だけでなく、そこには、明治以来の経験と伝統が存在しているのである。従つて、その経験を持続してきた国民の意志を無視して、学問は成り立たない。一筋の意志に貫かれた同胞協力が、実は、戦後日本の目ざましい復興の底力をなしているのと断定しても間違いない。同胞協力とは何か。それは国民相互が、心から信じ合う世界のことである。孤立した個々の心を、協力交流の世界に投じてゆこうとするところに、味わわれる心のかよい合ひである。それは友情と同義でもある。国民生活の中に実在しているこのような友情の世界を、学園生活にも展開しなくてはならない。われわれが、この合宿で諸君とともに作り出したいと希求するものも、この同胞協力の世界にはかならない。

以上で所見発表を終わり、直ちに質疑応答に移った。

問い 宝辺氏は祖先とか伝統とかいろいろ強調されたが、一般の現代人はそういうものを意識せずとも、大體身につけているのではないか。ことさら強調した理由を説明願いたい。

答え 祖先とか伝統とかは、日常生活とあまり縁がないようだが、それが現代とどうつながっているかを正しくつかむことが大切である。身近な例として会社のことを考えてみればよくわかると思う。会社の発展を真剣に考えれば、設立者の苦心と経験を学び、さらに新しい創意をこらしてゆくのが当然である。それと同様に、日本の真の意味での独立発展を念ずるならば、われわれの祖先や先輩が、いかにそのために苦心を重ねてきたかという点に思いいたって、その「経験を学ぼう」とすることもまた当然である。私のいう「伝統」とは、むかしこれこれしかじかのものがあつたと回顧したり、記録としてとどめておく、ということではない。それだけでは、伝統は「いま」につながっているとはいえない。もつと掘り下げていうなら、伝統とは単なる概念ではなく、経験の内容なのだ。単なる過去の出来事ではなくて、血の通っている生きた事実なのだ。それゆえに伝統は、いまにつながり生きている姿として把握しなければならぬ。ここまで考えなければ祖先とか伝統などということは、馬鹿らしいこととしか写らないであらう。

以上で合宿第一日午後の行事は終わった。淡々と進められるスケジュール、しかしその中に漂うきびしいほどの真剣さ。この日の講義や質疑応答が参加者にどのような印象を与えただろうか。ソファや廊下のすみから

「こんな熱心な会ははじめてだ」

「まだわからないが、来たかがあるようだ」

「そうかね、僕は肩がこって息つくひまもないような気持だ」

「講義や意見発表はよくわからない」

というようなささやきも聞かれる。楽観と疑惑と好意と反発と、それぞれ心の動きを示す複雑な表情が、ようやく参加者の顔に浮き彫りされてきたようだ。

五時半から七時半までが入浴、夕食の時間。三、四十人はゆっくりはいれる浴場。入浴しながら自己紹介しているグループがあるかと思うと、温泉気分を満喫している一群もみられる。みんな裸になつてお湯につかっていると、次第に一つの雰囲気の中にとけあつてゆくように見受けられる。食事は食堂でセルフサービスだ。（三、四班だけ班室）施設の関係で班ごとにまとまつて食事できないのが残念。このもどかしさは最終日まで続く。

班別討論

七時半から班別討論である。国民文化研究会の会員は、各班の世話から班別討論の司会、指導に当たる。一



方大学教官有志協議会の会員は、顧問格として、随時各班を回わって助言を与えることになっている。各班員は割り当てられた小部屋、ロビー、あるいはサンルームに集まる。

最初に自己紹介が行なわれる。自己紹介は、はじめて相会したものが、心を接近させる重要な契機である。各班ともこの合宿に参加した動機を中心に、日ごろの感想を交じえながら、一人三分以内で発言してゆく。

「阿蘇にひかれてきた」

「教養を高めたいと思ってやってきた」

「日ごろから何かしら満たされぬものがあるので……」

「学生運動は明らかに行きづまっている。その打開策をみつけようとして参加した」

「珍しい企てのように思われたのでその正体をみきわめようと思ってきた」

というような卒直な意見が次々に述べられる。中には

「私たちには希望がない、心から語り合う友人もない。そのうえ生活目標がない。このなんともいえない淋しさを満たしてくれるものは何か」

という切実な感想を述べるものもあった。

自己紹介が一通り済むと、各班の指導員は各班員に対し、日ごろ各人が持っているいろいろの疑問を講義と関連して述べてもらうよう司会してゆく。しかしなにぶん初めて顔を合わす未知の者同士なので、遠慮や気兼ねが伴って、思い切った発言は出ない。各指導員から討議課題が出されたが、活発な意見交換はまだ無理のようであった。提出された課題は、講師の話に関連したものや人生観などであったが、決定的な意見は出てこな

かった。中には卒直に自分の意見を述べるものもあったが、それらの発言は何かチグハグで、ほかの班員の心にしみいり、共感を呼び起こすだけの迫力に欠けていた。

大多数の人たちは、提出されている問題の意味をつかむのが精いっぱいというところで、班別討論にふさわしい白熱した空気はまだ生まれてこない。そこで各班の指導員たちは、次のように助言していた。

精神科学上の問題は、数学の解答のように割り切った答えを出したら、公式主義に陥る。むしろはっきりと問題を発見することが大切ではないか。そうすれば、自分の体験を通して回答を見出すことができるようになる。そしてやがてその問題が、自分の血となり肉となる。だから合宿中はディスカッションにとられるよりも、生まのままの自分をぶっつけ合うことが何よりも大切だ。諸君はこれがどんな大きな意味をもつことか。この合宿を去る時まで知っていただきたい。それは学問の研究方法上の大切な問題であるからである。

十時すぎ班別討論が終わり、参加者全員寝につく。遠くから笈きかを負うてきたうえ、第一日から本質的な質問を浴びせられたりして、精神的にも疲れたのだろうか、一せいに就寝した。ひんやりとした高原の夜のしじまの中に、すだく虫の音とともに、はややすらかな寝息がきこえてくる。

検 討 会

一日の行事が終わってから、検討会が開かれた。本部室に大学教官有志協議会員と、国民文化研究会のメンバーのほか、他の団体から合宿参観にきた二、三人の班友が集まる。議題は班員個々の心を開くための心理分

析と、その日の反省および翌日の日程をどう進めるかなど、運営全般の問題が中心となる。

まず講師と各班の指導員が、第一日の感想を卒直に述べる。

「僕の班ではこんな発言があつて、こっちがちょっとめんくらつてしまった。その班員はこういった。〃開会式のあいさつと最初の講義を聞いたところ、その中に学校の講義では聞きなれない言葉が沢山でてきた。たとえば祖国とか祖国愛とか、それに日本などという言葉の意味も、いままで聞いていたものとずいぶん違うようだ〃と。僕はそれをきいて、ちょっとびびくりした。いまの学生たちはそれほどまでに、祖国から離れてしまっているのか、と。しかしそう思った次の瞬間には、この人のいうことは、何という素直な感想なのだろうか、と思つた。それを語つてくれている班員の目の輝きをみているうちに、なんともいえないうれしさがこみあげてきた。素直な正直な学生の姿、久しぶりで清々すがすがしいものにふれた感じがした」

ある指導員の語るこの所感をきいていた列席の一同もまた、うれしそうに目を輝かせた。語る班員と聞く指導員の間に、早くも謙虚な信頼感が芽ばえてくることを予感したからである。それは合宿第一日に生まれた明るい報告であつた。だが、そのほかいろいろでた意見を拾つてみると

「講義に対する質問も班別討論の内容も、まだ地に足のつかないような議論、体験の伴わない議論が多かつた」

「すべての問題を、参加者自身の問題としてとらえてくれるようにしたいものだ。結論を発見するよう導かなければダメだ」

「他を見て批判するのではなく、参加者自身の切実な生活体験がきかれるようにできないものか」

「重要なことは、問題をどれだけ理解しただろうかということではなく、自己をどれだけ語ったかということだ」

「知的理解を伴う問題なら、参考書を紹介しておけばよい。帰ってから勉強すればすぐわかることだ。しかしながら、自分自身の課題を発見することは、このような機会でないとなかなか得られない。もちろん時事問題の正しい把握は重大であるが、それを通して本質的な人生観の問題に結びつけなければ、単なるニュース解説になってしまう」

検討会が終わると、その結論に基づいて綿密に日程を検討する。当面の課題は、何といっても全員の心を急速に接近させることである。そのためにあすは、午後と夜との二回班別討論を持つようスケジュールを組み替えねばならない。

かくて主催者側が寝床についたのは、すでに十二時を回っていたであろうか。参加者が就寝してからまる二時間、ねむさも忘れて検討が続けられたのである。

緊張する心を講義と討論に

(第二日)





午前六時、起床の鐘とともに、会館南側の庭園に集合する。しつとりと芝生の上におりた露と樹間に宿る露の玉が、キラキラ光って美しい。きょうは阿蘇も雲に閉ざされて見えない。

全員集合を終わり、気合のかかった号令で、体操が行なわれる。昨夜の睡眠で疲れがとれたらしく、身体の動きも軽やかである。

体操ののち洗面、朝食を含めて、講義開始までの約二時間、参加者は自由時間を楽しむ。一人つくねんと物思いにふけている者、次々にあいさつをかわしている者、グループを作って談笑している者、卓球に興ずる者などさまざまだ。館内を散歩している人たちの感想を聞いてみた。

「各班の指導員が、気味悪いくらい親切だ。便所はどこですかと聞くと、わざわざそばまで連れていってくれた」

「それにここに来ている教授連中も頭が低い。僕の学部の教授はもっとツンとしている」

「それにしてもなんだか異様なところへ来てしまったという感じだね」

「いまさら帰るに帰られず……早く合宿を終わって阿蘇に登りたい」

どうやらこのグループは、阿蘇登山第一目的組のようだ。

午前八時、今立鉄雄講師によって第二日の講義が開始された。

講師はまず戦争中の経験を回想し、ノモンハン事件、独ソ不可侵条約、第二次大戦勃発と、目まぐるしく動いた「複雑怪奇」な国際外交戦を分析した。次いで歐洲の激動に関連して起こった大東亞戦争に問題を移し、ソルゲ事件、ソ連参戦、日本とドイツの敗戦をめぐる米、ソの虚々実々のかけ引き、東欧共産化の推移など、多くの資料を駆使しながら、第二次大戦以来一貫して続けられてきている心理戦の特徴を強調した。左にその結論に当たたる部分を掲げる。

(昭和十五年早稲田大学文学部卒、参議院考査特別委員会事務局調査委員を
経て現在国際問題研究協会理事)

現代と心理戦

国際問題研究協会理事 今立鉄雄

共産主義戦争論の展開

心理戦争は宣伝戦、謀略戦あるいは秘密戦といわれる。そのいずれもが、心理戦争と呼ばれる一つの要素であり、またそれらを総合したものが心理戦争でもある。

われわれは戦争というと、とかく花々しい武力戦を連想しがちである。クラウゼウィッツは、その著『戦争論』で「戦争とは敵を屈伏させて、自分の意志を実現させるために用いられる暴力行為である」と規定した。また「戦争とは他の手段を混入した政治の継続にほかならぬ」ともいっている。マルクスもエンゲルスも、クラウゼウィッツの戦争論に深い注意を払ったことは彼らの著書、書簡にそれが散見される。しかしそれを最高度に活用したのはレーニンである。彼は左手にマルキシズムを掲げて革命を説き、右手に戦争論を振りかざすことによって共産主義戦争論を完成した。

中国共産党首席の毛沢東は

『戦争は政治の継続である』。この点からいえば戦争は政治であり、戦争そのものが政治的性格

を帯びた行動である。古来政治性を帯びない戦争はなかった。つまり戦争は一刻といえども、政治から離れることはできない……中略……だが戦争には特殊性がある。この点からいえば、戦争は一般的な政治とはひとしくしない。『戦争は政治の、特殊な手段の継続である』。政治が一定の段階まで発展すれば、もうそれ以上、従来通りには前進できなくなる。そこで戦争が勃発して、政治の路上に横たわる障害が、それによって一掃される。だから政治は血を流さない戦争であり、戦争は血を流す政治である（『持久戦論』より）

といている。マルクス—エンゲルス—レーニン—スターリン—毛沢東ラインを貫いている共産党の戦争観こそ、戦争は政治そのものであり、そして平和すら戦争の結果、実際の変化が起こったあとの追認であり、承認でしかない。このことはレーニンが

「ヨーロッパには平和が支配していた。しかしそれが保たれたのは、数億の植民地に対するヨーロッパ民族の支配が、常時の、絶え間ない、決して中止されない戦争によって実現されていたからである。われわれは、これらの戦争を戦争と見なさない。なぜならこれらの戦争は、あまりにもしばしば戦争に似ず、武器をもたない人民に対する最も野蛮な虐殺に似ていたからである。問題は次の点にある。すなわち現代戦争を理解するためには、われわれは何よりもまずヨーロッパ列強の政治に一般的な視線を投げねばならない」

と述べていることによって知られよう。これは社会主義社会が実現しない限り、平時も戦時も区別

なく、共産主義者にとっては革命が達成されるまで、戦争が継続することを意味している。それゆえにこういった戦争観の持ち主を相手とすると、たとえ全面武力戦が発動されなくとも、そこには絶え間のない抗争と、緊張した対立を呈することは当然であった。これらのあらわれが、すなわち冷戦であり、心理戦である。

現代戦と心理戦争

そもそも、戦争は相互の理解と互譲の精神を欠いて話し合いがつかず、憎しみの感情が激突するところ、存亡をかけて自己の意志を押し通そうとする暴力行為によって発生するものである。しかし暴力行為は、何も軍事活動に限られたわけではない。古来からよく用いられる兵糧攻めは、経済戦の古典的形態といえることができる。近代戦闘の科学化が、軍需動員の円滑な遂行なくしては、軍事力の形成すら困難になるところに、経済力運用の如何が大きく戦争の運命を左右するのである。このような戦争を別名総動員戦争という。

だが暴力とは軍事力経済力だけではない。環境が意識を決定すると同時に、意識もまた、環境をリードするならば、敵の心理をあやつることで、戦争指導を有利にする道も考えられよう。たとえば偽りの情報をばらまいて、敵の判断を誤らせ、あるいは人心の不和につけこんで、その離間をはかるといった策謀は昔から好んで用いられた。これを謀略といい、孫子も「正を以て合し、奇を以

て勝つ」と推奨したのである。そしてこのような心理操作は、近代に入り報道が普及すると、すぐさま活用されて宣伝となった。新聞、雑誌、ラジオなどの「言葉の武器」が、真偽とりまぜたニュースをばらまくとき、人々の心は惑乱されて平静を失う。つまり物理的暴力に対し、無形の暴力すなわち心理力もまた暴力の一つとして登場した。そして軍事、経済、心理の三戦力を総合し、その総力をもって、敵を圧倒するところに、現代戦争の特色がある。これを総力戦争と名づけることは、当を得た表現といふべきであろう。

ところで、戦争が総動員化し、総力化すると、戦争指導の方法も大きく変わってくる。第一次大戦は、独仏の陸軍が四つに組んで勝負がつかず、長期の陣地戦になったのであるが、そうなる所作戦の巧拙よりも国力の強弱、とくに経済力が物をいう。そして、世界の七洋を支配したイギリス海軍と、その巧妙な外交は、この経済力競争に勝を占める大きな要因となった。また第二次大戦になると、戦争は資源地域の争奪を中心に指導され、その経過中に武力戦を激発したのである。たとえ一朝の会戦に敗れても、経済基盤さえ強固ならば、退勢を盛り返して、最後の勝利を収めることができるが、しかし経済的裏づけのないところ、武力作戦における一時の成功も、決して終極の勝利を約束しない。このような戦争を経済戦争と形容したのである。

そして原爆の出現は武力戦の様相を一変する。そこではともに傷つき、いかなる強国といえども戦争の勝利を確信することはできない。こういった状況を、オッペンハイマーは二匹のさそりにた

とえた。つまり相手を刺し殺すと同時に、自分もまた相手から毒を注ぎこまれるわけである。従って全面武力戦の発動は、米ソともためらわざるを得ない。相反した理想を追求して両者が対立を続けるところに、しょせん平和は訪れず、世界は二分され冷戦を現出した。

原爆に象徴される軍事力の発展が、その発展のゆえに、逆に自己否定現象を呈すると、紛争解決の手段として物理的暴力、とくに全面的武力戦を発動することは、侵略者の汚名を覚悟せずには不可能となった。しかも国民皆闘を余儀なくされる総力戦にあっては、真の大義名分がなくては、戦争それ自体の遂行が困難となる。それゆえ紛争解決の手段として投入される物理的暴力は、お互いに制限されざるを得ないことになる。その結果はインドシナ戦争や、朝鮮動乱に見られたような力のつり合いを現出した。従って紛争はこのつり合いを舞台として、その上に演ぜられる心理戦略の決闘によって左右される。このような戦争を、心理戦争と形容することは、あえて不当ではなからう。

もちろん戦争が感情の激突である以上、敵対観念がこり固まると、いつか全面武力戦をまき起こさないとは断言できない。このような全面戦争は、武力的強者の野望的侵略として、計画されるよりも、心理戦的敗者の最後のあがきとして、爆発する公算が大きいものではあるまいか。つまり現代戦争は冷戦を前後に従えた熱戦ではなく、むしろ熱戦をその中に浮かべた冷戦それ自体と見るべきであり、物理的暴力のつり合いを舞台として、その上に演ぜられる心理戦争の経過中、不幸にして局

地的武力戦もしくは全面武力戦として誘発されるものであろう。

ソ連心理戦の特質

軍隊は遭遇して衝突するが、心理戦はお互いに、反対の方向にすれ違ってしまふ。宣伝は担当者同士の格闘ではなく、聞き手という決して返答をしてくれない相手と戦わなければならない。その反面聴取者はラジオ受信機を通じて反撃はできず、ピラを落した飛行機にピラを投げ返すわけにはいかない。(ライン・パーカーの『心理戦争』より)

ここに心理戦の特質がある。それは軍隊と軍隊とが、戦場に雌雄を決する直接闘争ではなく、心理工作の対象をめぐって演ぜられる間接競争である。それゆえに心理戦争はその担当者と対象との関係が、勝敗を左右する基本的な要件となる。この点から、マルキシズムの革命思想と全体主義の政治機構は、ソビエト心理戦の特質となっている。

ソビエトが心理攻勢を推進するとき、尖兵せんぺいの役割りを果たすものは、いうまでもなく共産主義の思想工作である。心理戦には武力戦に見られるような戦場がない。それは中立国を舞台とするし、敵国内に奥深く浸透するし、そして現にわが国の内部でも戦われている。だから敵の権力下で、なおかつ、わが思想にどうして共鳴させるか、その反面わが支配地域に、このような分子が発生するのをどうすれば防止できるかということとは、心理戦の出発点であり、また到達点ともいうことがで

きる。ところでソビエトの思想戦の具体的な一例をあげれば、尾崎秀実のスパイ事件がある。彼は祖国ソビエトの安全を祈って、巢鴨刑場の露と消えた。だがわれわれは残念ながらモスクワで「天皇陛下万歳！」を絶叫しながら、銃殺されたロシア人があったことを聞かない。

人は多かれ少なかれ、それぞれの思想をもつ。しかも思想は、個人個人の特有物に止まらず、さらに歴史的、社会的に共通の傾向をもった一つの思想集団を構成する。そして思想集団が接触するところ、そこに思想交流が行なわれて、より進歩した思想に発展もする。だが同時にややもすると憎悪反発して、深刻な対立をも招く。

マルキシズムは、階級憎悪から出発して闘争に終始する、戦闘的イデオロギーの一つであることは、今さら述べる必要もなからう。共産主義を基盤とする宣伝と、宣伝による共産主義の浸透が、二者一体となってソビエト心理戦争の主役をなしている。

ところで共産主義的統制を、すぐ単純な肅清や露骨な弾圧と同一視したら間違いである。そこでは報道も教育もそして労働組合も、あらゆる社会活動がすべて一つの思想を目標に組み立てられ、そのあげくいつの間にか、進んでその思想を支持するように頭脳が改造される。これが「洗脳」であるが、エドワード・ハンターは、中共の一例として次のような事実を示している。

彼はトラックの運転中に、うっかりして赤信号を突破したことがある。彼は呼び出しを喰って警察に出頭すると、罰金を科せられたうえ小言を聞かされた。『蒋介石はよろしくない。赤信号

を突破するのは甚だ^{はなは}よろしくない。アメリカは帝国主義侵略国家である。君はいつも赤信号に注意しなければならぬ。蔣介石は……』お説教はこんな調子で続けられ、そのうちに彼はこの単調なくり返しに気が狂いそうになった。

これは極端な一例かも知れないが、このような日常の反復は、いつか与えられた思想をおのれ自身がかんだような錯覚に陥らせる。つまり思想の強制ではなく、自発的な思想転向であったかのように思いこませる巧妙さこそ、洗脳すなわち共産主義的思想統制の特色であろう。そしてこういった思想工作の効き目がないうちに、はじめて強制労働が待ちうけるのだ。それは帝国主義に幻惑されたブルジョア思想を、労働によってたたき直すというものだが、実態は社会主義経済を維持するために、より低廉な、場合によっては、ただの労働力をひねり出す手段にはかならない。

洗脳の好例としてもっと徹底したやり方がある。アメリカのワード奉天総領事が、かつてモスクワに駐在していたとき、某国の大使館員が強姦^{かん}罪で裁判に付され、国外退去を命ぜられた。その男がパスポートをもらうために大使館にきたとき、同僚が裁判の模様を尋ねると「あの連中は私との約束を果たした」と彼は答えて自白の真実つまり犯行を認めたのである。ところが数週間後に、事件の記録を調査してみると、奇怪な事実が発見された。強姦事件の当時、問題の館員は他の町に滞在していたにもかかわらず、彼は安全な大使館に戻ってなお犯行を自白したのである。それから数カ月たち、この追放者から一通の信書が大使館に届けられた。それには「自分が強姦罪を犯したと

誰かに話したように記憶するが、そんなことはない。事件発生当時、自分は他の町にいた。今でもなお自分の精神には、その時期と公判の出来事について大きなギャップがある」と書かれていた。

このいきさつはしよせん知るすべもないが、他の諸情報を総合するとき、一応の推察をすることができよう。ソビエトではちょうど精神患者を治療するのと同じやり方で、人間の思考内容を変えてしまうある種の催眠術があるらしい。そういえば、過去幾多の粛清裁判で当然死刑とわかりきった犯行を、どしどし告白する秘密もうなずける。そして朝鮮動乱で騒ぎ立てたあの細菌戦も、こんなからくりを基礎にデッチ上げたと判断すれば、案外簡単にはつきりするのではないだろうか。

ソ連の心理戦争と条件反射

ウラディミル・ペトロフの書いた「シベリヤの果て」は、ソビエトが心理学者をいかに国家的目的のために駆使したかを明瞭に物語っている。彼は一九三五年から六年間、政治犯としてシベリヤで重労働を経験、ウクライナよりソビエトを脱走、第二次大戦後アメリカに渡った亡命者である。

『シベリヤの果て』——心理学者との奇遇——によれば、囚人となった心理学者は、思想改造について「私は一九三五年以来精神病学の教授をしており、モスクワの精神病院にいた。私は心理状態に及ぼす環境の影響について論文を書き、その中で患者の取り扱いに関する一連の方法を考え出した。実験は成功し論文は注目を引いた。ついで秘密警察に招かれた——秘密警察は、私に反射

の過程を研究するよう申し入れた——彼らは正常な人物をどうやったら白痴にできるかを見出すことに興味を持っていた——

私は正常の人間を白痴にすることは、その逆より遙かに容易であるということを発見した。ルーズな監視の下にきつい肉体労働を課し、系統的に食を減ずれば素晴らしい効果を生む。その場合囚人をさまざまに必要はない。通常二カ年ほどその状態におくと、人間の知的能力は五〇パーセント喪失するものである。もちろんこれは集団の場合で、個々の場合はより顕著な効果が得られる——」

と説明し、さらに秘密警察が、被告人に虚偽の陳述をさせる方法を述べている。これらはすべてバプロフ教授の「条件反射学」を基礎としたものである。

条件反射を手っ取り早く説明するなら、一つの習慣性を人為的に与え、天性としてしまうこと、といつてよい。たとえば、蛇へび使いの籠から蛇が、鎌首かまづねを持ち上げようとする場合、一枚の白い紙片で頭をなでると、首をひっこめるのを想像していただきたい。一枚の白い紙片の威力は、蛇使いに使用させれば絶対である。これは蛇がそのように飼い慣らされたからである。鎌首だけがかろうじて通る穴をあけ、蛇が首をもち上げると白い紙で頭をなでるが、その白紙には針がついていて、蛇は頭をもち上げると針で頭をつつかれる。いつしかそれが蛇の習性となり、頭を上げて白紙があると首を縮めるというわけである。

この簡単な原理を学問の分野に見出し、条件反射学として大成したのが、ソ連のパプロフ教授であるが、この条件反射がソビエトの政府によって応用される場合には、敵の心をあやつる心理戦争の一つの武器となったのである。このパプロフの条件反射はソビエト心理戦の武器として強力に推進されているが、スターリンの戦略戦術の基礎は

一、前衛を鼓舞してその戦闘準備を完了すること

二、予備軍を前衛支持の準備態勢に配置すること

三、戦慄りっさせることによって、敵陣営内における混乱と分裂を起さしめること

にある。そのためには人間の心理をあやつり、支配し、その人間がソビエトの指導者の要望を實行するように仕向けていくことが、絶対に必要であり、そのことが強力に要求される。

これはあらゆる場合に、あらゆる人々に対して行なわれる。すべてが心理戦争のための武器となり、武力の伴わない戦争が繰りひ展ひげられるのである。

それゆえにソビエトは、共産主義革命達成と同時に、心理戦争を全世界に対して始めたといふことができる。また共産主義的戦争観からいえば、共産主義者となった時には、すでに心理戦を行なわねばならぬ運命に置かれているともいえよう。ソビエトの心理戦争は、かくして米英をはるかに引き離し、独歩の立場で闘われるのである。

アメリカの予防戦争と呼ぶ心理戦が、アメリカ的科学の粋を集めて行なわれても、その観念に差

がある以上、簡単にソビエトに追いつくことは出来ない。ライン・バーカーの「心理戦争」を一読しても、その観念の差を見出すことができよう。米國務省の調査局ソ連東欧課長モーズ・ハーヴェ氏の米議会における証言は、この条件反射をソビエトが駆使している現状を端的に物語っている。それによればハ氏は

『スターリンおよびその他のソ連の指導者たちは、ソ連支持が完全に獲得されるためにこれらの勢力を操縦する「正しい方法」を詳細に記述している——恐らく「心理戦」計画というのが最もよからう。というのはその目的が、人間の心意をあやつり、支配して、彼が望むと望まざるとに関係なく、ある特定の場合に、彼らがソ連の指導者の要望を履行するように仕向けることにあるからである——共産主義者自身の見解に従えば、計画の要求事項は、第一に民衆が特定の場合におけるソ連の立場を、正しい立場であると信ずるよう教育によって納得せしめることである。次は扇動によって民衆を決起させる——また、計画は民衆がクレムリンの欲する道についてくるように指揮する。さらにそれは組織を通じて、効果的な活動が確保されることを要求する。もしソ連の目的に、積極的に貢献するよう民衆を操縦できない場合は、計画は消極的に民衆を利用する道をとる。それは、彼らの間の分裂と混乱を利用し、彼らの抵抗意志を切り崩すことを要求する。換言すれば敵の陣営内にあつてクレムリンの目的に役立ち、その勝利を容易ならしめるものは、すべて利用すべしとするのである』

と述べている。「人間の心意をあやつり、支配する」とは、よくソビエトの心理戦争の実態を把握した言葉といふことができよう。

むすび

われわれは、いろいろな角度から心理戦争を一応分析してみた。その答えとしてあらわれたものは、戦争を政治、つまり革命と同一視する共産主義者にとっては、平時、戦時の区別はなく、平和とは血を流さない戦いにはかならないことを意味している。それゆえに全面武力戦が発動されなくても、戦争は形を変え、常時闘われつつ、革命が実現するまで続くのである。その冷戦では心理攻勢が、マルキシズムの組織を通じて相手国に浸透していく。

しかも心理戦とは積極的な攻勢だけではない。防御的な思想統制は、冷戦の全期間はいうまでもなく、革命政権樹立後も反動を封殺し圧殺するために、永遠の活動を保つ。

かくしてソビエトが手をのばすところ、そこには常に執ような心理戦争が激しく闘われ、われわれの思想を改造洗脳しようとし、あやつろうとするのである。

換言すれば共産主義の天国とは、魂の犠牲であがなった切符なしには、入国できないことが、前提であることを忘れてはならない。フルシチョフ首相の訪米によって、戦後の冷戦は解消するかに見える。しかし冷戦の終結を期待するのはよいが、新たな政治戦争、経済戦争がこれより始まるこ

とを心しなくてはならない。

たとえば安保改定闘争を取り上げてみた場合、一般にその闘争は、如何に理解されているのだろうか。おそらく平和闘争の一環としてばく然とながめるのではなからうか。われわれはソ連の心理戦を政治戦争とみる。そこに盛り込まれているのは、日本を中立化せしめようとする激しい意欲に基づく戦争であり、現実には日本政治の否定である。

われわれは、混沌まごとしていまだに国家の方向すら決定しない日本が、この米ソの心理戦争に好個の場を与えていることを知るべきである。しかも遅ればせながら、日本もまた心理戦争に、自ら一役を買おうとする気配の見えるとき、心理戦争は国家の方向が決定され、それにある程度国力の裏づけがなくては行なえないことを痛感するのである。一朝一夕に心理戦争は計画され、成就されるものではない。

孫子は「兵は国の大事、死生の地、存亡の道、察せざるべからず」といい、その要諦ていは「百戦百勝は善なるものに非あざるなり。戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」としたが、心理戦争ということを考えるとき、痛切に思い浮ぶ教えである。

弱小国の日本の生きて行く道は、単純な再軍備論や戦前の蒸し返しむしの国防論ではない。「道とは民をして上と意を同じくし、これと共に死すべくこれと共に生なくべくして、危あやきを畏おそれざらしむる」ことであり、「彼を知り己を知る」ことでなければならぬ。現代の日本には、余りにも彼を知ら

ず己を知らないものが多いのではないか。必理戦をたたかう国々は、その間隙からひそかにわが国全体を狙っている。

堂々たる体軀から流れ出る口調は、一つのリズムを帯びているように感ぜられる。今立講師の話は、思想を問題とするよりも、事実を示す引例が多かったし、しかもそこに示された事實は、学生諸君には初耳と思われることが多かったため、驚きと深い関心を集めたようだ。とくに、若い世代の人は、大東亜戦争を、軍国主義の暗黒時代とか、帝国主義的侵略戦争というように、一方的概念的に理解する傾向が強いが、講師の示した大國間の思想戦の様相は、そういう問題を単純に割り切ることができないことを、知らせるに十分なものがあつた。従つて質問も、日本の運命を自分のこととして考えようとする傾向が出てきた。つぎにその一部を紹介してみよう。

問い 現在ソ連、中共によって、激しい心理戦が展開されていることはよくわかったが、これに対する日本の防衛態勢はどうなっているか。

答え 日本の心理戦に対する防衛は全然できていない。政府も心理戦はやっていない。政府部内に内閣調査室などがあるが、とても心理戦をやる段階まで行っていない。わずかに民間でいくらかやっている程度である。心理戦とは宣伝戦ということだけではない。国民の気持を一つにすることが何よりも大切である。それ

を背景にして闘わない限り心理戦の勝利はない。

問い 欧米を中心とする自由主義国の心理戦はどうか。

答え 最も優秀なのがイギリス、ついでアメリカである。ただアメリカの場合、心理戦にめざめたのがおそかったので、ややもするとあせりがでて無理をすることがある。しかし現在アメリカは、中央諜報機関でだいぶ力を入れてやっているから、ある程度までソ連に追いつけるのではないか。現在一番激しい心理戦の行なわれているところは、西独、ベルリン、日本、さらに中近東のイラク、イラン、エジプトなどである。国民がしっかりといてないと、世界のスパイ謀略者にかきまわされることになる。日本は極東における唯一の謀略都市の汚名を受けている。

問い 心理戦の深刻な時代に、小銃とか特車でかためた自衛隊はあまり役立たないのではないか。

答え 心理戦は必ず背景をもつ。ソ連はICBM、人工衛星、原水爆というようなものを背景に心理戦を行なっている。アメリカも強力な基地群とIRBM、原水爆を背景にしている。イギリスまた然り。フランスも原水爆を持つとしていて、そしてさきほどもいったように、各国は自国の利益しか考えない。日本が善意に考えるからといって、相手方も善意に考えてくれるとは思われない。いかに憲法第九条をふりかざしていても、世界各国はこれを尊重してくれない。世界大戦はますます考えられないが、終戦後も朝鮮戦争、スエズ紛争、ハンガリー動乱と相次いで起こっている。こういう局地戦心理戦に対して、ある程度の守りを固め

ることができなければ、心理戦に立ち向かうことはできない。も一つは国連自体の能力だけで、全面的に日本の防衛が保障されるかどうか。国連に拒否権があり、現在のように不備を露呈している時、国連が「日本の防衛は保障した。国連にまかせておけ」といつてくれるかどうか。これらの点も再考していただきたい。

問い 核兵器反対といいながらなかなか盛り上がらない。これをおし進めるにはどうしたらよいか。

答え 米ソが核兵器を持ち、その他の大国も持とうとしている。そしてこれらの大国は、表面核実験反対といいながら、実際にはさらに強力な核兵器を作りつつある。このような仏の顔をして心は鬼である国々に向かつて、反対という言葉だけでは、カエルの面つらに水をかけるようなものだ。それからもう一つ、核兵器反対をいいながら、それがソ連的勢力に追従するような政治的結果になつては、多くの人たちはついてこない。原水爆の洗礼を受けたといいながら、それが一つの政治目的に利用されていて純粹でないために、世界は冷たい目でみている。もつと純粹な日本人の願ひが出てきて、世界の人たちにも認められていいはずだと思う。

問い 日本はソ連や米国にかたよつてはいけないといわれるが、現在の立場を考えた場合、はたしてアメリカを中心とした自由陣営から離れて、日本の将来が保障されるかどうか。日本が米ソに追従しないで進むことはできないか。

答え 米ソに隷属たしないとは精神的な意味である。現実の問題として日本がアメリカに占領され、すべての制度が改められた以上、当分の間は講和条約の立場を基礎に進んでゆかなければならない。問題は私どもが、

米國なら米國のいうことを、そのまま聞いていいか悪いかという点である。そういう意味で、現状においてはそれを肯定しつつ、一步一步改善してゆくよう努力しなければならない。

問い 日本に革命が起こるとすると、チェコスロバキア「平和革命」の方式が採用されるといわれるが、チェコの革命方式は、どのような点にその特徴があるのか、それが将来の日本に適用される場合の想像図も、合わせ示していただきたい。

答え チェコ革命は、昭和二十四年に行なわれたが、それを現代の日本に当てはめて説明すれば、社会党が政権を取るような形をとりながら、実際は共産党が政権を取ってしまうという方式である。さし当たり日本では、総評が非常に強大化し、それが社会党と結んで革命にまでもってゆくことになろう。総評は、現在三百万の傘下労働組合員を持ち、政治闘争をやっているから、政党化しても少しも不思議ではない。そして総評が、次第に共産党路線に乗って動くことになる。それから、も一つチェコ革命の特徴は、チェコがソ連と国境を接していたことであつた。だから常にソ連から指導者が来て内部攪乱をやり、最後には国境に待機していたソ連軍が圧力をかけた。だから難なく「平和革命」に成功した。現在の日本でもソ連、中共からいろいろな人がきている。たとえば、この間香港からサッカーチームがやって来た。警視庁は懸命にその後を追つた。スポーツ親善が名目だったが、その監督は中共のスパイであつた。さらに梅蘭芳（メイランファン）という俳優が来た時は、みやげに日本の電話帳を全部持って帰った。電話帳を克明に調べると、日本の国家機構や姿が浮き彫りになる。電話帳は大切な武器である。（ソ連に電話帳がないことも合わせ知って置いていた

だきたい）そのほか、中ソからの政治闘争資金の流入、招待外交、日本人の追従等、数えあげればきりがない。こういう準備工作を重ねておいて、戦争とかなんかの混乱期に乗じて、核兵器その他で圧力をかける。こういう形をとれば、チェコ方式が、そのまま日本に生かされることになる。それから日本共産党革命の想像図だが、原子林次郎氏の「東欧十三年」（時事通信社刊）を読んでいただきたい。この間の消息が詳しくうかがえる。

やつぎばやに出される質問は、限られた時間内に消化することができなかった。参加者の中から講師の話をもっと突っ込んで聞きたいという声が出た。そこで午後十時から希望者は質疑を続行することにした。

次いで植木九州男講師（長崎大学補導係長）が登壇した。講師は冒頭「この研修会に参加するまであまり大きな期待をかけていなかったが、一晚参加してみて、そのあまりにも熱心な態度と、質疑内容の充実していることに驚いている。私自身準備不足のまま、演壇に立つことをいま強く後悔している」と前置きして本論に入った。

学生運動への疑問点

長崎大学補導係長

植木九州男

全学連に対する二つの疑問点

学生運動を語るに当たって、その中心的存在である全学連について語るのが、妥当であると思われるので、この全学連に関し、私の疑問点を二つだけ出してみたい。第一点は現在の全学連が、結成当初の目的からあまりにも逸脱していることである。二十年十二月東京都学生連合会、二十一年二月生活協議会が生まれ、同年四月に民主主義学生協議会が発足した。

そのときの目標は、学生生活は学生自体で守らねばならない、そしてこのような協議会組織を通じて学生相互の親睦と学生生活の向上を図ろうということ、その後全学連が生まれたと聞く。ところが現在の全学連は、当初の目標どおり活動しているかどうか。確信を持って然りと答えられる人々が幾人いるか。第二点は全学連を指導する中心人物に、日本共産党から「反党分子」として除名されるような過激分子が多いことである。私の記憶では、二十四年には教育復興を叫んで全国的ゼネストに突入し、二十五年レッドパーシ反対、二十七年再軍備反対、二十八年「破防法」反対、

二十九年京大事件、そして三十一年には砂川闘争と、その運動は国民のひんしゆくを買うような思いがった闘争の連続であった。このような運動の実際を見聞する機会に恵まれた私には、これが学生運動の本姿だろうかという疑問が、根強く去来するようになった。

全学連急進の原因

では全学連の急進分子が、なぜこのようなハネ上がった運動をするようになったか。私はすべての学生の持っている青年の潔癖性と、理想主義公式的なイデオロギーを、容易に受け入れ易い精神的基盤があること、一般学生が無関心なために、急進分子の運営に全学連の運動をまかせきりにしている、これらの点に要約できるのではないかと思う。この間にあつて一般学生は勉強やアルバイトに忙しく、また「赤い学生お断り」という一般社会人の先入観的偏見に恐れをなして、無気力になつてゐる。中には少し元気のよいのがいて、彼らがやるから自分もやるという衝動にかられて、追従してゆく。某地区の勤評闘争のデモ行進のさい参加したのは学生ばかりであつた。その地区の教組が、デモ行進中止を指令していたにもかかわらず、学生だけがデモを断行した。私は参加した学生に個々に当たつて、勤評に対する意見を求めてみたが、内容を十分に理解しておらず、付和雷同的に行動したと判断される学生が相当数あつた。学生の自主性の乏しさを示す嘆かわしい一面であり、私はそれを意外に思った。

学生運動はどうあるべきか

学生運動はどうあるべきかについては、早急に結論を出し得ないが、大学の自治は、学生自身で守るという態度が、もっともっと学生自体の中から芽生えなければダメである。個人個人が自主性を持って独自の力で解決して行く方向を見出すべきではないか。一部指導者に任せきりにしているのではなくして、みずからの力で解決して行く方向がありはしないか。学生運動は大学の自治を守る運動でなければならぬのではないか。かなり古いことではあるが、このような観点から、学生は政治運動に参加してはいけない、という意味の文部次官通達が出されたものと思う。しかし通達はばかりでは解決できない。学生自身が、その是非をみずからの意志で決めて運動するのに対し、制約を加えるようでは、好ましい結果は生まれぬものと思われるがどうだろうか。

植木講師のお話は、参加学生にとって身近な問題であり、また関心の的であっただけに、相次いで質問が出された。また各班の指導員である国文研会員からの質問も活発であった。ここでは問題の重要性にかんがみ、後者の人たちとの質疑応答を掲げる。

問い 全学連に対処するにはどうしたらいいか。どういう立場に立って、どのような運動を行なうことが、純

粹な学生運動だと思われるか。

答え 純粹な学生運動は、政治的に中立であるべきだ。政治の研究活動は、いくらやってもいいし、個人的にはどのような見解を抱くことも自由であるが、特定の勢力や権力の前衛となるような政治運動は、行なうべきではない。また学外勢力を学内に導入するような運動は、行なうべきではない。もしこれを行なえば、一般学生に対する思想の強制となり、イデオロギーの統制となつて、その傾向自体が、大学の自治、学問の自由をみずから乱していくことになる。全学連結成の初期の目的に帰れというのは、こういう意味からいっているのである。全学連に対処する方法は、このような立場に立つたとき、おのずから生まれてくると思うが、どうだろうか。

問い 昭和三十一年一月十七日の文部次官通達によれば「すべての学生が政治に理解を持ち、進んでその参政権を、責任をもって行使し得るようになるために、政治の研究批判の自由は、学校内において尊重せらるべきである。しかしながら、学校教育法に定める学校は、学問教育の場であつて、政治的闘争の舞台であつてはならない。従つて学校は、政治的中立性を確保しうる学園の秩序を維持しなければならない。また学生が個々に政治結社に加入するのは自由だが、学園に特定政党の支部を持つことは、避けなければならない」という意味のことをいっている。先生は政治研究と政治活動の限界をどこに置いておられるか。

答え 文部次官通達について、私の説明は不十分であつたが、要するに学生は、二重の性格を持つていると考へる。すなわち、学園生活という一面と、一般社会人という一面である。だから一般社会の生活面において

は、法治国の国民として法規に従わなければならない。法は個人の尊厳と自由を大幅に認めているが、その反面、学園生活においては、学則によって規制されている。なぜなら学園は、真理の探究という最大の目的遂行のために、学園の自治と秩序の維持を必要とするからである。従って学生としての身分と、社会人としての身分とに、限界が生じてくると思う。この点お考えいただければ、ご理解願えると思うが……。

問い 講師は学生の無批判な態度がいけない、積極的な態度をとれといわれるが、大学入学当初から学生は、一部の尖鋭分子から、右か左かという精神的威圧をかけられて、学問そのものに素直に入ってゆけないようにさせられている。このように歪曲された大学生活を正常化するために、学校当局自体、何か手を打っておられることがあれば、お聞きしたい。

答え どの学校もそこまで配慮している所は少ないように思う。私の大学では、学生団体の役員選出等の時期を、入学早々の四月でなく五月に遅らせて、その一ヶ月間に規約など新入生に検討させる機会を作っている。またすべての学生が、自由に発言できる懇談会を、毎月随時開催して学生の参加を勧めている。このような会合を持つことは、学園生活の正常化に役立つものと考え、過去五年間続けてきている。

このほかにも質問はいろいろでた。講師はそれらの質問に対して「わかる範囲で」という謙虚な態度で回答した。問題提起の役割をもって登場した植木講師は、その任務を十分に果たしたわけである。しかしなお、微妙な問題点が幾つか残ったようだ。司会者はその空気を察知して、問題の焦点と思われる ①政治研究と政治

活動の限界をどこにおくべきか ②全学連が国家社会の秩序を乱し、やがて国際勢力の尖兵となるであろう事実に対して、どのような所感をもつかを、国民文化研究会の小田村氏にただした。同氏は次のような所見を述べた。

原則として学生は、政治運動を行なう自由を持っていると私は理解している。かりに、もし文部次官通達
が、学生の政治運動を禁止していると解釈するならば、たとい法的に学生の活動を禁止することができたと
しても、それは本質的な効果のある拘束力を持ちうるものではない。大学生は、その国の中でえりすぐられ
た人たちである。国家の運命をいろいろに考え、やむにやまれぬ気持で行動に移すことがあるのは当然であ
る。それはどこの国にもあることであり、大学生たるの面目を如実に示す一面でもある。ただ全学連の政治
運動が、共産主義の本質に基づき、目的のために手段を選ばず、日本の運命を赤化勢力の支配下に置こうと
しているところに問題がある。そういう目的をもった政治運動には、絶対に賛意を表しかねるが、学生たち
のひたむきな心情の中には、もって学ぶべきものがあると思う。だから全学連の指導に当たっては、その狂
信性こそ誤りであることが指摘されねばならない。そして国家否認の暴力主義は、それが学問の本義を無視
する実際活動であるがゆえに、学生としてなすべからざることが説かれねばならない。そうした意味では例
の文部次官通達は、あまりにも無内容すぎ、学生運動の本旨が正しく理解されて、作られたものとはいいか
ねるのではないか。

小田村氏の言葉にうなづくものもあったが、いぜんとして、学生運動のあり方については、釈然としないものが残った。しかしその方が、真実に忠実である証左かも知れない。結論を求めることよりも、正しく探求することをめざしているこの合宿教室では、それは正しい出発点の把握の一つだからである。

これで学生運動への課題は、いよいよ深刻な問題として学生諸君の上へのしかかった。ある学生は「学生運動は政治的中立を確保する運動なのか。それとも中立にとらわれず、国家の運命を思い、われわれの意志を学生生活の中に実現してゆく運動なのか。この講義で迷路に入りこんだ」ともらしていた。

昼食の休みに引き続き、長野敏一講師の講義にはいった。その青年時代に、実践活動を夢見たことがあると、みずから語られた講師は、社会思想に対して情熱をこめて講義を進められた。

(明治四十四年大阪で生まれ、大阪高校、東大文学部社会学科卒、内閣情報局、熊本語学専門学校教授、熊本短大教授を歴任、現在熊本商大教授)

社会思想の構造とマルクス主義

熊本商大教授 長野敏一

社会的な思想、変革の思想は思想家の心情から発する。心情の発出は、その持ち主と家庭との間の、あるいは彼の家族と周囲の社会との間の摩擦や抵抗のうちから発する。順境の中からは社会的思想は発出しない。思想家と彼の家庭との間の不和——特に少、青年期における——や彼の家族とその周囲の社会との不調和——差別待遇、侮辱、劣等感、迫害等——から変革の思想は最初の火を吹くのである。ルソーは早くから母を失った。母のいない冷たい家庭から彼は十二歳にして家を飛び出した。この放浪の生活の中から彼の「社会契約論」思想の心情が、「自由」への熱望が生まれたのである。マルクスの家系は百数十年にわたってラビの家柄をついだユダヤ人の中心家族である。ナポレオン戦争後、ドイツのユダヤ人政策は、急角度に逆コースをたどっていった。一九一九年、マルクスの生まれた翌年、ドイツには南北に通ずる大規模な排ユ運動、いわゆる「ヘップ・ヘップ騒動」があり、政府はこの状態に応じてユダヤ人政策を厳格化した。一九二〇年代は大量のユダヤ人がキリスト教に「偽装」改宗した年である。マルクスの家族もこの時——一八二四年——やむな

く改宗した。マルクスの後の激しい資本主義に対する攻撃と憎しみとは、実はこの時の「キリスト教」プロシヤ国家」に対する憎しみと遺恨の「転位」であって、このことは彼の「ヘーゲル法哲学批判・序説」から「ユダヤ人問題」を経て、「神聖家族」「ドイッチェ・イデオロギー」「共産党宣言」にいたる彼の文献の脈絡をたどれば明白である。……この点に関しては拙稿「マルクスの深層研究」(『熊本商大論集』第二・三・四・五・六号)を参照されたい。ゾンバルトは十九世紀における社会主義者の「共通の運命」として「正常な社会生活の軌道から投げ出されたもの」――「生活における破綻者」としているが、このような環境からの心情こそが社会思想のあつらえ向きの心情なのである。ゾンバルトは「ヘス、マルクス、ラッサールはユダヤ人として、ワイトリングは私生児として、すでにその出生において社会から投げ出され、生活が異常に形成された」と指摘している。(ゾンバルト「プロレタリア的社会主义」)

だが心情だけでは思想は形成されない。心情が思想を形成するためには、知識を選択、吸収し、同化、融合し、成長して自己を揚棄しなければならない。心情は自己の惰性と好みにあつた知識を周囲に集め、その中に今度は逆に自己を潜入せしめる。このように自己展開の心情と、心情を没入した知識とは融合、合体し、同化、発酵して思想に生長する。思想家の生きた思想は単なる知識ではない。単なる知識は死せる精神の一断片にすぎない。生きた思想は、そのなかに彼の心情が透徹し、躍動し、呼吸する。彼の知識は主張として生きた心情につながり、彼の心情は主張として客観

化される。フロムはうまいこといっている。「このような思想は思考作用のうちに含まれている純粋に論理的な要素のほかに、思考する人間のパーソナリティの構造によって大きく決定されてくる。

このことは……単に一つの概念ばかりではなく、一つの教義や論理的体系全体についてもいうことができよう。このような概念や教義はそれぞれ一つの感情的中核をもっており、その感情的な中核は個人の性格構造のうちに根をおろしている」と。（フロム「自由からの逃亡」）

心情と知識との揚棄によってでき上がった思想は、思想家の頭の中にあっただけでは「社会的な」思想とはならない。「社会的な」思想は弘通され、享受され、賛同され、信奉され、行動の指針にまで高められなければならない。そのためにそれは伝達されなければならない。

伝達手段にのぼせられた思想は、論文として客観化される。論文は序論、本論、結論の三つの部分から成り立っている。だが、これは読者の側、観客席側からみた構造であって、演出者側、執筆側、楽屋裏からみた構造ではない。読者にとっては、論文は序論から始まって本論に入り、結論に達する。だがこれはでき上がりを逆からだどったコースであり、執筆者にとってはまさに逆である。最初主張があつて——これはさきにもいったごとく、思想家の心情と知識とを結びつけた生きた思想である——これが結論をなし、この結論——主張——を多くの人びとに納得せしめるための説得装置として本論があり、その本論と読者の心的準備とを結びつける橋として序論があるのである。菓子¹の包みの真相は、最初にひもがあつて、次に包装紙があり、その中に箱があつて中に菓子

があるのではない。これは買った人の包を解く順序である。ほんとうの菓子^の包みのあり方は、最初に菓子^があって、これを箱に入れ、包装紙に包んで、上からひもをかけるのである。

さて、社会的な思想の論文は、最初「批判」という形をとる。なぜなら、先に述べたごとく、社会思想は、思想家の、彼の家庭との、あるいは彼の家族の社会との摩擦、軋轢^{あつれき}の中から生じた心情から発するが、このような心情が最初自己の周囲に収集する知識は、これらの環境に対する防衛と反発からくる批判であり、その中に自己を投入して最初の思想を形成するからである。このような社会思想の発生過程を、あたかも試験管に入れた物理実験のように、純粹に近い形であつらえむきの材料を提供してくれるのは、連続的に書かれたマルクスの数多い文献である。彼の文献、とくに初期の文献は、全く文字どおり「批判」の旗行列である。「ヘーゲル国法論批判」「ヘーゲル法哲学批判・序説」、ブルノー・パウエルの「ユダヤ人問題」批判、「論説『プロシヤ王の社会改革』」に対する批判的傍註、「神聖家族——批判的批判の批判」、「ドイツチェ・イデオロギー」すなわち「フオイエルバッハ、パウエル、スチルネル、グリューン、クルルマン」等批判、「哲学の貧困」Ⅱブルードン批判、「道徳的批判と批判的道徳」Ⅱハインツェン批判「共産党宣言」における諸批判、「経済学批判」「資本論——経済学批判」「ゴータ綱領批判」等々。ゾンバルトは皮肉って「批判……がマルクスの全本質を支配した。……マルクスの著作家としての『創作』は批判であつた」といっているほどである。(ゾンバルト・前掲書)

さて、だが社会的な思想はただ「批判」だけでは十分ではない。現状に打ちひしがれ、失望し、絶望し、憤慨し、反抗する大衆は、同時に将来に希望を求める大衆である。現状の不合理、不安、窮状をあばき、暴露し、批判するだけでは十分ではない。過去の決算書だけではない。将来に支払いを約束する手形をも交付しなければならぬ。社会思想は批判だけでなしに、予言をしなければならぬ。大衆の願望を洞察し、それをいれ、必ずそれを実現するという約束をしなければならぬ。古来成功した多くの宗教は、この意味において、すぐれた社会思想であった。彼らは深く時代の大衆の願望を洞察し、それをいれ、必ず実現するという約束を、予言したのである。ユダヤ教、キリスト教、仏教みなしかりである。「メシヤ」を、「天国」を、「極楽浄土」を約束したのであり、宗教はみな「心情、願望の満たされた状態」すなわち、予言を「根本教義」に持っており、その代償としての信者の信仰を要求するのである。古来のすぐれた社会思想はみなこうであった。将来の願望の実現を予言し、約束し、大衆の心を受け入れ、安心感と救済感とを与え、引きつけ、その取り引きとして彼らに信仰と献身を要求したのである。マルクス主義もこの例外ではない。近代まれなすぐれたる社会思想として。

マルクス主義を宗教とみなし、その根本教義を予言とみなすことに對し、マルクス主義者は強い反対を示す。むしろ痛憤する。高弟エンゲルスはマルクス主義を、一つの倫理説とみなすことにつ

いてすら激しい反対を示し、あくまで「科学」といいはったのである。「宗教」視するにおいてはなおさらである。だが彼らが主観的になんと主張しようが、客観的にそうであるかどうかはまた、別個の問題である。数多くの学者、思想家のなかには、マルクス主義を宗教として、その教義の本質を「予言」として喝破^{かつぱ}した人も少なくない。シュンペーターは、その著名な著書のなかで「社会学者マルクス」「経済学者マルクス」「教師マルクス」の章に先んじて冒頭に「予言者マルクス」を置き「一つの重要な意味において、マルクス主義は宗教である。……墓穴^{こなた}の此方に天国を約束する宗教の一派に属する」と断定し（シュンペーター「資本主義・社会主義・民主主義」ロシアの哲学者ベルジャーエフも「マルクス主義の最も重要な点は、彼がプロレタリアートに神の選民という特質を与えている事実である。（比喩^{ひよ}的表現であることに注意せよ！引用者）……彼にとつては、プロレタリアートこそ新しいイスラエル、神の選民、人類の解放者、来たるべき地上の王国の建設者であった。彼のプロレタリア的共産主義は、いわば古代ユダヤのメシヤの俗化した形である。ただ選ばれた民の代わりに、選ばれた階級があるという点にわずかの相違がみられるにすぎない。マルクス主義はまさに宗教的観念である」と道破したのである。（ベルジャーエフ「共産主義の問題」）

だがこれは特殊な第三者がそう評するだけではない。マルクス自身の文献のうちに入れわれはそ
の証言をみるのである。彼は「ドイッチェ・イデオロギー」において「われわれにとって共産主義
は作り出さるべき一つの状態……ではない。……現在の状態を揚棄するための現実的運動である」

といながらも、そう遠くない同じ本の別の個所で、次のような素朴な、空想的社会主義のそれと変わらないような、田園共産主義を予約しているのである。「各人が専門の活動範囲をもたず、任意の部門の修養ができるような共産主義社会では……私は、きょうはこれをし、あすはあれをし、朝には狩し、午後には漁り、夕には牧畜し、食後には批判するというふうに、私の気の向くままのことをして、決して狩獵者にも、漁撈者にも牧人にも、批判者にもなることがない」といい、また「資本論」では「最少のエネルギー支出と、彼らの人間性に最もふさわしい最も適当な諸条件とをもって、……相互に結合した生産者たちが……自由国」を実現すること「ゴータ綱領批判」においては「各人は能力に応じて（働き）、各人は必要に応じて」生産物をもらえるという共産主義を、予約しているのである。

だが、マルクス主義の中から、ただ予言の社会思想のみしか見出しえないものは、盲目あるいは短見者流のそしりを免がれ得ないであろう。彼は、ただ将来の天国を、共産主義を、大衆の渴望する願望の成就を約束しただけではない。それを実現する手段、方法をも、教示したのである。しかも、それは大衆のうちでも最低基準にあるもの、最も知能の劣等なもの、最も技能の低いもの、徳性のないものも、人間としての物理的動物的腕力のあるものなら、誰でもできるであろう方法、暴力、破壊、革命である。この最も恐るべき結果をもたらす、しかも最も容易な手段、不平不満の徒であれば容易に雷同し、しかも実行可能な十分スリルを味わうこの冒険、この教義こそ従来

どの宗教も思い及ばなかった、採用しえなかったマルクス主義の最大の魅力であり、生活経験のない、責任感の薄い、最も単純な指標、スローガンで物事を割り切る青年、学生や労働者たちの最大の刺激剤となったのである。千年王国の到来が必然的だということ、しかもそれは現状の破壊の上ですぐ直結しているということ、その破壊力は諸君たちの掌中に握られているということ、このよ
うな教義は現状の重みに打ちひしがれ、生活難と不安に、無力感と劣等感に、憤慨と反抗心に湧き
たっている人たちに、天籟の福音と聞かれなかったならば、それこそむしろ不思議であろう。マル
クス主義は労働者、青年、学生、プロレタリアートに希望と確信を与えたのである。

「唯物史観」はこのようなマルクス主義の予言と革命的手段とを結びつけようとする思想的企図である。それはマルクス主義者が主張するように決して、「科学」ではない。ただ将来社会が、千年王国が、共産主義社会の到来が必然的であり、しかもその手段は革命によるのでなければなら
ないということに信者に納得せしめるための説得装置にすぎない。それは「科学」ではない。目的論
的歴史観の一つにすぎない。一体歴史観に科学などありうるであろうか。この点に関しては私は別
の論稿で討究した。関心を持たれる方は参照されたい。(拙稿「マルクスの文献文脈における生産関係の
研究」「熊本商大論集」第八・九号参照)

社会思想は予言だけでなく、予言に対する実現手段をも含むことによって最高の完成に達する。

マルクス主義は、この意味において、最高の完成に達した社会思想であった。成立後一世紀になんなんとして、しかもなお脈々たる生命を保持していることはこれを雄弁に物語っている。このことは他の社会思想のちよっと比肩できないところである。

だが、このことはマルクス主義が、それ自身として完全なものであり、人類はこの思想によって救済されるであろうということとは、おのずから別個のものである。変革の思想は、変革の実現によって自己自身を揚棄するが、新しい社会は、新しい大衆の願望によって、再び新しい思想を組織しなければならぬ。

私は変革の思想だけでは、社会の十全な指標とはならないと信ずる。変革の思想は保全の思想と均衡しなければならぬ。批判は共鳴と、闘争は協力と、均衡せねばならぬ。憎悪と友愛とは均衡ではなく、後者が前者に勝たねばならない。

大学では六十時間を費している一連の講義を、わずか一時間半にまとめたので、いい足りなかつた点が多かつたためか、同講師はいかにも残念そうな表情だつた。それでも参加者にはマルクスをめぐる社会思想に、心情的要素という「逆光線」をあてて写し出す手法は、はじめて聞くものであつた。社会思想の問題も、現代に生きているものにとって切実な問題だけに、つきつきに質問が出された。

「社会民主主義と民主社会主義の政策上の相違点」

「マルクスの歴史観と英国労働党の歴史観」

「保守主義と社会主義の発想上の相違点」

などが学生諸君の関心事であった。これらの質疑を通じて、最大の焦点になったものは「わが国における思想の指標をどこにおくべきか」という問題であった。この問題をめぐって、その結論を講師の研究成果の中からひきだそうとする質問と、学者は結論を出すべきではなくて、事実を提示するにとどめるべきだとする講師の答えとが、あざやかに対照される結果となった。次にその質疑応答のあらましを紹介する。

問い 民主主義に対する解釈はまちまちで、統一がないため、さまざまの社会不安をもたらしている。民主主義に統一解釈が必要ではないか。

答え 統一の解釈をしないところに、民主主義の特徴があるのではないか。民主主義を限定、制限すれば、もはやどこかの国のように、民主主義ではなくなる。もしいろいろの社会不安をもたらしているとすれば、それぞれの場合に応じて、統一解釈とは別の方法で限定する方法があるのではないか。

問い 日本人の心情と願望にあう民主主義は、いかなるものと考えておられるか。民主主義の日本化ということについてお答え願いたい。

答え 日本人の願望とか心情は、多分に環境によるものである。すなわち、日本の当面している諸問題、国内

問題、国際問題に対する調査研究、世論調査、そういうものの中から引き出さねばならない。そのうえ思想には思想家の天才的洞察がいる。そういうものを抜きにして、たいした識見も洞察もない者が、狭い知識や体験で、固定した方向を出すことは独断に陥る。現在日本はその下積みとなる基礎的なものすらできていないではないか。私も若いころは不動のものにあこがれたが、現実の歴史の進行は、製図を引きその上を進行するようなものではなくて、試行錯誤の過程を繰り返すのである。

問い 大衆動員をかけて、なんでも反対するという最近の傾向は、民主主義の危機ではないか。この危機を打開するために、ある程度共同社会にふさわしい権威がなくてはならないと思うがどうか。

答え 労組が行き過ぎれば、前回の参院選挙のように、投票で批判される。国民大多数が正しいと考えるものに、権威を与えるよりほかにないではないか。これが独裁にゆかない支えとなっている。そして国民が支持する権威のシンボルもいまのところこれしかない。

問い 講義の最後に、日本における思想的座標を暗示して終わられたが、そのアウトラインだけでも示していただきたい。

答え 政治的には弱いと思うが、思想研究家としてはヒューマニズムの立場にたつよりほかない。私は「ヒューマニズムのスペクトル分析と革新の座標」という論文を書いたことがある。ヒューマニズムを生む人間の願望を、プリズムにかければ、無色に見えるものも、虹たのようなスペクトル分析を示すのではなからうかと

思つて、次のような分光を試みた。

1 食欲と性欲——これは人間（動物）としての最低限の欲求であり、これを解決しようとして生まれたのがマルクスの社会主義である。

2 自由の欲求——これは人間としての基本的欲求である。独立した人格は人間の自由を願望する。これを確保しようとして生まれたのが民主主義思想である。

3 愛の欲求と救済の願望——人間の自由が実現されても、人間に伴う老衰、無力感等は、なんらかの救済を求める。愛と救済の思想はキリスト教に代表されるのではないか。

4 真善美の願望——以上述べたのは大体大衆の願望であつた。だがこのほかにエリートエリートの願望がある。それはより真なるもの、より善なるもの、より美なるものへの追求である。ギリシャの自由人たちが求め続けた三つの聖火を忘れることはできない。

5 解脱げだつの願望——私は最後に東洋の聖者たちの解脱の願望を思う。積尊や、最澄や空海が、神人合一の境地に超出しようとした最大の願望を思わずにはおれない。

以上のべたような願望全部を包含した全思想が、統一的座標に総合されてはじめて、わが国の均衡のとれた安定した発展が可能であると信ずる。それらのどの一つを欠いても、そのような思想は、やがて激しい社会的抵抗に遭遇せざるを得ないであろう。なぜなら、人間精神のゆがみや欠落のうえにたてられた制度や政治は、いまだかつて最後まで人類歴史によって耐えぬかれた例はないのだから。

問い 先生は講義の当初に、新しい社会思想は、逆境に遭遇した心情の中に育つことを強調せられた。日本の混乱に直面して、われわれは新しい創造を試みようとしている。合宿はその一つの試みである。この合宿にふさわしいものを、なにか片鱗かたなだけでも聞かせていただきたい。

答え デリケートな問題で、私がそれをいえば、現在の立場を変えなければならない。私は元来、実践的な立場と学者の立場とは、一線を引くべきだと考えている。マックス・ウェーバーもそのようなことをいっている。学者は献立表を作るのであって、どれをとるかの実践家の立場である。だから私にどれをとれといえといわれても、それはできない。元来歴史的な立場で、これが正しいと評価をつけ得る行動はないと思っている。私の答えにはもの足りない感のあることはよくわかるが、自分としてはこのギリギリの線をここ十何年間守ってきた。お許し願いたい。

班別討論

今立講師（国際問題）、植木講師（学生運動）、長野講師（社会思想）と講義が続いたので、大多数の参加者は、問題の累積に、頭をかかえてしまったようである。これを整理して、みんなの心を接近させなければならぬ。このため第二回目の班別討論が開かれた。

この班別討論では、参加者も次第にその雰囲気になじんでスムーズな発言が出はじめた。班別討論に現われた特徴は、ともするとものを対立的にとらえる傾向であった。たとえばある班で長野講師の話に関連して「学者と実践家とはそれぞれ限界を守って任務を分担すべきかどうか」という問題が提起された。これに対して

「長野先生は自分の見解をおしつけられないから立派だ」

「実践に結びつかない学問なら死んだも同然だ」

というような甲論乙駁ぎやくとなつて論議が続き、長野講師があのような講義体系を作りあげるまでに至つた苦心とか、講師の現在の学者としての立場とかに思いをはせるよりも、講師の評価を現在の自分の立場で白か黒かにきめて片づけてしまおうとする傾向である。

また時事問題に相当関心を寄せているある班では、今立講師の講義をめぐつて、再軍備論争が起こつた。「再軍備の是非」をめぐつてしばらくの間水かけ論が続いた。問題のとらえ方に対しても班員の足並みがそろわなかつた。そのとき一女子学生が

「お暇な方はそんなディスカッションを楽しまれても結構ですけど、何か大切な前提を忘れておられるのではないでしようか」という疑問を投げかけた。このつぶやきに似た一言によつて、討論が本筋にはいる契機を得たようであつた。討論が、からまわりや理屈のこねあげでは無意味であることが、次第に理解されてきた。

「合宿教室」は一つのイデオロギーで画一的に統制するところではない。「相互に心を通わせる道を発見するのが、この合宿の意義



である」という第一日の川井講師の言葉が、一女子学生の発言によって生かされてきたように感ぜられた。

「国防は軍備を持つことによってのみなされるものではない。一人一人の祖国を守る気持が集まって、はじめて国防の実があがる。しかも現代は武力戦の時代というよりも、むしろ心理戦の時代といわれる。それではこの心理戦、思想戦において、守るべき日本のよりどころは何か」という意見などが出てきた。また

「日本人のバックボーンは、日本精神とか日本主義とかいって、それをイズム化し画一化することではなからう。それぞれの体験を通して、みずからのよりどころを自分で作ってゆくべきだ。あるいは古典の言葉から人生的感激を得ることもあるし、そういうものの中から、自分自身の意志が芽ばえてくるのではなからうか。それらが集まった広大な世界が打ち立てられていって、日本の国防力の基礎が築かれるのではなからうか。国防とはわれわれ自身が、みずからの判断力を持つことから始まるのだと思う」という力強い言葉などが述べられた。

夕刻五時、班別討論を打ち切り、入浴夕食をふくめた自由時間を迎える。急に館内を動く人たちの足どりもあわたたしくなる。未解決の問題をかかえたままだが、合宿の気分は盛り上がりはじめたように感じられた。夜八時から、戸川尚講師が登壇した。

（広島文理大卒、鹿児島師範、旅順師範教官、在満日本東安高女校長を歴任、戦後引き揚げ、欧米各国留学一年、現在福岡学芸大教授、教育学専攻）

学問論

福岡学芸大学助教授

戸川 尚

学問の性格

およそ学問というものは、人間の悟性や理性が、一切事物の理を探り求め、これをまとめ、体系づけつつ、その理の深奥を窮めてゆくことをもって、その主たる任務とすることは、いまさらいうまでもない。俗に天の道、人の道、世の道などという。天然自然のうちにも、人為創作の中にも、その様相の差こそあれ「理」の存在することは否定できない。それゆえにこそ人間が、当為を追求する理性の力をもって、あるいは比量的に認識する悟性の力をもって、右の理の発見や調整に、あるいは系統化や組み立てに専念しながら、やがて人生への寄与を希求してやまないのである。従つて学問は第一に、人間の理性、悟性の優位を認めることから出発するのである。

青年、学生諸君、諸君が何よりも長所とするところは、その燃え立つ熱情を悟性、理性の活動にしむけることだ。いたずらな安っぽい感情論に陥ることなく、理性が理想を追求し、悟性が暖味あまいを許さず、堂々と無垢むくの知的究明心を発露することだ。その意味で青年は理想主義者である。若き学

徒の値打ちは、その若き柔軟な頭で、あるべき世界を考えかつ夢み、若き頼みで、あらまほしきイメージを描いてほほえみ、若き胸で、あらねばならぬ姿を決意することにある。ギリシヤ語のエロースの本義は、周知のごとく、いまだとらえ得ぬより高き価値界にあこがれる心、いまだ果さざるもよりよき価値の実現に向かう心、己れには欠くるも、他の生命体と協力して理想を創造し、育成してゆかんとする上昇運動の心を意味している。ピラミッドの形のごとく、積みなし築き上げて、着着その礎石の礎石たるゆえんを、上昇の線にそって進む姿こそ、学問の様態でなければならぬ。断じて平板式でもなければ、羅列平等でもない。学問は高さ深さが、その重要な様態で、求める当為の世界は存在の奥にあり、かなたにあるのである。

次に第二の点、学問は人格的倫理的な裏づけがなければならぬ。学を求め、学を追う者の心の自由は、人格的、倫理的自由でなければならず、低次のわがままや、野放図な無軌道は学の成立を妨ぐるものである。なんとなれば、理性や悟性の力が求め行く理の世界は虚偽虚構は許さない。誇張誇大は芸には許されても学には許されない。知識的な不正直さは科学を破壊するものである。論語にも「博く学んで篤く志し」とあるが、博く学ぶことで終わるのではなく、人としての本務すなわち人格的、倫理的な人間の本務の実践に志すという意味である。「切に問うて近く思う」の言葉もまた学問の間をよく示してあるではないか。日常のわが行ないに引き合わせて考えてみることの重大さを訓されたものと思うのである。

「學問に国境なし」といわれる。まことにそのとおりである、學問に善悪なしといえるであろうか。たとえそれがきわめて客観的な自然科学の世界であれ、個性豊かな文化科学であれ、知的に不正直であったり、理的に曖昧や二重性があったり、いわんや、考証に虚偽や偽矚が許されるであろうか。人の生存の本義を毒する為の學問が、はたして學問であろうか。それを悟性や理性が許すであろうか。かの「中庸」の有名な言葉は諸君もご承知であろう。「博くこれを学び、審つまびらかにこれを行い、慎んでこれを思い、すなわち倫理的に慎むのである。「明らかにこれを弁じ、篤くこれを行なうとあり……」、「これを行ないて篤からざれば措すかざるなり……」と続く。博學、審問は明、弁、篤、行と一続きであることを考えてみようではないか。

第三は、學問は民族、国民の性情の上に立つということである。東洋の學といい、西洋の學問傾向では……などという。ドイツ哲学の特色として……、フランス文學は……、またイギリスに発達した經濟學は……というごとく、日本の國學においては……といわれる。學問は人類普遍の価値の上に立ちながらも、国民的性能や民族の情念特質によって特殊性を帯びることも尊いことである。特殊即普遍そとくの理は、よく聞いていることと思う。支那人の個性が支那の學を生み、独自の体系を作り、あの大きな伝統の學問を樹立したのである。日本にもまた日本人独自の性情があり、日本固有の情念が流れきたっているがゆえに、尊い価値を持つ國學などが生み出されている。日本人本来の持つ人生觀、世界觀が、まずその基礎にあって、その生命力を儒教文化や仏教文化によって洗練し

きたったものである。そのいのちの真実さを曖昧にしては、日本の国学は成立しなかつたのである。現代人の中に、なかでも、なんでも日本軽侮の論を喜ぶ人々の中には、日本の学問というと蔑視の目や嘲笑をよの声さえもらす人々があるが、それならたとえば道元、日蓮、親鸞をたの学問は単なる印度の学問であろうか。平田篤胤あつたねや本居宣長の学問は何か。合理的、科学的の名をもってする自然科学的方面のみの狭い学問観ではわからない。ことに文化科学の特殊そと即普遍的理、あたかも私どもは日本人という特殊の人間であつて、普遍人間の価値があるごとく、日本の学問もまた、尊い普通の学である。

次に第四、学問の性格には飛躍や破壊は許されない。理を求め、しかも体系を重んじ、それぞれの分野に積み上げ、発展創造を大切にする学問を一举にくつがえすことはあり得ない。単なる飛躍もさることながら、分散も破壊も、それ以前の学問の集成を土台にすることなしには考えられないほど、学問には漸進的集積の功がある。第二で論じた人格的・倫理的性格をもつ学問なるものは、先人の努力や苦節、積年の失敗や成功、よくぞここまでと仰がざるを得ない追求と究明とを、簡単に無視し、否定し、いわんや軽蔑をた破壊して、新しく正しい学問が生まれるものではないと信ずる。思弁的な弁証法は、正と反とを対立抗争せしめて、結局は合の理に推進することはよくご承知の通り。断じて反をもつて得意とし抗争否定をもつてするだけのものではあり得ない。いま世の中で流行する単なる否定、安易な抗争否定の立場は学問ではない。ただいまの日本には、なんとという安価

な否定抗争態度が流行していることであらうか。

学問は前述のごとく、その本質上建設的、積み上げ的で、なし崩しということはあり得ない。掛
け算の九々を一挙に全面的に拒否しては、数学は成立すべくもない。学の創造も本来漸進的、学の
革命も本来漸進的である。弁証法の否定の理の面にのみとらわれて、これを至高至上の思惟方法と
信じ込み、学理は既成や現実否定のごとくかつぎ回る世の一部の盲目者に、よくよく学の性格を戒
めたいのである。識見の狭さと、非人格的闘争意識とを気づかせてやりたいのである。プラトンの
述べたごとく、宇宙も人生も、調和の理にその本質を見出すのである。ハルモニヤ——一円融合の
大調和の理、相和流通も、相補和合の原理も、単なる破壊抗争とはおよそ次元が違う至上善美のも
のである。

教学しやうじやう一如と修証一如

以上は学問の一般的性格を、思いのままに列举したに過ぎないが——独断的なところはお許しい
ただくとして——次に学問論を述べるに当たって、ぜひ触れねばならないことを申し上げる。それ
は教学一如と修証一如についてである。

学問を愛好する心は、必然的に学問のもつ生命力と、その歴史的価値とを敬仰し、尊重するので
ある。先哲刻苦の集積や聖賢不断の大努力なくしては、今日のわれわれの学問も成立たない。先師

の教ゆるところは、正しくこの我が身に伝授され、遺産として与えられてこそ、我もまた学問の尊さにおもむくのである。学のいのちは粗末にはされない。強いあこがれと、清い愛惜の情とをもって、さらに追求発展せしむべく、自己鍛練にいそまなければおれない気持がするのである。そのような学問の価値追求意識が、おのずからこれを次代に、次の若き諸君たちに、最も正しく、最も有能に伝授せんとの熱情を湧き立たせるのである。

教学一如、学生を愛し生徒を愛する教育愛、人間愛のうちには、いかに大きく文化遺産の真実な伝授の熱願が宿されておることであろうか。この青少年に虚偽を教えてはならぬ、嘘を授けてはならぬというその気持は、教育愛と価値愛の総合されたものである。若い生命を愛しめばこそ、若い生命に吸収せしむべき真実の文化遺産を愛しみ教える。学の価値を愛しめばこそ、その歴史的価値を愛しき子らに教えるのである。

とくに教える相手は単なる人間ではない。まず日本国民である。日本の青少年である。私はただいま、諸君という人間相手ではない。諸君という次代の大切な日本人である。若き日本学徒という諸君を相手としてるのである。なんらかの縁によって、いな同じ日本国民という格別の結びつきによって、同じく学問を愛しみ親しんでいる間柄である。次代を見事に荷なってくれよかし、戦に敗れた祖国日本を、立派に建て直しくれよかし、われわれのなし得ざりし繁栄発展の日本を実現してくれよかしの熱願をこめて、貧弱ながら私は学問論を講じておるのである。学を伝え、教えんとす

るのである。学問は真に教によって生命を与えられ、教はまた学によりて支えられる。より真実であり、より善美なるものを、若き君たちに把握させずばやまない教の熱情は、その基盤に求理の心と国民愛の血とが、脈打っていることを感ずるのである。この国民愛、従って国家愛という特殊教が、そのまま普通の教に通じ、それに貢献することを信ずるのである。理の普遍は特殊を通じてのみ顕現するのである。

以上のように、学を教えるもの、教えられるもの、その主体と客体とが、相共に同じ日本国民であるという具体的事実、また同じく人間ではあっても、人格体として見合う真実性、これこそが教と学とをいよいよ力強くさせ、一如の真生命を躍動せしむる熱誠を湧かせるゆえんである。もちろんこの教学一如は、同国民同志の間のみという意味でないことはおわかりと思う。

さて最後に修、すなわち修学や修行は、証、すなわちさとり、証明——証と明と一如なることに論を進める。

学問の把握する理、その理をとらえてその性を尽くし、その物を尽くしゆくところには、必ず行の立場が指望せられる。働きとして人間意志が、力としての人間の意力が、行じ続けゆくところに物を尽し性を尽す姿がある。古来、すべての宗教に行が必須であるごとく人間の作用、はたらきを態度に現わしてゆく修行修学の身的貫徹力が、かえって心的のそれをも誘導して、修の修たる極地——証の世界——さとり、明あきらしの世界に入らしむるのである。修したらば修しただけの証がある。百

字修せば百字の証、千字修せば千字だけの証、Aを修し得た人は必ずAの証を得ているのである。ただし修は意志力を要し、苦闘を伴う。苦を嫌うところ修はあり得ない。修は恒続を必須とする。続け続けて行じて修する。謙虚に修して進む。拒むものあり、断つものあり、しかし先人の学を修してゆく。先師の教を修してゆく。古賢の業績を素直に修してゆく。禪に虚襟きんという言葉がある。胸を謙虚にすることである。古今東西の聖賢偉人はことごとく自から修しながら証した。胸を空虚にして受け入れつつ、嚙かんで進んだ。学問にはこの修行の苦と、その修し得る喜び、従って証し得る歓喜よろこびがある。いかに古きものでも尊いものは尊いし、深きものは深いのである。

古きが故に尊からず、尊きが故に古きなり、昔から伝わるなり、というべきである。ソクラテスもキリストもなぜいまに残ったか、釈迦しやくかも孔子もなぜいまに伝わったか。その真理の前にぬかずく態度、これを体当たりで修める態度、そこから真の明しや、証が出てくるのである。欧米いずれの先進国においても学生は必ず古典を学修する。なぜそんな古くさいものを苦しんでひもとくのであろうか。基礎教育の中にどうして古典が必要なのであろうか。古典を修して何を証してゆくのか。

敗戦後の日本教育は遺憾ながら占領政策によって、古典から盲目にされた。諸君はまことにお気毒ながら、古典が読めない。先人の原典が読めない。日本人でありながら日本の古典が読めない、いや明治文壇の名作も読めない。いわんや幕末志士の文書など読めない（私は授業中に森岡外訳のゲーテ岩波本をテキストに用いたが、学生には読めぬ字が多い。吉田松陰の書簡を教材にするが、

読めぬ字だらけ、いわんや詩は読めない。修して行じて、行じて修して——苦行をわが身のものとして、はじめて証の世界に入る。私はフランスでゴッホの遺物展をみて驚いた。いかに修し、いかに行じ続けたか。そのペレットの絵具の跡に、筆を引き続けたその線の残りかすに、あの独自の偉作の背後を見て頭がさがったのである。

道元禪師は仏道を習うということは、自己自身を学ぶのだと教え残している。わかりにくい表現ではあっても、なんとという含蓄ある言葉であろうか。すなわち有名な「しよほうけんざう正法眼蔵」(現成公案の巻)の中に

仏道を習うというは

← 自己を習うなり

自己を習うというは

← 自己を忘るるなり

自己を忘るるというは

← 万法に証せらるるなり

万法に証せらるるというは

自己の身心および

他己の身心をして、脱落せしむるなり。

これをわかりやすくして、諸君の立場からいえば「学問を習うというは、自己を習うなり」……である。万法すなわち世の中の一切合切の中の理法である。それによりて証せられ悟らされるというのである。そのあとの言葉こそ最も味わうべく、体得すべき言葉である。自己に対して他己（自己）、その二つの界が、脱落すなわちは、ずされ、なくされることである。自己の自己たる特性も値打ちも、自己ならざる他人の異なる特性によって支えられ、与えられることを知れば、自己を支えて自己たらしめる他人や、また他物こそは、自己を自己たらしめる絶対条件であるから、他人の自己である。たとえば、私の長身は、短身者たる他者に比してであって、短身者が、私を長身たらしめているのであるから、私を私たらしめている短身者は、私にとって他の私である。他己である。

“Democracy means Toleration” という有名な言葉、その寛恕はまさに他己の信念から出てくるものでなければ本物ではあるまい。その深き寛恕に根ざす一円融合の体得こそ、道を学ぶ、学問することにはかならぬのである。学問を習うのは、諸君自身を学ぶこと、諸君自身を学ぶことは、我心、我欲、我見を忘れること、それを忘れることが万物の理に証せられ、それが実は自己と他己の見方から徹底した親和、融和、相助の人生観、世界観に立って、行ずる人たるゆえんを、道元禪師は仏徒らしく表現されたのである。フィヒテの説いた事行（Tathandring）も合わせてご研究いただければ、よくおわかりになると思う。ハンドリングは修であり行である。

張りのある声で力強く訴える戸川講師の講義は、あるときは微笑を、またあるときは緊張を引き起こしながら、学問に対するスピリットをめざめさせた。講師の使われる言葉は、理論ずきの学生諸君にとってもかなりむずかしいものであったが、次第にその熱意に動かされて参加者の心を奮い立たせた。とくに「道元」の言葉を引用し、学問の道で「死んでもよか」という心境を披瀝されて、学問への情熱を吐露された講師の真剣な言葉は、全員の胸に強く訴えるものがあつた。

問 学問は人格的でなければならぬといわれるがむしろ学問は人格や倫理からフリーであるべきだと思ふ。

答 学問に人格がうんぬんされれば、そこに学問の固定化、個性化が生じ、独断独善の危険を伴うのではないか。

問 答え 私は理性や悟性の優位を認めて出発した。その優位を信じなくては、学問は成立しないと述べた。理性は万人普遍のものである。不思議にも、人間は、古今東西の別なく、共通の普遍力——良心——理性——を持つている。理性の光は、なぜか時空を越えた客観力をもっている。NINETEENは、日本でも印度でも同じであるように、理性や悟性のキャッチするものの普遍性を信ずるところに、学の学たるゆえんがある。この自覚なくしては真を追求するはずの学の世界にも偽りが生じてくる。知的正直さは、科学の人格性である。

問 善を尊ぶ実践理性が、グルンドになれば、学の世界に悪が入ってくる。偉大なる科学者は、同時に偉大なる道徳者であり、宗教者であることが多いことを思い合わせてみよう。

問 人格的と個性的とを混同してはならない。従って人格的ということとは、独断独善の世界を意味しない。独断には普遍がない。それゆえ独断という。人類普遍のうえに立つての個性は人格的であるが、普遍に立たな

い個性は、独断的ではあつても、人格的とはいえない。独断独善を警戒しつつ、普通の理を追求する学は、従つて人格的であらねばならない。

問い 学問を愛するあまり、それに一身を投じ、ついに大切な生命まで失うことはたして幸福なことか。人間の眞の幸福という立場から答えていただきたい。

答え 人間の幸福というものをどこに見出すか、幸福観をもう少し深く考えてみよう。およそ人間には、同じように死んでも大變な死に方の違いがある。

こんな事なら死んだ方がよい
これができれば死んでもよい

この世にすでに生きがいなし、失意と失望と、全く何一つの光明をも見出しえず、生きることの不幸のみを思う前者、死んだ方がましだ……という心境は、いかなる場合であろうか。もちろん貧苦や痛苦や孤独苦もある。しかし、その他に自己の存在の無価値視、すなわち世の中に何一つプラスし得ぬ場合の無能無為の感、世の人から全く認められず、役立つ人として迎えられもせず、むしろじゃまもの扱いされる淋しさ、生きていても他人を喜ばし得ぬ寂寥感せきりょうかんも大いにあるのではないか。

逆にいえば、いかに貧苦に追われていても、自分の行為が他人のためにプラスする自信のある人、さらに世の人々から何らかの意味で常に迎えられつつあるとの喜び、あるいはいつの日にか必ず世の人々に寄与すると信ぜられることをなしつつある間は、断じて死んだ方がましとは思わない。むしろ反対に、肉体的生命

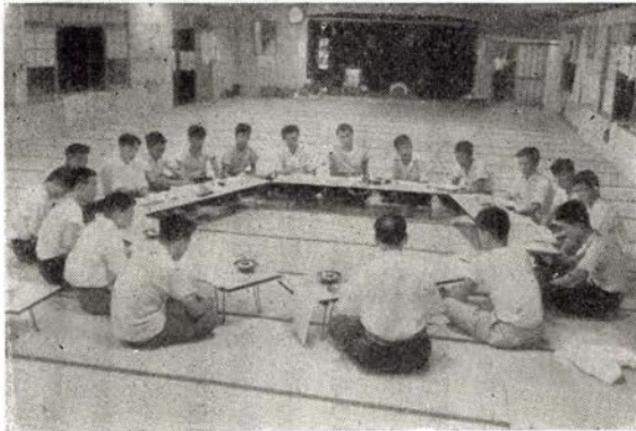
を忘れての生きがいを感じる。世に寄与するものを発見し、くふうし発明した人々、人の知り得ざりし真理を追求しつつある多くの人々は、それさえ成就すれば、いつ死んでもよいという。古今東西この種の偉人、達人はどこに幸福をみつめていたのだろうか。いな、諸君自身の胸底に、平凡な私たちのこの腹底にもまた「これができれば死んでもよい」の超身体的生命観からの幸福感が宿っている。

学を尊重する心理や、真実の学を伝えようとする熱意は、肉体的な生命以上に永遠に生きようとする精神的生命の中に躍動する。何か社会を益し、広く人類にプラスしようと自覚した自己を発見できるほどの幸福感はないのではないか。

私は学生諸君に訴える。君たちが他の人々から「お前は役に立たぬ、お前は無能だ、お前は何一つ間に合わぬ……」といわれたとして幸福であろうか。さっぱり役立たぬといわれるほど生きがいのないことはないはずだ。反対に「お前のしたことはすばらしい。お前の腕前は優秀だ、お前の業績は残るぞ、お前の着眼は抜群だ……」と他から認められた時の幸福感はいかなる種類のものか。

家庭の一員でありながら家庭の中に寄与しうる自分、学生の一員でありながら学園にプラスしうる自己、職場の一員でありながらその職場になんかの貢献ができる自分が幸福感に浸りうるように、国民の一員でありながら国の進展に貢献し、さらには人間の一人でありながら……と進んで行ける自分をこそ自覚してもらいたいものである。

班別討論



戸川講師に対する質疑が終わって、第三回目の班別討論をもった。時間は一時間半、戸川講師の学問への情熱に心を動かされた直後だっただけに、学問論、教育論をめぐる

「主観と客観を一致させるにはどうしたらよいか」

「人格をあまり強調すれば、普遍的な結論は出ないのではないのか」

「道元の言葉にふれながら『道』を強調せられたが、道とは何であるか」

というような意見が出された。班別討論に戸川講師をむかえた班では、なごやかな意見交換が続いた。とくに講師が満州から引き揚げられたときの生死にかかわる体験談の披露は、それが講師自身の学者としての基盤を作りあげたものだけに、学問が単なる机上の研究というような生やさしいものでないことを知らしめた。やがてその班では教職者や教育学部の学生が多かった関係もあって、戦前の教育勸諭を中心とする教育と、戦後の教育基本法を中心とする教育への反省批判が、各人の体験の中から次々に紹介されていった。そして最後に

「戦後教育はたしかに十余年を経て再検討すべき時期にきている。しかしそれに代わるに戦前の教育をも

つてくるということではなく、卒直に明治以来の教育史を、私たちの現場教育の体験の中から見直すべき時がきている。そして日本にふさわしい教育哲学を再建すべき時期にきているのではないか」というような意見が強くなっていた。

班別討論を終わって十時半、就寝の鐘が鳴った。希望者はロビーで、今立講師の講義を聞く。約九十人ほど集まる。講師は午前中に語りつくせなかった戦後の問題を中心に、米ソ極東政策の推移、米ソの対日政策の対比、朝鮮動乱をめぐる米ソの心理戦、サンフランシスコ条約の舞台裏、警察予備隊創設の裏話、安保条約改定問題など、国際心理戦の動きを説き去り、説き来たり、いつはてるとも知らなかった。参加者たちは、深刻な国際間の争覇を、眼前に見せつけられ、一様に、深い感銘をうけた。今立氏をかこむこのグループとは別に、三、四十名の人たちが三々五々サンルームや廊下のソファや部屋の中にとむろしてなかなか就寝しようともせず、意見交換や、自由な話し合いをかわしていた。消燈就寝の時間の後も、フトンの中でまた問題点のむしかえしや、さまざまの話し合いが続けられていた。参加者の心の中には、ようやく対決を迫られる問題が、徐々に醸成されてきたようである。

検討会

各講師と各班の指導員たちは、毎夜学生たちの就寝のあと、遅くまでその日のことを検討し合い、あすへの研究と準備に当たるのであるが、第二日の夜の模様を次に紹介する。

班指導員を中心とする検討会は十時半から開かれた。まず福岡大学の戸川教授は

「きょう夕方やっと到着したばかりだが、全体にのびのびした空気が、心を許しきった世界という安心感がある。どことなく出ている。少しのぎこちなさもなく、のびのびと豊かな情感が深いはじめている。これがあすあたりから、ぐっと融け合う機縁になるのではないか」

とはずんだ感想をのべる。それに呼応するように福岡大学の狩野教授が

「私はきのうからの推移をみていて、全体の発言がなめらかになったのを認める。いい意味での討論が育ちつつある。学生がなるほどという気持ちで受けとめている。その雰囲気浸っていると、時々いいなあという嘆声をもらいたくなることもある。司会者がもう少し『聞いてやろう』という態度になると、盛り上がりは倍加するのではないか」

とつけ加える。ついで都城中央病院長小川博士は

「国文研会員として第一回の合宿以来参加して、全員の健康診断に当たってきたが、私は討論に参加しながら精神の診断も試みている。わずか二日間で気分が盛り上がってきていることは、確かに進歩といえるが、まだみんなダイジェスト的知識を求めたがっているのではないか。重大な問題をいとも簡単に出現してくる。重大な問題と簡単な問題との区別がつかぬのは、健康な精神状態とはいえない」

との感想を述べた。班指導員も班員の発言が次第に活発になり、ようやく合宿の気分が高まってきたことについて喜んだり反省したりしながら、所見を交換した。席上小田村氏は、次のように述べた。

「この合宿にきて、おおぜいの人たちの中でもまわっていると、日本の混乱の中にもかほそいなながら、希望

の光が点火されつつあるように感ずる。今日の時代にこれだけの学生を集め得たのも、われわれの力ではない。目にも見えぬ時代の運命がそうさせたのではないか。従つてわれわれの方から、ここに集まつた学生諸君に何か寄与することがあるとすれば、学生の持つている素直な潜在的な本質を自覚してもらふことであり、われわれにできることといへば、それをおおいかくしていたものを除去することであろう。あとは個人の人格と意志力に期待するよりほかないのではないか。日本の混乱を阻止する方法は、運動とか団体活動とかでなくて、国民生活それ自体の中に新しい道が生まれてくることではないか。そういう意味でこの合宿は、日本の運命と直接結びついたもののような気がする。この合宿からすぐに今日の時代を打開する理論も、政策も生まれぬであろうが、やがて生み出さるべきものが芽ばえてくるように思う。ただ、きょうの運営で気のついたことは、こうした合宿にはもともとテクニクはない。あるとすれば参加者の心と結びつく努力だけであろう。あまり無理に個人個人の意見を引き出そうとするのはいけないのではないか。むしろ沈黙している人々の中から、真実のこもつた発言が、やがて出てくることを期待したい。だから指導員は、オシャベリ好きな人の無駄な言葉を聞かない努力をする必要があるかもしれない。」

そこへ特別講義を終えた今立講師が顔を出される。講師はあすの朝東京へ帰るので、きのうから参加した感想を次のように述べた。

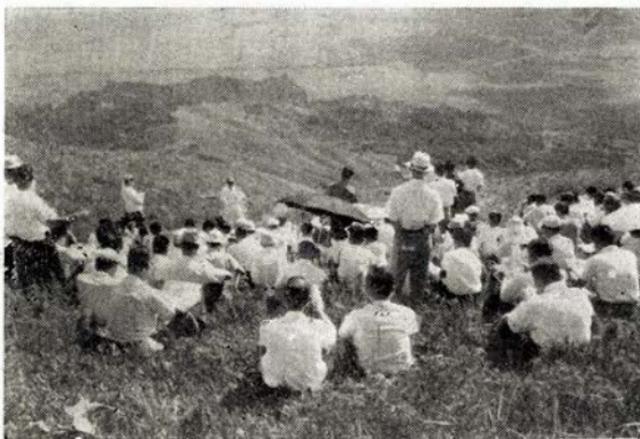
「私はこれまでこの種の学生を対象とした研修会には幾度か参加してみたが、この会が運営面でも、問題の核心に迫つてゆく迫力の面でも一番意義があった。このまま日を重ねていくのであるから、大きな成果が期待できよう。私は来年も、再来年も必ず参加させてもらいたいと願っている。ところで班別討論を運営す

るときに、司会者が一歩下がって見守る態度があれば、参加者の気分はさらにときほぐれるのではないか。参加者に『いい会だった。来年も友だちをさそってこよう』という感想をもって帰ってもらえるようになることが大切である。討論では一つの方向づけ、性格づけがでてくるが、これができるだけ抑える配慮があれば、おのずから合宿会合はもりあがると思う」

夜は深々とふけて、阿蘇高原一帯は深い眠りにおちている。しかし、二階の本部室だけは、あすのスケジュールについての協議が続いた。全員が床についたのは、一時を回っていたであろうか。

心の揺らぎと青春のよろこび歓喜と

(第三目)



起床の鐘に目をさまし、重い身体を体操場に運ぶ。激しい思想訓練と寝不足で、だれの身体にも疲労素が、うっ積しはじめたようである。けだるい身体を動かしながら体操を終え、一列になって肩もみをする。お互いに肩をもみ合うことよって一段と親しみを増す。これが済むと、学生たちはヤレヤレといった表情でソファやイスにもたれかかる。

はるかに仰ぐ阿蘇の山々のくつきりとした稜線^{りょうせん}。中岳は静かに噴煙をたなびかせている。ルリ色に照りはえゑ外輪山の山肌の美しさが、疲れた眼にしみとおる。

きのうの散策グループも、けさはソファに腰をおろして話し合っている。

「きょうも忙しそうだ。ぎっしりつまった日程で身動きできないが、ついてゆくほか仕方がない」

「しかし君、いい経験だとは思わないかネ。日本でこんなことをやっているところは、おそらくどこにもないだろう。それに合宿が終われば阿蘇に登れるじゃないか」

「ともかく俺たちの学力不足を知らせてくれただけでも有難い。ここでは一夜づけの試験勉強などは通用しない。俺はたたきめされたよ」

このグループのなかにも徐々にではあるが、積極的に受け入れようとするものと、反発するものとに分かれつつあるようである。

午前八時、津下正章講師の登場である。

（大東文化学院卒、陸軍教授を経て現在熊本大学教授、東洋哲学専攻）

陶淵明の詩における東洋的人間像

——東洋思想の基本的性格——

熊本大学教授

津 下 正 章

極く幼稚素朴な思考形式に従ふならば、私に与へられた問題の手ほどきとしては、先づ東洋といふことの概念規定から始めねばならない。しかし、それは自明のこととして、私は敢てくどくどしい説明をやめたいと思ふ。

人間の思想は感情に根ざすもので、真実の感情は、支那であれば詩に、日本であれば和歌の上に流露してゐる。私共が、或る一個人の思想とか、その人間といったものを知るには、その人の散文よりも、真実を語つてゐる詩歌を手がかりとするのが早道である。私はその意味に於て陶詩の一首を通して、東洋思想の基本的性格を視つてみたいと思ふのである。

その詩は「形と神」即ち肉体と、その影と精神とが「我と汝」「我と汝ら」といふ對話する親密な結びりの関係に於て、それ／＼の自己主張を試みつつ、最後に真実の人間の生き方に到達するのを描いてゐる。先づ「形」が「影」によびかける。

天地長く没びず、山川改まる時無し。

草木常理を得、霜露之れを榮悴せしむ。

人を最も靈智なりと謂ふも、独り復た茲の如くならず。

適々世の中に在るを見るも、奄ち去つて帰る期なし。

奚ぞ覺らん一人の無けしを、親識豈に相思はんや。

但だ平生の物を余して、挙目情悽澗たり。

我に騰化の術無ければ、必爾として復た疑はず。

願はくは君吾が言を取り、酒を得ば苟くも辭する勿れ。

「形」は肉体で、情欲に動き、本能的で、享楽に傾く。主観的で感情的である。人生の無常孤独を嘆くところは仏家に似るが、廬山の白蓮社が説く不飲酒戒にはそっぽを向く。仏教の内容を採つて外形に泥まぬ作者の見識がある。人を最も靈智なりとすることは、漢代に早く見られるところであるが、六朝に至つて更にハッキリして来る。しかしそれは、西洋でいふ「神は天地の主宰にして人は万物の靈長なり」とする、人と物とを対立させ、必ず物が人に従属する、人が物や自然を征服するといった考へ方ではない。東洋の場合は並立し調和する姿において、やがて結ばつて全体となる。人を最も靈智なりと、たかぶり思ひあがることではなくて、独り復た茲の如くならずと、人間

の弱さ愚かさを自覚するのである。天地山川草木の永遠に比して人間の生命は余りに瞬時である。しかも結局人間は、唯一人死んでゆく孤独な存在でしかない。身内の者も親しき友も、去る者は日にうとして、平生使った器物だけが空しく残るが、やがて人々は、それさへ気にとめなくなる。この孤独感、この無常感は、やり場のない、しかも果つることを知らぬ悲しみだ。人間のみが持つこの千古の愁は、何としてもやりきれない。漢書東方朔伝には「憂ひを消すは酒に若く莫し」といふ。淵明は「但だ恨むらくは世に在りし時、酒を飲むこと足るを得ざりしを」と擬挽歌辭でうたつてゐる。これは正に生理的人間の現実をとらへた前向きの人間像で、消極的ながら偽りない人間の、そしてそのまま陶淵明の一面の姿でもあらう。次は「影」が「形」に答へる詩。

生を存する言ふべからず、生を衛る毎に拙なるに苦しむ。

誠に崑華に遊ばんことを願へども、遽然として茲の道絶えたり。

子と相遇うて来り、未だ悲悦を異にせず。

蔭に憩うては暫く乖くが若きも、日に止まりては終に別れず。

此の同にすること既に常にし難く、黯爾として時と俱に滅ぶ。

身歿すれば名も亦た尽く、之れを念へば五情熱し。

善を立つれば遺愛あり、胡為れぞ自ら竭さざる。

酒は能く憂を消すと云へども、此れに方くろぶれば詎なんぞ劣らざらん。

「形」が主情的で、それ故に忘情適意こそ、人間いかに生くべきかの問題解決法であるとするのに対して「影」は主意的で、従って自じ竭立善のみが、人間いかに死すべきかの難関突破法であるとする。孔子流に云へば「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」といふ倫理的儒家的主張をなすのである。短い人生故に、遠慮なく欲望の充足をしようとする第一の自己「形」が、肉体的外向的であるのに対して、一度しか生存し得ない人生に、折角人と生れて来た以上は、当然道德的な努力の人生であるべきだとする「影」は、靈的精神的で、理想的内向的である第二の自己である。第一の自己に何かあきたらなさを感ずる第二の自己であるやうだ。永生を願ふことは言っても無駄だ。崑崙山こんろん華山に神仙となって遊ぶことは出来ない。我に騰化の術がないのである。道家はかくて、自分には無縁のものの様だ。また当時支那第一の名僧であった慧遠えいおん一派が説く「形尽くるとも神滅せず」の語も、うべなひ難い。仏家のよさを認めながらも、これに流されはしない。それで仏教道教の入信の第一歩である「止悪修善」の思想と、第二の自己である「影」が依らうとする儒家「立善」の思想とは相類似しながら、全然同一ではない様だ。陶子の第二の自己が語る立善は、儒家の性善説に立ち、気弱な「形」の酒を飲むことよって人生の憂悶を、僅かに消し去らうとするのに対して、あくまで気丈に、人間の本性である善の追求に努める積極的行動こそ、真の生き甲斐がひであるとすると

のである。このこと無しには、死んでも死にきれないといふ激しさといふか強さといふか、そんな気合を含み持つ口吻である。いかに生くべきかといふ「形」は、いづれかといへば現実的物質的でそれだけに外向的で、いはば陽の原理に立ちながら、究極に於ては消極的となる。これに反していかに死すべきかといふ「影」は、理想的精神的で、それ故に内向的で、陰の原理に動くものであるが、究極に至って甚だしく積極的となる。これは陰陽の変易する妙趣を語って意味深いものがある。

この関係は世間でよくいふ東洋は精神的で、西洋は物質的といふこと、即ち陰の立場と陽の立場の関係を、我々は如何に見、如何に行動すべきかと教へてゐる東洋的解釈として、今日の世相の混乱にも対処し得る指針と見なしたものである。陰陽はやがて男女であるとすれば、東洋の人間としての男女は、西洋の明暗善悪の対立対等同権の相争ふ二元論でなく、調和相補統一の陰陽作用に立つものである。従つて東洋思想からすれば、平等同権の思想は低い次元のものに過ぎない。「子と相遇うてより、未だ嘗て悲悦を異にせず」といふ「影」の「形」に副ひゆく姿が、東洋の人間倫の関係を語るもので、この詩の擬人法による表現の面白さを、私は相当高く評価してよいものと思ふ。

東洋の人間観は、自他の相補相属的和合関係に立つ人倫をのみ真の人間とするもので、この基本的性格の理解なしには、真の意味の東洋文化の把握は不可能である。しかも、この人間観は東洋四千年の文化遺産として、永い歴史のふるひにかけられた最も貴重な人類の至宝である。

次に第三の自己はうたふ。「神の積」ところが形影の惑をとくの意である。ところが現実と理想

とを位置づける。「影」が後向きの人間像を描いたとすれば、これは前向きの人間像や後向きの人間像のいづれにも偏らない霊肉一致の統一調和された真実の人間像を完成しようとしたものである。

「形」に仏家の「影」に儒家の色どりを匂はせたと見れば「神」には道家老荘の色を配したとも見れば見れる。しかし「神」には、三者の渾然たる融和の美しさが、馥郁として香ってゐる。また「形」が情的「影」が意的「神」が知的と見たてた場合に於ても「神」には、やはり三者の美事な止揚が見られると云へよう。

大鈞私力無く、万理自ら森著す。

人三才の中為るは、豈に我を以ての故ならずや。

君と異物なりと雖も、生れながらにして相依附す。

結託して善惡同じうす、安んぞ相与にせざるを得んや。

三皇は大聖人なるも、今復た何れの処にか在る。

彭祖寿永年なるも、留まらんと欲して住まるを得ず。

老少同じく一死、賢愚復た数ふるなし。

日に酔うて或は能く忘れんも、將た齡を促むるの具に非ずや。

善を立つるは常に欣ぶ所ならんも、誰か当に汝が為めに誉むべき。

甚だ念うて吾が生を傷ましむ、正に宜しく運に委せ去るべし。

大化の中に縦浪して、喜ばず亦た懼れず。

一応に尽くべくんば便ち尽くべし、復た独り多慮する勿れ。

大鈞とは造化、造物者のことをいう。万物を生成する造物者は、その力を用ゐるに至って公平で依怙偏頗にしない、すべてに平等である。その為に万物それ々の原理が、さまざまの姿態でハッキリと立備はり外部へあらはれる。その万物の理の一つとしてあらはれてゐるのが、人間の「神」である自分で、自分の存在があるばかりに人間が、天心地といふ関係位置を保って、万物の靈などとも云はれるのである。形影の兩君よ、君等は有形にして靈無く、我れは無形にして靈あり、かく相異なれど、生れ落ちたその時から相依り相附きて頼り合ひ、相異なるが故に、却って結託して善につけ悪につけ一体となって伴ひ離れることがない。いはば、我が半身とも見られる兩君の惑を黙って見過しにはしておれないのだといふ。第一の自己、第二の自己の経験経過の後に、第三の自己である人間本然の姿が、始めて顕現する。ここにある「異物なりと雖も、相依附し、結託して」といふ思想は、前述した相補和合の東洋的特色の表れであること勿論である。造化の公平をいひ、天心地の三才の関係を述べてゐるあたり、これも明かに東洋的思想の色濃いものがある。人間本位に自然を征服駆使する対立的立場の西洋思想と、自然本位に天地自然の中に融和統合する並立的立場

の東洋思想の明白な対照が、ここに於て見られる気がする。

上古の三皇や八百年も長生したといふ彭祖も、結局は死し去るべきもので、老少も賢愚も選ぶことなく皆一死する。この人生必然の死に対しては、賢愚の差なしとする表現は面白い。面白いといふより、この儼然たる事実の前には人間の賢愚などを問題にすることそのものが、ふざけ切つてゐるとするのである。アリストテレスは「智者は最も幸福なるものである」といふ。さすれば、智者でない者こそ哀れである。西洋の知性第一の文化は、智者の強い者勝ちで、今日まで地球上を支配して来た。そして、やがて機械文明、科学技術文明の行過ぎを現代フランスの哲学者ガブリエル・マルセルは「今やそれらを超克する東洋の靈的精神的なるものによつて調整されなければならぬ」と警告するまでに到つてゐる。賢愚といふことに關して、日本の思想を云へば、聖徳太子の憲法十七条に「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理、誣ぞ能く定む可き。相共に賢愚なること、鑽の端無きが如し」と「和を以て貴しと為す」といふ大眼目を以て始まる第一条の悲願が、第十条のここにも亦おのづから流露してゐる。「共に是れ凡夫のみ」といみじくも自他を誡めたこの名言は、東洋人のおほらかな寛容と自省の深さを示してゐる。そこには理智的人間の個我の優越を以て至上とする思ひあがり等は、微塵も見出すことは出来ない。この「共に是れ凡夫のみ」とする謙虚没我の心境の中に和が生れ、人倫同胞の親近感、さらに一体感が湧き出づるのである。これは、そのまま天地大自然万物の一体觀にまで生成發展される筈のもので

あらう。這般しやはんの消息を語るのが、陶詩の次の数句である。

永生を喜び、短命を懼おそれ、或は酒に憂を消し、善行を積んで人に誉められんことを思ふなどの作為をなさんより、ただそつと運命に身をまかせ、天地自然の運行、変化の波のまにまにゆられたたよひ、形影生命が尽くべきものならば、そのまま終るにまかせてよいではないか。

ここに於て、彼陶淵明は、完全に天地大自然の中に、彼の全身全霊を投入してしまつてゐる。正に天地と一体となり、自然の真意に融とけ込んでゐる。則天去私といふか、此の中真意有り、辯ませんんと欲して己に言を忘るの境涯がひそのものである。

淵明は「運まに委ませ去る」「大化の中に縦浪す」といふ。現実と理想を結ぶのに、自己を忘れ去つて、あるがまま来るがままの人生流なが転てんに素直に従はうとする。そこに無限の創造が生れると見る。流転こそ万物本来の姿であり、それ故にこそ人生の生死にも多慮し喜び懼れるを要せずと見たふ。ここに於て東洋の死は、無が有をはらむものと見るのと同じく、真の生き方への出発を意味するものとなる。西洋の「いかに生くべきか」は、東洋の「いかに死すべきか」の裏づけがあつて、始めて真の意味を持つことにならないであらうか。

淵明の詩には、深く静かな孤独感がただよふ。孤独なる自己を視つめることによって、他者の孤独へのしみ／＼とした共感が生れる。そんな時、常に彼の優すぐれた作品が生れてゐる。だから彼の詩には誇張が少ない。思想の上にも真実味が溢あふれてゐる。私は彼の文学を、特に郷愁しやうの文学と呼んだ

ことがある。郷愁とは人生の旅に疲れた者が、必ず待ち望み帰休を欲する至情である。彼の作品には歸去来之辭や歸園田居等、その名に値する傑作が残されてゐるが、他のほとんどに郷愁の心が寓せられてゐると云つてよい。彼は人間本来の安住所を求めつづけたのである。現実の望郷より眞実の桃源に帰休することを求めた。その意味に於て、彼の桃花源記は單なる文学上の虚構ではない。この「形影神」の詩も、私は同一類型に属するものと見る。

今日現前の闘争に疲れ切つた人類が、最も必要とするものは魂の憩^{いこみ}ではあるまいか。そこに詩文学の眞実が要請されなければならない。しかも帰休を欲する混乱の長旅に疲れ惑ふ人類の旅人たちにとつて、最も渴望されるものは、魂の健康を取戻してくれる古典詩といふ故郷の花ではあるまいか。私が最も誠実な郷愁詩人としての陶淵明の詩に、東洋思想の素朴な代辯者の役をつとめさせた意図はそこにある。

終りに一言蛇足^たを添へる。今日の科学技術や機械を主とする傾向の文明に於て、東洋は確かに後進国であるので、我が国の教育が、現在主知的先進国である欧米の方法に学ぶことは当然である。明治の日本が、それによつて急速な発展を遂げたことも事実である。ただ明治の日本の場合と今日と違ふところは、明治の指導層が採り入れた西洋文化の基盤には、豊かな東洋文化の伝統に養はれた主体性が用意されてあつたことだ。残念ながらそれが今日は完全に失はれたといつても過言ではない。占領政策の第一着手として為された歴史の遮断による自国文化への自信の喪失、従つて依存

卑屈の劣等感の発生、強大国への無批判的傾倒と自国悪罵の自虐小児病の流行——世界二十六ヶ国の教科書中で自国の歴史伝統を罵るものは、終戦後の日本のそののみ。左伝の中に「国悪を諱むは礼なり（自国に悪しきことありても、遠慮して口にせぬのが文化人の道である）」とある。その中国へ行って日本の悪口をいっては、先方から内心苦笑されて気づかない迂闊な政治家やインテリも居る——等といふ現象が次々と起って来る。西洋の学問は、知識欲に出発した為、その指向するところは、外界殊に自然の研究を主とし、日常生活の利便に役立たせることを努めた。これに対して東洋の学問は、生きることの人間的意義を得ようと努めた為、その探究されるところは、主として内界殊に道義の実践に終始し、日常生活以上の問題に想到することとなった。この二つの学問の傾向の赴くところ、前者は機械文明に過ぎて人間無視に走らうとし、後者は精神文明に過ぎて生活軽視に陥らうとする。マルセルの憂ふる如く、今日の我々はいづれに偏ることもなく、両者の調整を本気で考へ、また努力すべきであると思ふ。ただいづれかといへば、終戦後の日本は、正直にいつて物欲過剰の消費文化に傾いて、健全な精神文化の再建に対しては、恐ろしく不熱心であり、むしろこれが破壊に甚しく熱心であるといふ奇現象を呈してゐる。社会も学校も、それに気付かぬ筈はないのであるが、知悉して尚もこれに拍車をかける盲動は断じて許さるべきではない。

（講師の希望によりかなづかないなど原文のままとした）

津下講師の淡々とした詩の読み方にも、心のこもった響きが感ぜられた。東洋の大詩人によってうたわれた詩の中に、深い人生の哲理が、掬み取られるような講義であった。講師の陶淵明に対するつきぬ愛情が、しみ入るように聞くものの胸に伝わってきた。講義の中の言葉の意味がよく理解できない人も、講師の心と陶淵明の心を、一つのものと感じ取ったようであった。質疑応答も、それにふさわしく、陶淵明の思想と時代環境を掘り下げたものであった。

十分間の休けいののち、野口恒樹講師の講義がはじめられた。

（旧制三高、京大文学部哲学科卒、元海軍機関学校教官、昭和二十六年から以降、県立長崎短大教授）

わが国固有の人間観の特徴

長崎短大教授

野口恒樹

わが国固有の人間観

あらゆる人生あらゆる文明は、人間観（人間観というのは人間とは何ぞという問いに対する答えとみればよい）を予想する。それゆえわが国固有の人間観は、生活の事実として、日本人の生活日本人の文明が始まった時、すなわち太古からすでにあったはずである。しかしそれを今日からさかのぼって知る手がかりとしては、やはり最古の文字、書物に頼らざるを得ない。そしてわが国最古の書物はいうまでもなく、古事記、日本書紀である。

いまこの記紀の二典によって、わが国固有の人間観を探究しようといえば、古事記、日本書紀のような半ば神話的な物語は、いったい学問的研究の資料としていかなる価値を有するか、その問題から決めてかかるのが、順序ではないかといわれる人もあろうかと思う。しかしここでは時間の関係上、ただ神話は、マリノフスキーのごとく「本来生きた文化形成力」であり、そしてわが国の文化は、この言葉の真なることを証拠立てているというにとどめて、先へ進むことにする。

しからば記紀の二典にいかなる人間観がみられるか。

一 天照大神皇孫に勅して曰く、「葦原の千五百秋の瑞穂國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり、宜しく爾皇孫就いて治せ、さきくませ宝祚の隆えまさむこと、まさに天壤と窮なかるべし（日本書紀卷第二）

二 天照大神み手に宝鏡を持ちたまひて、天忍穗耳尊に授けて祝ぎて曰く、吾が見此の宝鏡を視まさむこと、まさに吾を視るが如くすべし、与に床を同じくし、殿を共にし以て齋鏡と為すべし（日本書紀卷第二）

三 伊弉諾尊、伊弉冉尊國の柱を分ち巡りて同じくひとつおもてに会ひたまひき。時に陰神先づ唱へて曰くあな、うれしや、うましをとこに遇ひぬ。陽神悦びずして曰く吾は是れ男子なり。理まさに先づ唱ふべし。如何ぞたをやめの反つて言先だつや。事既に祥らず。宜しく以て改め旋るべし。（日本書紀卷第一）

四 此の時伊邪那伎命、大く歡喜びて詔りたまはく「吾は御子生み生みて、生みの終に三柱の貴の御子を得たり」とのりたまひて、即ち御頸珠の玉の緒もゆらに取り揺がして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく「汝命は高天原を知らせ」と事依さし賜ひき。次に月詭命に詔りたまはく「汝命は夜の食國を知らせ」と事依さしたまひき。次に速須須佐之男命に詔りたまはく「汝命は海原を知らせ」と事依さし賜ひき。（古事記上卷）

五 ここに日子番能邇邇芸命天降りまさむとする時に、……天児屋命、布刀玉命、天宇受売命、伊
 斯許理度売命、玉祖命併せて五伴緒を支加へて天降したまひき。是に其の招ぎし八尺の勾瓏、
 鏡、また草那芸剣また常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて……竺紫の日向の高千穂
 の久士布流多氣に天降りまさしめき。(古事記上卷)

記紀の中のこれらの文章は、ただ神話的な事実を記したままで、何の意味もないと、多くの人は
 思うかもしれないが、われわれは、これらの事実の中に無言の意味と価値とを次第に見出すに至っ
 た。

そしてこのような自覚の媒介の役目を演じたのが、外来の儒教と仏教とであった。儒教、仏教の
 順で入来したが、仏教は、世間を超越した教えで、仏というものを拝んだ。これは、われわれにな
 い、われわれと非常に異なるものであったから、ここにはじめてこれと異なる己れに気づいて己を
 自覚した。外国にいったことのある人が、外国に行つてはじめて、日本のよさがわかるようなもの
 である。ここではじめて、わが国固有の道に「神道」とか「古道」とかいう名がつけられるに至っ
 た。儒教は元来人倫を明らかにすることを主眼とするもので、五倫の道、すなわち父子の親、君臣
 の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信を重んじた。ところが五倫の道は、親義別序信というような
 名前こそなかったが、本来われわれの間でも事実上重んじられてきたことであった。記紀の二典か
 ら抜きとつた前記の五つの文章は、一から順次に君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友

の信を示している。ここにおいて支那の文字、儒教をとり入れて、事実上わが国固有の道を、自觉地に拡充深化して行くことになった。徳川時代に儒学に心酔した学者の中には「日本には元來道というものはなかった。仁義忠孝に和訓がないのはその証拠である」などといったが、もしわが国に固有の道がなかったならば、儒教を学びながら、儒教の是認する「禪讓放伐」の革命思想をどうして退けることができようか。たとえ周公、孔子の聖經を学んでも、革命の国風だけは採用するわけには行かぬという自覚、この自覚そのものは、儒教が与え得るものではなく、わが国固有の古道、神道そのものから得るほかはない。道の名、言葉、文字がなければ道はないと思うのは、事実を見ることのできない皮相の見たるを免れない。儒教渡来以前すでに道の事実があったということは、牢固として銘記しておく必要がある。

かくて、わが国固有の道に宿るわが国固有の人間観は、徳川時代において儒学を媒介として、最も明瞭な自覚にもたらされたが、なかんずく、これを最も徹底して明らかにしたものは、浅見綱齋（国文研発行「読書の乗り」参照）であると思われる。綱齋には有名な「靖猷遺言」の著がある。これは支那の忠臣八人を選んでその言行をしるしたものである。さきほど津下先生の話された陶淵明もその一人である。津下先生は詩人としての面目について述べられたが、二君に仕えなかった忠臣としての一面がある。靖猷遺言では晋の処士としての陶淵明を論じている。その綱齋に「聖学図講義」という著書がある。彼はその中で次のようにいっている。

『父子有_レ親君臣有_レ義夫婦有_レ別長幼有_レ序朋友有_レ信』というは、人の天地に生まれて相立ち相属するなり、此の五より外天地さらになし、我身という己、父子という己、君臣という己、長幼という己、朋友という己、己の一字が五倫の身ぞ。人というも別なし、父子君臣夫婦長幼朋友ぞ。人というは人倫より外なし」

「我身と己」は一体であり、その己が「父子という己」であるとは、父子は二人であるから、己は一体二人であることをいったものである。君臣、夫婦以下いずれも一体二人で、人間はかかる一体二人の相立的、相互従属的存在であることをいったもので、それを一言に「人とは人倫である」といつている。これが後述する人間を「独立孤立の無関係的存在の個人」とみる西洋近代の人間觀と、最も大きなコントラストを示す相違点である。

くだって幕末、藤田東湖は「人道は五倫より急なるはなく、五倫は君父より重きはなし、然らば忠孝は名教の根本、君子の大節なり」（弘道館記述義）といい、また吉田松陰は「凡そ生れて人となる。宜しく人の禽獸きんじゆに異なる所以ゆゑを知るべし。蓋しおほし人に五倫有り、而して君臣父子を最大と為す。故に人の人たる所以は忠孝を本と為す」（士規七則）といっている。

そこで人とは人倫であり、人倫は五倫であり、五倫の中でも君臣父子は大準、大格、大節、大倫であるから、人とは君臣父子であるが、さらにこの限定をぎりぎり究極の所まで押しつめれば、どうなるか。君臣、父子、夫婦、長幼、朋友のうち、人によっては朋友のないもの、兄弟のないもの

もあり、結婚しなければ夫や妻でないものもあり、結婚しても子がなければ、父や母でないものもあり得る。しかし人と生まれたならば、必ず親がある。すなわち生まれた人はすべて子である。また親から生まれたといっても、日本人である限り、どんな山奥、どんな海辺に生まれようとも、生まれただけでこの国の民であり、君国の臣である。従って一時いかなる人間関係を欠くことができても、臣子であるという関係は生まれるとともに始まり、死ぬまでのがれることはできない。しかれば人とは何ぞの問いに対する答えは、人倫から五倫三綱と限定を進める時、究極すれば臣子となる。すなわち「人とは臣子である」——これがわが国固有の人間観であり、国初以来幕末まで日本人の人間観の基調であった。

西洋近代の人間観

ところが明治以後西洋から種々の學術思想が流入した。人間観についていえば、西洋近代の人間観がこれらの思想の根本にある。しからば西洋近代の人間観はそもそもいかなるものであろうか。

近世のはじめ、文芸復興期には各方面にさまざまな発明、発見が行なわれたが、これらの諸発見の共通の根底とみられる最大の発見は「人間」の発見であった。人間が人間を発見するのであるから、これは人間の「自己」発見であり「個人」の発見であり「自我」の自覚である。近世におけるこの「人間」の発見「自我」の自覚を最も徹底的に哲学的に表現するとともに、近世の指導的な人

間の理念、すなわち「人格」概念を確立し、基礎づけたものはカントである。

カントは人と物とを比較して、人は理性を有する、物は理性を持たぬ、理性の有無によって人と物とを区別し、無理性的なものを「物件」というのに対し、理性的なるものを人格と名づけた。カントが人間の本質とする理性とはいかなるものかといえば、認識の能力であり実践の能力である。すなわち目的を立て、これを実現する手段を講じ得る能力である。かかる能力は人間だけにしかない。そこでカントは、人間以外の万物は、ただ手段として存在するに過ぎないが、人間は目的そのものとして存在する。手段としてしか存在しない物は、相対的価値しかもたないのに反し、目的そのものとして存在するもの、すなわち「人格」は絶対的価値、尊厳を有するとした。カントによれば、人以外の物が、物件であるのに対し、人は「人格」である。この「人格」の観念を人と人との関係に移すと、人と人との関係は、人格と人格との関係、理性者と理性者との関係ということになる。一人の人間は「一理性者」であり「一人格」である。そこで人格が、絶対的価値、尊厳を有するとは、一人格すなわち一理性者、すなわち一人の人間、すなわち個人が絶対的価値、尊厳を有することになる。また理性は人間の本質としてすべての人が有するものであるから、すべての人はこの理性という本質からみる時、何の相違もない。ゆえにまたすべての人は本質上、同等であるということになる。そこで人と人との関係である世の中は、すべて同等の個人対個人の関係とみられることになる。人格主義は同等主義である。そしてこの個人の尊厳と同等という思想を含む点に

において、カントの「人格」概念はきわめて民主主義的である。

二つの人間観の明治以後における交渉

明治以後、このような西洋近代の思想が学問としては倫理や哲学の形で流入してきたわけだが、これがわが国固有の思想と相反することに気づいた人々は、一国の道徳はその民族の性情や風土、歴史と不可分の関係にあるから、国民によってその特色を異にするのが、当然であると主張して、国民道徳の必要を唱えた。明治二十三年に発布された「教育に関する勅語」は、この国民道徳の要を示すものであった。この教育勅語に現われている人間観は、祖宗の遺訓に基づく伝統的人間観、すなわち人倫的人間観である。とくに五倫を重んじ、忠孝友和信の徳を教え、なかでも忠孝を本にしているのは、忠は臣の道、孝は子の道であるから「人間とは臣子である」という人間観を反映するものである。

ところがここに奇妙な事象が現われることになった。わが国の学校教育において、道徳に関する教科として、小学中学校では「修身」といって、国民道徳すなわち教育勅語を主眼として教え、高等専門学校から大学では「倫理」と称して、もっぱら西洋の倫理学、西洋近代の個人主義的人間観が教えられ、国民道徳と倫理学が、昭和二十年第二次大戦に敗れるまで、並行して存在した。

そして敗戦の結果、進駐軍の占領下に、憲法と教育勅語が廃され、新憲法と教育基本法の施行を

強いられた。これは人間觀の上からいえば、伝統的な人間觀を廢して西洋近代の人格的人間觀に切り替えられたということである。そしてそれは、さらにそれまで國民の道德生活の事実から遊離して、単に理論、思想として一部の知識層に宿っていた個人主義的人間觀が、わが國においてそれに相應する所の生活事實の基盤を得たということを意味する。この点からいえば新憲法の施行——外國軍隊によるわが國の武力革命は、はからずも明治以後わが國に行なわれた西洋とくにカント流倫理學において、最も有力な理論的内応者、内通者を見出したということになる。そしてそれは偶然ではない。カント「人格」概念をはじめて打ち出した「道德哲學原論」は、アメリカの「獨立宣言」と相前後して現われたものであり、この二つはともに十八世紀の啓蒙思想の産物であることを多分に反映しているものとして、きわめて密接な關係をもっている。カントの「人格」概念が、民主主義的であることは先に一言したが、ベルグソンも「アメリカのデモクラシーの哲學的原理はカントの著作の中に見出される」といつている。これが占領下に旧敵國によって強制的に与えられた憲法を、わが國の西洋的教養偏重の知識階級指導層が、不思議にこれに反対しないばかりでなく、かえって擁護するという世界史に稀有な奇現象を呈し、これを奇とも何とも思わないゆえんである。

二つの人間觀の衝突の事例

このような二つの人間觀、すなわちわが國固有の人間觀と西洋近代の人間觀、人倫と人格との遭

遇、衝突が、具体的な生活の事実において、いかに現われるかということについて、一、二の例を挙げてみたい。

先ず親子について、二つの事件を対照して考えたい。一つは戦前のことであるが、瀬戸内海で連絡船が沈没したことがあった。この時母親と妻をつれて乗り合わせていた海軍の水兵が、多くの人を溺死（びやくし）から救った。しかし母親と妻は溺死した。その地方の新聞がこの水兵の働きをあたかも犠牲的精神の発露であるかのごとく称賛して書き立てた。当時広島高等師範（現在広島大学）の倫理学の教授西博士が、これを評して「水兵が戦場に出たならば一身一家のことを忘れて働くのは当然だけれども、平時私人として家族とともに旅行していて、水難に会ったのであるから、まず家族を救って、余力があれば他人もできるだけ救えばよい、他人を助けても家族を死なせては、ほめた話ではない。新聞の称賛も誤っている」という意味のことをいわれたが、誠に至論と思わざるを得ない。他の一つは戦後福岡県で息子が親を殺した事件である。地方裁判所の判決は軽過ぎるとして、高等裁判所から最高裁判所に持ち込まれた。ところがここでも判事の意見は二つに分かれた。一方は、親を殺すのは、赤の他人を殺すのとはわけが違う。親を大事にするのは、わが国古来の淳風美俗（じゆんぷみぶく）である。従ってただの他人を殺すよりも、とくに重く罰すべきであるという主張であり、他方は、それは昔のことで、新憲法下の今日では、すべての人は同等である。だから単なる殺人罪でよいとする主張である。前者は古来の良風美俗に現われているわが国固有の人間観に立ち、後者は新憲法の

根底に横たわる西洋近代の人間観に立っている。

しかし親を殺した場合、これを赤の他人を殺した場合と同じに取り扱うということは、これは国家が、世の人の子に「親を見ること赤の他人の如くなるべし」と教えるにひとしい。そしてこれは逆に人の子の親たるものに「子を見ること赤の他人の如くなるべし」と教えることにならざるを得ない。これは親子の仲を他人同様にすることにほかならない。この論法からすれば、前述の水死しようとしている人を助ける場合、親も赤の他人も一個人、一人格として価値が同じであるなら、親や妻子を先に助けなくてもよい、他人でもただ多く助ければよいということになるであろう。はたしてこれが人情、すなわち人間性になかったことであろうか。私にはそうだとは思われない。

次に夫婦の場合を考えてみたい。イブセンの「人形の家」のノラが家出をしようとする時、その夫は「お前は妻としての、母としての神聖な義務を忘れたか」といって留める。だが彼女は「私にはほかにも神聖な義務、私自身に対する義務があります」「私は妻たる前に人間にならねばなりません」といって家出し、夫に対して妻たることをやめると同時に、子供に対して母親たることをやめて家という共同体を破壊した。これは夫婦と親子の関係を単なる人間と人間、人格と人格との関係に還元したものであり、イブセンのプロット（構想）がどこにあったにせよ、近代的人間観を徹底的に実行すれば、共同体は破壊されるということを示している。

西洋における人間の再発見——結び

二つの人間観の相違は、親子や夫婦についてこのような問題を引き起こしている。ここに注目すべきは、第一次世界大戦後、西洋ではこの惨禍を生んだ近代文明に対する深い反省がなされ始め、一流の神学者、哲学者の間に、近代文明はその中核の人間観において誤っているというものが、輩出するに至り、ゴッタルテンのごときは、近代的人間観は「西洋の哲学的思惟の禍い（わざわい）にみちた誤謬（びつりょう）である」といつている。そしてこれらの学者は「我と汝」「応答的存在」「邂逅（かいごう）における存在」「他からしてある存在」などという言葉で、真の人間観を説こうとし、それを「人間の再発見」といつているが、それはわれわれからみれば、われわれ固有の人倫的人間観にはかならない。しかるに戦後の日本は、新憲法とともに与えられた近代的人間観を随喜している。それが問題である。

ポール・ブルジェの「宿駅」の主人公、大学生のジャンは、自己の進むべき道を見出した時、その決心を友人に告げていた。「僕は一七八九年と大革命の味方だと思っていたが、そうではなかったんだ。われわれの祖先がそうであったように、僕はフランスの最も深い底へ身を投じようと思う」と。私は日本の青年学生が「僕は新憲法の味方だと思っていたが、そうではなかったんだ。われわれの先祖がそうであったように、日本の最も深い底——国体へ身を投じようと思う」と、宣言する時はいつの日であろうか。私は心からその日の一日も早く来ることを切望してやまない。

講師の息づまるような真剣さに打たれ、講義内容に耳を傾けた学生も少なくなかった。しかし「忠孝」とか「五倫」とか、聞きなれない言葉が出てくると、講師のまじめさに逆比例して「古くさい」「封建的」だとひやかすようなささやきももれてくる。後の方では聞いていられないという格好で足を投げ出すものもある。

戦後のいわゆる民主教育の中に育ってきた学生諸君にとって、それは「短時間では受けきれがたい」「耐えられない」ものであっただろう。理論とか事実とかいうことよりも、学生諸君には肌身はだで反発するものとして受け取られたようである。

司会者はその間の空気を察して「真実は真実として守らねばならない。これが学者の信条である。要領のいい人気のある学者然として、学問の内容を世論の前にまげていったとき、学問はどうなるか。真理の前に毒杯を仰ぐ決意で述べられた野口先生の学者的良心に対して、真剣な質問を望む」と発言し、質疑に移った。はたして各班から一せいに質問の手があがった。

問い 「人形の家」のノラが「妻である前に人間であらねばならぬ」といったのに対し、先生は「人間である前に良妻賢母であってほしい」といわれるのだろうか。

答え いや、前とか後とかいわない。女にとっては妻であり、母であることの中に、同時に人間であることがこもっているといったのだ。

問い ノラが人間でありたいといったのは、みずからの意志を押えられたため、妻という身分から解放された

いと願って、人間でありたいといったのだと思うが……。

答え あなたはノラが意志を押しえられたから、人間になろうとして家出したというように解釈しておられる。

またそれが通常の解釈のようだが、私が問題にしたのは、ノラが家出の理由としていった「妻となる前に人間であらねばならぬ」という考え方、思想である。妻となることの中に、人間となることが、実際にはこもっていることを見のがして、妻であろうとする努力をやめ、人間に返った。自分が妻であることをやめれば、相手は夫であることをやめて、これも人間に返る。このような考え方で、すべての人が「人間」であろうとすれば、すべての人と人との関係は、皆他人同志の関係になってしまう。親子とか夫婦とかいう特別の人間関係は、どうして成り立つかわからなくなる。このようなだれもかれもただ「人間」とみる、近代的人間観の「人間」の考え方では、共同体は成り立たぬということの例を「人形の家」は、夫婦の場合について示している、というのが私の解釈である。あなたの解釈とは違う点を問題にしているのである。

問い 親が子を殺した場合は、普通の殺人罪にしておいて、逆に子供が、酒飲みで社会に害をおよぼすような親を殺した場合、これを特別重く罰するとすれば矛盾すると思う。

答え わが国固有の人間観からすれば、親を殺した場合と、赤の他人を殺した場合とを、原則的に同一視すべきでないといったのであって、同じ親殺しの場合でも、事情によっては参酌されることもある。私は原則をいっただけである。この問題は最高裁でも判事の意見が分れたくらいだから、あなたと私と人間観を異にする限り、一致するわけにはいかないでしょう。ただし親が子を殺した場合と違って、子が親を殺した場

合、これをとくに重く罰することにしても、不公平ではないと思う。なぜならすべての息子は、いずれ親の立場に立つことになるだろうから。

問い わが国本来の人間観は「人間とは臣子である」といわれたが、人間が子であることはよくわかる。だが臣であるという点は納得できない。天皇は戦前は君であったが、戦後は象徴である。臣ということは通用しないと思う。

答え 戦後の新憲法では天皇は象徴であるから、臣ということは通用しないと考えるのは、一応もつともである。しかし天皇が、単に象徴であるだけなら、日の丸も日本の象徴である。象徴は、代名詞でいえば、三人称の「それ」であって、考えられたものである。われわれはこれでは「我と汝」との関係に立つことができぬ。天皇を単に象徴とみるのは、わが国本来の正しい考え方ではない。これを本当の関係、我と汝との関係に戻すには、新憲法を変えねばならぬと私は考える。

問い 私は憲法改正については同意する。しかし天皇制については意見を異にする。先生は忠孝でなければ、人間性の發揮はないかのようにいわれたが、私は国民一人一人の人間性が見出されたから、天皇制が象徴に一步後退したのだと思う。

答え あなたは忠孝と人間性が矛盾するかのよう解されているが、忠孝と人間性とは矛盾するどころか、人間とは臣子であるとみれば、当然忠孝は人間性の極致である。一昨日小田村講師のあいさつの中に出たわが

特殊潜航艇の勇士の話——濠州海軍の司令官が、鉄の棺桶に乗って祖国のためにこのように勇敢な働きをするとは、敵ながらあっぱれである。かかる忠勇の士をただ日本という一國の榮譽と誇りとするのは、あまりに惜しいといって、海軍葬をもってしたということは、忠が敵、味方とか勝ち負けを越えて、無限の価値をもつことを証掘立てているものと思う。

また孝についても、今日孝は教えてならぬことになっているが、「母の日」はよいとされている。「母の日」は「汝の父母を敬うべし」という聖書の中の言葉を、日曜学校で聞いて帰った子供が、自分の家の庭のすみのかーネーションの花を摘んで、お母様に捧げたことに由来している。このささやかな真心が、全教会、全米、全世界の人の心を揺り動かして「母の日」は、今日世界的な行事になっている。孝と父母を敬まうということと、どこが違うであろうか。こういうことは忠孝が、古今東西に施してもとらぬという証掘であると思われる。

またキリスト教は、ある意味で忠孝の宗教であると思う。神のことを天にまします主とか父とかいいうが、天の主と呼びかけるものは、そのしもべ、臣であるはずであり、天の父と呼びかけるものは、その子でなくてはならない。キリスト教は、神に対する忠孝の教であるといえることができる。裏からいえば、わが國の忠孝は道德であるとともに宗教である。

このような意味で、忠孝は人間性の極致であつて、人間性と矛盾するなど思いもよらない。一体今日では「人間性」とか「人間」「人類」「社会」というような、一般的なばく然としたことばかりよくいうが、一般的普遍的なものは、具体的には特殊であることを知らねばならない。アメリカ人は正義とか人道とかよくい

う。正義、人道がアメリカ人の人間性發揮の道である。同様に忠孝が日本人の人間性發揮の道である。

問い 孝については同感である。しかし忠については納得がいかない。これについてはかの学生はどう考えているか、意見を聞いていただきたい。

右の質問に対する意見(学生)何か私たちが社会科で学んできたこととズレがあるように思う。私たちは社会科で、明治維新のさいは、一面文明開化をやり、西洋の科学力を使うため知識階級を育成しなければならなかったが、他面一般国民や農民には、いままでの道徳を残しておいた方が、支配するのに都合がよいからこれを残した、というような説明を聞かされている。私たちはこの説明を誤りとは思わない。

また天皇と臣、官吏と人民、地主と農民、しゅうとめ(姑)と嫁、こういう間柄はたして美しいものだったであろうか。戦前の知識階級が、なぜ西洋の近代的人間観を持ち続けたか。終戦後、新憲法制定の時、なぜ反対が起こらなかったか。独立後十数年たった今日、なにゆえに新憲法反対運動が起こらないのか。これは近代的人間観が、世界的視野に立つ真理を含んでいるからではないかと思う。

答え 今日新憲法の反対運動がなぜ起こらぬかといわれるが、そういう運動が全然ないわけではない。しかしそれが容易でないのは、戦後の一切の制度、とくに教育が新憲法に歩調を合わせてきているからである。戦後新憲法制定の時、なぜ反対しなかったかといわれるが、占領軍が制定を強制して、反対を許さなかったからである。占領軍の強制がなければ、反対も何も、そもそも憲法の全面的改変などあるはずはなかったのである。当時の歴史的事情を調べていただきたい。次に戦前の知識階級は、なぜ近代的人間観を持ち続けたか

ということだが、これはすでに述べた通り知識階級が、それをよいものと思つたからで、道徳は民族によつてその特色を異にすることを考えず、数学的真理が共通であるように、道徳上の真理も共通であると考へたからである。もちろん知識階級にも例外はある。どこかで日本固有のものに触れた人とか、あるいは四書五経を勉強したというような人はそうではなかつた。

以上三つの「なぜ」に答えたわけだが、も一つ、忠は君主が人民を支配するのに都合がよいから残したという解釈については、身ぢかに戦争に引き出された人を見聞きしたものは、そう考へるに違ひないと思われ。アメリカのロイスという哲学者が、日露戦争で日本人の忠義について、いたく感動し「忠の哲学」を書いてゐるが、その中でロイスは「忠といへばいの一にロシアの青年（私は今の日本の青年もつけ加えた）は、暴君が人民を思うように支配するための道具であるといつて反対するであらう」（当時日本は立憲君主国、ロシアは専制君主国であつた）といひ、そのほかいろいろの立場の人々に忠の反対論を存分に述べさせた上で、今度はロイス自身その反対論の反対論、すなわち忠の弁護論を展開してゐる。そして理論で反論する前に、まず事実をもつて反ばく（駁）してゐる。ロイスがあげた事實は何か。それは日本の武士道であつた。そしていうには、この日本の忠義は、忠義の反対論者が皆考へて見なければならぬ一つの反例である。なぜなら日本の忠義は、圧制者の使う単なる武器ではなかつたからであるといつて、詳しく論破してゐる。私はわが国の忠義反対論者が、アメリカにおける第一等の哲学者の言葉を内心に味わひ、日本古来の忠義がいかなるものであるか、とくと考究すべきであると思へる。

問い 戦前の地主と小作人とか、しゅうとめと嫁との關係などについてどう考えられるか。

答え そういうような關係をみんないっしょに同視して論ずることはできないと思うが、わが國固有の人間觀を重んずべきであるといったところで、いまあなたが列举されたような人間關係が、すべて美しかったといつてゐるわけではない。現実の事實としては、その反対の場合もずいぶんあると思つてゐる。しかしそれを改めるために、人間觀を根本から変えることがよいかどうか、それが問題であると思う。どちらの人間觀にも長所とともに短所がある。採長補短と簡單によくいわれるが、實際はむずかしい。ツル（鶴）の足を切つてカモ（鴨）に足せば、ツルもカモも台無しになると思う。それならどうすればよいか。それぞれ長所を生かして、短所は出ないように努力するほかないと思う。ちよつと弊害がでると、そこだけみてがらりと根本から変える。また弊害がでる、また変える。こういう風にならりと変えたのでは、國家の健全な進歩も發達も到底あり得ない。イギリスも革命をやつたが、十年ぐらidemとに復し、以来大英帝國と稱し、しかも民主主義國家として今日に至つてゐる。わが國もこういう行き方があると思う。

きのうも民主主義との調和ということが質問に出たが、わが國の民主主義の歴史的根柢は「齋穂」の神勅にあると思う。君主にとっては、人民の生命がその政治の全体であるという教訓が、これにはこもつてゐる。即位式のさいに行なわれる大嘗祭は、天皇がこの心を体得されるための儀式とされている。終戦のさい天皇が、御一身のことは少しも顧慮されず、すべての戦争責任は自分一身にある、といわれたそのお言葉に、マッカーサー司令官は、非常に感動したといわれている。この心がわが國の民主主義の根柢であり、この天皇のお心を本當に体して、党利党略などいっさい眼中におかず、政治家が政治を行なうならば、立派な民主的

政治が生まれると思う。そしてその民主主義の道具立ては、よいものならどれだけ西洋からとり入れてもよい。君主国で民主的政治はいくらでもできると思う。がらりと根本から変える必要はない。

問い 国民が一丸となって進まねばならぬという気持は、皆同じだと思う。そして国民が打つて一丸となる方法を先生は天皇だといわれるが、戦後の人にとっては、別の道があると思う。また日本の政治は、事実上内閣が動かしていたのだから、天皇は一種の看板ではないだろうか。

答え 全国民共通の広場を新しく作ればよいというようなご意見だが、そういうこしらえものではダメである。全国民共通といっても、今生きている人ばかりではない。過去何千年の間に生まれては死んだ人々を含み、また将来の人々をも含むはずだ。いまさら作るとかこしらえるとかしなくても、わが国には過去現在未来の三世を一貫する立派な歴史的共通の広場がある。それが天皇である。アメリカが星条旗を尊ぶのは、わが国の天皇のようなものがないから、それに代わる人為的なものとして、国旗を大切にしているのである。

次に日本の政治は、内閣が行政権を行使し、運営しているから、天皇は看板に過ぎないではないかということだが、それは合理主義的な考え方である。合理主義も一概に悪いわけではないが、それだけではいけない。明治二十二年に立憲政治が布かれてから、天皇は自分一人のお考えで「それはかくせよ」などといって内閣の決定を変更されたことはかつて一度もないということであるが、それなら内閣と内閣総理大臣だけでよいかというと、そうはいかない。『大東亜戦争』開始のさいに、東条首相が開戦の決意をしたというだけで、国民がこぞつてついていったかどうか、そんなことはとても考えられない。天皇がお取り上げになった

詔書が出たというので、全国民が全力を尽したのであって、時の総理大臣が決めたからといって、そんな氣持に皆がなれるものではない。また終戦の時にしても、陸相の強硬な戦争継続論に、鈴木貫太郎首相は決がとれなかった。最後に天皇のご決意によって終戦が決定した。これも鈴木内閣が、終戦を決めたというだけでは、海外にある数百万の大軍が、一斉にホコ（矛）をおさめはしなかったと思われる。これらは天皇のご威光、御稜威（りやうゐ）によるものである。ご威光とか御稜威といえは、ただ飾り文句、形容詞のように思うものがあるが、それは生きた現実の力である。ただの看板だけなら、どうしてその中に連合軍も目を見張った偉大な力があつたであろうか。ただし天皇をただの看板だと思ふ人には、天皇は存在しないことになる。天皇も立てばあり、立てなければないものである。そして立てるか立てないかは、われわれ日本人の問題である。今日天皇というとき、天皇ご個人とか皇室ご一家を指すかのごとく思ふ人が多いのだが、われわれが天皇という時、天皇は国家国民と一体である。だから天皇を絶対に立てねばならないと思ふわけである。

問い 問題はそこにあると思う。私たちは天皇といえは、天皇個人を考えている。先生のような説で教育する時、若い人を納得させることができますか。

答え 若い人たちは、戦後天皇をただ象徴というあいまいなものとするように教えられてきたから、天皇を君主とみるような考えは、急には理解できないかもしれない。しかしながら教育は漸を追うて改めればよい。終戦の時まで国民にとって天皇は共通の広場であつた。ポツダム宣言受諾のさいにつけた唯一の条件は、国体に変更を加えないということであつた。新憲法制定のさいには、社会党まで国体に一致するものとしてと

いう条件をつけた。しかし私どもには新憲法が国体に一致するものとは思われない。国民としていったん志を立てたならその志すなわち建国の精神を貫き通すべきで、それでこそはじめて国として存立し得るのである。日本は占領下に憲法を変えさせられたが、日が浅いからまだ建国の精神を連続させることができる。さきほど述べたように、イギリスもそうであった。ここ数年ないし十数年が問題である。だからこのような合宿が催される意義があると思う。

講師の信念あふれる主張は学生たちに大きなショックを与えたようで、質問は次々に出された。終始誠実な態度で確信に貫かれた回答が行なわれた。だが言葉の上では一応引き下がっても、講師の思考のベースの中にはいり込んで考えようとする空気は、いつになっても出てこない。この質疑応答にもみられるように、講義と質問との間には大きなギャップがあった。しかもそのギャップが、いかなるものであるかが検討されないでいる。講師は国民同胞が一つに結ばれることの人間的意義が、いかに人間として高度の文化生活を意味するかを力説され、そしてその要素としての天皇を説明された。しかし学生たちの方は、天皇という言葉が出てきたことだけで、青天のへきれきのように意外なことに感じてしまい、自分たちの受けた教育の中で感じとっている天皇と、それとの相違を比較するいらたらしい雰囲気がかもし出されてしまった。従って講師のいわれた天皇を国民生活、人間生活の中心に仰ぐということのもつ広範な意味は、少しも理解されないうまま、学生たちの疑心暗鬼が深くなっていったようである。問題の本質を言葉のはしの表現と取り違えてしまうこの傾向——それは戦前、戦後の異なった世代の断層のゆえかもしれない。

これまで合宿の空気は、次第に高まってきていたが、この講義を契機として、順調な流れはせきとめられ、参加者全員の心に、大きな激流がうずまきはじめた。時計ははや正午をまわっている。このまま全体討論を続行せよと訴えるもの、班別討論で問題を掘り下げよと提案するもの、指導員各人の心の欲求はさまざまである。だが司会者は「午後のスケジュールは予定通り、大観峰登頂を決定する」と発言した。一たびせきとめられた激流を大観峰に解き放ち、そのあと改めて班別討論を開いて、問題を整理した方が適切だと判断したためであろう。

以上で午前中の行事を終わり昼食、休けいに入ったが、野口講師の講義と質疑応答をめぐって、あちこちにグループが作られ、熱心な討議が続けられた。「いますぐ野口先生の心境に到達できないにしても、究極的にはやはり日本民族としての生き方は、ああでなくてはいけないのだろう」「合宿で行なわれたいままでの講義は、そのままついてゆけるとしても、野口先生のような線を出されると途端にシリ込みしたくなる」「ああいうものを押しつけるのがこの合宿のネライなのか」という感想等々、受け取り方は各人各様であった。

大観峰登山（レクリエーション）

合宿は理論的にも、情意的にも、大きな壁に突き当たっていることを、参加者の一人一人が感じはじめていく。だが難関を突き破る道は白熱的討論だけではあるまい。午後一時すぎ、バス二台に分乗して、海拔九百三十八メートルの大観峰に向かう。つづら折りの観光道路を幾めぐりかして九合目に着き全員下車。初秋を思わ



せる晴れ渡った空、阿蘇外輪山の全容は
 いうにおよぼず、遠い山なみもハッキリ
 望見される。合宿以来室内の討論に終始
 したためか、開かれた高原の道をゆく全
 員の足どりも軽くはずんでいる。あるい
 は道のべに咲く名もない花に心をとめ、
 あるいは一団となって談笑しながら歩む
 こと約三十分、ようやく頂上に到着する。
 ここは昔「遠見が鼻」と呼ばれていたと
 ころ、それを徳富蘇峰が「大観峰」と命
 名しただけに、ちょう望は雄大をきわめ

一同われを忘れて絶景に見入る。地理に明るい人たちが、右左を指さしながら説明してくれる。

広ほうたる大自然には、それにふさわしい民族のロマンがある。この地をひらいた阿蘇大神が、一切しゅじょう（衆生）の罪に代わって、みずからを焼きたまうそのほのおだと伝えられる阿蘇の噴煙、建磐竜命（たけわたつのみこと）が外輪の一角を破って、火口湖を干拓されたといわれる立野の口、貧民への放出米が山となってきたといわれる米塚、必死の開拓魂をかたる自衛の武器庫矢村社等々、何物をも焼き尽くす火の国阿蘇のエネルギーの中から生まれた伝説には、すべてきびしい物語が秘められている。



—山上の合唱—



—(左)花田大五郎学長 (大学教官有志協議会代表)—

持参のスイカを割って渴をいやす。あちこちで盛んにシャッターがきられる。やがてバスの中で配られた国文研の「いのちのいずみ」と題する合唱曲集を手に、全員斜面に集まり合唱し始める。「箱根山」「われは海の子」「旧制高校寮歌」など、阿蘇山頂にとどけとばかり歌う。青年の意気は盛り上がり、各大学有志はスクラムを組んで母校の歌を紹介する。

大観峰の頂上に立てばこだまするものもない。健康な青年の歌声が、青空のかなたに吸われるように消えてゆく。大自然の雄大なのに比べ、人間の営みのいかに小さなことか。つたなく、ささやかなわれわれの演出力

をもつてしては、結局大自然をそのまま舞台にして、雄こん壮大なドラマを展開することは望めぬのだろうか。ある学生が思わず「きょうだけは自然の子になった」ともらす。広ぼうたる高原にたたずむわれわれグループの微力さを、いまさらのように感じさせられるひとときであった。

四時合唱をうちきって帰途につく。一部はバス、大部分は徒歩で宿舎に向かう。女性も全員徒歩隊に加わる。大観峰の尾根づたいに、眼下を見おろしながら長蛇の列が続く。

三々五々歩きながら語り合う機会は、お互いをさらに近づける。講義の疑問点を討議する者、過去の身の話を語り合う者、音楽論や恋愛論に花を咲かせる者。合宿の意図はまだはっきりつかめぬままに、情意の世界ははるかな広がりをもつて結ばれてゆく。

夜は七時半から花田大五郎講師のお話を聞く。大学教官有志協議会の代表である講師は、当年とつて七十八歳、明治以来の日本を生きてきたこの老学者は、現代の青年学生に何を訴えるであろうか。

（五高、京大卒、朝日、読売新聞記者を経て、京大、大阪商大教授、和歌山高商、福岡大学、大分大学、別府大学学長を歴任して現在に至る。この間、花田比露思の名で、正岡子規の流れをくむ「アケビ」根岸短歌会員として教多くの和歌を発表した）

日本人のこころ

別府大学学長

花田大五郎

これから私の話すことは、おじいさんの昔話のつもりで聞いてもらいたい。話のあと質問されてもいいが、私はおそらく皆さんの鋭い質問には答えられないだろうと思う。「沈黙は金にして雄弁は銀なり」ということわざがある。質問を受けても黙っているのが「金」というのではなく（笑声）私の話を皆さんの心で自由に受け取ってもらえばいいと思う。また「羊頭を掲げて狗肉を売る」という言葉がある。私はここに「日本人のこころ」という題を掲げたが、恐らく内容はつまらぬものだろう。お話するに当たって引用したい書物や資料も、戦災で焼かれてからは再び入手できず、従って私の述べることは私の独断であろうが、それを披露したいと思う。

日本人にもいろいろあって一概にいえないが、日本人には他国人と違った日本人の心があると思う。ドイツ人でも、アメリカ人でも、ソ連人でもない、日本人本来の日本人らしい心があるに違いない。その日本人のこころとはどんな心か、私の独断であっても一応聞いてもらいたい。

明治維新の少し前に伴林光平ともはやしみつひらという人がいた。その人の詩に

本是もとこれ神州清潔の民。

誤まちって仏奴どとなつて同塵じんを説く。

如へまより今仏を棄すつ、仏恨むことを休やめよ。

本是神州清潔の民。

というのがある。自分は本来神州清潔の民であると自覚したのであるが、その神州清潔の民としての心が、日本人本来の心であると思う。光平は河内の人で僧侶の子として寺院に育ったが、やがて加納諸平や伴信友に就て国学を学び、神国日本人であるという自覚に達し、仏教を捨てた。その時の詩がこれであるが、日本人としての自覚を実現すべく、仏門を去つて勤皇運動に参加した。彼は幕末に外国船が日本にきたとき

君が代は巖いわとともに動かねば砕けてかえれ沖つ白波

と歌い、わが国の微動だにせぬことを内外に示す意気けんこうたる歌を詠よんでいる。そのうち天忠組の大和義孝に参加し、捕えられて同志とともに京都六角の獄で殺されたが、殺されるまで光平の精神はりん（凛）然として一貫していた。

光平のみならず、あの当時の勤皇の志士たちには日本は神の国という信念があった。この立派な神国日本が、外（夷）などに汚されてたまるかという意気込みがあった。この意気込みがあったればこそ、当時の日本が印度や支那のテツを踏まず、外国から侵略されることなく、ともかくも独立

を維持し得たのである。神の国という観念はキリスト教にもあり、支那では宇宙を支配するものを神とはいわず天といい、天の子として天に代わって国民を治めるものを天子といった。ところが日本の、ことに古代日本の神という観念は、それとも違う。神と人との関係がもっと密接である。日本の神代のことをしるした古事記や日本書紀によると、神代はもとより、それより高天原族の人々の名は、何々の神または何々の命(みこと)となっている。それらは皆当時に生きた人々であろうけれども、神と呼ばれ、または死して神と呼ばれている。そしてそれは皆われわれの祖先である。祖先の神様は、その身死しても、魂は死せず、長くその家に留まって、その家を守り子孫を護って下さるものと信じられ、これをその家に祀り、あるいは同族相寄り氏神と祀り、同郷相ともに鎮守の神と祀って敬い、拝み、なおその加護を祈るのである。敬神崇祖とはこういう意味である。そしてわれわれの祖先は皆神々であり、八百万の神々であって、その神々の中の神、中心の神様が天照大神であった。中心の神様といっても、武力をもって討伐し君臨したのではなく、権力をもって支配したのでない。慈愛と仁徳をもって臨まれ、神々はこれに帰依し、喜んで従い、和やかな大家族のようなものであったらうと想像される。そしてまつりごとは、それらの神々を高天原に集め、衆議にはかつて行なわれたようである。「和を以て貴し」とする大和民族の家族国家はこのようにして興り発展してきたのである。かくてわれわれは神々の子孫であり、神々によって守られ、神々とともにあるという信仰が生まれ、日本は神国という信念が生まれたのである。

これは余談だが、私の解釈では高天原は大和平野であつたらうと思う。古事記の神代記事は神話伝説であつて、信じられないようなことが多いが、その中から真実らしいものを探り出すと、天つ神の命令で伊邪那伎、伊邪那美の尊が国生みをなされたというのは、実は大和民族の勢力が大和を中心に淡路から四国、九州、杵岐、対島、隠岐、佐渡、本土、および瀬戸内海の諸島に及んでいった経路を示すもので、かく領土が西に伸び、それに大国主命にも、日本海に面する山陰の領土を譲らしめたので、この拡大した西陲の領土を治めるために天孫瓊々杵命が九州につかわされたのだと思う。ところが、その後高天原民族の本拠地大和平野は、出雲族や蝦夷（アイヌ）族の侵入跋扈によつて、大和民族が勢力を失つていったので、瓊々杵尊の子孫である神武天皇が、統治権回復のために東征されたとみるべきではなからうか。かくて神武天皇は、大和民族中心の国家建設に成功されたが、民族融和については、御自身まず出雲族から皇后をいれ、蝦夷族を討伐されたようである。その他は帰順するものをそのままとの地位に置き、手向かうものを討ちながらいわゆる八紘一宇の精神——天が下を一つの家族にしようという精神——のもとに融合が図られた。その後、朝鮮や支那から帰化した者も同化されつつわが国の家族国家が成立したのである。

この大和民族はおのずから優越感を持っていたであらう。神の子孫であるということ、従つて家柄を尊び、家名を重んじ、家名を汚すまいと心がけた。こういう考え方は封建的だといまの人は笑うかも知れないが、この家柄を誇る風はアメリカにもある。私は学生時代に半年ばかりサンフラン

シスコにいたことがあるが、私がいざばらく滞在していた家の主人は、その家がワシントン時代から続いている純粹のアメリカ人であることを大変誇りにしていた。世界の各地から、あらゆる民族がいり込んでいるアメリカでは、純粹のアメリカ人であることはやはり誇りであり、優越感を持っている。いわんや大和民族は、遠い神代の昔から神の子孫として、その血を伝えて来たと信じているため、家を大事にする風習があるのは当然といえよう。そしてこの家は祖先の神様が守って下さっている家であり、祖先の神霊とともにいる家である。そしてこの神様を祀り、拝み、よく仕えて行くのが、子孫の務めであるとされたのである。この風習は仏教が日本に入ってから、変形して続いた。死んだら仏様になり、その家の仏壇に祭られ、拜まれるのは、大和民族の長い伝統の敬神思想と結びついたものでないかと思う。

ところで、その神様を拝み、神様に仕えるに当たって、神様は大変清浄潔白を好まれ、けがれを受け給わぬ。そこで神に仕えるものはもちろん、神に近づき神を拝むものは、身も心も清まらなければならぬ。みそぎをし、祓はらいをするのはそのためである。知らず識らず犯したであろうここだくの罪をはらい、その身も齋戒沐浴ちよくして、身のけがれを落しきよめ、心もともにけがれ、きたなさを去ってすがすがしい潔白の心、清く明あかき心となる。このような清く美しい心になって、はじめて神に仕え、神の心にも通じ得るのである。これが日本人の心である。神州清潔の民の心である。だから、この清潔を愛し欲する心は、すなわちけがれや、きたなさを忌み嫌う心であって、逃げる者を

恥かshめては「きたなし返せ」と呼びかけ、汚名は何としてでもそがねばならぬとされ、同時に心の美しき、態度の立派さ、技の見事さ、などに対しては、それが敵であっても「敵ながらあつぱれ」とほめそやし、感嘆、称賛することを惜しまない。この清さ、美しき、立派さ、見事さを愛する心は、我を忘れてそれに共鳴、感嘆する。これは敵味方を問わず、そういう清く、美しいものとともに愛し、それを伸ばしてゆこうとする心である。これが日本人のすぐれた心である。一例をあげよう。これは「近古史談」に載っている話である。家康の次男秀康が、越前の福井に封ぜられるや、阿閉掃部が武勲家柄すぐれた武士であると聞き、高禄をもってこれを遇した。同藩の世臣狛伊勢がその子の鑑初に、掃部を招待して、その子のために武功談を乞うた。掃部は別にないが、やむなくくれば一つあると、次のような懐旧談をした。

賤ヶ嶽の戦において、兩軍すでに散じ、自分一人馬に乗り余吾の湖に沿うて退却していた。ところが一騎の武士が後から呼びかける。振り返って見るとその武士がいうには「今日は朝から倒したのは雑兵ばかり、まだ好敵手に巡り合っていない。今貴殿の風采をみるに、どうも凡庸の武士ではない。一戦勝負をつけようではないか」と。自分はそれを承諾して馬から下りまさに槍を交じえようとしたところ、その人は「ちょっと待ってほしい、拙者の槍は血塗られている」という。槍先を湖水に突き込んで洗うこと三たび「これでよい。さア一戦交じえよう」といって闘ったのだが、なかなか勝負が決まらない。そのうち日はだんだん暮れてきた。その人いわく「残念ながら槍先が見

えない。この勝負は他日に譲ろうではないか。貴殿の名はなんとおっしゃるか。拙者は青木新兵衛と申す者だが、後日戦場で相まみえることがあったら、この勝負は誓って他人にやらせたくない」といって、彼は馬にムチを当て別れていった。私は若年の頃から、幾たびも戦場に出陣したけれども、こんな落ちついた立派な態度の武士を見たことがない。

ここまで話したとき、青木方斎なる者が、屏風びょうぶのかけから出てきて、掃部ぶいぶに向かい「今そこでお話を聞いていましたが、懐旧の情に耐えず、思わず落涙した。尊公は御記憶か、あの時尊公と槍を合わせたのはこの老人でござる」といふ。掃部手を打って「誠に久し振りでござった。今日会えたのは何という奇縁でござろうか」とあいさつしたのち、杯をくみかわし腰の刀を贈った。そこで青木の名が一時に高くなり、秀康の耳に入り、方斎も掃部と同額の高禄でかかえられたということである。この話で、阿閉掃部が極力賞めたのは敵の態度の立派さであり、その悠々いくさに臨むその心境の美しさである。誠に敵ながらあっぱれと感じた美談である。この立派さ、見事さ、美しさをしみじみと感嘆し、称赞する、そこには敵もなく、我もなく、ただ立派さ、美しさがあるだけである。それが日本人本来の心である。

これも同じく近古史談の最初に載っている話である。佐野の城主天徳寺了伯が、ある時琵琶法師を呼び平家物語を語らせた。法師は佐佐木高綱と那須宗高を語った。了伯は一曲を聞くごとに涙にむせび、すすり泣きした。そして他日家来どもに「先日は平家を聴いてどうだった」と問うた。家

来どもは異口同音に「どちらも赫々たる功名をたてる物語なので誠に楽しうございました。ただどうも腑に落ちないのは、御主君お一人が、涙を流しておられたことでございます」という。これを聞いた了伯は「はてさてお前どもは頼むに足らぬやつばらである。高綱が頼朝公から名馬「生月」をもらったとき、宇治川の先陣となることを心中深く期している。もしそれができなければ生きて帰れない。また宗高にしても、源平の両軍環視のなかで、もしあの扇の的をあて得なかつたら、即座にみずから生命を絶つ覚悟である。その心情を察するときどうして泣かずにおられようか。この二人の悲壮な心をもってみずからの心とするならば、どんな戦でも勝てないことはなく、いかなる手柄でも立て得ないことはない。しかるに何ぞや、お前たちはただ楽しかったというだけで、その悲壮な心事がわからない」と大いに嘆息したというのである。これは深くその人の心事や覚悟を察し、そのいさぎよさ、立派さ、悲壮さに全幅の同情を寄せ、他人のこととも覚え、自分の身になって深く共感しているのである。深い心をもってその深き心を量り、そのいさぎよさ、悲しさに共感の涙を流す。ここに日本人の深く美わしい心がある。これが人間惻和の心である。いたずらに我を立てて相争い、へ理屈を並べ、理論闘争と称して敵視、抗争し、相手を屈服させ、みずからの勝利を喜ぶとものごときは、美しく、清く明き心に共鳴同感する最も人間らしい高潔優美な心を失くしたものであって、偕楽共栄が人類のまさに進むべき道ならば、それに逆行墮落するものである。

現代の日本はマルクスの階級理論にかぶれ、階級闘争に狂奔する傾向が強まっている。そこには相手の人格を認め、相手の立場やその心情に同情すること風潮はみられない。非妥協的な闘争があるだけである。我を立てなければ平和にゆけるものを、平和を欲するといいながら激しい闘争を続けている。古来日本人はその国名「大和」が象徴するように、敵をも包容する民族であり、すがすがしい心の持ち主であった。だが明治、大正、昭和の三代になって、西欧文明、物質文明に血道をあげて、日本人本来の心のあり方を忘れてしまった。八紘一宇というのは、天が下を一家族として、睦^{むつ}び合^あっていこうという世界平和の理想であり、世界家族実現の目標であった。そしてこの世界家族を実現するには、世界の人々をこの日本人本来のこころにならしめるにある。本是神州清潔の民である日本人が、本来の日本人の心を忘れて獣のごとく相争う物質偏重、自己本位の外国人のまねをするのは間違^{まちが}ったことである。科学偏重や唯物主義では到底人類は救われない。

私はすでに動脈硬化し、これからそう長く生きることができない。どうか若い皆さんが、日本人本来の心を取り戻していただきたい。私の言葉は十分意を尽すことはできないが、とにかく気宇を拡大にし、真に世界人類を救うものは日本人本来の心であることを自覚し、この日本人本来の心を主体として、外国文明を摂取してもらいたい。日本人が築きあげた精神的業績は、決して見捨てたものではない。むしろ世界の人々の心を、より高尚に、より美しく、より平和に浄化してゆく至宝たるべきものである。どうかこのことを深く考えていただきたい。

たくまぬ、しかも枯れ切った言葉。そしてその底にすがすがしい情意を秘めた生命的な言葉は、参加者の心を徐々に引きつけていった。講師の話は、長い和歌創作の体験が裏打ちされているからであらうか。だれにもわかる平明な言葉からくる暖かい思いが、豊かに全員の心を包んでいった。

折しも阿蘇町は年に一度の温泉祭、高原の夜空に打ちあげる花火の音が、講師の話をつたひ打ち消し、仕掛花火の煙は講堂の中にまで流れ込むが、みじろぎする人もなく話に聞き入った。講話内容は理論でなく、人身体験に裏づけられた魂の叫びという感じで、それだけに学生諸君に深い感銘を与えたようであった。

次代の日本をになう学生たちに残す「遺言」のような花田講師の言葉に対し「先生だいじょうぶ。あとは私たちにまかせて下さっても安心ですから」というささやきも聞かれて明るい爆笑をさそう一幕もあった。講師は時間もないので質疑を省略する。あとは随意に判断してもらいたい」といって話を打ち切られた。

懇親会（コンパ）

講堂は参加者全員の手助けによって、たちまち懇親会場に変わり、九時すぎから懇親会がはじまる。大観峰登山後、各自の内心に芽ばえた情意のつながりと盛り上がりは、そのままセキを切ったように、懇親会の中に流れていった。広大な自然をステージにした大観峰の合唱に比べ、落着いた講堂を舞台にしたにぎやかな夜の行事である。すこしばかりの酒にピーナツやアラレのささやかな宴であるが、どの顔も一せいにほころび、どこからともなく「乾杯」のかけ声がかかる。杯を手にして見交わす顔と顔、老いも若きもこれまでの苦しみを

た日本民謡コンクールの感がする。



忘れて童心に立ち帰る。余興はま
ず岡山から参加しているグループ
の合唱からはじまる。それに唱和
するコーラスが、力強い歌声とな
って、講堂を庄する。一講師の演
ずる「児島高德」の剣舞が、参加
者の目を楽しませる。熊本グルー
プによる正調「田原坂」、長崎グ
ループの「長崎の鐘」、鹿児島グ
ループの「西郷どん」、山口グルー
プによる萩女台場の雄々しい「築
城歌」など各地域対抗の出しもの
は、祖先から子孫へと歌いつがれ

場面は急転して学生落語、講師陣から木挽きの歌にあわせた「鋸ひき」が飛び出す。ふたたび学生側から寮
歌と踊りのアンサンブル——笑いは笑いを呼び、飛び入りの統出する中に、女性軍による「故郷の歌」のメロ
ディが静かに流れる。「兎追いしかの山、小ブナ釣りしかの川」大の男もうっとりとしてしばし故郷の夢に浸

る。十時半、つきぬ宴になごりを惜しみつつコンパの幕を閉じる。閉会后も、あちこちにたむろして語り合う紅潮した顔、顔。心ゆくまで友情の通い合う世界に身をまかせ、寝もやらず語り合うグループがあちこちにみられる。青春の情熱を燃やしたきょう一日は、阿蘇の噴煙とともに、いつまでも消えることなかれと祈りつつ、各班指導員は本部に集まった。

大展望登山のレクリエーションと夜のコンパとは、参加全員の心をほぐし、軽やかな談笑のゆとりをつくったが、その反面、連続した講義から起こってきた問題点の不消化が、ようやく深刻化したまま、すこしも解きほぐせない状況にあった。心の播らぎと青春の歓喜よろこびに明けくれた一日が終わると、あすのきびしく、ただならぬ波乱が、指導員一人一人の胸に予感せられるのであった。

検 討 会

検討会に集まった講師と指導員の感想はみな同じだった。合宿の成否は、残された二日をいかにもってゆくかにかかっている。学生たちは、日ごろ教壇であまり聞いたことのない講義の連続に、十分かみくだいて理解する余裕もなく、押しつけられるような感じをいだいているようである。それにきょうは、野口講師からきわめて信念的、体験的な講義がなされ、しかもそれが参加者に理解しにくいものだったため、よけいに混乱している。「きのうまでの楽観はきょうで一べんに吹っ飛んだ」と卒直に感想をもらす指導員もいる。

およそこれまでやってきた過去三回の九州合宿は、起承転結の法則通り、次第に高調して最後はひとりでに融け合う形をとってきたが、こんどは一応盛り上がったものの、思わぬ「時代の断層」にぶつかってしまった

ため、合宿の雰囲気は下向線をたどってしまったように感ぜられる。いまや合宿は重大な岐路にさしかかっている。いまこそ、参加者の不安、動揺を解きほごし、参加者全員の精神の統一、意志の確立に努めることが、指導員の任務として要請されているのである。

検討会の席上、ある指導員は

「合宿に横たわる諸問題にもっとメスを入れてみるべきではないか。われわれの合宿はあらゆる階層の人の願いをくみとることができる生活を作り上げようとして発足した。だが、参加者には、そのことが理解されていらない。無理もないことだ。対立と反目と闘争の中にほうりだされているのが、いまの人たちだ。合宿の目的がよくわかってもらえない、というのは、とりもなおさず、いまの時代がどんな欠点をもっているかについての根本的理解に大きなギャップがあるからだ。それをそのままにしては先に進むわけにはいかなのが当然だ。野口先生の今日のお話についても、それがわかりにくかったのはあたりまえにしても、わかるわからないを考えようとしてもしないで、用語だけが気にかかって反ばつしているようだ。とにかくこうした事態が三日目に出現したことについては、合宿プランの順序にも欠点があったかもしれない」と発言した。また別の指導員から

「どの班でも同じようだが、班の中で二、三人だが、自分の殻をつくってかたく閉じこもっている人たちがいる。この人たちに力を入れてみると、他の人たちに十分行き届かない。どうしたらよいか」という相談も出された。それに対して

「そういう人が合宿の雰囲気からはずれ、時には規律を乱していることも認める。とはいっても合宿はあ

と二日しかないのだから、そのような一部のの人にとらわれるよりも、合宿を構成している大多数の人たちのことを考えて、あすの日程をどうするかを検討すべきではないか」という意見が出された。それに呼応するようにある指導員は

「その通りと思う。われわれは精いっぱい努力を重ねてきた。これ以上われわれに何ができるといえるのか。それでもわかってもらえないのは、その人たちの心があまりにも貧しいと断ずるよりほかない。すべてを望むことはいつの場合にもできないことである」

という見解を述べた。しかし最終的には

「はたしてわれわれが精いっぱい誠実と努力を重ねたといえるかどうか」

というきびしい自己批判が検討会の空気を統一していった。だれも異論を唱えるものはなかった。そしてそこにまとめられた結論は次のようなものであった。

「合宿の内容のすべてを理解してもらうことは無理だが合宿の意図しているものだけは理解して帰ってもらおう。」



いろいろの問題が参加者の中に渦巻いて、收拾はむずかしい。だが、われわれが意図したものは何であったかそれが十分説明されていなかったようだ。われわれ自身もそれな心くばることに十分であったとはいえない。そこでおくればせではあるが、もう一度、この問題を取り上げて、わかりやすく参加者全員に訴えようではないか」

この結論から第四日目の運営についてプランの変更と次のような具体策が立てられた。

- (一) あす午前中、班別討論の時間を一時間設け、これまでの講義で累積してきた問題を中心に徹底的究明をはかること。
- (二) あすの講義の日程が夕刻で終了するので、そのあと、今夜の討論会の結論に基づいて、参加者の不安や動揺をなくするために「臨時講義」を行なうこと。すなわちこの「合宿教室」の意図するところを、できるだけわかりやすく話すこと。(この講師には国文研の小田村氏が選ばれた)

(三) 臨時講義のあと、再び班別討論の時間をつくり、全員の理解を高めるよう、教官有志グループ、国文研メンバーが



ともに全力を傾注すること。

(四) その班別討論のあと、全員が参会する全体討論会をもつこと。出来るだけ多くの人から発言を求め全員の意見発表会の形式にもつていきたい。それによって参加者が合宿で気づいた所感や、心の中にわだかまっているものを、ありのままに発表してもらおうようにする。この発表会では一人の発表時間は制限しても、最終時間の制限は保留し、発表したい意見を抑制するようなことは絶対に避けること。

こうしてえんえん四時間、午後十時半から午前二時半におよぶ検討会が終わった。明日のために立てられたこの四つのプランには、検討会に列した二十余名の講師、指導員たちの深い祈りがこめられていた。われわれは、ここに馳せ参じてくれた若い人々に、はたしてその期待に^{こた}えるだけのことをしているのだろうか、という自己疑念も生まれていたからである。とにかく若い人々に対して、万一にも不安と不満のまままでこの合宿を去らしてはならない。それは申訳ないことだ、という強い自責の念が、この検討会を蔽っていた。現実の世相の把握の仕方について、われわれ自身が大いに欠けるところがあった、と知ったからである。新しい出発の決意が列席した全員の面にはつきりとうかがわれていた。

身体の疲れはおおうべくもない。だが、気持だけはピンと張った弦のように、はりつめている。窓の外にすだく虫の音も、ひときわ澄んで聞こえてくるような気がする。みんなすぐに床に入ったが、四日目の朝までに、もう三、四時間しかない。

時代の断層をふみ越えて

(第四日)



合宿も第四日目になると、血走った目をした人たちも出てくる。綿のように疲れた身体は、起床直後とくに苦痛を覚える。神経の消耗はますます肉体を疲れさせる。それでもさわやかな朝の大気を吸いながら、体操をしていると、そこに不思議な力が湧いてくるような気がする。

けさの阿蘇は、黒味がかった薄茶色の噴煙を北の空にたなびかせている。合宿はいよいよ最後の関頭にさしかかっている。えんえん四時間、未明まで続けられた検討会の結論に基づき、講師と指導員の祈りにも似た切実な気持を、参加者全員にあますところなく伝えなければならぬ。きょうこそ成否はどうあろうと、最大限の努力が傾注されねばならない。

午前八時、石村暢五郎講師の経済学に関する講義がはじまる。

（神戸大学卒業後満洲国經濟部官吏を経て福岡大学、高崎経済大学教授を歴任し、現在アジア大学教授、財政学、経済政策専攻）

マルクス経済学の生成と近代経済学

亜細亜大学教授 石村 暢 五 郎

若き日のマルクス

カール・マルクスに対するわが国での評価は、マルクスを信奉する人も、そうでない人も、ほとんど彼が無神論者であり、唯物論者だというのが通り相場である。しかし私は、最近マルクスの生い立ちを書いた伝記を読み、このような見方は誤りではないか、彼はむしろ一つの宗教家の立場で「資本論」を書いたのではないか、という新しい解釈も成り立つように思う。

彼は一八一八年五月五日、モーゼル河のほとりのトリエルという町でうぶ声をあげた。マルクス家は百五十年間ユダヤ教の律法学士（ラビ）の家柄である。ラビというのは、イスラエルの精神的な王侯みたいなもので、宗教的な中心の人物であった。彼の父は常に子供のことに気をつかい、子供たちが無神論の罪を侵さぬよう戒める反面、将来ラビの仕事を継がせるため、絶えず具象的なものに興味を抱かせるよう理科教育などにも心を配っていた。ところがマルクスは、いっこうに理科とか物理化学には興味を示さず、むしろ文学青年のような方向に走っていった。彼は詩を愛し、や

がて詩で世界を征服したいと考えるようになった。

彼の姉ゾフィーの学校友達にイェンニーという美人がいた。彼女の父ルドヴィヒ・フォン・ウエストフアーレンは、時の王家の枢密顧問官であった。マルクスはよく姉と一緒に遊びに行っているうちに、年上のイェンニーと非常な恋仲になる。ボン大学からベルリン大学に学ぶため、いよいよ別れねばならぬという日など、夜が白々と明けそめるまで、二人は将来を語りあったということである。それから七年間婚約時代を続け、やっと二十九歳になって結婚する。しかも終生このイェンニーと連れ添っている。よく共産主義者たちは、共産主義とは、終局的には家族が破壊されなければならぬというように考えるようだが、マルクスの私生活は極めて家族的であったことを思いめぐらすべきである。彼は実際に家庭こそ無上安楽の場所であるといっていた。ベルリン大学に学んだ彼は、非常な希望をもって次々に哲学の本を読んでいた。当時大学ではヘーゲル死後もヘーゲル哲学があたりかたまり絶対のものであるかのように講義されていた。このことについて彼はかなり強い反発を覚えていたが、ヘーゲルを知り尽くそうとして猛烈に勉強した。彼はヘーゲルのものとヘーゲル派の哲学の本はほとんど読破していた。しかし必ずしもその主張に賛成ではなかったようだ。「法の哲学」「形而上学の新体系」などは、読後ストーブにくべて燃やしてしまった。彼がよく頭休めにゆく近所のコーヒー店で、いろんな友だちが新しくできた。青年牧師で大学の講師のブルーノー・パウアー、ベルリンの高等学校の教師カール・フリードリッヒ・ケッペン、元士官学校講

師のルーテンベルク、哲学雑誌を発行しているルーゲ、それらの人々との間で常にヘーゲル哲学が論争された。彼はヘーゲルの「人類は全能のきわめて理性的な絶体理念によって不可抗的に推進される。上昇の経路は一定不変で、予定されたジグザグコースを進む」という考え方に対して非常に感服していたが、何か満たされないものがあることを発見していた。神の意志とは何か、世界精神とか、絶対理念とかいうものは何であるかなどについて深い思索をこらした。そのころ彼は天体の運動法則とともに①歴史の運動法則はないかを考えた。それと同時に②ヘーゲル哲学には神とか宗教という言葉が多過ぎる。結局神とか絶対精神とかいいつつ、本当の神の姿を観念化していると思うようになった。ある日は彼はコーヒー店で「ヘーゲルすら無神論である」と叫ぶに至った。

人間マルクスと唯物弁証法の発見

一、彼は青年時代より生涯を通じて人間味の豊かな人であったように思われる。のちには権力に反抗するが、根は純情の青年であって、詩を愛し、ロマンチックで、イェンニーと結婚して一生連れ添ったこと、しかも子供が死ぬば墓にも参るし、ともに悲しむ家族主義者であった。そして家族と楽しむ夕食のさいの一はいのビールに無上の喜びを感じていた。

二、彼はユダヤ人としての血が流れていたため、神より選ばれた民としての自覚に満ちていた。またユダヤ教以外の宗教、とくにキリスト教に対しては強い否定の立場をとっていた。つまり彼の

無神論は、実はキリスト教に対する否定にほかならなかった。

三、哲学の分野ではヘーゲルに尊敬を払いつつも、何とかヘーゲルを越えたいという意欲に燃えていた。ヘーゲルすら無神論だといわしめたのは、ヘーゲルが絶対精神とか、神とかいいつつ、実は神を抽象的、観念的ならえ方をしていることに気づき、むしろ神そのものが、この自然界を支配している、という強い神への渴望を一挙に現わそうとしたのである。彼の思想の根底には、旧約聖書の中の過去において失ったエデンの花園、すなわち黄金時代の復活を夢み、千年王国の信仰を強く抱き続けていたわけである。「資本論」にみられるように、彼は原始共産主義社会によって失われた楽園が、プロレタリアによる私有財産の解消によって再び回復せられると考えていた。フランスのウィリアム・ピゴーも最近「マルクスの全思想体系は、偉大なる人類救済のヒューマニズムである」と評している。いわば、無神論という一つの宗教、いや自分自身がより宗教を理解しており、少なくともヘーゲルのような説明は誤りであると考えていたようである。

彼は、ベルリン大学を卒業したのち、ライン新聞の発行に当たることになったが、このころから「神の廃止」（キリスト教神の廃止）とともに「貧困の廃止」が問題となっていた。そのうち独仏年誌をバリーから出すに至り、①社会主義の到来は不可避であること②革命がなければ社会主義は到来しないという二つのジレンマに悩まされ続けている。しかし彼はとうとう両方とも捨てることはできなかつた。当時チャーチスト運動という武装暴動の運動が起こったことに対して、彼は多分に

同情的であったようだ。彼はやがて社会主義をもって専門分野にしようと考えるに至った。彼はここで①フランス革命の新しい歴史を研究し②社会主義の不可避性の証拠を探すこと、いわば科学的社会主義の理論づけに没頭し③またスミス、リカード、セイの主要作品を読み、経済学を勉強した。

ある日エンゲルスが「君が集めた材料を早く世間に出したまえ」といったのに対して、マルクスはその理論なら二、三カ月後に完成すると心にもないことをいってしまった。エンゲルスは実業家である地位を利用して、早速出版社と契約し、千五百フランの前渡金を彼に渡した。当時マルクスは生活のためにもぜひ金が欲しかったので、金は貰ったがまだ理論はできていなかった。彼はそれから毎日図書館通いを続け、ついに唯物弁証法の理論を発見した。彼は早速家に帰って妻のイエニーに素晴らしい理論を発見したことを告げた。そして「経済状態は一つの原因ではなく、原因そのものであって、生産力Ⅱ経済こそ世界を動かすものである。あらゆる政治、思想、倫理、道徳もみんな物質的な経済によって動かされている。しかもそれがヘーゲルの弁証法を転倒して説明できる」と一気にしゃべった時、彼女は奇妙な顔をして「私が貴方と結婚したのはどんな経済的理由からでしょうか」と尋ねた。彼女は実際に結婚前の方がはるかに経済的に恵まれた生活をしていただけであった。彼女は夫を愛し、精神的な生きがいを感じていたからにはかならなかった。二人はしばらく論争を続けたが、イエニーはハッと悟ったかのようにこういった。「私はあなたの哲学と結婚したわけではありません。あなたの仕事にケチをつけるために結婚したのでもありません。貴方

そのものと結婚したのです」彼女はそれから論争には加わろうとしなかったのである。

マルクスによって否定された「資本論」

ある日エンゲルスは、マルクスに、先進国イギリスに渡り、彼の理論を労働者に話してみることをすすめた。二人は早速渡英し、現地の労働者と会見した。ところが、驚いたことには、彼らは宗教と法秩序の尊重が重要な問題であるといい、政策面では「穀物条例」の廃止が最大関心事であった。マルクスは例の生産力と生産関係の理論から、資本主義の必然的な崩壊の理論を説いたが、彼らは首を振って、英国は理論で片づく国ではなく、より実的な国だといって耳を傾けようとはしなかった。マルクスとエンゲルスは、この現実のギャップをどう埋めるか悶々とした気持ちで帰国したが、この旅行はマルクスにとって、非常に大きな心の転機になったようであった。しかも実際彼が死ぬまで、資本主義は崩壊の兆候すら見せないばかりか、労働者の生活は年々向上し、賃金の上昇が行なわれるに至った。

彼は「資本論」第一巻、第二巻、第三巻と書くにつれて、体系は膨大になったが、よく考えて見ると、第一巻の価値論と第三巻の価値論とに矛盾があることに気がついた。そしてとうとうその解決がつかなかったとされている。

このことは、彼の晩年の作「ゴータ綱領批判」で、さらにははっきりと示されている。マルクスは

「資本論」では資本家は何もしないで剰余価値を受け取っているに過ぎないといったが「ゴータ綱領批判」では「共産主義社会でも労働者は生産物の全部を自分の収入として受け取る事ができるか」と必ずしもそうではない。やはり社会主義社会でも分配される前に源泉で徴収されるものが五つほどある。①減価償却②資本の増加部分③天災地変の予備費④公共の需要、教育行政費⑤働けない人を扶養する費用などである。剰余価値は他人の不払い労働の塊りだと資本主義を中傷したが、社会主義社会でも剰余価値は必要である」といつている。要するに、資本を誰が所有して管理するのがいいかの問題だと、晩年にはいうようになったのである。

以上のようにマルクスはその理論の究極するころ、ついには自分自身の書いた「資本論」そのものを否定する立場に立つに至った、と解釈しなければならぬと思う。彼は一八六七年資本論第一巻を出版した。二巻、三巻、剰余価値学説の草稿は、すでに一八六四年、六五年ごろにでき上っていたが、二巻以後は自分の引き出しの中に仕舞い込んで、ついに死ぬまで公刊を見合わせている。

それは前述したように、学問的な意味における価値論の未解決とともに、資本論の予見と全く違った経済状態が、次々とヨーロッパ諸国に現われてきたからと解することができるのではないかと思う。いま日本では模倣性の強いマルクス学者が「資本論」を大学で講義している。自分の生活のためといえはそれまでだが、「資本論」そのものは、マルクスによってすでに生前否定されたものであるということを知っている人が、はたして何人いるであろうか。

唯物弁証法への疑問点

マルクスは生前自分の経済学は否定していたが、哲学は否定してはいなかったようである。しかしマルクスの唯物弁証法には、やはりいろいろの意味において疑問が存在している。大体これを要約すると

一、マルクスの経済学は、理論の結果として資本主義社会の崩壊、社会主義社会の到来を結論づけたのではなく、はじめに社会主義の到来を仮想してあとから理屈をつけたということ。このような方法論がはたして許されるか、これが第一の問題である。

二、マルクスは唯物弁証法といいながら、実は史的発展を最初の原始共同体、出発点に復帰させようとする。

三、弁証法は無際限に続かねばならぬにもかかわらず、私有財産の廃止によって社会主義が到来すれば、もはや矛盾は無くなるという。これは一体どういうことであろうか。

四、資本家と労働者の両方が、同時にアウフヘーベン（止揚）されねばならぬにもかかわらず、プロレタリアのみの独裁になるということへの疑問。

五、生産力という物質的、経済的なものの発展の歴史が中心になることへの疑問。

六、弁証法は因果の理論であるが、東洋哲学とくに仏教哲学によると因果の理論が展開せられ

ている。この面より考察して哲学の問題にも根本的な問題が残されている。

従来弁証法の理論では、その社会に矛盾があれば必ず崩壊して次の新しい社会に移り変わるといわれているが、この考え方は根本的に誤りと思う。「矛盾という因があっただけでは果にはならない。因が何らかの縁と結びつかねば果とならない」と、説くのが東洋哲学の骨子である。仏教の神髄である法華経方便品第二に十如是というのがあるが、その中に如是因・如是縁・如是果というところが書かれている。

たとえば搾取機構であれば、それが必ず崩壊して、次の新しい社会になってゆくとはいえない。なんとすれば、蜂の世界を考へてもわかるように、女王蜂はものすごい搾取の権化であるが、まだ働き蜂の攻撃を受けて殺されたという話を聞いたことがない。そこには、完全な秩序が保たれている。要するに働き蜂たちは、自分らは女王蜂からコキ使われているという自覚がないからである。

だから資本主義社会がいかに搾取機構だといっても、搾取されているかどうかは判定がむずかしいが、労働者が搾取されていると強烈に意識すればこそ、そこに資本主義社会の破壊運動が起ころのである。逆に労使ともに自覚して互譲の精神で、日本の繁栄のために立ち上るならば、これはまた立派な制度であるといわねばならない。しかし現状は労働者が団結して賃上げ要求をする。経営者側もビタ一文出さないとすれば、やはり争議は長期化し、日本経済は破壊されるわけである。因がいつでも同じ果に必然的になるのではなく、縁の結びつきようで、どのようにもなる。いま世界の

哲学、経済学の考え方はまさに転倒していると思う。（詳細は拙著「日本経済の方向」国文研叢書第一号

参照）

七、資本主義社会は富の不平等、所得の不平等だからといって、きたるべき社会主義社会は平等の社会になると考えることは、ちょっと考えるとよいようだが、事實はそうではない。

近代経済学は最適条件をねらう

元来生産を増強するためには、全くの平等では働く人はない。他人との間になんらかの差別があればこそ働こうとする。人間はやはり差別を求めるものだが、だからといって差別があまり激しくなれば生産は衰える。ここに平等か差別かではなく、問題はまさにその中庸というか、もっとも適当なところに求めなければならない。近代経済学は、いわばこのような最適条件の発見をその使命としている。今日厚生経済学というのは実はこのことをねらっている。このことは資本蓄積か分配かという問題とも考えることができる。分配問題を強調し、賃金要求を必要以上に叫べば、あすの資本蓄積を阻害する。社会保障も、現在の日本経済においてはおのずから限度がある。さらに産業構造からいえば、大工業と中小企業、独占と下請け工場との関係もまさに同じ問題で、最適の条件を見出してゆかねばならない。日本経済はやはり対外競争力に打ち勝つために、またコストの低下を図るためには、ぜひとも企業の大規模化は必要だが、そうかといって中小企業の犠牲の上に立て

られてはならない。下請けの状態もその間において搾取抑圧があつてはならないわけである。

次に日本経済が現在直面している経済情勢を端的にいえば、それは雇用と入超のジレンマといふことができる。日本経済の底の浅さもまた、このような国際収支の入超、外貨の不足というような形で現われているわけで、これをなんとか打開しなければ日本経済の進展はない。

戦後すでに十四年を経過したが、西ドイツは今日隆々と繁栄している。日本も成長率という点からいえば、あるいは世界の列強にひけをとらぬものがあるといわれている。けれども、実際の輸出力は西独に比べると問題にならない。しかもこれまで二年半ごとに、デフレ政策をやらねばならぬというへまなことをやっている。こういうデフレ政策のようなものは西ドイツにはなかった。そしてそのデフレ政策のたびごとに民間産業は無用の出血を余儀なくされている。

参加者の中に興国人絹パルプの方々もおられるが、日本の人絹パルプ界の問題は、すでに合成繊維の生産が、かなり拡大しているにもかかわらず、いぜんとして綿や羊毛をどんどん輸入し、綿紡績や羊毛加工をやっているため、勢い過剰生産をきたしている点にある。これが結果的に首切りとして現われているわけで、このように技術革新に対する対策が皆無である。私は今日の日本の経済政策は貧困の一言に尽きると思う。その具体的な積極的な意見については「経済往来」に昨年四月から五回にわたって述べているのでご覧になっていただきたい。

今日日本の資本主義が悪いからこのような貧困を来たしたのであると思つている人があるが、そ

うではなく、第一は日本の資源、とくにエネルギー資源の枯渇が根本である。第二はそれに対して適確な政策が立てられていないのではないかと思う。

今日このようなことを念頭において、学園において勉強に励んでおられるみなさんも、もっとわが国経済を研究されて、日本の発展のため努力していただきたい。マルクス経済学だけを勉強するのではなく、マルクスも近代経済学も、その根源にさかのぼり、さらにその応用面に向かって常に研究的態度でのぞまれることを期待してやまない。

参考文献Ⅱ「経済政策入門」評論社昭和34年刊「経済往来」33年4月、8月号、34年2月、6月、10月号参照
「日本経済の方向」国文研叢書第一号

問い 労働者の賃金を上げればインフレが起こるといいますが、購買力は現在たいして変わらないから、インフレにはならないと思う。

答え 賃金が上がればやはり購買力は上がる。しかし、賃金のアップによって、購買力が上昇したからといって、常にインフレになるとはいつていない。インフレになることもあり得るといったのである。

マルクスや総評などの考え方によると、賃金が上がっても、ただ利潤が減るだけであるから、商品の価格は上がらない。だからインフレにならないと考えている。なぜそう考えるかという点、平均利潤率の考え方が根底にあるからだ。競争経済を前提とした場合には、あるいはそれでよいかもわからない。しかしマルクス

自身、資本主義社会は、だんだんと独占資本主義に移行するといっているのだから、独占商品が多くなればなるほど独占価格が形成せられ、賃金の上昇部分は利潤が減るのではなく、これを販売価格にプラスすることによって、商品価格を引上げることが考えられるわけである。だからマルクスの理論は、賃金の上昇がインフレになるということを内包していると私はみている。この点マルクスの理論は矛盾していると思う。

また今日所得を倍増したとすれば、当座は品物があまっているので、購買力がふえてもインフレにはならないかもしれない。しかし品物が無くなってくれば、やがて輸入する。輸入超過は外貨不足を招来する。これが日本経済の悪循環をもたらし。しかも悪いことに、一度賃金倍増とか減税政策を行なうと、次の期に品物がなくなつたとき賃金を抑圧することができない。賃金と物価の関係はこのように考えるべきだと思う。

問い 重点産業の育成を強調されたが、それは独占資本の育成になりはしないか、そうなると日本経済の二重構造は、いよいよ溝が深くなるのではないか。

答え 私は講義の中でも触れたが、大規模経営は優秀な商品を作り得るし、コスト・ダウンも可能となる。また海外市場において外国商品と競争しても負けない。しかも日本経済においては、最も開発の不足しているエネルギー資源や、重要産業はことごとく大規模工業化の必要性を持っている。しかるに今日一部の人はこれらの開発も独占化への傾向として排撃する。問題はそれらの企業が、ある一部の人々によって独占せられる場合を非難しているのであつて——それらの人々も実は一方では国営産業をいつているくらいだから、決して大規模化を反対しているのではない。だから日本経済としては、ある一部の人々だけによって、独占

せられることのないような組織がある程度とらなければならぬ。幸い今日は証券民主化の時代となり、形は大規模化でも、株式は多く大衆に分散所有されており、労働者、サラリーマンも資本家となっている。この傾向はさらに今後進められてゆくものと考えらる。

二重構造が起こるのは、人口過剰と資金の不足が最大の原因である。中小企業は小資本で経営でき、手つとり早いために、多くの中小企業の存立がわが国企業の特徴となっている。ここに大きな構造的問題をはらんでいる。大規模化は必要であるが、中小企業の問題もまたゆるがせにできない。このことを日本では二重構造の問題と呼んでいる。この解決策については、大規模工業と中小企業は、それぞれ産業の分担上任務があるのだから、互いに競争するのではなく、互いに補足し合うような形にもってゆかねばならない。下請けも搾取されるのではなく、ともに助け合い、競争できる体制に進まなければならない。またいま一つの重大な問題は、日本の輸出産業面における資本財輸出のパーセンテージが非常に少ないことである。西ドイツは資本財七に対して消費財輸出三だが、日本は資本と消費財の輸出の割合が五対五となっている。私は今後ますます資本財産業の発展に留意しなければならないと思う。

問い マルクス学者によれば、機械化が進めば失業がふえるというが、それは正しいか。またオートメーションが進んでも失業を抑える方法はないか。

答え マルクスは、失業の原因を不変資本がふえれば、可変資本は相対的に減って失業が出るというが、この考え方はおかしい。資本家は利潤があっても、不況の場合には品物が売れないのだから機械化はしない。む

しる利潤は貯蓄に向けられる。マルクスは、資本主義がだんだんと恐慌に向かってゆくというのだから、この点矛盾している。この点についてケインズは、有効需要の原理で説明し、遊休貯蓄がむしろ失業を生むのだといっている。しかし日本の失業は、マルクスやケインズのいう失業とはまた違ったものをもっている。それはマルクスのいう絶対的過剰人口によるものである。今日日本の社会政策学会あたりでは、日本の失業をいまだにマルクスの相対的過剰人口だといっているが、日本では機械化によって失業するという分野はかなり少なく、あっても一時的現象に過ぎないようである。もう一つ日本における失業の原因は、資源の貧困化による場合、あるいは労働組合自身が、自分自身によって失業を生み出している場合もある。

次にはオートメーションの問題だが、日本ではオートメによって失業が起こる心配より、資金がないためオートメできず困る問題の方が多い。このため対外競争力が弱化している。しかし日本は労働者が多いのだから、ただ労働節約的な機械化はやはりできるだけ避けて、資源開発的な機械を採用しなければならない。だから日本の特許政策などもこの点を考慮に入れなければならない。

問い デフレ政策は失敗であったといわれたが、ドッジ政策いらいデフレ政策は正しかったのではないか。
答え ドッジ政策が均衡財政を確立し、金融引き締めをやったからインフレが止った、と考えている人が多いが、実は小麦粉を大量に入れたためにインフレはとまっている。だから二十八年以降見返り資金がストップして、基幹産業へ資金が流れなくなってしまうあとでも、均衡財政、金融引き締めさえやれば経済はうまく運行してゆくという考え方は、根本的に誤っているといわなければならない。ドッジ政策のいま一つの意

味は、基礎業の培養にあった。二十八年十月以降のデフレ政策が、金融引き締めをするのにあまりに急であつたため、石炭産業をはじめ基幹産業は抑圧される羽目となり、コスト高を形成し、一方では国内炭価の上昇、構造インフレを誘発するとともに、他方では国内における原料品のコストが高いため、輸入をふやさなければならぬ。輸入がふえるから外貨不足となる。結局デフレ政策をやつたことが、やがて次の期の外貨不足をきたしている。これがまた三十一年にもデフレ政策をやらなければならなかつた根本原因ではないかと思う。しかもデフレ政策によつて、基幹産業面の抑圧があつた間、消費財産業の方は、賃金が八%の上昇率を示したため、デフレ下といえども繁榮している。その一つの原因は、デフレ政策すなわち高金利だから株式も高配当をしなければならぬ。労働者も株主に高配当をすくらないならば、われわれにもよこせと要求する。これを抑えることができない。しかも悪いことには、金融機関はもうかるところに投資するので、消費財産業面への資金の流入はとくに顕著であつた。西ドイツは全くこのような考え方と反対の方向をとつている。配当制限令を制定し資本蓄積のためのあらゆる手を打っている。これらのことについては「経済往来」の私の所論を参考にしていただきたい。

問い、イギリスでは基幹産業の国有化が失敗したが、日本のような資源の乏しい国ではやつていいではないか。
答え、私は新産業の国有化には反対しない。たとえば原子力発電のような場合は、国有化というより公共投資である。国有化は管理面で官吏が非能率的であるので、この点を考慮に入れねばならない。やがて利潤採算に乗れば払い下げることが必要だと思ふ。しかし逆に炭坑などが、利潤採算を割つた場合どうするかは、非

常に難しい問題だ。これは国有化ではなく、能率化のため財政投融资による公社か半官半民の形において、優秀なる経営者を事業の経営に当たらせることなどが必要だと思う。

石村講師の講義は、マルクスと近代経済学に関するものだけに、学生の関心は深く、質疑も活発であった。質問時間が足りなかつたので、夕食後の自由時間に、希望者に対して補足説明と質疑応答を行なうことになつた。

次いで水野講師の講義に移つた。

(五高、東大農学部、法学部、経済学部卒、東大助教、東京高等農林学校教授、現在熊本大学教授、農学博士)

畏いと敬と恥

熊本大学教授・農学博士 水野武夫

この間東京からの帰途、汽車の中で多くの大学生に接することができた。私は現代の大学生の最大の希望は何かを聞いてみた。すると、どの大学生もみないい会社に就職することだという。それでは希望した会社に勤めてからどうするかと聞くと、その先は考えていないという。最高学府に学ぶ現代の青年の大多数は、人に雇われて三等職員になることを唯一の希望にしているようだ。そこで女子学生はどうか、とその点を女子大の先生にただしてみると、やはり三等職員の奥さんになることであった。現代の日本を背負う青年学生のほとんどが、これという野望も持たず、三等職員を夢みているとするなら、涙がでるほど気の毒であり、哀れである。従って私は専門の農業経済をやるつもりであったが、きょうはあえてこのような演題を掲げることにした。

まず戦前の日本人は、どのような考えを持っていたか、明治初年の日本は、封建制度からの脱却と新制度の形成について真剣に悩んだが、五カ条の御誓文によって日本のバックボーンとなる基本方針が確立された。いまみなさんに配ってある五カ条の御誓文は、どの一カ条をとってみても、そ

れは大らかな明治日本のデモクラシーであり、高らかな文化創造の宣言であった。こういう宣言が明治元年三月十四日に早くも打ち出された。現在日本では戦後十数年になってもまだこれに匹敵するようなものが明らかにされていない。日本はこれによって多少の曲折はあったが、次第に大きくまとまっていった。つづいて教育の基本となる教育勅語が制定され、国民のひとしく守るべき実践的な倫理が明確にされた。教育勅語の表現は現代的でない所もあるが、今日の別の言葉に置き替えて読めば、すべてうなずけることばかりである。「一旦たんだん緩急あれば」という言葉が問題にされたこともあるが、いかなる国家でも、すべての人が一つ心になって、危急にはせ參ずる気持をもっておれば、その国家が興隆、発展することは、古今東西の歴史の明示するところである。いずれにしても明治、大正、昭和を通ずる戦前の時代は、天皇を中心としての国作りにはバックボーンがあり、青年は何のために日本に生まれてきたかを本質的に考えていた。さらに「乃たひ公出こうしゅつでずんば」の熱意に燃え、日本をどうしても世界の一流国にしなければやまないという希望と夢があった。これが政治経済、文化に反映し、あらゆる方面への日本的創造が行なわれた。だから、たちまちにして世界の「ビッグ・ファイブ」となり、その経済社会文化の発展ぶりは、世界の驚異ともなった。もちろんこのような動きの中には、行き過ぎやうぬぼれなどもあり、指導者の誤った指導もあって、今次大戦を引き起こしてしまったのである。だがこれらのことも、現在日本がおかれている人口、食糧、経済問題の深刻さ、さらに世界の外交、経済その他の諸状勢からすれば、その是非善悪を簡単に批

判することはできぬものがあると思う。

では戦争はなぜ起こったか。この問題を解明するために戦後官民一致による「戦争問題調査会」ができ、これを取りあげたことがある。その研究によれば、戦争は起こるべくして起こった、必然的なものであるという結論になる。この事実をソ連は察知して途中で中止させたが、この課題は今日もそのまま残されている。当時の興隆する日本の勢力を、諸外国なみに発展させようとするれば、生産商品の市場確保は当然のことであった。さらに国内的に不足する食糧の補給、資源の確保などの問題も考えざるを得なかった。その結果、世界の大国に伍して軍備拡充策がとられた。日清、日露、第一次大戦と続くあまりにも順調な経過は、自己過信を生み、諸外国のねたみと圧迫（ABC D包囲陣など）を受ける羽目になった。日本は敢然これに抗して、ついに戦争という非常手段に訴えたのであった。当時の日本民族の興隆しつつある勢力を、戦争以外の手段で拡充するとすれば、どのような方法があったか。このことについて深く掘り下げて明らかにしたものはない。

それはともかく敗戦によって経済、社会機構の破壊が行なわれ、一時貧窮のどん底に落ち込んだ日本は、経済的には今日みるような姿となって再興した。しかし目に見えない精神的破壊はあまりにもひどく、二千数百年来の精神的蓄積をすっかり失ってしまった。宗教心の喪失、道徳の退廃、気力の亡失は、三等職員になる希望しかなくなり、日本民族をどのような方向に持ってゆくかということさえも、わからなくしてしまっている。経済の発展は、資本の蓄積が大きければ大きいほど

その力は増大するように、日本民族の精神的蓄積が大きければ、それだけ世界に占める地歩は大きくなる。みなさん方の若々しいインテリゼンスと、長い間の民族の精神的蓄積をどう結びつけるかこれが分岐点に立つ現代日本の課題ではないか。私はこのことに関連して本題にふれてゆきたい。

「畏」とは神を畏れて努力するということである。日本民族は、かつて生活の中に神を見出し、神に近づき、神とともに生活した。四方拝、祈年祭、新嘗祭（にいなめ）、地鎮祭、えびす祭、大国祭等、数えあげれば際限がない。さらに日本は「神国」ともいった。それはいつごろからであろうか、信仰の精神的要素をなくして形式的信仰さえも失ってしまった。これに反してマッカーサーが、ミズリー艦上で最初にいった言葉は「平和の到来を神に祈ろう」ということであつた。このように民主主義合理主義といわれる西欧には、生活の中に神が生きていて、皆さんと同じ大学生も、日曜日には敬虔（けいけん）な態度で教会にいつて神にぬかずき、礼拝する。神はあるとかないとかいうことではなく、人生への真剣さ、まじめさが、自ら神を発見させるのである。それは心理学的事実である。

次に「敬」とは、他人を尊重し、敬うという態度である。民主主義といい、人権擁護といつても根底にこの思想がなくては社会生活の円滑な展開を期待することはできない。個人主義とは社会の中に生きるべき自己の発見ということであつて、自分さえよければよいとして勝手気ままにエゴイズムに満足することではない。正しい思想とは、自分の考えは絶対に真理であると一人決めて、それを貫くためには、いかなる闘争も辞さないということではないはずである。

さらに動物のように、無節操な行動をしてはばからぬ態度に対し、根本的な反省を促したい。端的にいえば「恥」を知って行動せよということである。「封建道徳」の中には「借金を返さなかつたならば、大衆の面前でお笑い下されたく候」という証文があったし「切腹しても約束を守る」ということがあった。この自分の責任を果たすという厳肅な生活の心情は、封建社会のもので、特定の武家階級のものでない。それは真剣な態度をもって生きる人間のものである。私はこの真剣さの千分の一でも、現代に取り戻してもらいたいと思う。

思えばわれわれの祖先は、多くの美德を生み、立派な生活を築いてきた。このような美德は、意志さえすれば現代に再現できるのである。私がこのようなことを次々と訴えると、みなさんは時代に逆行するものと思われるかもしれない。しかしながらガケに落ちかかった自動車に、もしバックギヤがなければ、そのまま落ちてしまう。節度ある逆行は前進のための最大の条件である。前進、暴走しか知らないインシン武者は、必ず自らの墓穴を掘るであろう。

いろいろ申し上げたが、結局「やろうという気」がなければ、何もできないことを最後に強調したい。日本人のよくいう「気」には、自然現象・経済社会現象・日常の現象などを表わすものが非常に多い。「強気」「弱気」「気が合わない」「気にやむ」「気をつける」「やる気がある」というように、人間活動のプロモーターをなしているのは「気」である。日本が米英をはじめとする列強を相手にして四年間戦った奇蹟は、日本を何とかしなければという「気」が凝り固まってなし得たこ

とであつた。しかるに八月十五日の終戦のご放送を聞いて以来、日本を何とかしようという「氣」が抜けてしまつて、氣の抜けたビールやサイダーのように、味気ない日本人となつてゐるのが現状ではないか。畏も敬も恥も眞の日本人となろうという「氣」がなければ中味は充実しない。日本を今後発展させることができるかどうか、一切は日本人のやろうという「氣」にかかっていると確信する。

日本はかつて戦争という非常手段でこの氣を発現させたが、今後は平和手段で世界一になる努力をしなくてはならない。そのためには、日本が戦争という非常手段までとらねばならなかつた。農地不足による人口・食糧問題の解決、工業資源、商品市場の不足等を解決するために、ボルネオ、セレベスやニューギニアなど、東南アジアの土地をかうことを私は提唱している。すなわち武力でなくわれわれの働いた金で、ボルネオやセレベスの土地の一部を購入して、そこに第二の日本を作ろうではないかということである。アラスカやハワイをアメリカが買った例もある。また現に日本も海外移住会社などが、ブラジルやアルゼンチンの土地を購入して、移住者を迎へてゐるではないか。今後増大する日本の人口、食糧、経済などの諸問題を考へるとき、これがそれらを解決する一つの道だと思ふ。そしていま日本は、東西の谷間に生きることを余儀なくされ、原水爆、ミサイルの危険におののいている。民族分散のためにも、また海外に日本文化の花を咲かすためにも、このような移住策をとる「氣」を持つてゐないか。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」。三等職員にな

ることを考えるより、気宇を大きく持って、日本民族発展の策をみなさんもとくと考えていただきたい。

問い 五カ条の御誓文は、先生のいわれるように、デモクラシーの手本であるにしても、これを窒息させてしまったものは何か。

答え 一口にいえば、この精神を本当に進めてゆこうとする氣を失ったからではないか。デモクラシー、ヒューマニズム、マルキシズムという外来思想を日本の土壌の中に伸ばしてゆくことを考えず、せっかく芽生えはじめたものを権力で弾圧してしまった。すなわち日本の貧困をカバーする手段として軍備を考え、それが軍部の異常な台頭となって、日本を内面的に支える文化威力を失うようになった。この教訓はいまの日本にそのまま生かさねばならない。この合宿にはそれにこたえるなにもがあると思う。

水野講師の平明な言葉、時々交じえるユーモアは、参加者の心をやわらげたようであった。とくに東南アジアの土地購入の話は、参加者の目を海外に向けさせるとともに、戦争によらないで国力を伸張する方途——民族の夢と希望を暗示した感じであった。

班別討論

この講義のあと班別討論が一時間が行なわれた。この討論のさい各班で出されたものは、合宿開始らしい次々になされた講義が、なんとなく復古的なように受けとれることに關する疑惑であった。それは参加者の胸にくすぶり続けてきた問題でもあった。また前進しようとする青年、学生は、古いものに引き込まれるような気がすること自体に、生命的反発を感じたからでもあった。「この心のシコリを解消しない限り前進できない」と深刻に告白するものが続出してきた。その前進とは、講師や指導員についていくという意味である。

各班で出された問題はいろいろあったが、総じて天皇をどう把握するか、国家とは何か、平和と戦争とはどういふ關係で理解すべきか、民主主義の範圍はどうかなどであつて、いわば人生觀、世界觀に觸れる問題点ばかりになつてきた。だが、参加者は一応聞いておこうという態度はとるものの、そのなかに一歩足を踏み入れようという意気込みは感じられない。たとえ觀念としては理解できても、それを自分のものとしてじかに受けとられない。この合宿の前に横たわつた壁をどう突き破つたらいのだからか。参加者と主催者側の越え難い精神的なミゾをどうしたら埋めることができるだろうか。

午後一時半、中山優講師の講義に入る。

(上海東亜同文書院卒業後、朝日新聞記者、外務省嘱託、新京建国大学教授を経て、満洲国公使として南京に駐在、現在アジア大学教授)

第二次大戦論

亜細亜大学教授

中山 優

第二次大戦の定義

第二次世界大戦は、ドイツ、イタリアおよび日本の枢軸三国と、米英仏ソ、支那、オランダその他の世界の諸国を含めた連合軍との間に、戦われた総力戦である。一九三五年ヨーロッパでは、ドイツのポーランド侵入とともに開戦となった。しかし東洋において日本は、しばらく支那一国を相手にするにとどまっていた。政府は正式の宣戦布告を避け、支那事変の名のもとに一九三七年七月、北京城外の蘆溝橋ろこうきょうにおける日支両軍の小衝突から発展した事実上の戦争を、不拡大の方針をもって取捨することに苦慮していた。だが戦争は勢である。日本の不拡大の意志に反して、戦場は支那大陸の奥地まで進展していった。四川省の重慶に退避し、頑強に抵抗する蔣介石政権しょうせつせいけんに対するアメリカの公然たる援助、ビルマからのいわゆる「援蔣ルート」による物資補給を遮断しやくたんするため、日本は当時仏領であったインドシナ、すなわち現在のベトナムに武力進駐するのやむなきに至った。これが直接の動機の一つとなって、一九四一年十二月八日、日米の戦端が開かれ、約四年にわたる太平

洋地区全域におよぶ大戦争は、一九四五年八月十五日、日本の無条件降伏によって終止した。終戦後の数年間は、アメリカのマッカーサー元帥が日本を支配し、朝鮮事変でマッカーサーの積極意見が入れられず、トルーマン大統領によって解職されると同時に、リジウェー大將が後任司令官となり、昭和二十六年（一九五一年）サンフランシスコにおいて平和条約が成立するまで、日本は六年間占領軍の統治下にあった。

いわゆる第二次大戦の期間も、見方によって違ってくるが、総括的には一九三九年の英独開戦から起算して、一九四五年春のドイツの屈伏、八月十五日の日本の降伏をもって、終末とするのが常識である。しかしこれは形式的なまた狭義の解釈で、太平洋戦争の前には足かけ五年間続いた支那事変がある。これは実質的には太平洋戦争の序幕とも解せられるから、日本としては広義に解釈して、支那事変も含めて考えなければ意味をなさぬであろう。しかも支那事変なるものも、つまりは一九三二年九月十八日の柳条溝事件を発端とした満州事変の延長であるから、歴史的考察としては少なくともここまでさかのぼらざるを得ない。終戦直後の東京裁判で、日本人の戦犯を決める条件として、満州事件まで遡及することには、連合国側にも多少の異論があったらしく、中国側の強い主張によって、これに決まったとも聞いているが、これは中国としてはやむを得ないところであろう。第一次大戦までは、戦争の勝敗が決まるとすぐ講和条約が決まり、一切がそれで解決した。それが第二次大戦後の日本は、六年間も占領軍の統治の下に束縛され、朝鮮事件のお蔭で独立国にな

ることができた。この占領統治のもとで日本人自身の意志に反して、革命に近い政治的、文化的変革が起こった。このようなことは、史上類例のないことで、拡張解釈すれば、この占領政治も第二次大戦の延長とみることもできよう。

これは時代とともに戦争の形態が変わるからである。その目でみると次の第三次大戦は起こるか起こらないか。人類を破滅させるような戦争は容易に起こらないだろう。しかしソ連、中共を中心とする共産陣営が共産主義の原則を固執する限り、その世界革命の野心と自由陣営の対立は継続する。それがすなわち冷たい戦争である。この冷戦を原則として不断に心理作戦を続け、決定的な瞬間に必要な程度の熱戦をも辞さないというのが第三次戦、総合戦の形態とも考えられる。その見方からすれば第三次大戦は現在すでに行なわれているといえよう。そして思想的にみた場合、その戦場の一つとして、日本においてはすでにいたるところ重要な橋頭堡が築かれていると判断してよい。

近世における日本と中国

人間の文化は交通と並行して発達する。キリスト教紀元前、崇神天皇の御代にはすでに、朝鮮南部の任那には日本府が置かれていた。紀元後二世紀、日本では十三代の成務天皇、中国では後漢の桓帝のころ、倭国が大いに乱れ、ついに卑弥乎を立てて王とすという記事がある。七世紀のはじめの聖徳太子時代、中国では随から唐にかけて、日本は謙虚に先進国中国に学び、大化の革新を断行

し、みずからを充実した。西紀六三三年の朝鮮白村江の戦で唐に敗れてしまい、日本は朝鮮から退却し、十三世紀の元寇くわうの乱、十六世紀末から十七世紀初頭にかけての、文祿慶長年間における豊臣秀吉による朝鮮征伐に、彼我の勢力の消長があったほか、おおむね平安無事、日本は鎖国を国是とし、その間制限された通商貿易が行なわれたくらいで、文化的には中国を先進とし、固有の神道の上に五倫五常の教えを骨格とする儒教を、仏教とともに取り入れて融合した。これが日本精神を形成し、倫理的にも矛盾するところがなかった。

古代、中世における中国の政治文化は、世界一流の水準を示したものであった。十三世紀のヨーロッパの文芸復興、宗教革命に次ぐ蒸気機関の発明による近世の産業革命の完成とともに、ヨーロッパ諸国の東洋開拓がはじまり、一四七八年のバスコ・ダ・ガマのインド航路発見、一五七一年のイスパニヤ人のマニラ占領、一六八九年には北方ロシアと清の康熙大帝との間にネルチンスク条約が締結されるなど、西力東漸の勢が進み、一八三九年の英国と清国とのアヘン戦争が近世支那史の黎明れいめいとなった。一八四二年に南京条約が成り、これでそれまでの天下思想は崩壊し、中国も国際世界の一員に過ぎないことが自覚された。同時に漢民族からみれば、夷狄いてきに過ぎない満州族である清朝の支配に対する民族的反抗が、一八五〇年から十五年にわたる太平天国の乱として続けられた。日本がアメリカ公使ハリスとの間に通商条約を結んだのは、安政四年（一八五七年）であり、明治維新の断行された明治元年は、一九六七年に当たっている。すなわち三百年間武陵桃源の夢をむさば

っていた日本は、中国に十年か十五年遅れてほぼ同じ時代に、ヨーロッパ勢力の攻勢の前にかく然として目覚めた。ここにおいて東洋近世史の幕が開かれるのである。

近世史における日本と中国との関係は、ほぼ次のような要素があり、その調和的要素と反発的要素が幾重にもからみ合って進行し、今日に至っている。

一 調和的要素

- (一) 漢字を共用し倫理的親念を同じくする文化的人種的親近感、すなわち同文同種の善隣感。
- (二) 異種の文明の欧米人の、科学的かつ帝国主義的攻勢に対する共同防衛の連帯感。これをわれわれの先輩は唇齒輔車しんしほしやの関係による東亜保全の計と表現した。

二 反発的要素

- (一) 善隣の関係は、それを裏返すと、競争敵視の関係に転じやすい。そしていわゆる遠交近攻の外交政策に陥る。

- (二) 中国も日本もともにヨーロッパ勢力の前に劣等感を持つ。立ち遅れを取り戻すためには、ヨーロッパ先進文明の技術面を応急的にとり入れる必要があった。（このため文化の本質に對しては模倣の域を脱しなかった）日本は一步先んじて富国強兵に成功したが、これに遅れた中国は、そのかわり民主主義革命に先鞭せんをつけることになった。かくて両者は相互に尊重し合う精神的地盤を喪失した。

(三) 中国は地大物博、その文明の歴史は長い。それによる潜在的な能力に自信を持つ大國意識がある。日本は初め弟分として出発し、日清、日露、第一次世界大戦を経て五大國ないし三大國の國際的地位を自任し、中国を輕視する風潮が一世を風靡した。

明治いろいろの日中關係の概観

支那事變から第二次大戦にかけて、日本の政治の中樞にいた首相近衛文麿公が、ある時こんなことを語ったことがある。「日本がもし将来英米と戦う場合にはロシアとしっかり結ばねばならない。逆にロシアを敵とする場合は、英米と手を握らねばならない。そして、そのいずれの場合でも中国（支那）を中立として、しかもできるだけ好意的中立の立場に置かねばならない。これが先輩政治家の遺訓である」と。日露戦争の場合は、ほぼ理想的にこの線に沿っていたといえる。一八六七年明治時代に入った日本は、十年の西南役で明治維新を仕上げ、二十七、八年（一八九四、五年）には清國と戦って大勝を収めた。満州朝廷のもとに李鴻章（りこうしょう）によって代表された清朝は、これによって崩壊し、三十七、八年（一九〇四、五年）の日露戦争を経て、明治四十四年（一九一一年）には孫文のいわゆる辛亥革命（しんがく）が成功し、清の宣統幼帝が退位し、ここに共和政体の中華民國が成立した。

しかし旧秩序がくずれ、広大な大陸に新しい國家秩序がつくられるのは容易なことではない。昔の易姓革命の経験では、旧王朝が倒れて新王朝が成立するまで、たいてい五十年か百年くらいの無

政府状態が中間に続いたものだが、二十世紀の中国でも十五、六年はかかった。孫文の死後あとを継いだ蔣介石が北伐に成功し、一応南北の統一に成功したのは一九二八年である。その時すでに江西省の辺地には毛沢東らの共産党勢力が、次第に拡大されようとしていた。第一次世界大戦当時、大正四年（一九一五年）、時の大隈内閣は連合国側に参戦、膠州湾のドイツ軍を降し、青島港や山東鉄道など旧ドイツの権益を引き継ぎ、日本の手から改めて支那に返還することになり、二十一カ条にわたる条件を時の袁世凱政府に申し入れた。それは山東そのものよりも、むしろ日露戦争の戦勝者の当然の権利として、帝制ロシアから日本がうけ継いだ旅順、大連ないし東支鉄道南部の諸権益について、借款協定の期限をさらに延長することに主眼があり、当時の国際通念としてはなんら不思議ではない。大隈内閣の当初の外務大臣であった加藤高明が、英国大使をやめて帰国する際、この問題をあらかじめイギリスのグレイ外相に相談した。その時グレイは「日本は旅順の山に木々を植えただけでなく貴重なる血を流した。満州における日本の権益が尊重されることは当然である」と答えたくらいである。ただ最後通牒の形をもってした外交折衝の技術がまずかったことは否定できない。それがいわゆる日支二十一カ条条約で、中国青年の排日に大きな根柢を与えることになった。一九〇一年の団匪事件で、中国は四億兩の賠償金を列国に支払うことになり、それが清朝の崩壊に拍車をかけることになったが、ただひとり米国だけは自分の分を使わず、その金で中国各地に大学や病院を建てたり、アメリカ本国に留学生をつのったりして中国青年の人気を集めた。そのう

え第一次大戦は民主主義国側の勝利に帰し、アメリカ大統領のウィルソンが、民族自決を唱えて中国や朝鮮の青年の情熱をかきたてた。それが排日として反転してくる。日清戦争後日本にあこがれたせもあるが、第一次大戦後の、とくに国民党の執政以後の中国一般の空気は、反日の程度に逆比例して親米的であった。ただそれをうまくコントロールしたのは、革命の指導者孫文であった。孫文をはじめとその高弟の胡漢民、汪兆銘、蔣介石は、みなかつての日本留学生であり、孫文のいわゆる大アジア主義の思想、伝統をある程度まで受け継いでいる。

明治いろいろの日本の大陸政策は二重の構造を持っている。一つは欧米の侵略、ことに北方からするロシアの南侵に対する防御である。(これは幕末いろいろの歴史的なものである)明治初年の征韓論は、よく失敗した旧武士階級の不平を大陸に向かって発散させようとする帝国主義的なものといわれるが、征は「征伐」の意味でなく「征く」ということで、西郷隆盛の真意はロシアの南侵を見越して保守頑迷な大院君を説得して、朝鮮との間に軍事同盟を結ぶにあったと故徳富蘇峰は語っている。いま一つは、日本は天皇を中心として早く近代国家の成立に成功した。そして一九三〇年代のヒットラーやムッソリーニの登場を余儀なくされた世界の風潮の前には、他のブロック経済に対抗するために、極東における独自の広域経済をつくる必要に迫られていた。しかるに孫文のいわゆる散沙のごとき中国では、統一国家の成立は容易でなかった。一九二二年のワシントン会議の席上、フ

ランス首相のブリアンが「支那とは何ぞや」という奇問を發するくらい、南北に分裂してとらえどころがなかった。それだけに感情的には、一種の若いナショナルリズムの発酵があり、その目でみると日本は、桑の葉をかむ蚕のような侵略国家として映じたのである。それも赤の他人ならやむを得ない。同文同種という口の下から西洋の帝国主義に追隨し、それで先進国ぶるのはけしからんという気持がある。ご承知のように中国の面積はヨーロッパ大陸に匹敵し、その人口はヨーロッパの総人口にまさる。ヨーロッパ大陸に対するイギリスの国策が、たくみに大陸諸国間の勢力の均衡を図ることを中心としながら、しかもその間幾度かの戦争に身を投ずることを避けられなかったことを思えば、積弱のあまり、長い間無政府状態にあり、あわや西欧帝国主義の前に分割されようとする中国を一衣帯水の前面に控えて、万全の方針を建て得なかったのも一概に責めるわけにはゆかないと思う。

南京条約いらい第一次大戦に至るまで、満州蒙古にはロシアが、山東にはドイツが、揚子江以南にはイギリスとフランスが、教会や租界や郵便、鉄道、港湾、鉱山借款の特殊權益を持ったうえ、北京その他に少数ながら自国の軍隊を駐屯^{とん}させ、海上には軍艦を常駐させている。中国は地理的には一つでありながら、内政そのものが国際性を帯びていた。ワシントンにおける九カ国会議で中国の門戸開放が、再確認されているのがその証左である。孫文はこの状態を半植民地と表現し、その苦痛は一国による植民地よりもさらにひどいといったことがある。

いわば、当時の中国は、四本か五本の外国勢力の柱のバランスによって、かろうじて崩壊を免れている状態であった。その中国の隣国として、すでに近代国家としての実力を充実した日本としては、単独で東亜の保全の任務に当たらねばならなかった。そして勢のおもむくところ、中国の支柱の一つとして参与しなければならぬ地理的・物理的な理由があった。それはあたかも、カリエス患者に必要なギブスのようなものであった。患者の健康が回復したら、それははずすべきものであるが、病気の身体に対してはやむを得ない圧迫ともなる。しかし患者自身はその意味を解せず、ギブスをかけられる苦痛によってその医者を憎む。今日からみれば、いぶん下手ヘタをやり、先見の明がなかったといえるが、ギブスを必要としない程度に、中国の国家主義が盛んになったのは、満州事変、支那事変の間ぐらいからであろう。逆にいえば日本の圧迫が中国の国家主義を促進しただけでなく、行き過ぎの結果として、その共産化にまで貢献したともいえる。しかも当時の事情として、それがやむを得なかったというところに歴史の皮肉がある。

日本の対支政策は、日清戦争以後の五十年間を通じて、北進論者と南進論者、保守主義者と革命論者、武断派と文治派という二つの対立した考え方があって、完全な統一をもたなかったのは致命的である。ある場合には陸軍と海軍との不統一ということもあった。団匪事件のさい、台湾総督の児玉源太郎大将が福建占領を計画し、海軍大臣の山本権兵衛が、これを未然に挫折させたというようなエピソードもあったのである。

満州事変

日本の満州における権利と利益は、日本がロシアと戦って勝ったのち三十年間、国力を傾けて切り開きたいわば日本の支体ともいふべきものであった。万里の長城が渤海湾につきる所を山海関といい、これから南を関内すなわち支那本部といい、北の方を関外、すなわち満州、奉天・吉林・黒竜江の三省にわかれているところから東三省と称した。奉天——いまの瀋陽以南は漢時代から中央の支配する時代もあったが、鞞鞞、遼、金、清と、この地方の民族が逆に北支那を支配した時代もある。最後には長白山付近に興った満州族の愛親覚羅氏が、二百七十年間全支那を支配して孫文の中華民国に代わった。素朴な北方の民族が、武力で支那を征服するうちにいつの間にか漢文化に消化され、言語も感情も漢化されて、今日ではほとんど区別することができないほどであるが、それでも支那本部からみると特殊地域であって、清朝の半ばくらいまでは、満州人を保護するために一定の地域以外への漢人の移住を禁止していた。私は昭和十三年の春、鮑という中国の学者と、北満の広野を遍歴したが、米国に留学したことのあるこの国際政治学の博士は「これは東洋のユナイテッド・ステートである」という感慨をもちたことがある。ヨーロッパの宣教師の書いた「奉天生活三十年」という書物によると、日露戦争前の満州の状態は、われわれの想像にあまる人口稀薄な処女地であった。ネルチンスク条約を頂点として、ロシアと清朝の勢力の均衡が漸次くずれはじ

め、一九〇〇年の義和団事件の紛糾に乗じて、ウラジオストクを含めた黒竜江東の広大な地域はロシアに割譲された。同時に中国の領内を通じて東はウラジオストク、南は旅順、大連の不凍港に通ずる東支鉄道の建設と沿線の管理権を獲得、治安維持に名をかりて大軍を駐屯して、言を左右にして容易に撤兵しない。当時の参謀本部次長ブレベルスキー中将の秘著「満州処分論」をみると、ロシアの意図が満蒙併合にあったことは歴然としており、これをみた私の恩師根津山州先生などが中心となり、近衛篤磨公を先頭に「対露同志会」を起こし、ついに、明治三十七年の日露開戦となった。当時世界政策において帝政ロシアと大英帝国とは対立し、日清戦争と義和団事件における日本の優秀さを実見した英国は「光榮ある孤立」の歴史を捨てて、極東の小国日本と同盟を結んだのが、その二年前の明治三十五年（一九〇二年）である。同盟国イギリスと、ほとんど準同盟ともいうべきアメリカとの後援を背景として、二年間にわたる大戦によって、日本は世界の大陸軍国たるロシアに勝った。そして樺太南部とともに、長春以南におけるロシアの一切の權益を継承することになった。それにしてもハルピンを中心とする北滿にはいぜんとしてロシアの勢力が残存し、第一次大戦時代は帝政末期のロシアと日本との協調が続いた。日露戦争は米国大統領の初代ルーズベルトの仲介によってポーツマスの和約をかちとったが、大海軍論者ルーズベルトは「太平洋を支配するものが二十世紀における世界の覇者となるであろう」といい、それは同時に米国の東洋におけるライバルが、ロシアよりも日本に移る端緒ともなった。

ロシアの侵略政策の露骨さは、日露戦争より十年前の、日清戦争直後のいわゆる三国干渉において、まさに傍若無人の感があった。日清戦争の講和は、下関の春帆楼で、伊藤博文と李鴻章との間に行なわれ、台湾とともに旅順、大連を含む遼東半島を日本に割譲することに決まった。その二、三日後、ロシアはドイツ、フランス両国とともに、日本の遼東進出は世界の平和を妨げると威かくしてその返還を要求した。日本は彼らの実力の前に涙を吞んで服従しないわけにはゆかず、文字通り「臥薪嘗胆」して国力の充実に努めた。そのロシアは中国に恩を売った代償として、こともあるうに日本から取り上げた旅順、大連を二十五年の契約で租借し、東洋一の軍港と要塞を作り上げたのである。ロシアに対する勢力均衡に名をかりて、イギリスは渤海湾を隔てた威海衛を租借した。日清戦争によって中国の積弱が暴露され、支那分割の勢に拍車がかけられた。しからば日清戦争は、なぜ起こったかという点、それは朝鮮の問題からである。半島国である朝鮮は、大陸続きの支那と、海を隔てた日本との勢力の消長の前に動揺する宿命を負っていた。日清戦争から日露戦争にかけて、ロシアが支那に代わった。採木の名目でロシアの兵力は鴨緑江を渡り、朝鮮国境内に侵入するにおよんで、明治天皇が日露の開戦をご決断されたのである。この点レーニンも、日露戦争は日本の自衛のための戦争であると是認している。

帝国主義という言葉は、レーニンによって、共産主義者に有利な一種独特の定義が与えられている。しかし、人類の歴史は、道徳的判断の前に常に実力による闘い、交渉という一面がある。また

ある意味からいえば、その実力的支配を通じて後進国が開発される。支配者は少数であり、被支配者は多数であるから、いつの間にか被支配的民族の知的、経済的充実により実力の所在が転倒し、独立とか解放とかの運命になる。木の實のように熟すれば地に落ちるといのが、植民地における異民族支配の原則であるように思われる。イギリス、フランス、ロシア、日本と多少の巧拙はあっても、大体似たような運命をたどっているようである。

孫文の革命は日清戦争と同時に始まる。彼らの最初の目標は「滅満興漢」であった。すなわち夷狄である清朝の支配から漢民族を救うという民族主義革命であった。従って彼らの眼中においては満州は第二義のものであった。そしてロシアの南侵を防ぐために日本の力を借りる必要を感じたことと思われる。彼は民間人では頭山満、犬養毅、秋山定輔等の志士、政府側では桂太郎ともっとも相許した。革命のために日本から資金と武器を送り、その代わり、満州における高度の中立性、換言すれば日本の実質的参与を許すという、孫文・桂の会談の内容を、当時孫文の秘書戴天仇たいてんきゆうとともに孫文の左右にあって、日本側との間に奔走した山田純三郎氏から私はしばしば聞いたことがある。南方の革命党と対立する北方の旧勢力、清朝の社稷しやくをその故地満州に保存しようとする宗社党の活動も、肅親王や蒙古人の巴布札布等ぱふさふをめぐるって日本の川島浪速らの一派によって、前後三回ほど満州の独立運動が試みられ、ついに成功しなかったこともある。

またそれとは別個に満州の特殊性に基づき、いわゆる閉関自主を主張した王永江のごとき土着の名士がある。彼は三国誌の蜀王劉備しよくりゅうへいにおける諸葛孔明しよかくわきやうにも比すべき政治家で、日露戦争時代の馬賊出身の張作霖ちやうさくりんを助けて、いわゆる満州王の地位にまでのぼらせた。しかし張作霖は彼の忠告を聞かず中原への野心をいだいて北京に乗り込み、大元帥を称するに及んでついにタモトを分かち、郷里の金州に隠退した。満州建国のさい中国側の要人として一役買った于沖漢ゆちゅうかんなどもその亜流である。

日清戦争のころに比べ満州の産業は開発され、人口は倍加し、満州建国の歌にも三千万とうたわれるに至った。鉄道も支那本部のそれに匹敵し、満州は支那の宝庫といわれた。これはすべて満鉄を中心とする日本の経営に伴って発展したものである。張作霖は日本を背景として支那本部にらみをきかせたが、その前時代的な暴政は、人民の恨みと日本人の怒りを買った。奉天駅前で彼が横死したことに對する当時の関東軍參謀の責任は糾弾に値するが、調子に乗った張作霖父子が、三十年の歴史を忘れて満州における日本の權益を覆くわえずに急いそだったことは、明らかに当時の国際通念に反する。石井・ランシング協定では、ヴァイタル・インテレスト（生命線）と表現されている。満州における日本の特殊的地位と權益は、九カ国条約も承認しているところである。蔣介石の北伐が成功し、一方張作霖の横死に次いで張学良がその地位を継ぐにおよび、従来の五色旗を青天白日旗に変え、蔣は總司令に、張は副司令に就任した。父を失った心理から無理からぬ点もあるが、張学良によって日本の意志は無視され、ついに満州の特殊性も失われ、そのあげく支那本部のほうはいた

る排日の風潮に合流した。そして昭和六年（一九三一年）九月十八日の柳条溝事件が発生したのである。満州国をカイライ国家Ⅱパベツト・ガバメントⅡと批判したリットン報告書も、日本を罰する判決は下すことができなかった。

満州問題に登場する人物は多々あるが、満州事変から満州建国にかけての中心人物は、当時の関東軍参謀の板垣征四郎、石原莞爾^{かんじ}で、とりわけ石原は頭腦の中心であった。柳条溝事件の発生は日本にとって名譽なものでなく、天皇陛下も必ずしも嘉納^かせられなかったのではないかと想像される節もあるが、当時行きづまった日本が、その活路を民族協和の満州建国に見出した苦心を認めぬわけにはゆかない。また、その果敢な戦術と満州経営の高い理想は注目に値するものがある。日支は早晚衝突を免れず、十八倍の敵を相手にし、日本の生命線を守るためには、特別の戦略的考慮も必要であったであろう。当時日本の内外情勢は大体次のようなものであった。

一 国内政治は既成政党が腐敗し、デフレ政策による農村の不況は深刻化し、農村出身の兵士間にかんがりの不満がひそんでいた。一方第一次大戦後、共産主義思想がはびこり、階級闘争の激化によって国内不安が生じた。

二 支那の排日は全面的に高潮し、満州、支那を通じて、日本の権益は根底から排除される気配を示し、国民政府の外交部長王正廷すら、旅順、大連奪還論を公言するほどであった。

三 レーニンの死後スターリン時代が出現し、第一次五カ年計画の完成とともにシベリヤにおけ

る近代的軍備は漸次日本を脅威するに至り、極東赤化の布置は着々と進行しつつあった。

四 アメリカは高関税と差別的移民法をもって日本を圧迫し、さらに支那の排日を扇動した。

五 イギリスはオッタワ会議によって大英帝国経済ブロックを形成し、日本貿易に圧迫を加え、日本はまさに四面楚歌の中に孤立した観があった。

六 第一次大戦直後、一時共産党によって国内を麻痺させられたイタリアおよびドイツは、ムッソリーニおよびヒットラーの新国民主義によって目覚ましい復興を示し、トルコのケマル革命とともに日本の青年将校に一種の刺激を与えた。

石原はまず日露戦争の日本の辛勝は偶然に恵まれたものであり、ロシアは帝政が共産主義に変わっても、帝国主義的野心を捨てていない以上、いかにしてその攻勢を防ごうかと腐心した。そこで天皇の公平無私の御心を体し、強国日本が謙虚になり、満州にゆかりのある諸民族がそれぞれ平等の資格をもって協力し、白紙の立場から新しい王道国家を作り、最新の技術をもって満州の資源を開発する。各民族の愛国者をもって組織する建国大学の研究院を頭脳とし、協和会をもって最高の民意機関となし、政府をして執行せしめる。そこで物心両面の実績を挙げ、これを外に拡大して、日支両国民の心からなる提携を枢軸とした東亜諸国の連盟を作る。それに成功したら、ソ連米国も恐れるに足らぬという格調高いものであった。藉すに時日をもってこの理想通りに満州の経営に専心したら、成功の可能性はないとはいえなかつたであらう。

そしてそれは、宿命的な日支間の矛盾を高次の次元において創造的に解決する一案たるを失わなかつたであろう。前述の通り、満州の特殊性もあって、山海関どまりであつたら当時の汪兆銘かうを行政院長とし、蔣介石を軍事委員長とする国民政府は、しばらく様子を見るだけの冷静さをもつていならしく思えるからである。しかし、時代の勢いというものは理想通り進行することは稀まれである。石原は不遇に終わり、蘆溝橋事件を導火線として、日本は欲しないまま支那事変という泥沼に踏み込んだわけである。

満州事変当時の首相犬養毅は、満州国の成立に反対で支那の主権内において高度の自治を要求する意向であつたらしいが、五・一五事件で非命に倒れた。この犬養と石原の意見の優劣は今日にわかには断じ難い。ただ建国の構想が支那に対する侵略よりも、将来ソ連の南侵に対する防波堤たらしめることに重点があつたことは記憶しなければならぬ。従つて国民政府に対する広田内閣の三条件の申し込みの中には防共協定の一項があつた。趣旨は同感だが、防共は中国の国内問題として処理したいというのが蔣・汪の答であつた。

支那事変

満州事変には目的もあり計画性もあつたが、日支戦争—支那事変はズルズル引っぱられて深みに陥つただけのことで、確固たる戦争目的も従つて戦争の終結点というものも持たなかつた。顧みて

拙劣というほかない。開戦の当初からすでに終戦の機会を考慮していた日露戦争時代の政治家や将軍たちに比べると、昭和日本の指導者に人材無しといわれても仕方ないであろう。日清戦争の時はもちろん、日露戦争のさいでも、形は無格好でも日本の兵隊は気持が優しく強いという印象を現地人の支那人に与えた。団匪事件でも列国環視の中で日本軍の規律の厳正は絶賛を博した。昭和七年に現地人の協力を得て、ともかくも満州国が一応成立したのは、ロシアやあるいは墮落した支那人に比べ、潔癖な日本人に対する三十年間の信頼と期待があったからであろう。それに比べて、予備後備の老兵までを繰り出し、百万の大軍を動員したことからくるやむをえない事情があったにせよ、支那事変における日本軍の道徳的水準は著しく低下していた。南京の虐殺事件は恥ずべきその一例である。最前線で若い兵卒が苦勞しているとき、北京や天津や上海や南京では、文武官僚や政商を交じえての宴会が、繰り返されていた。上海に陳という有力な実業家の友人がいた。彼は清末民初にかけて江蘇一帯の人望を集めた中国民間の長老、故張謇けん先生の高弟であった。汪兆銘が蔣介石と訣別して重慶を脱出し、南京政府を作ったとき陳は私に語った。「汪政権が魅力を持つことによつてのみ重慶の分子を吸収することができるが、汪政権が魅力を持つためには、それが日本のカイライでないことが実績において示されねばならない。しかるに人民は日本のやり口に失望している。この現状ではかりに地位を転倒して蔣介石が南京にきて、汪兆銘が重慶に残ったとしても全面和平は不可能であろう」と。勝ち戦の最中、日本人の私はまるで叱られているような風であった。支那

事変解決の道は、いかなる代償を支払っても、一刻も早く、大陸から引き揚げるということにあった。そのチャンスは、南京攻略前とか漢口陥落直後とか二、三なかったでもない。汪兆銘重慶脱出のキッカケとなつたいわゆる近衛声明のねらいもそこにある。——ちなみに昭和十三年一月の「蔣介石を相手にせず」という近衛第一次声明は公の不用意に乗ぜられ、公の真意に反して発表されたものである。父君近衛霞山公の精神を継ぐ文麿公の真意は、中国を強化し、共通の道德的基盤にたつて東亜を解放することにあつた。それは公がかつて院長だった上海東亜同文書院の興学趣旨において、敵愾に宣言されており、第二次近衛声明は、この主旨に基づき「相手にせず」の誤りを訂正しようとしたものであつた。——

戦争は生き物であり騎虎の勢に流されやすい。五年の長期戦によって戦闘には勝ちながら、戦略的にはいわゆる「退却してから対峙し、深入りした日本の疲弊に乗じて反攻に移る」という、敵の三段階の戦略のワナにかかる結果となつてしまった。それにしても日本軍の強さは当時世界一であることが立証された。

この支那事変について私は三つのことをいいたい。

第一に、支那事変は日本の一方的侵略のように思い込まれているが、これは大きな誤りである。なるほど冀東政權や冀察政權を作つたりしたことは日本側の過失であり、いわゆる「経済提携」にしても強欲さを免れなかつた。ただし、中国側が思うほど日本には計画的侵略の意志はなかつた。

すなわち蘆溝橋事件は、政府も現地日本軍も極力衝突を回避しようとした日本の意志に反して起こった。さればと云って国民政府側の真意でもなかったようだ。これは当時内閣書記官長であった風見章の「近衛内閣」をみてもわかる。また、国府側の記録としては、近刊の「中国の中のソ連」や「中共の革命戦術」の中にその間の消息を見出すことができる。結局それは北京大学生などを使つた中国共産党の反間策に乗せられたというのが真相である。ただ乗せられるスキを与えたことは日本の責任といえる。それにつけても思い出すのはスパイ事件の尾崎秀実である。尾崎は朝日新聞のすぐれた支那記者で、朝日をやめてから満鉄や内閣の囑託をやっていた。当時ジャーナリズムの花形であった橋樑とともに私は彼の論文に常に注意していたが、秩序整然たる論理にかかわらず、彼の結論がどこにあるか一向につかまらなかった。ある時彼の司会で彼の恩師の戸田博士との対談会が開かれた。尾崎と私と二人になったとき、私は何気なく「君の本心は一体どこにあるのか」と尋ねた。その一瞬彼に狼狽の色が見えた。本来ならば南京占領ぐらいのところで事変の收拾を図るはずの彼が、しきりに漢口攻略を主張するのである。後の彼の裁判長に対する告白書によれば、日本を深みに追い込みついに日米戦争に導くというのが、国際共産党の謀略であったようだ。

第二には、日支事変は愚かな戦争であったとはいえ、もともと、人間も国家も完全なものではない。そもそも賢明な戦争というものがありうるかということも一つの問題である。戦争の多くは双方の誤解と計算違いから起こる。支那事変を收拾することなく、勢いのおもむくままに日米戦争に

突入したのは、いうまでもなく日本の悲劇だが、この支那事変中にも幾多の美談はある。日本軍に不満であった現地人が、日本の敗北で国民政府が進入してくると、かえって日本時代をなつかしかった。国府が台湾に去り中共が天下をとると、その初期の二、三年を過ぎても、まだ国民党の時代の方がよかったという一面もあったらしい。

第三には、かりにまずい戦争であったとしても、それを愚劣であったと片づけるだけでは、祖国を信じ、上官の命のままに戦い異域に倒れた幾百万の英霊は永久に浮かばれまい。戦争が愚かであったとすれば、その愚かさの前にすらその職分を生きぬいた彼らの忠誠、道徳的価値は、一層尊いといわねばならない。

第四には、日本の近衛声明を真正面から信じて日本に呼応し、自主的に和平政権を作り、日本の敗戦に殉じて、漢奸かんかんの汚名を浴びながら、従容しんようとして刑死した汪兆銘以下のわれわれの同志に対して、生き残ったわれわれは軽薄であることを許されない。彼らが死してなお悔いなかったことは、日支事変の過程の中にそれだけの意味があったからにはかならない。少なくとも私個人としては、支那事変を通じて彼らと相会することがなかったなら、東洋の理想が大いなる未来性を持つことに揺るぎない信念をいだくことはできなかったであろう。

日米戦争

余裕がないのでどちらが戦争の挑発者であるか、またその戦争の成果の二点につめて述べよう。

戦争当時の昂奮（こぶ）が去り、冷静な史的考察が進むにつれ、日本だけが戦争犯罪者でないことは明らかにされてきた。故芦田均氏の遺著「第二次大戦史論」はまだ読んでいないが、最近なくなった元外交官の重松宣雄君が、昨年はじめから数回にわたって、雑誌「流れ」に発表した研究によれば、当時の大統領ルーズベルトは、きわめて巧妙に日本をたく方略を決めておったことが明らかである。日露戦争を頂点として日米間の友情にはすでに水が入っていた。第一次大戦の結果米国は大成金、日本は小成金になり、人口と資源に富む支那市場は、日米の競争場となった。満州事変によって、日本が国際連盟を脱退するに至るまでの舞台裏には米国の策動があった。支那事変で米国は国府の保護者の立場であった。日本との通商条約の廃棄を序幕とし、ついで資金凍結、石油の禁輸等の手段をもって日本の大陸からの全面的引き揚げか、インドネシアの石油確保のための太平洋戦争への突入かのいずれかを選ばざるべき窮地に追い込んだことは事実である。

アメリカが当初から計画的であったかどうかは疑問としても、もしアメリカが好意をもって支那と日本との間にあつたなら、日支事変の早期解決は可能だったであろう。そうして今のようになり強力なソ連の攻勢に当面することもなかったであろう。歴史の浅いアメリカの外交は近視眼であり

長い目でみてアメリカのライバルが日本でなく、ソ連であることについて先見の明がなかったことは否定できない。朝鮮動乱後ソ連に対抗するため、日本を強化する必要に迫られたことは、日本を弱体化することに専念したアメリカの従前の政策に誤りがあったことの証左である。日米戦争の責任は、公平にみて五分五分と私は判断する。

昭和二十年八月の終戦のとき私は南京において、最後のご奉公のつもりで「真の勝利者は誰ぞ」と題する一文を当時の「東亜新報」に寄せた。いおうとしたことは、日本はもろろん負けたが重慶も戦勝者の名目だけで、真の勝者ではない。やがてルーズベルトは、後世史家におそらくマイナスと評価されるであろう。唯一の勝利者はスターリンのようにみえるが、これも疑問だ。その素性がわるい。日本が戦争末期、ソ連に居仲調停を依頼したとき、ソ連が仁俠心にんぎょうしんを發揮し、窮鳥ふところに入った日本を九死一生から救っていたならば、日本の赤化ははるかに容易だったであろう。目前の功利に目がくらみ、長遠の計の足らなかつたところに、共産主義者の素性の浅薄さがある。

終戦とともにアメリカは、儀礼的に国府軍の九州進駐を承認するハラであったと伝えられる。それを蒋介石は辞退した。その理由は、中国が九州に入れば、ソ連は北海道進駐を主張するに違いない。そうなれば日本は、ドイツ以上の混乱に陥る。それは中共との対決に迫られている国府としても、良策でないという判断からである。対日理事会におけるフェドレンコ中将の執ような北海道進駐の要求に対し、マッカーサーは断乎としてこれを拒否した。東西に分裂したドイツに比べ、これ

はどれほど日本に幸いしたか知れない。

自由主義陣営に留まることによつて、日本は意外に早く回復した。しかしその繁栄は外面的なもので、それが真に根を下ろすためには、精神的支柱がなければならぬ。しかるに六、七年間にわたる占領政治の過程において、日本人は「洗脳」され、民族国家の主体性を失った。あらゆる場合に「民主主義」のレッテルを張らずにおれないのは、一つの劣等感からくる。この主体性を失った劣等感の上に立つ限り、一切の物質的、外面的繁栄は根無し草である。このままで行けばどんどん建てられる大きなビルの上に、朝目がさめてみると、赤旗が林立しているという日のくる可能性も皆無ではない。

この劣等感の出所は、東京裁判が公平な裁判の名目をもって、日本を戦争犯罪者と宣告したことに発する。いらい日本人は原罪を背負うことになった。それに対しては、外国人の間からも批判の声があがった。連合国側裁判官の一人、インドのパール判事は、当時すでに「日本に戦争のための共同謀議のあった証拠は一つもない。これを誣（し）めるのは神を恐れざる戦勝者の傲慢（ごうまん）と越権（えつけん）である。

他日歴史がこれを裁くであろう」と膨大な報告を発表し、判決文への署名を拒否した。滝川政次郎博士は「東京裁判を裁く」という著書でその不当性を暴露しているが、アメリカの有名な歴史家ピアード博士も、日本に戦争責任はないといっている。日本の真の独立を妨げるものは何か。それは憲法、教育制度の変改と、みずから祖国を守る責任からの回避、不当裁判に対する確信の喪失、産

業界の階級分裂、行政力の弛緩、エログロの社会相などであり、原罪を背負うた劣等感から生じた価値の転倒から招来されたものである。もともと日本を骨抜きにすることを目的としたのであるから、戦勝者が日本に有罪を宣告するのは無理もない一面もある。しかし、アメリカの政策が、今日のようなものに転換せざるを得なかったのは、彼らの宣告が無根拠のものであったことの反証である。彼らがすでに反省したのにかかわらず、当の日本人がいまなお劣等感にとどまり、あらゆる西洋的なるものへの模倣をもって進歩的と信じて自慰しつつあるのは、日本人自身の無知がその責任を負わなくてはならない。

まことに歴史の進行は皮肉だ。春秋に義戦無しといわれるが、第二次大戦の責任に対する判決もそんなところになろう。そして結果としては、日本人の物質的繁栄と自己喪失、日本の大陸政策たる赤化防止の全面的失敗と、島国日本への総退却はまごうかたなきマイナスだが、一方アジア、アラビヤにかけて二十カ国がこれによって独立し、東西対立の対象となりつつも、とにかく第三勢力を形成している。日本は「身を殺して仁を成した」ともいわれるが、これは日本が過去の経験を反省し、与えられた時代的環境にに応じて、威厳をもって立ち上るとき初めて意味を持ってくる。第二次大戦の功罪は、結局日本人の自覚と決心によって定まる。

端的に言えば、日本は明治以来それを追うて一たび強大となり、またそれを模倣することによって

惨憺たる羽目に没落した。西洋文明そのものが、資本主義と社会主義を含めて今や曲がりかどにある。社会思想としては唯物共産主義が、自然科学としては宇宙ロケットがその限界だ。人類の自殺を免れるためには、彼らの世界観そのものに対する反省が不可欠である。ここでくわしく述べる余裕はないが、私は日本人に生まれてこの世界文明の転機に際会したことをこよなく幸いと思う。

註一 満州建国の精神は、ロシアの南下を日支両国の協力で防衛しようとする意味において、明治以来の伝統を継いでいる。そして民族協和を中心においたことは、先進国の後進国支配の歴史に新紀元を作ったものといえよう。

註二 石原莞爾は、その後の軍部の下剋上の風を招いたとの批判がある。本人は国策の一角を拓開したのち、退職を申し出たが、聞き入れられなかったという一説もある。これについて元禄の赤穂義士同様、法に基づいて処分すべきであったという見方を持つ人もある。

註三 日本がなんら外国の圧迫に気がねせず十分に自力を発揮したのは、私の体験からいえば満州事変以後の十四、五年間であった。行き過ぎもあつたにせよ、日本人の自覚と理想主義がこれほど発揮された時代はなかつた。この自信が戦後の急速なる経済復興の裏づけになっているのではないか。

註四 世界の恒久的安定は、性善の人間理性の納得の上のみ期待できる。共産主義は覇道の典型だ。

註五 明治二十九年（一八九六年）露帝ニコライ二世の戴冠式のさい、李鴻章と露国ロバノフ外相の間に日本を仮想敵国とするいわゆる「カシニ―密約」なる攻守同盟が結ばれていたことが、一九二二年のワシント

ン会議で発表された。日露戦争当時このことがわかっていたら、日本は満州占領の権利を主張できた。

註六

最近発行された「第二次大戦責任論」(時事通信社刊)の一説をすすめる。著者は元ポーランド駐在公使の大鷹正次郎氏で、英米側の資料をもととした厳正なる批判である。序文と目次をみただけでも、日米戦争の挑発者が日本でなく、ルーズベルトであったことはいまや疑う余地はない。日本海軍のハワイ奇襲ののち、ハワイ守備の陸海軍司令官の責任を問うため、米国政府は第一回の調査をはじめ、終戦後一九四五年から六年にかけて二回三回の調査を行なった。その最終的結果として、アメリカ大統領の方が秘密のうちには戦争を計画していたことが明るみに出たのである。調査会の多数意見は、アメリカおよびルーズベルトの名譽のためにこれを発表しない。しかし少数者の意見が正しいことは、暗黙の間に識者の常識となつてゐるらしいとある。

ヤルタ会談でスターリンにいわせられたルーズベルトの晩年は、悶死に似たものがあつたようだ。戦争責任の問題は同時に賠償の問題に関連してくる。賠償の根拠は勝敗にあるのか、戦争責任に伴うものか。前者とすれば、もし日本が勝つていたらアメリカが賠償しなくてはならない。もし後者だとすれば一層責任は米国にある。現実の問題として、すでに締結された今日、賠償条約の廃棄を主張するのは政治的でないが、原則的理解と信念を持つことの必要を痛感する。この点は将来、中共に対しても十分用意するところがなくてはならない。

しかし戦争責任問題の眼目は別にある。すなわちこの問題の真相を知ることによつて、十年来の劣等感を脱却し、民族の威厳を取り戻すことだ。低俗なジャーナリズムの流行の圏外において、世界の十何カ国

を相手としてあれだけ戦った日本人の知力、意力、そうして脱線もしたが、ドライな西洋人に比べて人情味豊かな日本人が、東洋のいたるところで好意をもたれている半面も私は聞いている。

問い 先生は西洋文明を霸道として否定されるが、むこうは着々と発展しているではないか。中共、ソ連の各方面における躍進はもはや否定できない事実ではないか。この現実をどう解釈されるか。

答え 東洋文明は王道で西洋文明は霸道であるというのは粗雑ないい方で、そうでない事例もたくさんある。ただ文明の本質を大まかにいえば、そういえるのではないか。私がとくに述べたのは「西洋文明が産業軍事面で大変な躍進をとげ、現在頂点にきている。戦争をすれば両方とも自滅するところまで追い込まれている。こんな状態になったことは進歩かどうか」という点についてである。ここでわれわれは「進歩とは何ぞや」ということを考えてみなければならぬ。進歩には正しい方向がなければならぬ。西に行くべきところを東行きの汽車に乗ったのでは、進むほど退歩することになる。かつてトルストイが、七十過ぎて支那の古典である「大学」を愛読し「ものに本末あり、事に始終あり。先後する所を知れば道に近し」という言葉に感服している。彼は何が第一に必要で、何が第二に必要か、本末を知ることが第一だと繰り返し強調している。産業軍事面の発達も、道徳倫理に並行したときにのみ意義がある。中共、ソ連の躍進は認めるが、その半面も知らねばならない。たとえば最近来日した周鯨文の告白「風暴十年」（時事通信社刊）を一読するとよい。彼はかつての中共政治協商会議の要人で、つぶさにその裏面を紹介している。中共発表の統計数字や、マスコミの報道などを通じてだけながめることは、片手落ちであろう。

問い 精神的、道徳的な中心が日本から失われたらいけないといわれるが、日本の精神的な中心とは何か。

答え 今日時代相においては「忠義」を基礎にすることである。「忠義」といえば皆さん方はわからんといつて否定されたそうだが、当然のことだ。日教組をはじめとして進駐軍の教育を十年以上も受け、その上占領憲法のままでおれば「忠義」がわからんのは当たり前だ。わかる者があればそれは例外だろう。(笑)「君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」どれ一つとりあげても、それは当然のことばかりだ。それがこのごろはアイマイになってしまっている。忠とは中心だ。主権が国民にあるとしても、天皇はわれわれの象徴だ。それが天皇であれば、象徴に対し真心から敬意をもちたい。それが自分自身に敬意をもつことだ。中心をはっきりさせてはじめて共同体の団結ができる。いわゆる「散沙」にならないのだ。手っとり早くいえば、天皇は選挙を必要としない大統領と考えればよろしい。アメリカは四年間雇われた天皇をいただいていると思つたらいい。(笑)フルシチョフはいつ殺されるかもわからない天皇だ。(笑)そのような借り物の「天皇」でも、それらの国は教育の核心がしっかりしていて、その教育を徹底してやっている。つまり「忠義」の教育をやっておるのだ。考えてみれば外国の大統領制は不安定な虚中心だ。イギリスやオランダ等の帝政は安定感をもった実中心だ。とりわけ日本天皇は万世一系、これくらい立派なものはない。この意義を解することが忠なのだ。忠とはすなわち愛国心だ。皆さんは私がいうと古いと思うだろうが、外国人がいうと新しいものとして受け取るに違いない。アインシュタインが、大正十一年改造社の招きで日本にきたとき「近代日本の発達史ほど世界を驚かしたものはほかにない。この驚異的發展は、三千年

の歴史に一系の天皇をいたたく比類ない国体による。これから世界の歴史は進むだけ進み、最後に戦に疲れる時がくる。そして人類は世界の盟主を挙げなければならぬ時がくるだろう。この世界の盟主は、武力や金力でなく、あらゆる国の歴史を越え最も古く、最も貴い家柄の者でなくてはならない」といつている。これは当時の改造はじめ新聞にも掲載された。さらにこれには後日物語がある。第二次大戦後、稲垣守克氏が彼を訪ねて「独裁制の国家を交しても、世界政府を樹立することは可能であろうか」と質問したところ、彼は「われわれは科学によって原子力の秘密まで発見したではないか。社会原子力とでもいうべきものがあるはずだ。大いに頭をしぼりなさい」と答えている。スターリンの後継者であり、ライバルだったキエロフはのちほど暗殺されたが、晩年白き恐怖の中に煩悶して、武官を通じて日本研究をはじめた。彼は古事記、万葉の深い理解者になった。さらに近くはマッカーサーも、日本の国柄に非常に感心している。支那では孫文、蔣介石など心からの天皇ファンだ。先だって日本に新任大使となってきた張氏が、天皇の前に出た時は戦々きようきようとして、あの豪傑に似合わない恐懼ぶりだった。通訳した清水公使はさすが東洋人だといっている。こういう状態だから、日本共産党も頭がよければ天皇を利用するかも知れない。日本の道徳的基礎はなんとしてもそこにある。私はいまから日本人も忠孝の二字に帰ることを確信して疑わない。

問い 日本と中共が対立していることはよくないと思う。しかし簡単に中共と国交は結べないこともわかる。日本と中共の妥協できる最低の条件はどの辺か、先生の見解を聞きたい。

答え 日本と中共が対立していることは確かに不幸である。しかし中共が日本を敵視しているならば、あえて

日本の威厳を損じてまでそれに従うことはない。たとえば台湾を犠牲にしてまで、中共と結ぶことは日本の手にあまることである。現在のところアメリカには中共承認の最終的意図はない。もしいまソ連が西独を承認すれば、アメリカは中共を承認し、アメリカが東独を承認すれば、ソ連は台湾を承認する。しかしこのような承認は、台湾も中共も、そして西独も東独も反対なのだ。だから中共承認といっても容易なことではなく、その間日本だけが別行動するにしても、それだけの力は現在の日本にはない。しかし、たとえば外遊から帰国した時などに岸首相が、人心を一新するような宣言を出すことは結構だと思う。その内容の第一は、日本は共産主義に反対であるとはっきり打ち出すことだ。今のようないい加減な態度が一番いけない。第二は、日本は中共との国交回復を希望する。ただし中共のかかげている平和五原則は、はたして本気でいっているのかどうか。われわれはむしろ本物でないのではないかと恐れている。第三に、二つの中国を作っているのは日本だというが、それは中国自身が作っていることであって、これくらい明白なことではない。中国こそその責任をとってもらいたいというように、対中共三原則を打ち出すべきだ。またある場合は、台湾と同じ条件で承認するということも考えられる。これは恐らく向こうが断わるだろうが、そうすれば二つの中国を作っている責任は先方にあることが、いよいよはっきりする。しかしこのようなはっきりした態度を日本の保守党はとり得ない。哲学と信念がないからである。

長く満洲と中国大陸で生活体験を積んでこられた中山講師は、まる二時間にわたって、動乱の現代史を浮き彫りするように講義された。しかし参加者の大部分は、戦前の歴史や東洋史をよく知らず、講義に出てくる人

名、地名やいろいろの事件も、はじめて聞くものが多く、当時の時代環境や歴史的背景については、十分理解できなかったかもしれない。それでも中山講師の容姿や風さいなどから受けた深い感銘は、心の底に焼きつけられたように見受けられた。

五分の休けいののち、労働問題の講義に入った。当初、熊本県知事、元労働次官寺本広作氏の予定であったが、急に所用ができたので代わりに、熊本県地方労働委員会事務局長内田正助氏が講義を行なった。講師は豊富な実地体験から、労働委員会の内容、労働三法、不当労働行為、あつ旋、仲裁など平易な言葉で解説した。この講義は民間会社から参加した人たちに、とくに参考になったようであった。（講義内容省略）

午後七時、昨夜の検討会の決定通り、小田村寅二郎講師が臨時講義を行なった。

（一高、東大法学部（中退）を経て精神科学研究所理事、現在すみだ製作所
経営、全日本教育父母会議常務理事）

この合宿のめざすもの

——「階級闘争理論」の克服と「友情」の探求——

小田村寅二郎

この合宿のめざすものは何か。結論的にいうならば、それは「階級闘争のもつ根本的、致命的欠陥を本質的に把握し、克服する」ことである。もちろんそれは、合宿のめざす目標の一つにすぎない。だがそこにはすべての問題が含まれており、その意味できわめて基本的な課題である。

今日の国内状況は階級闘争の激しい様相を示している。そして階級闘争理論は学問の中に、実社会の中に、また教育界の中にも、いろいろの形や運動となって横行している。この合宿の主催者である大学教官有志協議会と、国民文化研究会は、この階級闘争理論が「間違つたもの」であると考えている人々の集まりである。しかしそれだけのことなら、この合宿の特異性について、とりたてていうほどのこともないであろう。そこまではありふれたことのようにみえるが、その次の問題の立て方が大切である。

すなわち「階級闘争理論がもし間違ひであるというなら、人間社会の中に階級、差別を乗り越え

るなにものがなければならぬ」ことになる。そして「そのなにものかを、自分自身でしっかりと身につけなければならぬ」ことになる。それだからといって、私どもはそのために、宗教や信仰に頼ろうとするものではない。またわれわれは、階級闘争理論の代わりに、天皇制を打ち出してゐるものではない。まして何々主義とか何々イデオロギーを持ち出すものでもない。

われわれはこのことについて、主義、主張を問題としてゐるのではない、というはっきりした立場をまず第一にとる。そして階級闘争理論が、もし本当に間違ひであることを自覚するためには、どうしなければならぬかという問題と取り組もうとする。共同生活を送っている実社会の場で、人間同士が、外見的差別たとえば会社内における地位とか、資本家と労働者、上役と下役、あるいは勤労者と学生というような、いろいろな外的差別を乗り越えて、もしそれらの人々が一つに結び合う経験、一つにつらなる喜びと悲しみを持つことができるならば、そのときはじめて「階級差別だけが世の中のすべてではない」ということを、自分自身の心の中に実際に感じることができない。そして同時に階級差別や外的差別を乗り越え、内的平等の世界を求めて、人間活動を再開するに違ひなからうと思う。いままでの自分自身が、あまりにも階級差別や、外的差別にとらわれ過ぎていたことに気づけば、なんとしてもそれから脱出しようとする生命的欲求に駆られるであらう。

階級闘争理論に対するに、理論をもってする限りは、階級闘争理論を滅断することはできない。

対抗理論の必要なことはいうまでもないが、完全に近いまでの対抗理論が用意されていても、なおかつ、階級闘争理論が、強力な魅力をもって若い学生の心中に浸透しているのであるから、その現実には深く考えなければならぬであろう。

ところで、ここに集まっているお互いは、いろいろの長所や短所を持ち合わせている。知識、知能や経験の差異もあろうし、生活環境も千差万別に違くない。しかしその差異のままではこの百五十人の人々が、合宿生活の共同体験を通じて、それぞれの心の中に、お互い人間としては平等なものというなにかを、実際に感じとることができるようになりたいというところにこの合宿の最大の目標がある。もしこれだけの人がこうした目的を持って、ともに学び、生活体験を平直に交換、告白し合いながら、しかもお互いに人間として平等なのだ、なぜ今までは外見的な差別にばかり心を奪われていたのであろうかと、気づくことができなければ、階級闘争の動きを阻止し、その勢力を駆逐することはとうていできないと私は考えざるをえない。この合宿教室のめざすものは、理論でもなく、主義でもなく、イデオロギー以前のものである。この合宿で、いろいろの講義が行なわれたが、そこに展開される理論のかけには、つねに理論以前のものがこめられている。従ってここでは、その理論の根底をなす理論以前のものを、他の人の心にしみ通るように伝える方法を見出すことが大切である。階級闘争理論の分野では、外的差別や物質的差異が問題にされ過ぎていて、その差別や差異のかけにあるものを見失いがちである。しかしこれらの外的差別が、いつまでもそのま

まあ、よというのでは決してない。貧富の差は政治の問題、社会政策の問題として、その差を縮めなければならぬ。

しかし社会政策の対象であることと、人間社会存立の根本原理とは、厳密に区別されなければならない。そこにはいささかの混同も許されない。人間社会の外的差別は、社会政策によって打開することが必要である。と同時に、一方ではその差異を乗り越える心を不断に持ち続けることが絶対に必要である。そしてお互いの心を結び合わせようとする努力によって、そのつながりがどのように開けてゆくかを、自己の経験として理解、体得することが何よりも大切である。すなわち外的差別を越えたその心のつながり、心の広がり、どのようなものであるかを知ったときに、はじめて階級闘争理論に限界のあることを、身をもって知ることができるであろう。

大学教官有志協議会の先生方や、国民文化研究会の会員は、いってみればただこの一つの目的のために、合宿運営に当たっているのである。

かかる見地に立って、この合宿のめざすものについて、どうか真剣に考えていただきたい。「人間はみな迷っているのだ。そして欠点だらけなのだ。欠点だらけであり、迷っているのが真実である以上、どのようにしてその足りないところを認め合いながら、お互いに協力し合ってゆくことができるか」ということが、一番大切な問題となってくる。われわれがここで皆さんにお願いしたいと思うのは、決してむずかしいことではない。各人が協力、提携してゆくために、第一に何が必要

か。ありふれたいい方ではあるが、なによりも先にお互いが信じ合っていくことである。お互いが信じ合おうとするとき、「アレは資本家だ」「俺は労働者だ」というような一つの壁を作ってぶつかってしまったてはならないということである。現在の世相をみると、資本家と労働者とは、お互いに信頼できないものだと思つてかかっている風潮が非常に強い。また全学連の問題をみても、同様のことがいえると思う。いわゆる進歩的文化人はじめ多くの人たちは「資本主義社会を打倒しなければ、世の中は平和にはならないし、幸福ももたらされない」といつている。こうしたイデオロギーの障壁を先に立てて置き、階級闘争理論を尺度として、すべてのものをみようとしてゐる。このように、いまの世の中にはイデオロギーによって、勝手に決められてしまった障壁が少なからずある。また貧富の差をはじめ、知能、環境、幸不幸、運不運の差など数多くの障壁が現実存在する。しかし、それらはよく考えてみれば、もともと今日にはじまったものではないし、また今後どんな時代になつてもそのような障壁や差異はなくなるならぬであろう。つねに流動してとどまることのない人生と同様に、世のさまもまた、決してこれをとどめることは不可能である。動き、変容していく人間社会——それがいかに理想的な幻影であろうと——を、静止的に把握しようとするのが、実は根本的な誤りである。かりに一時は理想通りに革命を実現したとしても、次の瞬間からはまた人間同士の知能の差、運不運の差、幸不幸の差などが、そこに作用し働き出すのが当たり前であつて、それをしも静止させたり、変革させたりすることは、限られた人間人智のよくなしうると

ころではなかるう。

今日のソ連をみてもわかるように革命を行ない、理想実現をめざすかにみえても、いまだに反革命の名のもとに、一部の人々が消されていく。共産主義においても、人命の尊重は、当然第一の命題として掲げられているはずである。にもかかわらず革命四十年におよんでなおかつ、ソ連の政治には、暗いかげが残されていることは否定できない。このことは、人間社会を静止的観念をもって律しきることがいかに難事であるかを明らかにしているとともに、それがもともと不可能であることも示しているものと思う。また元来ソ連では、人はすべて平等であるべきはずだが、科学技術者は、途方もない高給をもらって、豪壮な邸宅に住んでいるかと思うと、他方では黙々と農耕のノルマに甘んじなければならぬ人々がいる。しかしこの方がむしろ当たり前のことである。ソ連が観念的な平等を実行しているのであれば、今日のソ連の進歩はみられなかったに違いない。農業にいそむ人々と、全知能をしぼって原子力の計算をしている人との待遇は違っていい、それだからこそソ連科学の飛躍的な進歩がもたらされたのであろう。

こうしてみると、現実はこの世にある障壁というものは、人間社会の続く限りいつまでもあり得るものだといわなければならない。しかるに何故お互いに敵や味方を作っていがみ合わなければならないのか。敵だ、味方だといって争わなければ、気が済まないというなら、それはむしろ人間同士が、人間というものをお互いに軽蔑し合っていることになりはしないか。お互いに生命を尊び、

人を尊ぶというのであれば、同じ国民同士のなかで敵だ、味方だといっているがみ合う理由は、どこにも見出すことはできないのではないか。それでもいがみ合うというのは、自分たちが勝手につくった観念の障壁に目がくらみ、それだけが人間社会の邪魔物だと浅はかに独断しているためではないであらうか。そこでもしこの世の中には、人間同士が敵だ、味方だといひ合う決定的な理由がないとわかれば、その外見的な障壁は、心の持ち方いかんで、乗り越えることができるはずのものである。障壁を越えて心の通い合う世界を練りひろげることこそ、この合宿のめざすところのものである。こうした意味でこの合宿は、国民生活の基本的なあり方の実践的な場であり、一つの「ヒナ型」を作りあげようとする短期間の生活の場でもありたいと思うのである。ここで私は平素心にとめている先人の和歌を一首ご紹介したい。

心知る友とかたれば心なごみながるなみたとどめかねつも

ここにいう「心知る友」ということは、主義、主張を同じくする仲間だけでなく、主義、主張は違っても、お互いが、お互いの心を信じ合うことができる間柄という意味であろう。そうした友と語り合う喜びが自分の心をなごませ、自然に涙が流れてくることを詠んだものであろう。「とどめかね」といい、さらに「つ」「も」と感動の助動詞、助詞が重ねられて表現されているところに、その忘我の喜びと感激が感じとれるように思う。学生間で「友情」というような言葉が、もし安易に功利的な交友の意味で使われているとすれば、そうしたこと自体の中に、人間生活の軽薄さや墮

落さが見出せるかもしれないように思う。友とのつながりとは、決してそのような功利的なものではない。また目にみえる形の上だけのものでもない。こういう意味で私は真の友情をはぐくみ育てることが、学生生活の第一の目標であってほしいと切に念願する。学問の研究も相互の人格研鑽もすべてその友情の上に立ってこそ格段の深さと奥行きをもつことができると思うからである。功利的な友情だけしかない学園では「万人の心を知る」ということが、人生の大きな目標であり、同時に学問そのものの大きな目標であることが、全く気づかれないでいるに違いない。ここでは、いわゆる「治国平天下」の政治の大道を明らかにすることも不可能だし、社会に生きる個人のあり方も狂ってくる。従って、友情の問題、友情のあり方を正しくすることは、同時に学問の正しい道に直接つながることであることを明らかにしなくてはならないし、また人間社会の進歩、向上を求める上にも、それをおろそかにしてはならないことを知りたいと思う。

全学連の幹部や総評幹部の激しい運動をみると、私はあの人たちが一つの主義、主張だけで固まっている段階はすでに過ぎていくようにも見受けられる。いかに主張のためとはいえ、スクラムを組んで、自動車の前に飛び込んでいくというような熱狂的行動は、単なる理知的の裏づけだけではできないものではなからう。彼らのあいだには、功利的なものから脱却した友情が生まれているに違いない。理知をこえた情意を基底にして、あの全学連の動きが進められているとしたら、それに対して内部の一部の人たちが理知的な批判や消極的なためらいをしても、その前進をくいとめるために

役に立たないことに気づかなければならない。先方が熱狂的なら、こちらも熱狂的、狂信的になれるというのではない。ここでも、階級闘争の動きが、理論闘争を背景としながらも、それだけで動いているのではないのを見きわめ、人間同士のつながりのあり方という根本的な問題があることを知って、それと取り組む勇気と方途を見出していきたいと念ずるものである。

このように考えてくると、お互いに「人の心はどうして知ることができるであろうか」ということに突き当たってくる。このことはお互い同士が、何を考えているであろうかというようなことではなく、もっと直接的に、お互いの心と心の中に、なにか敏感に感応、共感することのできる雰囲気や常を作りだしている必要があるということの意味する。学問の研究も、日常生活も、人間同士が感応し合って生活するためには、いかなる研究が必要であり、どのような生活態度が大切なのかについて、もっと真剣に究明されなければならないと思う。

たとえば、この合宿における班別討論の場で「あなたの考えや意見はどうですか」と班の指導員から聞かれたときに「まあ、あまり自分の考えはわからない方がいいでしょう」というような人がいるとする。この場合この人の態度はなにを意味しているか。私はその人は自分の心からでた「ことば」を発しているのではなく、頭の中で整理された一つの論理を発表しただけか、あるいは発声器官に命じて、ある音を発させただけであると思う。その人はなぜ「いや私は答えたくないんです」といわないのか。「そういうことはいままで考えたこともないし、いまさらここでいうのはいやだ」

となぜはつきりいわないのであろうか。中途半ばな、わけのわからない煮えきらない発音をしていて、まことの友情を生み出すことのできない雰囲気をも自分自身でつくっている。われわれの周辺の日常の会話を考えてみても同じことである。あなたが一人の友人に対して「私はこれこれこう思うが、君はどうか」と質問したとする。その友は「ああそうか、僕はこう思うなあ」としみじみとした表情と親身の態度で、それにこたえてくれる、いわば、自分の質問を胸にだきしめて考えてくれる。そうした間柄では、本当になごやかな心の通い合いが感ぜられるに違いない。「心知る」とは「人のことばを知る」ということであり、その人のことばの中に、その人の心を知るということである。ところが、これと違って、こちらの問いに対して「フンそれはなんだなあ、まあそんなところか」といって心にとめないような返事をしたりする相手は、返事をしてくれたとはいっても、それは、ある音を発したにすぎなく、少しもこちらの胸に響いてこない。こうした友だち同士の間には、まともな友情などは生まれてこないし「心を知る」ことも「ことばの中にその人の心を感じること」もできないのである。学生生活の中で正しく健康な友情を体験、把握することが、いかに大切であるかは、それが国家の将来に深い関係をもつからである。この合宿の班別討論で、お互いの意見を交換し合っているのも、実はこのような観点から努力を払っているわけである。それはいわば正しい友情の発生を念じながら、人間生活の基本としての「ことば」のあり方を正しくしようとするものである。換言すれば、のどにひっかかったような発音を、胸の中から湧き出てくること

ばに、心の奥からはとばしり出ることばに直す訓練をしているともいえるであろう。このようにい方は、立派な人格を持たれるみなさん方に対して、大変乱暴ない方であるとは思うけれども、こうした修正、精神的改革を行なわないう限り、いまの日本を救う道はない。心のこもらぬ、深い人生体験に裏づけられていない、乱れた言葉が広がる限り、日本国民が一つの心に結び合う道はないと思うからである。

それゆえに、この合宿がみなさん方に願っていることは、第一にみなさんの言葉を、またみなさんの心の奥の声を、人間本来のありのままの姿にしてみなさんの口から、常に正確に、出てくるようにすることにありである。そして第二に口先だけでものをしゃべったりしている人が、心の奥からのことばを発するようにするためには、大変な勇気が必要であることを知っていただきたいのである。それは自分自身の生活態度を大きく変革することである。自分の腹のなかのことを友だちに伝えるということは、決して生やさしいことではない。しかしその逡巡しゆん、低迷をみずからの力をもって打ち破り、抜け出す人になっていただきたいのであって、その勇気をぜひこの合宿の中に作り出し、育てねばならないと念じているのである。

しかし勇気だけあればそれでよいのではない。すなわち、勇気をもって実際の生活に入ろうとすると、そこにどういふ現象が起きてくるか。勇気は用意されても、やはり人の心は常に逆戻りしがちであり、やはり自分は自分だけで生きていくなどという孤独に陥ってしまうおそれがある。そこ

で他から、周囲からその心のゆるみを鞭打むちつてくれる友をもたなくては、人と正しく交わっていくことがきわめて困難になってくるのである。それゆえに友が必要であり、友の心を知る努力が大切になるのである。心知る友を持つことに努めつつ、友だちとの交わりの中にこれを支え、これを磨き合っていくことの重大な意義を感じとっていただきたいのである。

しかし、私は以上のようなことをみなさんに要請できるほど、私自身立派でもなければ、それができる人間だと思っではない。しかし私は、はかない、無力な人間でしかないけれども、それはきっと日本のためにいい方向なのだ、これだけのことは自信をもって断言できる気持である。

こうした合宿の中に、みなさんが四泊五日を過ごして、やがてそれぞれ学園なり職場なりに帰っていったとき、みなさんの周囲には必ず一人なり、二人なりのよき友だちがおることに気づかれることと思う。その友だちの間に、そうしたまことの友情の通い合うつながりを、少しづつでも広げていったとしたら、一波から一波へと波打って、その波はいつしか、心なごむ人の世を広げていくに違いないと思うのである。五年先か十年先か、あるいは二十年先のことかもしれないが、それがいつかは、日本全国の津々浦々に浸透していかないとは限らない。そのときこそ、あのしらじらしくとげとげしい階級闘争理論が克服されるであらうし、お互いに血肉をかけた同じ国民でありながら、敵だ、味方だとわめき合わねばならない不自然さから脱け出すことができるに違いない。そこにこそ人の世の平和が心の底に感じられて、しみじみとした人間社会が生まれてくるのではなから

うか。またそうした日本に仕上げることこそ、日本が世界文化の進展に、具体的、現実的に寄与することになるのではなからうか。従っていま世間にやかましくいわれている文化論や平和論が、どんなに浅薄、浮薄なものであるかについても、こうした面から批判しなければならぬ。そしてとげとげしい階級闘争理論に導かれた平和論や、いわゆる「進歩的」文化人の所論などが、いかにその名にふさわしくない非平和的なものであり、また非文化的なものであるかについても、よく気づいていただきたいと思う。

最後に、われわれは何々運動というようなはなばなしい運動を起す考えは全くないことをとくにお断わりして置きたい。われわれはただ日本の古い国民生活の中にも、世界文化の発達に寄与、貢献するためにかけがえのなく尊い生活態度が秘められていることを、指摘しなければならぬと感ずるのである。日本の伝統のなかにあるそのよきもの、それはまた古今東西の学問文化を正しく吸収同化する力源であったと思う。その探求を怠って、どうして進歩を期することができらざらうか。それとともに、国民一人一人が、主義やイデオロギーの幻惑からめざめて、今日の時代に生きている日本人の姿を直接この目でみ、その言葉を耳に感じ、その心を五官に感得して、日本人として生まれながらもっているその使命と生き方に、国民こそぞってなんとしてでも戻っていききたい。みなさんの周囲には、無限の宝玉が散在している「人の心」という宝が――。それを発見する仕方但至少でも身につけていただけることができたとすれば、それこそわれわれにとって、この上ない喜

びであり、来年もまたこの合宿を開催しようという決意を、われわれに固めさせる心のよりどころとなることを確信して疑わない。

班別討論

小田村講師の話のあと、一時間の班別討論を行なった。各班ともなごやかな雰囲気の中に、合宿開始以来たどってきた心の推移を、一人一人かみしめて回想したひとときであった。そのような空気のなかに、それまであまり発言しなかった人たちがかわるがわる発言した。

「これまでこの会の正体がよくわからず、いろいろと推測していた。いまはじめてこの合宿のねらいを聞かされて、裸になって飛び込めるような気がする」

「この会は右翼的な性格をもっていると受け取っていたが、右翼でも左翼でもない、広い視野の中にふまえて立っていることをはつきり知ることができた」

「これまで私は私なりの理想を心に掲げていたが、それがいかに他愛ないものであったかを知った。私は頭でっかちであった。現代の日本人は、イズム以前の内的なもので結ばねばならないという深い意義を知る必要がある」



等々、さまざまの感想がでた。

意見発表会

班別討論を終わって、直ちに全体による意見発表に移った。司会者は冒頭「ここでは班の壁、心の壁をとり払って、思い切った意見を続々発表してもらいたい。発言時間は約三分」と述べるや、たちまち「発言」「発言」と四、五人の手があがる。

まず最初に二班のK君（福岡大学生）が登壇した。

僕は個人の意見というよりも、二班の気持を中心に訴えてみたいと思う。合宿期間を通じて僕たちの班別討論はとても面白かった。講義の終わるのが待ち遠しい位だった。毎日時間が足りなくて、きのうなど零時半過ぎまで話し合った（就寝は十時だぞの声）これには紅二点がいいたこともあずかっていたが（爆笑）何としても二班の指導員の先生のリードがよかった。班別討論が理屈ほくなってゴチゴチになると、先生が雰囲気をやわらげる方向にもって行って下さる。それから森先生提案の恋愛論も、われわれを近づけるに大いに役立った。いままでに感じたことは、やはり「民族意識」のことである。左右の対立意見は別として、底に流れる共通のものがあることを、はっきり知らせていただいた。この本質論に僕たちは大きく目を開くべきではないか。先生のお話を最初に聞いておけばよかったのというのが、ほとんどの班員の一致した意見であった。

続いて登場したのが三班M君（長崎大学生）

私は個人として現在の気持をみなさん方にどうしても聞いてもらいたい。私は打算的動機から参加していた

から、最初テレビや外出禁止をいい渡されて、山岸会と同じではないかと思った（爆笑）だから私は野次馬の気分だった。班別討論の雰囲気にもなじめず、気がすっきりしなかった。講義の最中睡眠も十分とった（笑声）一日も早く帰りたいとさえ思った時もあった。しかし小田村先生の話をきいて、はじめて胸にくるものがあった。こうしてはおられないという気持ちに駆られているが、いまは朝もやが晴れたようにすっきりした気分である。これまでみなさん方にいろいろ気苦労をかけて申し訳ない。残る一日を有意義に過ごすことを誓う。

続いて一班O君（九州大学生）

僕の場合もつと深刻で、きのうはほとんど絶望的だった。耐えられなくなったので、脱け出して火口をみてきた。自分自身の勉強がいかに不足しているか。どうすることもできないドン底にまで落ち込んでいる。みなさんの意見をきいてみると、あなた方はほとんど講師に同調的だ。僕たちが受けてきた教育を無視した講義に、なぜ簡単に同調できるのか（反省過剰だとの声）みなさんは人生を楽観視しているのではないか（被害妄想だとの声）もうやめる。

O君の告白に会場は一瞬シンとなる。司会者はこれだけの告白に立ったO君の勇気を多とし「今後の真剣な探求を期待する」と述べ、次の発言者を求める。四班F君（早稲田大学生）

ただいま深刻な意見発表を聞いた。私はそれに同調しないが、そういう人もいるということは参考にさせてもらいたいと思う。私は合宿中三班のF君から、沖繩を死守したひめゆり部隊や、健児の塔の話聞いて、特別に感ずるところがあった。青春を祖国のために捧げたひめゆりの少女たちは、はたして「右翼」だったのだろうか。彼女たちはだれかに「だまされて」死んでいったのだろうか。現代の日本では、愛国心が右翼とか、

左翼とかいう特定の人たちの独占物にされているのではないか。私たちはだれにも通用できる愛国心を持ちたい。世界に向かって、堂々と発言できる愛国心を持ちたい。そして「愛国心」を唱えても、誰にも笑われない世の中にした、またそういう日本を築き上げたいと思う。

淡々たる訴えの中に、考えさせられる内容をもった発言であった。

続いて一班T君（長崎大学生）が静かに立ちあがる。

僕は一昨年も昨年も、この合宿に参加した。その間一貫して変わらない国文研の態度は、職業や意見が違っていてもいいから、心をこめて話し合おうということであった。いま同じ班のO君が、あのような意見を述べた。また来年は参加しないという人もいる。それはなぜか。僕はもつと話し合ってみようと思う。そのような人がまだおられることは僕自身のまごころが足りなかった証拠だ。

続いて六班E君（山口大学生）が登壇する。

私も日本人だ。日本を愛する。しかし日本を愛するということは独善的であってはならない。だれにもわかってもらえるものでなくてはならない。「赤だから」あるいは「新教育を受けたから」ということで差別をつけては独善に陥る。そして日本を愛することが、外国にも広がる可能性のあるものでなくてはならない。さらに付言したいことは、この美しい情意が、政治や経済も解決できる広がりを持たねば枯れてしまうということである。

運動とか会とかが組織をもったとき、ともすればセクシヨナリズムになりやすい欠陥を突いた意見であった。

次に二班I君（鹿児島大学生）

現在の混乱した日本の諸問題をいかに解決するかを求めて合宿に参加した。賛成できる場所もあり、受け入れられない場所もあった。しかし合宿は知識や意見をすべて受け入れるところではなくて、お互いに融和する道を発見する場所だということを知って、心が軽くなった。とくに印象深く残るのは、何といっても班別討論である。そのうえ小田村先生の話を聞き、国民同胞感の未知の世界に生きようという決意を胸にいだいて帰ることができる。川井先生は最初に、合宿から何かを持って帰ろうなどというケチな気持ちを起こすなといわれたが、持って帰らなければならぬ重大なものがある（その通りの声）ことを私は確信をもって申し上げることができた。

続いて四班Hさん（福岡学芸大学生）女性として最初に発言した。

確信にみちみちた先生たちのお話を拝聴して、私の小さな心は風にそよぐ草のように揺れ続けた。根の小さな草は支えることもできず迷い続けた。あまりにもかげ離れたところから吹きまくる突風の中で、やっと身体を支えてくれたものは、女性同士寝室で話し合ったときであった。私たち女性は、女性だけの合宿を別の部屋で持っていた。こういう意味で、女性だけでこのような合宿が持てたらとてもすばらしいと思った。いや「女性の参加者がもうすこし多かったら」「女性に身近かな問題も先生方がとりあげて下さったら」というのが、私たちのお願である。

次いで二班S君（九州大学生）が立ち発言した。

多くの人から、班別討論は楽しく、講義は味気ないようにいわれたが、私は反対だ。私は班別討論になじめないで困った。それに反して講義では、日ごろ考えてもみななかった大切な点を指摘され、大きく目を開かされ

た。先生方はすがすがしい日の丸の前に立たれて、東洋独自のもの、日本民族としての統一原理、そのようなものを深い信念に基づいて述べられた。この思想に到達されるまでの先生方の苦しいご努力を思つて、私も勉強への強い勇気を与えられた。私にはそういう意味で、講義は班別討論以上に有難いものであった。

時間はまたたくまに経過する。発言者の手はひきもきらさずあがる。司会者の「あともう一人だけ」という注文で登場したのが、二班H君（福岡大学生）であった。

私は露骨な言い方だが、花田先生に安心して死んで下さいということが出来る（爆笑、拍手）花田先生の昨晚のお話には、死んでも死にきれないお気持がこもっていることが十分わかった（拍手）私たちがもつと責任感を持つて行動しておれば、もつと早く安心されたであろうと、いまにして情なく思っている。私はいまはじめて人間としての道を与えられたような気持がする。「老兵は死なず」、花田先生がたとえ消え去られたとしても、先生のお志は必ずや私たちの心の中に生きることを通して上げて感想を終わる。

意見発表をしたくとも、時間のないのを残念がる人たちは、閉幕後もあちこちにグループを作って話し合いを続けた。班指導員が就寝するようによつても「私たちの気持がわかってもらえないのですか」と逆に応酬する始末で、指導員の方がタジタジのいでであった。

検討会

講師と各班指導員は例によつて、本部に集まった。高調した意見発表のあとなので、検討会の空気もなんとなくはずんでいる。まず長崎大学のU講師が口火を切る。



「今晚の班別討論では六班に行ったが、二、三日でこうも変わるものかと驚かされた。これまでを振り返ってみて、合宿運営に非常な研究と細かな配慮がゆき届いていることが感ぜられる。こういう盛り上がりは、講義だけではとうてい実現できない。本合宿に一番大きく寄与したものは、やはり班別討論であったように思う。あすの最終日は予定を変えてこれを中心にやられたらどうであろうか」

続いてH氏は

「学生との間に深い断層があることを知り、これではどうにもならないと半ばサジを投げた形だったが、ときほぐす道のあることがわかった。いまは講師と参加者のギャップは埋められようとしている。何がこのような結果をもたらしたか。整理して置く必要があると思う」

これをうけてT氏は

「青年時代に教えてもらったことはだれも愛したものだ。学生諸君の気持はよくわかる。それをこっちに行けといったのでは解決にならない。私たちの間でこの解決策を見出さなければならぬ。この合宿で私たちは日本歴史、東西文化の対比を訴えた。それはわれわれとして百パーセントの努力であった。しかし私

「私たちは痛めつけられた。このなんともいえない苦悩の中から時代の断層を踏み越える方途を生み出したい」と述べた。また

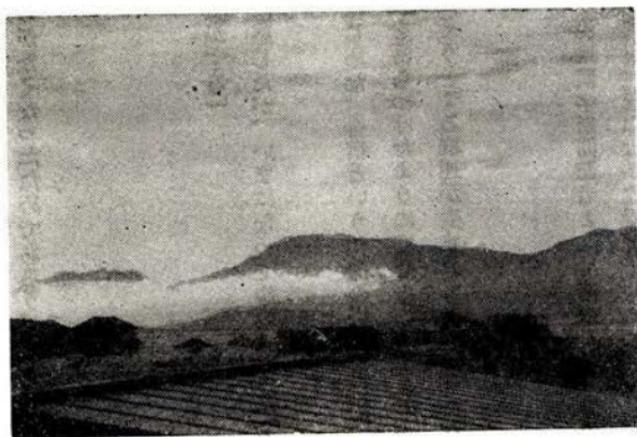
「われわれはもつと学生たちに接近して、バトンを渡さねばならない。後輩にわかつてもらえる魅力ある言葉、表現方法を生み出さなければならない」

「古きよき明治時代を回想したら青年学生はとたんに心を閉ざしてしまう。まず青年、学生一般が心ひかれる西欧の例を引いて心を開かせる。それから西欧と明治の比較をやる。一足飛びにゆこうとしたら無理が起ころ」

「青年、学生は自分自身で一度経験しなければなっとくしない。私たちは、彼らに何をいかに経験させるかということについてのすぐれた演出者にならねばならない。ソクラテスが『哲学者は産婆役だ』といったように、青年に自己の考えを生み出させてやる立派な産婆になることが必要だ」

などの意見も出された。この「時代の断層」といかに取り組みいかに解決するかということこそ、現代の指導層に課せられた宿命的な問題であろう。時計はすでに午前二時半を回っていた。

国民同胞感の生成へ
(第五目)



いよいよ合宿最終日である。参加者全員の肉体的疲労度は、限界に近づきつつあるようにみえる。しかしどことなくすがすがしが漂っている。これは昨夜の小田村講師によって触発された各自のおもいが、引き続き行なわれた意見発表会によって吐き出され、心にわたかまるものがなくなったためであろう。けさの阿蘇は、山麓から中腹のあたりまでぼうと霞み、太古の姿を想起させる。

「現在の君の心境は？」

「悲喜こもごも、波乱万丈だネ」

「合宿開始らしい五日目だが、もうずいぶんたつたような気がする」

「はじめは自分とあまり関係のないことをやっているように感じたが、いまになって傍観者では仕方のないことがわかったよ」

アウトサイダーを自認していた人たちの心も、ようやく動きはじめた。合宿という共通の場のなかに、学生も、女子学生も、そして民間から参加した人たちも、じっくり腰を落ちつけたように感ぜられる。この一体的雰囲気の中に、すこしずつではあるが心の通いあう世界を作り出そうとする機運が生まれてきているようだ。

この日の最初の講義は木下彪講師である。

（若くして満洲、中国に遊び、現地漢字新聞記者として活躍した。宮内省御用掛、外務省研修所講師を経て現在岡山大学教授）

歴史なき現代に思う

岡山大学教授 木下彪

今度の合宿では、野口講師の天皇制や忠孝の倫理に関する話に諸君の反発が強く、また中山先生の現代史、中国関係の話も諸君にはよくわからなかったという。中山先生のように、身をもって現代史を体験してこられた人の生きた話が、わからないというのは何故か、戦後の教育を受けたものと、戦前のものとの間に見られる大きな断層のためであろう。

中国清代の学者龔自珍（きんじしん）の史論に「人の国を滅ぼさんとすれば、先まずその史を絶つ」とある。これは中国ばかりではなく、東西古今の歴史にみる事実である。それどころか、敗戦の日本でもこれが行なわれてきたではないか、全く他人事（ひとごと）ではない。占領軍はわが国の歴史教育を禁じた。人の国を滅ぼさんとしてまずその歴史を絶った。国が滅びるとは国民が死滅することではない、他国の奴隷になることである。社会科などといって本当の歴史を教えず、社会だ、個人だとばかりいっておれば、国家観念は無くなり、国民精神は消えてしまう、つまり日本の国を忘れ、日本人たるの自覚を失わせるような教育が行なわれた。日本はつまらん国だ、悪い国だ、お隣の中国、平和な印度が

うらやましい。どうしてこんな世の中に生まれたのだろう。”私は貝になりたい”。こんな無気力、劣等感が青少年を支配した。まさに民族の自殺である。それに唯物史観に立つ左翼の学徒が、ことさらに祖国を誹謗し、天皇制を傷つけるに適したように資料を集めたり、継ぎ合わせたりして黒白転倒の歴史——実は歴史でも何でも無い、イデオロギー宣伝の具にすぎないものを書き散らす。岩波新書の「昭和史」だの、東大出版部の「天皇制」だの、すべて浅薄な一方的偏見と独断で片づけている。社会科学の教科書もまたたいいこの類いで、本当の日本から見たら皆ウソだ。しかも占領軍の申し子である日教組が背後にいて、十何年も彼らのいう平和教育——世界が平和になれば日本なんか滅びてもかまわない、奴隷になっても平和を守れというような、低能に等しい非常識を、次代の国民に植えつけてきたのであるから、奴隷化の道、洗脳工作は、ほとんど成功したといわねばならない。ことわざに「狂人走れば不狂人もまた走る」という。残念ながら日本の現状がこれだ。

「白熊が紙の鎖につながれることはめったにない」と西欧人はいう。はたせるかな、大東亜戦争の末期にスターリンは、日ソ中立条約を反故にして日本に挑戦した。しかもそのいい分が「日露戦争の仇を討った」である。その憎々しい一言を聞いた時、日本人はみな啞然とし、不覚にも忘却の彼方に置いていた日露戦争を思い浮かべた。敗戦で虚脱状態に陥った国民は、今度の戦争は日本の侵略が原因だ、お前が挑発者だと敵国人からいわれれば「ハイ申訳ありません」と頭を下げる。はては日清、日露戦争まで日本の侵略だなどといわれて、一言も反発しきらない。そして日本人が日

本を譲り、嘲けり、踏みつけにする、いわゆる自虐症状が熱病のように蔓延した。それに国民的憤りを感じずる人もあって「明治天皇と日露戦争」という映画を作り、これが大いに世間に受けた。私の友人H氏は中学に通う男の子をつれてそれを見にいった。見終わって映画館を出ると、その子が「お父さん、日本も戦争に勝ったことがあるの？」と聞く。日露戦争を知らない中学生である。

以前何かで読んだのであるが、明治二十八年の三国干渉直後のこと、東京のロシア公使館で、ある日公使は通りかかった日本の少年を呼び入れて談笑した。果物を与えようとしたところ、少年は拒んで受けない。なぜかと聞くと、ロシアは日本の手から遼東半島を奪った。だから日本人はロシア人のくれる物など受け取らないといったという。公使はこのような子供までもとひどく感心したそうである。

この二つの話は、今の教育と昔の教育との違いをよく現わしている。私は何も戦前の歴史教育でなければならぬとはいわない。しかし戦後社会科学の名で行なわれている教育は「人の国を滅ぼさん」とする敵国の謀略に簡単に乗ったもので、それを独立後の今日まで後生大事に持ち続けている馬鹿があるかというのだ。

由来日本人はあまり歴史を重んじない、歴史を書くことに不得手な国民ではないかと思う。中国の梁啓超は「日本立国二千年、無三正史、私家記述、穢雑不可理」として、日本の官私ともに歴史の不完全なことを指摘している。中国の二十四史くらい正確詳細で完備した記録は世界に比類が

ない。梁氏はその目でみて日本に正史がないという。實際三千年の国史の根幹として筋の通ったもの、歴史として統一し総合したものに欠けている。明治、大正もすでに過去の時代となつて久しいが、いまだに完全な明治史も大正史もないではないか。かつて皇太子はジョージ五世伝を勉強しておられたという。そのわけはわからないこともないが、一体不出世の名君、世界的な英主であられる明治天皇の御伝記はどうなっているのか。諸君が日清日露の二大戦役を勉強しようとして方々の書店をあさつてもこれというものはない。そういえばこの一、二年日本史、日本文化史などの講座や全集が続々刊行されているというであろう。しかしこれらのものは、時代の風潮に便乗した営利出版業者と唯物史学者の共同作品で、部分的、断片的に歴史を取り扱ったものの寄せ集めに過ぎない。日本の永遠の歴史的生命の本質を知るものにはならないし、内容も大いに警戒すべきものがあるようだ。いまこそ正しい日本歴史、新しい歴史教科書の編纂さんがなされなければならない時である。

私は最近中国の友人沈雲竜氏から同国の近代史に関する数種の著書を贈られた。その中に「我們中国人は一歴史最悠久的民族、同時也是一最重視歴史、並在史学上最有成就的民族、我們有兩個史学伝統、一是国家的、二是私人的」——われわれは歴史の古い、歴史を重視する、歴史的業績の多い民族だ。国家的、個人的に歴史学の伝統がある——といっている。また「最近十年、由大陸、由台湾、由海外、所發現、所印行、或就原件節録印行的中国近代史或現代史資料、至少不会少於五百種、或三千万字至五千万字」ともある。中国の歴史ことに近代史の研究の盛んなことは日本の比で

はない。日清戦争にしても中国人の本を見れば、実によく詳細なことがわかるし、今なおこれらの資料や論評が刊行されていることは、一考に値するところである。もっとも最近大陸に行なわれている唯物史学には、不純でかたよったものが、はなはだ多いことも知って置かねばならない。

今やわが国では文学といえは小説しかないかのように、日に月に膨大な量の小説が生み出され、それが丸呑みされている。まさに小説狂時代である。これは世道人心に裨益するどころか、むしろ害毒を流す方が多いであろう。こういうものに費やす時間や精力が少しは正しい歴史の方に向けられないものであろうか。青年学生が素直な目で日本史を見直す、再発見するという気持で、また戦後極度にゆがめられた国史に対する再検討の意味で、記紀や万葉集、中朝事実、日本政記などに真剣に取り組んでくれたらと思うのである。

昨日小田村講師が、シドニーに進入したわが特殊潜航艇の勇士を、濠州は海軍葬をもって手厚く葬ったという話を引用された時、私はこれに似た話を古い記憶から呼び起こした。私は小学校の時——日露戦争の数年後——親に連れられて旅順に行った。表忠塔のそびえる白玉山の麓に、わが海軍閉塞隊勇士の墓所があった。当時わが海軍が旅順口の閉塞戦を行なった時幾人かの勇士は、勇敢にもあるいは口にナイフをくわえ、あるいは手に軍刀を握って海を泳ぎ、黄金山の断崖をよじ登って敵と戦った。後でその遺体を片づけた敵の砲台司令は、驚いてこの状況を主将ステッセルに報告した。それを聞いた彼は「日本は神国と称しているそうだが、この度の閉塞隊勇士の行動は、人間

業ではない、神業であろう。波に打ち寄せられた他の遺骸とともに丁重に埋葬せよ」と命じ、そうしてでき上ったのがこの墓である。濠州海軍の義挙とともに合わせ伝うべき美談であろう。後年在留邦人が、そこに桜の木数十株を植えたのもゆかしい行為であった。

旅順陥落後ほどなくして有名な水師管会見が行なわれた。この時乃木大将は、ステッセルに「露軍戦死者の墓が所々に散在しているが、今後自分ではできる限り一所にまとめて、不明のまま埋もれているのを防ぐつもりである。これについて閣下のご希望があったら承りたい」と述べた。これに對しステッセルは「閣下の周到な注意がこのようなどころにまで及ぶとは全く想像もしなかった」と深甚な謝意を表した。こうして露軍将士の遺骸は、小案子山の麓に墓地を定めて手厚く埋葬された。その後日本政府によって白玉山のわが表忠碑とともに、露軍墓地にも欧風の立派な忠魂碑が建てられた。明治四十一年、天皇はとくに乃木大将を御差遣になり、露国皇帝も代理を送り、盛大な除幕式が行なわれた。「日本は祖国のため皇帝のためにたおれた露国軍人の遺骸をここに葬り、その英霊を弔い忠節を伝えようとしてこの碑を建てた」という意味のことがその碑に刻まれた。それから何年かのち、旅順籠城戦に生き残った露兵数十人が、この墓地に詣って花環を捧げたことがある。一同はその足でさらに白玉山に登り、納骨堂に花環を手向けた。それには「忠勇なる日本帝国軍人の英霊に捧ぐ、旅順籠城露国軍人生存者一同」と露文で書いてあった。今のソ連とは違って、そのころのロシアにはまだ宗教があり、軍隊には騎士道の精神が伝えられており、日本にも武士道

が実践されていた。

除幕式から帰った乃木大将は、ある日学習院の学生を南寮に集め、当日の所感をのべて訓辞された。「ロシア側は多くの僧侶を伴ってきて、ロシア式に戦死者を祭りたいと申し出たので、これに同意を与えた。彼国の僧侶は態度きわめて敬虔で、一人の大僧正らしき者が長文の祭詞を読んだ。その中に、この祭典は単に死者の冥福を祈るばかりではない、死者はすでに軍人たるの本分を尽し、今は天国にあって神の祝福を受けているがゆえに、むしろ生存者が戦死者に対する礼を尽し、また国民をして常に国家に対する忠誠の念を忘却せしめないようにするために執り行なうものである……とあった。これはまことに感ずべきことである。日本人たるもの戦勝に気驕り、安きに馴れることなく、学生はますます学業に励んで、一意君国に尽すという覚悟がなくてはならない」と。

一方故国に帰ったステッセルは、一九〇八年軍法会議により死刑を宣告された。これを聞いた大將は、ステッセルがいかに善戦善防したか、もっともよくこれを知る敵將の立場において一文を草し、当時パリに駐在武官としていた津野田少佐(前乃木第三軍参謀)のもとに送り、フランスおよびイギリスの新聞に大々的に発表させた。それが露国に大きな反響を呼び、ステッセルは減刑にあい次いで出獄を許された。数年ならずして明治天皇が崩御になり、御大葬の日乃木大将は殉死した。わが国はもとより、世界中の人々がこの名將の死を惜みかつ讃えた。その時匿名でただ「モスコ一の僧侶より」として丁重な弔電に多額の金を添えて送ってきた人がある。発信地を調べてそれがス

テッセルであることがわかった。当時はモスコウ郊外の田舎の一農夫におちぶれていたのである。旅順開城の日、乃木大将がいかに敗将の名誉を重んじ、かつ懇ろねんろにこれをいたわったか、「ああいう立派な將軍と戦って負けたのなら、負けても悔ゆるところはない」とステッセルはいったという。一九一〇年イギリス皇帝の戴冠式に参列した乃木、東郷両大将は、英国上下をあげての熱狂的大歓迎を受けた。自己の名声のますます高くなるにつけ、敗残の将に對する同情の念はいよいよ深くなった。英国よりの帰途、ステッセルを慰問しようと決心し、百方手を尽したが、露国内にこれを妨害する不穩の空氣があり、ついに目的を達することができず、怏々おひびきとして帰国した。それから二年にして乃木大将は逝ゆき、これに遅れること三年、一九一五年ステッセルも逝いた。血あり涙あり、花も実もある話ではないか。これと対照的に連想されるのは、今次大戦におけるシンガポール開城や戦犯裁判とその処刑——一片の人情味すらない、憎惡に満ちた冷酷な闘争と復讐しゅうである。

今度の戦争でソビエトは、國際法規を無視して、我が捕虜を抑留し、酷使虐待し、死者が続出して棄すてて顧みなかった。恨を吞んで異境の鬼と化した同胞は、その数幾万なるかを知らない。彼の悪虐無道はすでに世界の認むるところである。敗戦で自暴自棄になった日本人は、戦死者のことなど顧みるものもなく、いたるところ忠魂碑は倒され埋められ、靖国神社は荒れに荒れた。私は東京に往復するたびごとに、東海道浜松辺で、銅像が脚のところから折れて台石だけ残ったものを見た。土地の人に聞いたところ、空襲でこわされた乃木大将の銅像であり、その折れた部分は保存さ

れていて、これを東京の乃木邸跡に移す計画もあるが、戦後共産主義者たちが「我等の祖国ソビエト」を負かした敵だからといって乃木邸を焼こうとし、かえって進駐軍に制止されたこともあり、まだ決まらないでいるということであった。

大正以来乃木の伝記類は百種を越えるという。米人記者スタンレー、ウオッシュバンの書いた「乃木」は絶好の名著であろう。ウオッシュバンは日露戦争に従軍記者として乃木第三軍に配せられ、それから一年あまりの間「直接乃木大将を見、かつ乃木大将を知るに及んで、その人格と天稟てんれいとにかく感激させられ」「Father Nogi」と呼び慈父のごとく景慕し「將軍が偉大な軍人であることは世界中で知らぬものはないが、その個人的私的方面の純真まこと掬くすべき温情、婦人の優しさにも似た親切、愛嬌あいせうに至っては、ほとんど英米人に知られていない」といって、克明に將軍の人間性を描写し最後に「Nogi was such a man」の一語をもって全篇を締めくくっている。一九一三年ニューヨークとロンドンで出版され、わが国でも翻訳されているので是非一統をすすめたい。なお私はここに二人の著名な社会主義者の珍しい乃木評の言葉を引用したい。河上肇は「人々は乃木大将の死を悲しんで、乃木家の断絶を悲しむに暇ひまなき様子である。大将の死も惜むべき事には相違ないが……国家の為に最も惜むべきは、大将のごとき尊むべき人格者が、不幸その子孫を遺のこさずして死去された事である。大将の血が永遠に失われたという事である。これこそ実はわが国民が千万年にわたって

回復することの出来ぬ血液上の大損害である」と、日本民族の血を論じた中にいっている。社会主義者義も昔は違っていた。大庭柯公は「偉人乃木大将の非凡なる死歿後は、今において幾多の伝記、教訓類の刊行を見るべし……」。大将を吾人の子孫に伝えんとするには、真にその人とその筆を扱ばざるべからず。予は「品川子爵伝」の著者村田峰次郎氏を知る。氏は村田清風先生の孫にして徳あり学あり、乃木大将伝はかかる人の手に成るの至当なるを想う」と、その文中で述べている。一体青年学生が自国の世界的偉人のことについて、何も知らないでいてよいものであろうか。

今次大戦中の国軍はもはや日清、日露当時の皇軍ではなかった。このことは六十年來日本を知り日英外交に尽したピゴット少将が「戦争に残虐行為はつきものだ」という大胆な所論がある、これは大体真理であろう。これについては身の潔白を証し得る国は世界中どこにもない。しかしこれは日本人には当てはまらない。日露戦争および北清事変の時に示した日本人の行動は、非の打ちどころのないほど立派なものであった、動かすことのできぬ証拠がある。何が日本人をこれほどまでに墮落させたのであろうか？」と戦後の著書でいっている。同じことは日露戦争のころ日本にきて、乃木、東郷などわが武將の風格を尊敬をもって眺めたことのあるマッカーサー元帥も「明治の日本と今日の日本とは、同じ人種同じ軍人とは思えぬ」といっていたという。名は同じ日本でも半ば異質の国になっていたのである。それが戦後さらに一変してしまった。戦後の日本をみにきたピゴット氏は、大きな失望をいだいて帰ったらしい。

このような時に当たって、今秋東京で大東亜戦争戦没学生の慰霊顕彰祭が行なわれるという。若い青年学生の間にかかる気持が起こったということは、日本が立ち直る前兆であろう。戦没学生は欧米では昔からあり、各国各様に記念されているが、日本では初めてのことである。敗戦心理はこういうことには思い及ばなかった。そればかりか犬死だとか、だまされたとか、聞くに耐えない言葉をもって、殉国の英霊を冒瀆してきた。この意義深い学生たちの企ては、全学連や愚連隊に愛想をつかした世人に清新な感銘を与えるであろう。「青年よ銃を取るな」というものがある。国家の危急に当たって、青年が真先に逃げ出すような国は、地球上に存立する価値はない。最近の「平和屋」の平和のかけ声の中に平和はない。平和は戦う気力あって戦わざる者の上のみある。今世紀の初めスイスの画家ホドラーがかいた、一九一三年の自由戦役における、イエナ大学生出征の図と、いう有名な歴史画がある。誰か大東亜戦争徒出陣の図をかいて、明治神宮外苑絵画館の壁画につぐ歴史画の一つとする日がこないであろうか。

さらに日本国際政治学会では、外務省その他の賛同援助を得て、大東亜戦争の原因ならびに責任の問題を調査研究し、完成の上はこれを世界的に刊行する計画を立て、すでに着手したと聞いている。またアジア大学には日露戦争研究室が設けられたという。誠に結構なことである。しかしこのようなことは、国家的事業として政府の責任において為すべきことではあるまいか。米国においては、すでに歴史学会会長ピアード博士により「大統領ルーズベルトと一九四一年の開戦」という大

著が発行せられ、その他有力な学者たちによって太平洋戦争の責任がむしろ米国にあるという論証が行なわれていると伝えられる。同じことは英国にも現われているといわれる。それに引きかえ卑屈きわまる日本人、なんでも長いものには巻かれよ、日本が悪いのだから仕方がない、軍閥が勝手にひき起こした戦争である、負けた以上侵略呼ばりされてもやむを得ない、こう決めて東京裁判の判決をう呑みにしているようである。日本としても反省すべき点はもちろん多いが、この罪悪感とそれに伴う劣等感から脱却しない限り、日本人はいつまでも立ち上がれない。私はさきに歴史を重んぜず、歴史を書くことに不得手な日本人といったが、今日ほど日本人が歴史に盲目になった時代はあるまい。また今日ほど歴史の重要な時代はない。それゆえに、いまこそ正しい日本史、ことに正しい近代史が書かれなければならない。

先年中共の郭沫若（かくまつじや）（全国人民代表大会常務委員会委員長）が日本に來た。その彼は「日本の明治維新は東洋の奇蹟だ」といい、明治神宮に参拝した。またかつて留学した六高の岡山で講演し、冒頭に「私は日本で愛国心というものを学んだ」といった。明治大正のころ中国から大勢の留学生がきた。彼らは日本人の愛国心に動かされ、ことに尚武の精神に感じ、隆々たる日本の発展に学んでそれを祖国に伝えようとした。有名な戴天仇はその「日本論」の中に書いている。「一民族が発展進歩しようとする時、尚武は最も必要な習性だ。日本人が尚武的であることは人々の知るところ、この点は十幾万の留学生が各々日本人に代わって十分宣伝している。——一個民族要發展進歩、尚武

当然是一個最必要的習性、日本人の尚武、是人々知道的、這一点到是十幾万留學生、人々替日本人宣傳得够了」そのみならず「日本の社会には中国礼教の美点が確實に流行しているが、中国にはただ礼教の腐敗無用の墮力が残っているだけだ。——日本の社会裏面、所以確實流行着中国礼教的好処、而中国只保留着礼教的腐敗無用の墮力」この觀察は正しい。中国人は留學生を通じて日本の好さを知り、日本のような立派な国になりたいと願った。辛亥革命が起ころや、留學生等は學生服のまま祖国に飛んで帰り、直ちに銃を取って戦った。だから中国では一時詰襟金ぼたんの日本學生服を指して革命服と呼んだ。

明治の世が去るとともに、だんだん日本の墮落が始まった。明治天皇が崩御された時「日本はずでに下り坂に向かいつつある」とロンドンタイムスは指摘した。はたして戴氏もこれを見逃さなかつた。「一千余年間、中国と印度の文明をとり、日本人の血液中に調和されていた一種独特の日本文明が破壊され、日本人の自信力は衰え、民族的分裂が拡大した……尚武的精神、和平的精神もともに低落した……これは大都市における現象で、地方ではまだ日本本来の面目を見ることができうるんぬんと。恐るべき慧眼といふべきであらう。また昔東大で哲学を講じたケール博士も同じことをいって日本人に警告したが、日本人の耳には入らなかつた。自信力を失って祖国を忘れ、思想的に分裂した日本人の墮落は、昭和に入ってますます甚しく、ほとんど国家の崩壊に至るかと思われた時満州事変が起こり、ともかく挙国一致緊張した。だが敗戦とともにゆるみきつて、墮落の上

にいつその退廃が加わった。戴氏のいうごとく「一種独特の日本文明が破壊された」ばかりでなく、アメリカニズム、共産主義の毒素が、この国の骨の髄まで余すところなくしみ込んでしまった。「尚武精神」は封建的悪徳としてしりぞけられ、「和平精神」は平和の名を藉る敗北思想と化した。「日本人の自信力は衰え、民族的分裂が拡大した」。予言者のようなこの戴氏の言葉は、目に見えぬ三十八度線で左右に分裂した日本、国家に自信を失った国民の現状に当てはまる。民心はばらばらで国論一致せず、国策が定まらぬことは全く致命的である。戦争に敗れたために国が減んだためしはめったにない。内部分裂によって滅び去るのである。われわれは「ローマを滅ぼしたものはローマ人自身であって、北方の蛮族^{ばら}ではない」という歴史の教訓を思い出さずにはおれない。

この日本の危機を救う者は誰か。政界、学界、教育界、宗教界、マスコミの各界に誰もいないのではないか。そればかりかみんなこの日本を滅ぼそうとしているような現状ではないか。そういう中であって久しく焦慮と危惧^{きん}の念にたえなかつた私が、ようやくしてめぐり合ったのが国民文化研究会であり、年一度の合宿研修会に集まる青年学生であった。ことしはさらに大学教官有志協議会が生まれ、両者の共同主催で合宿が営まれたことは喜びにたえない。私はこの夏は北海道に遊びたいと思っていたが、どうしてもこの合宿に心引かれ、予定を変更して阿蘇にきたのである。

北海道といえば、二十九年の夏、天皇のご巡幸があった。室蘭の日鋼製鉄所では二千人の労組員がストライキの最中で、赤旗とインター、スクラムが生まれ、反天皇的言辞が飛び、不穏な空気が

みなぎっているところへ、お召し自動車は近づいていった。とたんに組合員の幹部らしい一人が、赤旗を手にして躍り出すや「天皇陛下万歳」を絶叫した。強く組んだスクラムも解け、人々はこぞって万歳万歳と叫んだ。組合員であろうと、赤旗を振ろうと、本当はわれわれと同じ気持の日本人である。天皇を中心に二千余年団結してきた民族の体内を流れる脈々たる血潮を抑えることができなかったのだ。

五十年間側近に仕えた甘露寺元伯爵（現明治神宮宮司）が書かれた「背広の天皇」の中に「赤旗の打ち振られる中へもずんずん入っておいになった。その赤旗もいつかおろされ、インターナショナルの歌も次第に君が代に変わった」とある。こういう例はたくさんある。一再ならず凶変に会いになった陛下には、赤旗も革命歌もなかった。この陛下の勇氣はどこからくるのであろうか。「陛下は天授、人力に非ざるなり」と中国人がいったごとく、真に天授としか思えない。悠久の日本歴史とともに歴代の天皇から受け継いでこられた御徳の力は、さすがに争えないものがある。マッカーサーが、一度お目にかかってすっかり感服したことは、すでに世間周知のことであるが、エチオピア皇帝やフィリピン大統領や、その他一度陛下に拝謁まじらしたものは、みな傾倒して大の親日となり、それが直接間接、日本の国際的信用にどれほど大きくプラスしているか。天皇制をうんぬんするものに知らせたいことである。

諸君もご承知であろうが、札幌から五六里離れた広島村という所に、有名なクラーク博士の碑が

建っている。明治初年、札幌の農大に招聘されてきた米人クラーク博士は、わずか一年で農大の基礎を築いて帰国した時、恩師を慕って徒歩でここまで送ってきた学生に「青年よ大志をいだけ」という力強い一語を残して去った。短い平凡な一語であっても、人と時と所を得れば、それが一大金言となって、当時の青年学生を感奮興起させた。それは北海道の開発だけでなく、日本を東海の孤島から世界の強国に推進させた一つの原動力ともいえよう。そのため日清戦争後には隣国から前後十何万の学生が教えを受けにきた。ところが今の日本はどうであろう。二三年前だったか、中国の雑誌に「東京には一週間に一つずつ映画館が建つ。数において世界一、これにはニューヨークも及ばない」とあった。目にあまる享乐的施設の過剰である。現代青年の悲劇は大志があり過ぎて苦しむのでなく、反対に無さ過ぎて苦しむことである。精神の空虚を満たそうとして、感覚的な享楽を追っているかに見える。かつてあれほど国を愛し、民族を愛し、わずか数十年にして東洋の歴史を一変させた明治の日本人の子孫ではないか。それが敗戦後の日本には勇気が否定され、生きとし生けるもののきわめて自然な、自衛の本能までが麻痺している。血の気の多い青年が、いつでもこの現実にとどまるとは、どうしても思えない。私は諸君に、勇気を持って、自信を取り戻せと叫びたい。やがて諸君の胸に、愛国の熱血が、阿蘇中岳の噴火のように燃え上がる日を期して待とう。

木下講師はこの講義の中で言及しているように、この合宿に心引かれ、夏休の日程を変更して出席された。講師は豊富な史実と資料を引用し、講義を進めたが、青年学生に対するその情熱は、参加者の胸に強く訴えるものがあつた。持ち時間三十分という時間的制約があつたため、参加者の中にはもうすこし、講師の情熱のいふぎに接したいという声もあつた。

続いて福岡大学教授森三十郎講師が演壇に立つた。

(五高、九大法文学部卒、外務省事務官を経て現福岡大学教授「憲法、行政法、ユダヤ法専攻」日本公法学会々員)

マッカーサー憲法と国民主権

福岡大学教授

森 三 十 郎

この合宿で若い世代の方々は、天皇制について何か釈然としないものを感じたり、古い世代の講師の説明に反発をいだいたりするものが多かったようだ。それは戦後の民主主義が、若い世代の方々にかなり浸透し、それが意識的または無意識的に、反発または反情を抱かせるメンタリティとなっているのではないかと思われるので、デモクラシー、とりわけ国民主権の問題を取り上げてみようと思う。

ヘーゲルの歴史哲学の中に「ここがロードスの島だ。ここで踊れ」*Hic Rodos hic tange* という言葉があるが、われわれはまず、自分たちが踊っているロードスの島が、どこにあるかを反省してみる必要がある。われわれは、もとより時間と空間の制約を離れ、天馬空を行くごとく思惟することはできないのであって、謙虚に自分が育ってきた時代や環境を顧み、自分が寄りかかっている思想的シュタンドポイントを洗ってみる必要がある。禅に「脚下照顧」という言葉があるが、自分の足下は「燈台下暗し」になり易いのである。この意味で「汝自身を知れ」というソクラテスの

言葉は千古の金言である。

日本国憲法が制定され、新教育が開始されたころの小学校の一年生が、今では高校の三年生くらいになっている。したがって学生諸君はその時二年生から四年生ぐらいの学童であり、物心ついてから民主・平和憲法の精神的支配下に育ってきたわけである。しかも、きわめて恵まれない社会生活、劣悪な教育環境のもとで、大切な青少年期を過ごしてきたわけである。すでに一千万以上の若き国民が、多かれ少なかれ、新教育の洗礼を受けて学窓を出ており、現在高校以下およそ千五百万の児童生徒が、その支配下に置かれている。「鉄は熱いうちに打て」というが、物心ついてから六年も九年も、民主主義、平和主義をたたき込まれれば、いかに科学的、合理的に物事を考えることが好きな学生でも、これから脱却することは容易ではなく、なんとなく従来の天皇制に割り切れないものを感じたりするのも当然であろう。しかも、天皇制については、ほとんど何も教えられず、ろくに食べてみ、味わってみたこともないというのではなおさらである。頭でなんとか解決できても、意識の深部においては、何か沈澱したものがあって、それが古い世代の方々の言説に、反発を感じさせるメンタリティになったりする。したがって、諸君自ら自分の足下を見つめ、この内心の障壁を突き破らない限り、いぜんとして「燈台下暗し」になり、光に面することはできないであろう。

諸君は「科学的、合理的」という言葉が好きなようだからできるだけ科学的、合理的に考えてゆ

こう。

現行憲法は正式には「日本国憲法」であるが、俗に「マッカーサー憲法」「占領憲法」などとも称されている。これはいうまでもなく現行憲法の「ニクネーム」である。ところで、このマ憲法をいかにすべきかということについては、今日国論は分裂し統一を欠いている。

その一は護憲論である。これはマ憲法を擁護すべしという主張で、あるいは「理想的な憲法」あるいは「善美なる憲法」と賛美し「生命をとんでも憲法を守れ」などといっている学者もある。社会党、共産党、総評、日教組、「進歩的」学者や文化人等々、いわゆる左翼の方々がその首唱者である。それらの人たちは、このマ憲法を橋頭堡として、将来はこれをさらに左旋回させようというのが本当のハラであるが、保守的方向への改変をなんとか抑えるために護憲の旗印を掲げているに過ぎない。だからこの派の人たちのものは、戦術的顧慮からする護憲論である。これに反してまともなこの憲法をそのまま守るべしと考えているものもある。個人主義的リベラリストやデモクラットあるいはコスモポリタンといった思想傾向の人々に多く、キリスト教徒もこの陣営に属している。

その二は改憲論である。これはマ憲法を改正すべしという主張で、いろいろな分派があるが、おおむね保守的方向において真剣に論ぜられ、考えられている。大別して部分改正論と全面改正論に分けられるが、後者といえどもマ憲法の根幹、すなわち基本原理または指導精神、その世界観的基礎を変更しない限度における改変を考えている限り、やはり「憲法の革命」ではなく、憲法の改革

を考えていることになるから、この改憲論の陣営に属する。ただし全面改正が、マ憲法の枝葉にとどまらず、根幹まで含む場合には、それはむしろ次の廃憲論に属することになる。この改憲論もなかなか有力で、自民党やそれを支持する保守主義者たちは、大体この方向に歩みを進めている。

その三は廃憲論である。これはマ憲法を破棄すべしという主張である。これにはマ憲法を破棄して、新々憲法を制定すべしという主張があり、また憲法を通して、これをつぶそうといういわゆる全面改正の主張がある。前者はフランスが、ペタンの下で修正された第三共和国憲法に対してとった、廃棄措置と同様なやり方を採ろうというわけであり、後者はSCAP（連合国最高司令官）が、帝国憲法に対してとった全面改正と同様の、不法な改変措置を踏襲するものである。やり方は違いますが、いずれもマ憲法の改正ではなくて、その廃棄を意図している点においては一致している。

ところで結果的にはやはりマ憲法の破棄ということになるから、これらを私は廃憲論の陣営に入れているが、さらにこの陣営にマ憲法無効論、帝国憲法復原論がある。マ憲法の定立行為には、重大にして明白な瑕疵があるから、当然無効であるとして、改正憲法説、革命憲法説を否認し、マ憲法の無効、すなわち帝国憲法の復元を主張するわけである。

かように一国の憲法において国論が分かれておるのであって、そのこと自体奇怪な現象といわねばならない。国政の基本法、最高法規である憲法に關することであるから、国論はおのずから帰一するところがあってしかるべきであるのに、入り乱れて争っているわけである。諸君は以上の議論

の中で、はたしてそれが正論と思われるか、諸君ら自身結論を見出すべきであらう。私自身は第三の廃憲論、なかなしく無効論が正論だと思ふ。この点については、井上平齋たみざら先生の名著「憲法研究」（東京堂刊）があるので推薦したい。

ところでこのマ憲法のもっとも重要な民主主義の原則をとりあげて少し考察してみよう。

民主主義 Democracy と称してもいろいろ意味があり、人によってはたんなる衆民参政、公論統治の意味に解している。しかしながらこのマ憲法の民主主義は、さらに進んで国民主権を含んだ民主主義である。ご承知のように憲法前文にはリンカーンの有名なゲティスバーグ・アドレス *Gettysburg Address* 中の名文句「人民の人民による人民のための統治」*Government of the people, by the people, for the people* の再版とみられる文体が出ており、それが人類普遍の原理、すなわち自然的原理とされている。このリンカーンが定義づけたような民主主義は、つぎの三つのことを内容としている。その一は、統治の主体が人民 *the people* であること、その二は、統治は人民の手によって行なうこと、その三は、統治の目的が人民の福祉にあること、以上である。この三つのうち、もっとも重要なのが第一の原則、すなわち、人民主権または国民主権の原則である。あとの二つはこれに比べればさほど重要ではない。統治権の行使が、直接人民の手によって行なわれねばならないということは、君主の直接政（天皇親政）を否定することにはなっても、君主の間接政または委任統治を否定することにはならないし、名目的君主的存在を否定すること

にはならない。また統治の目的理念が、人民の福祉であらねばならないということだけなら、それは啓蒙君主制の下でもいわれてきたことだし、何も民主制に限ったことではないからである。

思うにマ憲法の国民主権はつぎのような性格をもっている。

(一) 一般的性格

まず第一にマ憲法の国民主権も、各国憲法における国民主権と同様な性格をもっている。

- (1) 多義性 主権の語にしても、国民の語にしてもいろいろ意味があり、国民主権といっても各国憲法例や学説上において種々の考え方があり、はなはだ「多義的な概念」*Vielfältige Begriffe* であるということである。主権の帰属点たる人民または国民の概念について、紛々として説が分かれ、人民または国民主権といってもなら「自明の公理」でも何でもなく、掘り下げてゆくとまことに曖昧模糊として「法的虚構」であることがわかる。国家契約説などと同様に、厳密な法律学的思考にはとうてい耐え切れないフィクション *Fiktion* に過ぎない。くわしいことは、別に「主権の存する国民」という論文を書いておいたので、それをお読み願うとして、こういう代物を自明の公理だなどと思ひ込み、これに手を触れることを禁忌視^{タブー}している方々は、愛すべき思想的愚者である。

- (2) 相対性 国民主権の原理は、人類普遍の原理でも自然法的世界法的原理でもなく、やはり一個の歴史的所産であり、原理自体としても単なる相対的な統治原理にとどまる。なんら絶対的恒久

的普遍のカテゴリーに属する原理ではなくて、やはり相対的可変的特殊的歴史的カテゴリーに属する一つの原理にしか過ぎないことが指摘される。世界には時と所を異にするに従い、いろいろの神々があるように、国の統治原理、統治形体、統治形式についても、種々の相違が見受けられるのである。民主主義なり国民主権なりが、いつどこにおいても普遍的に妥当すべき、唯一絶対無謬な原理だと主張しうべき資格はない。たとえそういう主張がなされても、それは単に主観的自己聖化の上塗りにすぎないのであり、本来相対的なるものが絶対的なるものとされ、そういうよそおいをして登場しているだけのことである。そのよそおいに幻惑されてこれをうのみにするのは、ミゼラブルな頭脳だけであらう。

(3) 抗議性 国民主権が君主主権に対する抗議的概念 *Polemische Begriff* として成立したことは、すでにこれまで学者によって指摘されてきたことである。ポードンによって一応主権概念が確立され、君主主権が絶対王制を弁護する理論的武器としての役割りを演じたが、その主権概念を拉しきたって、国民または人民と結びつけ、敵を刺す武器として国民主権が主張されたわけで、そのにない手は台頭する自由市民層であった。人民民主主義においては、そのにない手は労働的人民に切り替えられておる。教皇主権と君主主権、君主主権と国民主権、国民主権の労働的人民主権、どこまで続く抗議的概念の輪廻であろう。あたかも国の主権を狐人のように追い求めて角逐し合っている観があり、禽獣の権力本位、闘争本位、利益社会的なもののお考え方が、そこに反

映している。そういう抗議的概念をサル真似しなければならぬ理由がどこにあらうか。

(4) 階級性 国民主権は元來市民社会的商工ブルジョアの政治概念であつて、国民全体を標榜しながらも、その歴史的 성격においては、やはり階級主権としての性格を持っていたことは否定できない。この点はフランスのシーエス Sieyes の次の言葉がはっきりこれを示している。

「第三階級とは何ぞや。『すべて』なり。今までそれは何であつたか。無なり。それは何を求むるや。あるものたらんことを」

特権的身分層を締め出した第三階級たる庶民こそ「すべて」Alliesであつたのであり、利害反目の市民社会における優勝的ブルジョアジーに王冠を載せたわけである。共產憲法、人民民主主義における人民主権は階級主権だが、国民主権は階級主権ではないというのは、その標榜する全体性に幻惑されて、その歴史的真相を看過しているわけである。

(5) 観念性 国民主権は、これを理論的に追求してゆくと、近代民主主義の要請、自由市民の旗印、単なるイデオロギーに過ぎないことがわかる。主権概念にしても、人民または国民というこの実体のない擬制人格、集合的一者なる理念と結びつけられることによって、君主主権の場合における主権と異なり、単なる観念主権になっている。魔阿不思議な人民、神権的君主の無謬性と同様な性格をもつた神がかり的人民、それと結びつけられたうつろな主権の形態、そのようなものは、とうてい科学的思索には耐え切れない単なるスローガンにとどまらう。

(二) 特殊的性格

次にマ憲法の国民主権には、さらに他にみられない特殊な性格を持っている。

- (1) 亡者の国民主権　マ憲法自体、法理上は無効であり、したがってその最高規範たる国民主権も、ほんらい「憲法の憲法」としての効力を持たえないものである。ただ違法にして当然無効の行政処分が、事実上通用している場合と同様に、当然無効のものが事実上通用しているだけのことである。したがって「亡者の主権」と評してよいであろう。

- (2) 奴隸的国民主権　強制された自由が自由でないように、強制された国民主権も本物でなくて贗造品であり、柵きの中の国民主権、奴隸の国民主権にとどまるであろう。

- (3) カカシの国民主権　マ憲法の国民主権は、血が通わず、魂が抜けている。欧米流の国民主権が、そこでは形骸をとどめているに過ぎず、魂はもぬけの殻になっておる。アメリカ、エール、南阿のような神の前に頭を垂たれ、神の加護を祈念して確立された国民主権ではないし、またフランスのような革命の熱血をもって闘いとられた無神論的国民主権でもない。低く垂れた敗惨の巾ぬいの下でのカカシの国民主権である。

- (4) 伝統破壊の国民主権　国民主権は西洋の精神的、文化的伝統に由来したまったくの舶来品である。それがすでに日本の歴史と伝統の中に存していたかのような主張は、まったくのゴマカシである。ローマは古き伝統の上に立つ。Monibus antiquis stat res Romana vivisque だが、

日本国のマ憲法の最高規範は、祖国の古き伝統の破壊、異邦の伝統の上に立っている。思想上の大混乱が結果されても、それは当然のことであろう。

マ憲法の国民主権は、かような一般のおよび特殊的性格をもっているのであって、よくその真相を把握し、これを従来^の天皇統治の原則と対比して、そのいづれをとるべきか、決断を下すべきであらう。後者については、別に「天皇制の本質」と題する講演の記録が出ているので、それをお説み願うことにして、最後に一言だけ皆さんに質問したい。

「祖国への忠誠」ということは、よいことか悪いことか、はっきり返答していただきたい。

もしもよいことだとすれば、次に移ろう。祖国への忠誠、その現われ方は、時代により国によって異なり、また君主国と共和国では異なるらう。イギリスでは、キング the King へのロイヤリティ Royalty アメリカはじめ幾多の共和国では、しばしば国旗への忠誠が誓われていた。ところで従来わが国では、元首たる天皇への忠誠という形をとってきた。天皇個人への忠誠ではなく、公人たる天皇への忠誠、天皇によって表現される祖国の普遍我への忠誠という形をとってきた。これを封建道徳と笑う者は、その前にゲルマン民族の武勇の伝統、西洋の騎士的精神、日本の武士道^のよさを改めて見直し、自らの鈍磨した愛国心、文弱に流れ、個我階級我に執着した不忠の心を笑うべきであらう。ジェイムス・ブライスは次のように書いている。

「日本においては、その発祥、神話の霧中に茫漠たる皇室^をに対する宗教的な忠義は、その領主に

対する武士の個人的な忠義と結合し、日本軍人に一死報国を特権と心得る、国家および国民に対する無私の騎士的な忠義を生ぜしめた。かくのごとき忠義が、一様に国民の全階級に磅礴（たうげく）しているように見受けられる国は、他にその例をみない」と。日本人の中で忠孝を封建道徳だと片づけている人たちは、このイギリス人よりも、日本における忠義の意味を理解できない、精神的には日本人でない人たちである。

森講師の持ち時間も、スケジュールの関係でかつきり一時間。木下講師同様このような短時間に「国民主義」というような根本問題をどう説明しようかと、相当苦慮したようであった。再三時計をみては「くわしく説明したいのだが、時間が無い」を繰り返していた。

主催者側は、合宿計画の立案に当たって、十分の時間をとっていたのであるが、班別討論などに時間をとられ、質疑応答の時間もなくなってしまったことを強く反省させられた。（このにがい経験は次回の合宿では完全に生かしたい）

続いて小田村寅二郎講師によって、この合宿の最終講義が行なわれた。時間の関係で省略した部分も多かったが、ここにその大要を収録した。

平和国家建設の基本的課題

——現代の青年学生諸君に寄せて——

小田村寅二郎

(この「合宿教室」が、参加者全員に体験させたものは、戦前、戦後の二つの世代の間に横たわる大きな「時代の断層」であつた。それを取り除くためには、両者ともに細心の努力を、惜しみなく傾け尽くすことが必要であることがわかつた。以下七項目にわたつて述べることは、国民生活の基本的な問題点、いいかえればごく平凡な問題を平凡に取り扱つただけである。この講義を行なおうとする私の真意は、「断層」の除去に少しでも役立てたいためである)

一、誤つた意味の「平和国家」論

敗戦後、日本国民はわが国を文化国家、平和国家にしたいといっている。自分たちの生を受けた日本が、文化のかおり高い国になり、平和に満ちた国家になることは、このうえなく喜ばしいことである。われわれはその理想を高らかに掲げ、それを実現するために、日本国民の知能と努力のす

べてを結集したいと思う。しかし目標を掲げたり、理想を持つことは容易であるが、いかにすれば自分の国をそのような国家にすることができるか。それは決して生やさしいことではない。

まず第一に日本を文化国家にするとか、平和愛好国家にするとかを、日本国民だけで勝手に決めていても、他の国々が日本はそういう国だと、特別扱いしてくれるかどうか疑問である。いかほど声を大にして、自国の性格を主張しても、他国がそれをどうみているかを確かめて、それに対応する努力をしなければ、それは独善に終わってしまう。残念ながらいまの日本は、そのひとりよがりの中に陥っていないだろうか。試みに軍備について考えてみても、それがいえはしないか。国連加盟のほとんどすべての国は、軍備のために多大の国費を投じている。また軍事に従事する若い世代の少なからぬ犠牲も払われている。しかもそれらの国々の一国として好んで軍備を持っているのではなく、自国防衛の本能が、それを欠くことのできぬ大切な仕事であると決定させているわけである。各国がそうしている中であって、もしある一国が、自分の国は軍備などを持たぬところに、文化国家、平和国家としての特色があるのだ、それが世界の平和に寄与するゆえんであると主張したとする。はたして各国はその国に対して「ああそうですか」とそのいい分を素直に認めてくれるであらうか。それでいてその国の人たちは、万一その国が他国から侵犯されるような非常事態に直面した時には「国連軍のお世話になりたい。どうか出動をお願いしたい」などといったとしたら、その勝手ないい分は全世界の物笑いの種になりはしないか。それだけではない。その国の国民が、口

では文化とか、平和とかいっていても、世界の人々は、その国民に向かって「一体あなた方は人類の文化を高め、平和を維持するために、われわれがいかに高価な犠牲を払い、いかに貴重な努力を傾注しているかを知っているのか」と反問するに違いない。さらに「あなた方は文化だ平和だとやたらにいうが、そもそも文化とは何か、平和とは何かということさえちっともわかっていないではないか」と逆襲し、批判してくるかもしれない。全人類が、心の中で熱烈に軍縮を望みながら、なおかつすべての国々が、いまなお自国防衛の体制を整えているのは、実はその国の文化の向上と、国民の平和を維持するためであって、特定の国を除いては侵略、勢力圏の拡大などの目的は持っていない。かかる見地からしても、文化と平和の嚴肅な意義に透徹しているのは、文化国家、平和国家などと誇らしげに、いいふらしている国民ではなくして、逆に絶えず精強な軍備を用意し、防衛体制を固めている国民の側であるかもしれない。従来、軍備と平和、文化と祖国防護意志とは、現実の人類の社会ではそのような関係で存在してきたし、将来もまた、その原則が変わると思われぬ。原水爆の発達が、軍備と戦争の様相を一変させたといっても、文化と防衛意志との表裏相関関係までが、いっしょに消滅するわけでもなからう。この問題を追求することを怠っては、文化国家・平和国家建設の第一歩を誤ることにはしないか。

そこで終戦以来十五年の長きにわたって、文化国家、平和国家を唱えてきたわれわれは、いかにすれば「平和」を生み出すことができるか、また「文化」とはいかなるものであるかについて、い

ま一度謙虚に反省する必要に迫られている。すなわち、いま一般にいわれているように、平和は戦争と対立する言葉であるにしても、軍備と両立しない言葉なのであるのか、さらに戦争が、平和に反する現象であるにしても、自国防衛の戦争までも、反平和的として否定してよいのか。自国の滅亡という万一の事態を到来させ、それでも平和を守ったことになるのか、ということを考えてみたい。いいかえれば、平和を念ずる人類の悲願は、深く大きいにもかかわらず、この世の中に争いの起こるのは避けられない。われわれは、このような理解のもとに、平時、戦時の双方に対処する方途を、不断に兼ね備えていることが必要であり、そのうえで平和実現の具体的方策を求めるのが正しいのではないか。また軍備を持つことが、戦争につながるという簡単な割り切り方をして、それが反平和的行為であると断言できるかどうか。さらにそうした割り切り方をする人々の心の中には、単に軍備を持つことを毛嫌いするだけにとどまらず、もともと国民の一人として、すべてに優先して持っていなければならないもの、すなわち「自国防衛の意志」そのものを失ってしまっても、なおそれでよいとするのか。そのような国に、はたして真の平和があり、すぐれた文化がある得るだろうか、というように問題点を掘り下げていきたいと思う。

平和の実現に必要なものは、まず平和的精神の確立であり、それには瞬時も、みずからの平和が侵されないようにする防衛精神の裏づけが必要である。自己の生命を守ろうとする厳肅な人間精神が発露してこそ、生き生きとした文化的精神の美事な開花をもたらすのである。平和国家を口にす

る以上は、他を頼らずとも、祖国を平和国家たらしめる万全の策が、樹立されなければならない。いかにして万全の策を生み出すかという問題こそ、平和国家建設の最大の課題であろう。

二、"国家"とは何か、また"文化"とは何か

戦後わが国で文化国家、平和国家ということが、あまりにも皮相に解釈され、誤って理解されてきたのは何故か。私は"国家"とはいかなるものかについての理解、把握が正しくなされていなかっただからであると思う。もともと平和国家、好戦国家といってみても、"平和"とか"好戦"とかいう言葉は、その文字の下に続く"国家"の形容詞に過ぎない。双方のいずれの場合でも国家そのものが主体であって、平和国家といながら形容詞の"平和"だけに気をとられ、肝心の"国家"の意義、内容を軽視することは、重大な誤りである。しからば国家とはいかなるものか、はたして国家とは世界の平面的な一部分だけを意味するものに過ぎないのだろうか。

いつの日か、世界が諸国民の相互理解と互譲によって、世界連邦を作り上げる時代が到来したと仮定してみよう。その場合の世界連邦は、どのように運営されるであろうか。やはりその中に幾つかの単位連邦があり、その各単位体が、連邦を構成すると考えることが最も自然である。その単位体は、名称こそ変わっても、従前の国家以外には考えられないのではないか。人種の混合は、結婚によって可能であり、風俗習慣の改変も、環境を変えることによって必ずしも不可能ではない。し

かしながら、言語の相違を完全に解消することは至難の事業である。国語と呼ばれるそれぞれの国のコトバは、その国民が、国民として生きている基本的条件である。ともあれ、国家は人類社会の存在する限り、なんらかの意味において「単位」であるとする見方が妥当であろう。政治単位であることに限界はあっても、自治単位としては不滅性をもつに違いない。自治単位体であるということとは、言語、風俗、伝統などの差異をも含めて、世界文化の構成要素としての「文化単位」を意味する。国家が人類社会における自治単位であり、文化単位であることは、世界の政治情勢が、現在のように米ソ二大陣営の併立状態にある場合も、世界連邦の暁においても、本質的にはいささかも変わることなく、永遠性を持っているものと思つてさしつかえなからう。そこで、国家というものは、世界の一部分としての永遠性を、それ自体の中に持っていることが理解できる。だが、はたして単なる一部分だけのものかということが問題となるので、次にその問題と取り組んでみたい。

コトバは人と人の心をつなぐものであり、コトバを離れて人の心はつながることができない。以心伝心というように、コトバを語り合わないで心の通じ合うこともあるが、それはある一瞬時だけであつて、言葉を交わすことなくしては以心伝心もあり得ない。それゆえ同じコトバを話す国民とコトバの異なる他国民との間では、親密の度合——それが文化交流の基本的条件であるが——に大きな差異が生じてくる。それでも異なった国語を持つ人々との間で議論を闘わずとか、論理の展開を試みるといったような、いわば理づめの事柄や交渉などの場合は、翻訳または通訳によつて意志の

流通が可能である。しかし人の心の微妙な動きを表現する詩歌や、宗教的情操や芸術感覚などになると、それぞれの国語のもつニュアンスは、論理的展開だけでは、到底説明することができない。それは生まれながらその国語を駆使してきた国民感情の裏づけが、何よりも理解のための重要な要素になっているからである。人間が生死の問題をかかえて、人間のあり方を掘り下げ、考究してゆくことは、コトバを通じてはじめてできるのである。多くの外国語を駆使できる少数の人々を除くと、世界各国の人々は常に同じコトバを話し、読み、書くことによって、諸国民の文化を興してきたのであり、それが世界文化の基礎となっている。そして将来といえども、この原則は変わらないものと思われる。それゆえ日本のように日本語という独特のコトバを使っている国民にとっては、日本語によって掘り下げられてきた文化、日本語によって受け継がれてきた国民文化こそ、日本国民における「文化」の基本的内容を意味する。そして逆にそれを軽視することは、文化そのものに対する冒瀆を意味することになってしまう。われわれは「文化」を論ずるに当たって、このことを決して忘却してはならない。このようにみると、一つの国語とともにある国家というものは、その国民の生活にとって、生命的のただ一つの基本的、全面的な対象であって、人間の心を統一する精神生活においては、決して部分的存在として国家をとらえることは不可能となる。その意味からすれば、人の心の中において、国家は世界の一部分ではなく、全体であるといえるし、その方が自然である。従って国家というものは、人の眼には世界の一部分として、具象的に写るものであ

り、人の心には世界そのもの世界全体として、感覚的に写るものといふことができるであらう。このように文化の母体が国家であり、国民生活であると聞かされると、いまの青年学生諸君は、それがなんとなく独善的な考え方にみえたり、かたくな過ぎるような気がしてくるかもしれない。しかし事實は決してそうではないのであるから、さらに次のこと——国家間の文化交流と国家の興亡の関係——をいっしょに考えてみたいと思う。

国家と国家とが、相互に接触を保つとき、両国の文化が交わりを持つようになる。いわゆる文化交流が自然に行なわれる。この時どのように異質文化を受け入れるかは、その国の運命、国民生活の将来およびその国民の持っている文化の体質に大きな影響を与える。従って文化交流がもたらす結果は、双方の文化がともに向上して繁栄に向かう場合と、AはBを吸収することに成功するが、Bは相手方Aの文化に幻惑されてしまつて、表面的にはAを吸収するかのようみえて、その実、逆に自国文化を消滅させてしまうことがある。この場合の文化消滅とは、終局的にはその国家が自立力を失ふことであり、その国民が自国を防衛する意志を喪失するに至ることを意味する。それゆえ、もしこの両国が、お互いに交わっていなかつたとすれば、両国ともいつまでも共存できたであらう。しかし文化交流を行なつたために、一国が滅亡に至つた悲劇は、史上幾多の例を見出すことができる。文化交流を大いに進めなければならぬことはいうまでもない。だがここで注意しなければならぬことは、文化交流に当たつた国民の一人一人が、いかなる異質文化をも吸収できる確信と

自覚を、心の中に持っていないのではなくてはならぬということである。そのことはソ連、中共との文化交流の場合でも同じであり、アメリカとの戦後十五年におよぶ文化交流の再検討にも適用されねばならない。この場合、自国文化に確信と自覚を持つということは、自国文化の長所をよく理解し、身につけているということであり、自国文化に深い信頼と誇りを持つことを意味する。しかもそれは自国文化だけを善とし、他を排する独善的なたくなきでは断じてない。

私はこれを例証するために、日本歴史の中で、異質文化から激しい影響を受けた三つの時期について述べてみたい。一般に日本歴史における外来文化との交流の時期は、支那を中心とする大陸文化と接触する推古朝前後と、西洋文明が浸透してくる明治時代の二つがあげられる。しかし私は第二次大戦以後における日本文化の変質をもたらした現代を加えて、三つの時期として考えたいと思う。それはわれわれが、現に体験しつつある時代であり、これを加えた方が、今日の青年学生諸君にとって、日本文化を身近なものとして感じてもらうのに、好都合であると思われるからである。

まず第一の大陸文化との交流時代の歴史的背景を説明しておきたい。わが国とアジア大陸、朝鮮半島との交渉は、紀元前二世紀にさかのぼるが、四世紀の半ば神功皇后が、強国新羅（当時朝鮮の南部を統一していた）を征討されたころから、その接触は緊密の度を加えてくる。六世紀の半ばになると、日本の直轄領であった任那（みまな）の日本府が、新羅のために滅ぼされてしまう。その直後に聖徳太子が誕生せられ、アジア大陸文化との積極的な交流が開始される。ところが当時の日本国内は、

史上空前の混乱を呈した時代であり、それは現代の世相の混乱と一脈相通するものがあるように思われる。もとよりその内容、程度に本質的差異があるにしても、何か共通するものがあるように感ぜられる。すなわち、任那の日本府滅亡の原因として、まず五世紀の後半から朝鮮の新羅に内通する者（吉備田狹）がいたり、また北鮮の高句麗を通じて、南鮮の百済を攻める者（紀生磐宿弥）がいたりすることが指摘される。ついで六世紀のはじめには、任那の四県を勝手に百済に与えてしまふ者（大伴金村）も出る。やがて六世紀の半ば欽明天皇の時代に任那日本府は、完全に滅亡してしまふ。当時のわが国の対外交渉は、全く支離滅裂で、それは今日「革新政党」といわれる政党内の一部の分子が、南樺太、千島の領有権を放棄する態度をとったり、保守党内ですら対ソ交渉を考えるに当たって、クナシリ、エトロフ島を含む南千島の領土について意見の不一致をみたりするのと同類のようである。任那日本府滅亡当時の国内情勢は、有力者（氏族）の間で派閥抗争が激しく、そのために任那派遣者たちの眼中、すでに日本なく、あるものはただ自己の勢力拡張と保身の術のみであった。自分自身のために、国家の利益を犠牲にして顧みない傾向は、今日とすこしも違わない。日本書紀が詳しくしているこの有力者たちの浅ましい離合集散をみると、今日の日本の政党内の派閥におけるそれが連想されてきてならない。

それはともかくとして、五百四十六年、日本に仏教が入り、十六年後に任那日本府が滅亡する。さらにその十二年後の五百七十四年、聖徳太子がお生まれになる。五百八十七年、太子の父君用明

天皇が病気でなくなれば、時代の歩みはいよいよ険悪化し、ついに国内の混乱は、最高頂となるのである。すなわち、仏教伝来以来蘇我、物部の両派氏族が、仏教崇拜と仏教排斥をめぐって争い、天皇崩御後皇位継承問題とからんで、この両有力者による激しい争いが起こる。その結果、蘇我氏の勝利となって、蘇我馬子の奉じた崇峻天皇が位につかれる。ところが崇峻天皇は事もあろうに、間もなくその馬子のたくらみで、弑逆されるという前代未聞の不祥事を招くのである。日本の歴史上、天皇が臣下に殺されるという事件は、前にも後にもたった一度だけである。今日とは時代が違うといっても、当時の暗たんたる政情は想像するに難くないと思う。用明天皇が亡くなられて五年後に、推古天皇（女帝）が位につかれ、翌年聖徳太子が皇太子となる。摂政として、政治の最高位につかれた太子は、外国からの威圧と国内の派閥抗争の渦中に立たせられ、さらに外来文化に対処する重大な転換期に際会されるのである。アジア大陸の文化が、とうとうとして日本に入ってきた聖徳太子の時代は、このようにきわめて深刻な激動期であった。もし当時の為政者としての太子のお心の中に、確固たる人生観、厳然たる自主的精神、透徹した人間平等の思想がたたえられていなかったら、日本は大陸文化の輸入によって、どのような姿になっていたかしかない。聖徳太子は仏教信者であって、日本古来の神道に逆らった方であると非難する向きも一部にあるが、それは太子が書き残された著作についての無知からくるものである。すなわち、法華経、維摩経、勝鬘経の三つの経文（お経）を註釈された三経義疏やそれと関連させて読むとよく文意のわかる有名な十七カ条

憲法などの精緻な言葉使いにみられる太子の信仰思想は、決してそのような偏向的のものではない。
（黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」昭10年一高昭啓会刊
昭32年国民文化研究会再刊参照）いなむしろ、太子が仏教を
どのように摂取されたかは、外来文化摂取の基本的典型を身をもって示された姿にみるべきであっ
て、新旧思想のいずれによって、それをなしたかの外面的方便論をもって判定すべきではない。こ
と文化に関する限り、人の心が帰依する対象が問題ではなく、その帰依の内容こそ重大である。わ
れわれが、日本文化を心から誇りうるのは、その足跡が外来文化をその文化の生育した国々におけ
る以上に深くとらえ、より以上に本質的に追求してきた事実をみるからである。文化を本質的に追
求する力そのものは、まごうかたなく国民生活の伝統のなかに発達していたに違いなかるう。太子
によって守られ、向上させられた日本文化が、やがて落ち着きを取り戻したとき、日本の神道精神
の高揚をもたらしたことをそれと関連させて考えなくてはならない。とにかく太子は仏教帰依の生
活の中にあつて、かくまで正確に人間心理を分析し、それを総合的に把握したことは、まことにす
ばらしいことである。前記黒上氏（昭和五年、三十歳で病死）の研究によれば、法華・維摩・勝鬘の三
つの経文についての太子の解釈は、支那大陸の多くの高名な先師に例をみないといわれ、同じ経文
の解釈の仕方について、黒上氏は支那大陸の先師と、太子のそれとを文献文化的に研究して残さ
れている。ともあれ悲喜動乱の繰り返される人生そのものを、正しく見きわめるのが、宗教的精神
であり文化の底力であるならば、太子の仏教帰依の信仰思想は、総合的日本文化創造に大きく寄与

しているといわなければなるまい。

私はさきに日本が外来文化によって大きな影響を受けたのは、前記の三時期であると述べたが、ここでこの三時期に共通する歴史的、時代的背景を比較してたどってみたいと思う。太子の時代は前述した通りであるが、西洋文化との積極的交流が始められた明治時代も、黒船の到来について、欧米各国から通商の開始を迫られた時代であり、一步誤れば国運を左右する重大時期であった。しかも徳川幕府政治の最終段階の時期であって、これまた内外ともに空前の危機に見舞われた時代である。以上の二つの時期に関連して、第三の時期現代はどうであろうか。第二次大戦の結果わが国は完敗し、無条件降伏した。そして建国以来二千数百年、はじめて迎えた外国軍隊による完全占領という最悪の対外関係から脱出したものの、内には日本文化の全面的否定を唱える思想が、日を追うて国民の上をおおい尽くし、その勢力は拡大の一途をたどってきた。しかもこのような思想および勢力から、日本を防衛すべき保守政党は、国民大多数の信任をよいことに安逸をむさぼり、国家百年の計を明示することなく、国民を奮起させることなど望むべくもない状況である。かくて保守党に対する不信は、政治そのものに対する不信と化しつつある。長期政権をねらって思いがっている保守政治も、ようやくその限界に達しようとしている。国の行政、立法機関に携わる有力者たちの私利を第一とし、国事を第二とする習慣が続くと、大所高所から国事を判断、決裁する能力が減退していくものである。高位に心ゆるみ、派閥抗争の醜を白日のもとにさらして、恬として恥

しないようではどうにもならない。占領が解除されても、いぜんとして内憂外患の改まることのない日本である。現下の国内情勢をみると、第一期における聖徳太子や、第二期の明治時代に数多く輩出した大政治家に比肩すべき人物が政権の座につかぬ限り、到底日本の運命は開拓されそうもない。もし時の首相が「文化」を知り、「国家」を知り、そして外来文化の流入にさらされた国家、民族がいかにすればそれを摂取し、日本固有の文化を開展させることができるかについて、心を砕いているならば、こうした時代にこそ悲痛な人生に徹した宗教的情操が、いかばかり必要であるかということもわかってくるし、異質文化に敗れるか、その摂取に成功するかの大問題は、目に見える戦争の勝負以上に、国運を左右するものであることを知るに違いない。重大な危機にさらされていながら、少しの危機感もみられない日本、ことに政治家にそれが感じられていない日本。そこに日本の危機の実情がある。指導的地位にその人を得なければ、外来文化の流入期は乗り切れるものではない。現在われわれが、政界最高首脳者の一新を求めてやまないのは、この意味においてである。世論をはじめ世の有識者は、保守、革新両政党の性格、政策の比較についてのみ言及しているが、むしろそれは第二のことであって、総合的人格を天下に求むべき時であると思う。現在の日本は表面的にはそれほどひどいようにみえなくとも、歴史的、文化史的には、有史以来の重大時期に突入していると思う。なぜなら西洋的物質文化が、日本固有の精神文化を駆逐する形勢を示しているからである。それもマルキシズムとアメリカニズムの「カクテル」によってである。推古時代、

明治時代は、それぞれ外来文化との交流に当たって、その外来文化を内容的に摂取することができた。すなわちその長所を取り入れて、なおかつ伝来の固有文化を開花向上せしめることに成功している。現代はまだ過渡期であって、結論づけることは無理であるにしても、大勢としては、その摂取に成功するか、あるいは失敗に終わって固有文化を退化滅亡させるか、いずれともいいかねる段階ではなからうか。繰り返していうが、いまの日本は、重大時期のまっただ中にある。それゆえ、かりそめにも「文化」を口にし、「文化国家」を論ずる以上は、文化が生きて存在するために必要な生命体としての国家、ならびに国民生活の本質についての、正しい開眼がなされなければならぬ。太子の時代、明治時代についての研究も、その意味からしてきわめて大切である。そしてその研究の主眼には、外来文化のために固有文化を滅亡させなかった原因が、どこにあったか、その探求に忍耐強く、謙虚な態度で臨まねばならないであろう。学問の任務は論理の「もてあそび」ではなく、こうした目にみえない、しかも論理だけではつかみきれない文化の源泉を、国民生活の体験を通してとらえるところにありはしないか。総じて、伝統的な国民精神や国民生活の感覚を、一概に古くさいと軽蔑する態度は、およそ非文化的、非進歩的であると思う。

終戦後、みずからを「進歩的文化人」と称した学者、評論家のグループが、世人の拍手を浴び、人気を集めてきた。だが、もうそろそろ年貢の納め時になってもらいたいものである。その主張は前述した国民精神とは全く正反対の、いわば「根なし草」的所論であり、私をしていわしめるなら

ば、非文化的、非進歩的の最たるものと見受けられるからである。つましい庶民が、勝手な熱を上げているのとはちがって、このいわゆる自称進歩的文化人たちは、大学教授とか、評論家とかいう肩書を振り回して物をいい、物を書くから、その及ぼす影響も過小評価できないものがある。これらの人々は祖国を非難し、祖国を売ることが、いかにも文化的であるかのごとき口吻くぶんをもらす。それがもてはやされ、マスコミによって全国民に伝えられる結果、それに反対するものは、「反動」であるかのごとく印象づけられてしまう。いまの時代が転倒しているのか、私のいうことが間違っているのか。この問題に関する限りは、どちらも一理あるなどという八方美人型は、全く無用である。諸君の賢明な判断におまかせしたい。

われわれ国民が自国文化の把握にまず全精神、全努力を注ぐことが、決して独善でなく、偏狭でもないこと、さらにそれが重大な基本課題であることは、前述の通りである。また世界文化に貢献する方途も、自国文化をしっかりとして把握することによって、はじめてより効果的、具体的になることも説明した。従って、世界各国の国民が、いずれも自国の伝統を誇るのには、そうした意味でごく自然の人情である。それが正しいことはいうまでもない。そればかりか、自国の伝統を誇る態度をとり得ることが、とりも直さず世界文化の向上に対する責任を、その国民が理解し身につけている証左である。建国の古いことを自慢することも同じである。外国人たちが自国の古さを誇るのには、世界文化に貢献してきた深さを誇りたいからである。国家が存続してきたというこの中に、すで

に世界文化に貢献してきたことが意味されている。さらにいうならば「文化」は、いかにして向上発展するかを、それらの諸国民はよく理解しているからである。それゆえ私は繰り返し強調するが、「国家」は人類社会においてなんらかの意味で、永遠に「単位」である。ことに文化という面からみる限り、永遠に世界文化の「単位」である。さらに日本語という独自の言葉を用いて、文化を興し、存続してきた日本は、世界文化における重要な「文化単位」をなしているのである。

さて私は、ここでもう一つはっきりさせて置きたいことがある。いま学生の間で流行している考え方、すなわちわれわれは国民である前に人類の一員であるという見方は、はたして当を得たものであるかどうかという問題についてである。人間そのものの本質——同一国語を語り合うことによって生きている事実——に立脚すれば、国民であるということと、人類の一員であるということとは、この世の中における人間存在の可能性を離れて論議することは無意味である。いいかえれば、人間がこの世に生きている現実のよりどころが、国家であるか、抽象的な人類社会であるかをみきわめることが先決問題である。ある国家に所属し、その国の国民であるということが、取捨選択の対象にされているかどうか。国民でない人間は、この世にいないといえ、宿命的に聞え、束縛されているような気がするが、国民であるということが、人であることとの具体性を意味していると説明すれば、この間の関係を正確に表現し得るのではなからうか。それゆえに人類の一員であることと、国民であることとは、前後を論じたり、優劣をうんぬんすべきことではなく、おのおの別の

範疇ちゆうのことといった方がよいであろう。すなわち人類の一員としての誇りは、人間生活が禽獸きんじゆうと異なる精神的要素を持つていことに對しての自覚であり、人たるの道を求めていこうとする意識である。これに對して国民であることの意識と自覚は、人たるの道を具体的に歩むことを意味する。すなわち前者は抽象的理念であり、後者は具体的実践である。従つて具体性を離れて、抽象的方向づけがあり得ないと同じく、国民たる立場を離れて、人類の一員たるの立場は實在しないことが明白となると思う。「われわれは日本人であるよりも前に人間である」などという流行思想は、それ自体人間把握を誤つており、文化の興隆をはばむおそれのあることを深く考えたいと思う。

三、"国家"は完全独立をめざすべきもの

このようにみえてくると、われわれ日本人にとって国家——具体的には日本という国家——は決して世界の一部分に過ぎないとみるべきではなく、われわれの生命そのもの、またいかにかけがえない全体的のものであるかが理解されてくる。国民として国家独立の尊厳を守り続けることは、われわれ自身が、人間としての尊厳を保持するための絶対的条件であることも、納得されると思う。そこで次に検討しなければならぬことは、国家が独立している時の、その独立の具体的内容についてである。一口に独立国といつても、自立能力においては各国とも千差万別であり、独立の内容

は、ピンからキリまであるのが実状である。われわれは、自国の独立が名実ともに備わっているかどうかにか、不断の関心を払わなければならない。なぜならわれわれ自身、人間の尊厳をみずから保持するために、自国の独立が権威あるものとなることを求めるのは当然である。

第二次世界大戦の敗北は、日本を戦勝国の占領下に置いた。やがて六年間の占領後、サンフランシスコにおける平和条約の調印（二十六年九月）によって、占領形態は解除された。ついで同条約の発効（二十七年四月）によって独立国の名義を回復したが、それは国際法の上において独立国としての待遇が得られたに過ぎなかった。国防力はもとより、経済復興もたゞどしいものであった。国内的には衣食住の安定が先決要件とされて、経済的自立に全力が注がれたのは当然のことである。経済自立が独立国としての第一条件であることはいうまでもない。しかし現実の国際場裡においては、経済力の拡大と増進は、それ自体で自由に伸張できるものではない。自由主義国家群の間においても、良品であろうと安価な輸出品に対して、相手国は自国産業保護のための関税の障壁を立てている。貿易自由の大原則はあっても、現実的には外交交渉にまかせられることになる。国家間の交渉は、両国間の良識と互譲によってなされるとはいふものの、その国の権威、実力と無関係ではない。独立国同士であるから対等であると思うのは、はなはだしい間違いで、利害相反する場合は遺憾ながら国力の優劣をいかんともすることができない。何も強国が無理じいや無理押しをすることというのではなくとも、おのずから国力の優劣に大きく影響されてしまうのである。共産主義国家群

の間では、この傾向はとくに顯著であつて、優劣強弱が国家間の一切の交渉に反映していることは否定できない。要するに自由主義国であろうと、共産主義国であろうと、このことになんの変わりもない。常に対等の交渉をしたいと思えば、相手と同等の権威（あえて武力だけを背景とした権力を意味しない）を持たなくては不可能である。

そこで自国の主張を、その対外政策の上に十分に貫徹し得るようになるためには、単に国際法上独立国とみなされているだけでは不十分である。また国内的に経済自立を達成することができてもなおかつ不十分である。すなわち、完全独立の状態、すべての外国と対等に交渉できる体制にならなければならない。従つて国家の独立は、その国家が対外的にみて完全独立といえる段階にまで至つてこそ、はじめて名実ともに独立国といえるのであつて、この間のことをよく念頭に入れて置くべきである。私がこうしたい方をすると、きつと諸君は、それこそ帝国主義の再来だ、軍国主義の抬頭たいただといふかもしれない。しかし私は卒直そくじにいつてこのような反論は、実にたわいのないものと思つている。

まず第一に、これらの反論の出発点には、「国家」についての把握が、全く混沌としてゐることを発見する。その結果「国家」が強大になることと、自分自身が自由安泰であることとの密接な関連性が自覚されていない。従つてこの反論者たちは、自国が強大になるためには、自衛力を完備していることが必要だなどとは少しも考えない。さらにそのままの考え方を前提にして、軍備を持つ

ことが何を意味するかを考えようとするから、思考の方向が狂ってしまう。すなわち、そこでは国家と軍備の関係よりも、軍備だけが目につくために、徴兵制度の復活が連想され、軍事兵力の強大が、戦争誘発の最大の原因であるように錯覚する。ひいて自分たち国民は、必ず戦場に引っぱられて、とどのつまりは戦死の浮き目に会わされる、という思考の順序をたどる。結局、軍備を持つこと自体が、やがて個人の自由の完全な抹殺を招くと結論づけてしまうのである。しかもこの場合でも、完全無防備が、不時の侵害を誘う危険のあることや、そのさいにおける同胞婦女子の受けるであろう惨害については（それに気づかないわけでもなからうが）あえて想起することを避けようとする。そのようなことは万が一にも起こらないであろうと気休めに楽観して、問題点からの逃避を図ろうとするのが通例である。なぜこのように、一方の連想は勝手放題に進め、他方の大切な連想を避けてしまうのであろうか。そこに不自然さを感じないのであろうか。ところが、不自然さを感じようが感じなからうが、そんなことはおかまいなしに軍備そく即反平和だというのであれば、その人たちには私は何もいう必要はない。すなわち、その人たちの考え方は、はじめから不自然だからである。なぜならば、彼らはかつてレーニンがいったように「われわれは単なる平和主義者ではない。ブルジョアジーは武装解除するが、われわれ自身は武装する。その点が、単なる平和主義者と、われわれ共産主義者とは違う点である」というレーニンの考え方と、同一歩調をとっているからである。この人たちは、いまの軍備は困るが、日本で共産革命を達成した時には、強大な軍備を持ちた

いと考えていることは明白である。気の弱い善意の国民が、この人たちに引きずり回されて、軍備反対運動に踊らされている有様は、なんとしても悲しい事態というほかはない。しかし現実には、一方は連想をたくましくし、他方は知って気づかぬ風をよそおう風潮が、多くの国民の間に浸透しているのです、その不自然な連想の仕方については、さらに深く検討する必要があると思う。

この部類の人々の中には、戦時中の経験を持っている者と、それを知らない戦後に生育した若い世代の人々がある。しかし共通していることは、民主主義というものを自分の身辺だけに局限して理解しようとする傾向があり、ともするとそれらの人々の意識の中では、国家を考えるスペースが狭められてしまっているようである。そこで国家が無防備ならば、同胞婦女子が、万一の場合に受けるであろう被害について、考え及ばないわけではないが、この世の可能性をすべて考え尽くそうとする人生的迫力を欠いているために、ついつい万が一などという場合のことは、考えるのはやめて置こうという習慣がついてしまう。そして万が一というような時のことについては「その時はその時さ」といってその時のために平素の生活が束はくされて、犠牲になるのはいやだと決める。万一の場合、自分がむざむざ侵入者に殺されてしまうのでは、到底あきらめきれない自分であるにもかかわらず、いかにも気前よく割り切って見せるところに問題がある。しかし実は内心ビクビクで「そんなことは自分の生きている間はきっと起こらないに違いない」と自分にいいきかせて、その予想の可能性に身を託しているのが普通である。しかしこうした立場を固執することによって、自

己満足を保とうとしている人たち、表向きはそれを頑迷に主張して、自分の残りの一生を平穩にしたいと念じている人たち、その人々のいつていることは、はたしてどういうことを意味しているであろうか。私はその人々を追い込むようないい方をしまことに相済まないと思うが、大切な点であるので、お許し願いたい。

こうした考えに立っている人々は、次のことを意識していないにもかかわらず「自分の国家が強大になることは、なんとなく不安でならない」といつているのと同じにならないであろうか。また別のいい方をすれば「自分の国が強大になって、完全独立をかちとり外国と対等の交渉ができるようになってしまつと、国内では人間らしい国民の自由や平和がひどく脅かされそうでならない」と考えるのと同じことになりはしないか。これを逆にいえば「自国がいつまでも強大にならないでいまのままにいる方が、自主独立の体制を整えるよりも安心である」といつることになりそうである。世界のどこにそのような奇妙なことを考えている悠長な国民がいるであろうか。このような途方もないことになってしまつものも、もとをたせば、自己を守りぬくことは、どうすれば可能かについて突きつめて考えないからである。自己と「国家」の結びつきがぼやけているからである。国家の把握のし方がいい加減であると、国家独立の尊厳さがわからなくなり、知らず識らずのうちに、国家のあり方について、途方もない懷疑と恐怖が生まれてくる。人間の尊厳を口にし、平和国家の理想を高らかに叫んでも、これでは実感の伴つた響きは、生まれてこないであろう。概念だけが過剰

になって、その概念を構成する内容から心を遠去けてしまつては、ついにどうにもならない矛盾に突き当たるだけではなからうか。現実の人生、人の世のありのままの姿を、とことんまでみつめる努力、その意欲、スピリットを、いま一度この日本の国内に喚び戻したいものである。

四、国家——人間性に立脚した集団として——の把握

次に国家のあり方、生き方をよりよく理解するために、人間個人の生き方をよくみつめて、これと比較してみたいと思う。

われわれが、一人の人間として日常生活を送っている時には、われわれは自己およびその家庭を維持していくだけでさえ、いかにきびしい努力と自省とが必要であるかを知っている。①社会通念によれば、衣食住はまず自己の責任においてせよとされていて、その家庭が、経済的独立を保っていない場合には、世間は一人前の人間としてつき合ってくれない。そして暗黙のうちに、すべての人がそれを了解し合っている。②また治安の守られた現代文化社会に生活しているといっていないながらも、夜間や外出の時には戸締りを厳重にする。それは、他人を疑う行為でありながら、当たり前のことと認められ、戸締りを怠る者の方が、逆に不注意だとされている。このように自分を守るには、自己自身によって周到な配慮を払うことが必要である。③さらに予測し得ない不時の災難や自己の子弟の教育のために、万全の貯えを各自の努力によって用意し、自己保全を策することも、ま

た立派な社会人としての行為であるとされている。

これらのことが何を意味するかといえば、社会の一員として自己の家庭の完全独立を図っていることにはかならない。度の過ぎた生存競争は、公共の安寧を乱し、社会の福祉に反することとして排除されているが、生存競争そのものは、何の不自然さもなく人に納得され、了解されている。また人々が、その職場において昇進を望み、社会における優位を求めて勉強これ努めることが、なんら不自然にみえないのも、人々が生存競争のきびしさを原則的に肯定しているからである。時には腕力の強い者が、弱くて正しいものを抑制することもあるし、金力にものをいわせ、理不尽な行為で天下を闊歩する者がいても、程度の差だけが世の指弾の対象となるだけである。度を越したものは、法的社会的反撃が加えられる反面、適度かつ穩健に節度をもってそれがなされるときは、その行為は逆に社会人として立派な行動として称賛されている。そしてこれらのことは、社会機構や政治機構の相違によって、その認められる程度、肯定される度合に多少の差異はあるにしても、人間感情や人間生活の本質的性格ののっとっているから、アメリカその他の自由主義国であらうと、ソ連、中共のような共産主義国であらうと、原則的には共通に認識されているところである。米ソいずれにおいても、人間生活はこれを離れ、これを否定しては、進歩発展がないと理解されているからである。

人間生活、個人生活が、このように生存競争肯定の上に立って営まれているように、国家のあり

方生き方もそれとなんの変わりもない。私が前述した国家の独立は、完全独立をめざすべきであるというのも、人間個人の生き方において、それが認められている範囲を少しも出ているものではない。しかし、かかる国家の行き方が、いかにも排他的、腕力的にみえるとすれば、そのようにみる人自身が、国家を人間と別のものと考えているからであろう。だが国家は、このような人間によって構成され、運営されているものであって、人間性に立脚し、人間性に基づいて運営される以外に生存の方法はない。個人生活では、生存競争もいいが、国家間ではいけないというのならば、おおよそおかしな論法である。個々の人間には醜さを認め、人間の集合体にはそれがあってはならないというのと同じである。一国一家も、一個人も、ともに人間性の肯定の上のみ成立する。国家を生きたものとして把握し、血と魂の通ったものとして感覺するためにも、国家をひからびた概念と空想的な観念の世界にいつまでも放置して置いてはならないであろう。

日本を平和国家文化国家、に仕上げるためには、このような国家としての生存競争に耐えることが絶対条件である。従って「平和」という言葉の意味にも「文化」という表現の中にも、現実の世の中のこのきびしさが、素直に肯定されていなくてはならない。換言すれば、平和的精神の裏づけには、常に武を尊ぶ尚武の精神がたたえられていなければならない。軍備、自衛といえ、すぐさま平和に反する行為であるとするような、皮相浅薄な見方が流行しているようでは、平和的精神はいつまでたっても日本には生まれてこない。このような見方から脱却して、われわれが直ちにめざ

さなければならぬのは、むしろ次の点であると思う。日本がかりに世界第一の軍備を持つに至っても、また原水爆その他最強の兵器を保有する時でも、日本は、いかなる国よりも真実の平和を愛し、人類の眞の幸福のために行動できるという強い信念、すなわち平和維持について、他に比類のない抱負と識見とを持つようになることではなからうか。自衛のためのわずかな軍備を所有することで、軍国主義への転換が起こりはしないかと、国民同士で心配し合っているということは、とりもなおさず、自己自身に「平和」についての信念が欠如していることを告白しているようなものである。軍備であろうが原爆であろうが、それを持ってなおかつ、平和堅持のために微動だもしない国民精神と国民の氣質を確立することこそ、焦眉の急務ではなからうか。武芸に秀いでた人や筋骨隆々とした偉丈夫の中にも、心の平和な、氣だてのやさしい人がいくらでもある。国家もまた、そのようにあってならさしつかえないし、またそのようにありうると確信する。

五、日本の過去の反省の仕方について

終戦後の教育や世論にみられる、日本の過去の反省の仕方、再検討を必要とする面が決して少なくない。日本がかつて明治時代に、日清、日露戦争を経験したことや、大東亜戦争に突入したことなど数多くの戦争経験を持っていることから、日本が軍国主義国であったと断定したり、日本国民が、好戦的国民であったと判断したことは、あまりにも軽率であった。日本が日清、日露戦争を

戦わなかったとすれば、日本は滅びていたかもしれない。そのことは世界史がよく証明しているところであり、国民が平和を求め、文化を愛するがゆえに戦ったのが、日清、日露の戦争であった。また一方、日本が幾つかの戦争を戦って勝利を収め、そのときに領土を拡大したからといって、日本人は侵略的国民であるというのも誤りである。さらに日本が帝国主義的国家であるというのも間違っている。なぜならその時代には、戦争の終結に領土の割譲や賠償金の支払いが伴うのは、世界いずれの国でも当然のこととされていたからである。ただ、ここで見逃してならないことは、昭和にはいつてからの日本は、政治と軍事の区別が、きわめてあいまいになり、ために軍国主義的とみられる行動がなかったとはいえないことである。それを反省することは必要だが、全面的に否定すべきではなく、行き過ぎた行動を抑制することができなかった、政治のあり方に対する反省でなければならぬ。軍事行動が起こるには、起こるだけの必然的な理由が存在していた。そしてその理由の中には、常に日本の国力の自然伸長を阻止しようとする相手国の動きがあったのも事実である。矢が弦から放たれるに至るまでのせっぱつまった事態と、矢が放たれてからあとの行き過ぎた行動とを、一概に混同して批判することは間違いである。前者は日本と諸外国との相互関係に基づいており、日本だけが反省しても、否定してみても意味のないことである。もとよりそうした事態に立ち至った理由の一端は、よく省察すべきであるが、それは相手方の国とても同じ責を負うべきものである。いまの若い青年学生諸君が、日本の過去の見方について、こうした誤った解釈を教えられ

てきたことは、何としても残念なことであり、国家的にも文化的にも大きな損失である。

なお、これと関連して、この際いま一つ述べておきたいことがある。日本の国の称号は、終戦までは大日本帝国であった。国名のみならず、憲法も帝国憲法と呼び「帝国」という文字がよく使われていた。この名称としての「帝国」が、いわゆる帝国主義という旧時代的の侵略を意味する「帝国」とその文字が同じであるため、日本の過去を反省するに当たって、その二つが混乱して、頭の中に入ってしまったている。日本は、終戦までは大日本帝国であったのだから、終戦前の日本は帝国主義であった、というようにきわめて簡単に割り切っている傾向がある。もし過去の日本が帝国主義的であったというならば、アメリカもイギリスもフランスもドイツも、すべて帝国主義的であったといわなければならない。また帝国主義という意味が、ナポレオン時代のフランスやツァー時代のロシアを意味するならば、日本の過去においてそれと同種のものを見出すことは、全く不可能であり、日本が帝国主義であったというのは歴史的に正確ではない。さらに帝国主義という意味が、一国がその抱懐する理想を対外的に浸透させて、同盟ないし同調国を求めていくことにあるとすれば、今日の米国もソ連も、いぜんとして帝国主義の最たるものといわなければならない。古い帝国主義といわれる時代の強国は、武力で他国を席捲し、自国の領土に編入した。これに反して、今日の強国は、相手国に交渉とか協調とかの名目によって、自国の主張を納得させる方式をとっているが、その両当事国の間に優劣の差があるときは、やはり、なんらかの支配、被支配の雰囲気が入

してないとはいえない。何々の傘下かさかにある、というようにいい方も、表向き品のいい体裁であつて、弱者が強者に動きがとれないことは、今も昔も変わりがない。強国が弱国に臨む態度にこのよ
うな変化を生じたのは、交通、通信手段の発達によって、直接の支配関係の必要度が少なくなった
こと、非文明地域が続々と近代化され、単なる武力上の示威だけでは、効果がなくなつたからであ
る。このことは実は強国の立場に立つ者が、時代の変化に応じてその支配の仕方を変えただけであ
る。そしてごく最近では、国家間のことについては、支配関係という言葉さえ全く使わなくなつて
いるが、自国の理想を諸外国に認めさせようとする心的根柢は、古今東西、また将来も変わること
がなからうと思われる。

過去の反省の仕方、過去の把握の仕方は、とりもなおさず歴史の見方につながる問題であつて、
自国の伝統と歴史を素直にみる目だけでも、すべての日本人が、一刻も早く取り戻さなければなら
ぬところではなからうか。

六、日本の現在の把握の仕方について

さきごろある有名な国立大学総長が「われわれは戦前と訣別けつべつしなければならぬ」と書いておら
れた。しかし、はたしてそうであらうか。反省するということと、訣別するということとは全く違
う。前者は精神的努力によって可能であるが、後者は精神的変革を意味するがゆえに、何びとにも

不可能である。

そこで、われわれはいま一度、敗戦後の日本の外形的変革と、それに伴うわれわれ自身の心的変化が、どのようなものであったかについて、じっと見直したいと思う。はたして、われわれは、その人生観や生活感覚を日本の外形的変革と同じように、変革することができたのであろうか、という問題についてである。君国のためにという言葉が、民主主義のためにと置きかえられた変化はある。しかしそれが、大変革であったかどうか、検討しなければならないし、かりによくいわれているように大変革であったとすれば、われわれ自身は、それにふさわしく精神革命を達成し得ているかどうかの問題である。

われわれは敗戦後、日本国体といわれた政治形式を捨てて、占領軍の提示する民主主義を受け入れた。しかし強制されたから受け入れたと考えると考えるのが人情である。それゆえ、人々の心は、表は大変革だといっても、心のうちでは民主主義というものも、実は従来の自分たちの思考と根本的に違うものではないのだ、と考えるようにする。それほどわれわれ人間は、自己自身をいとおしむ愛しているのである。精神革命などということは、到底口でいうほど簡単にはできない。口でなんといってみても、戦前の日本人と、いまの日本人は、大して変わってはいないとみる方が、むしろ正しい見方ではなからうか。精神革命ができたとみるのも間違っているし、それができると思い込んで、努力しているとすれば、そのこと自体むなしい努力であるかもしれない。そこで、このこと

を少し具体的に分析してみるために、天皇についてのここ十五年間の国民の心的推移と変化の跡をたどってみたい。

敗戦によって日本国民は天皇制から離脱した。確かに天皇が統治される形式は消滅して、憲法の上でも天皇の統治権、統帥権は否定された。それに伴い内閣総理大臣の行政権と国会の立法権は、実質的に強化された。いまの国民は、われわれ自身が主権者になったというので、主権は天皇から取り除かれてしまったと考えている。法制上は確かにその通りである。しかし、冷静に考えてみれば、主権とか主権者という意味が、昔と今と同じように感覚されているであろうか。同じように感覚されているとすれば、主権者はたしかに変わり、その所在も変わったことになる。しかしその所在と人の変化といっしょに、主権そのものについての感じ方も変わってしまったことはないであろうか。それが問題だと思う。

天皇が主権者であった時代の主権者は、天皇という一人の人格であった。すなわち、主権というものについて、われわれの頭の中には天皇というお姿なり、ご人格なりが結びついて考えられていた。ところが新憲法では、主権者は国民全部だということになった。複数、いなほとんど無限大に近いといつてよいほどの複数である。一億人の国民がいるとすれば、一億分の一の主権者が集まって、日本の国の主権を構成していることになる。主権という言葉は戦前、戦後を通じて同じであっても、それが同じものであるという実感を持ち得る人間は、一人だっていないのではないか。それ

に天皇という人格であられる方は、生まれながらにして、将来天皇たるべきことが決められておつた。従つて幼少のときから君徳の培養に努められ、天皇たるのご修業に専心勉勵されてこられていゝる。天皇の位と権力のほかに、天皇自身のご修業がそこに加えられていた。われわれが主権者としての天皇を仰いでいたのは、なにも天皇がオールマイティーの権力と権限を持つておられたからではなかつた。そのほかにもっと大切な権威が、天皇のご人格の中ににじみでていたからである。われわれが考えならされてきた主権者とは、事実このようなものであつたのである。

ところが一億分の一の主権者は、それに比べて全く異質の人格をもっている。人間としての容姿だけは同じであるが、その心根は千差万別、ボスの人物も主権者であれば、貪欲どんごのかたまりのような者も主権者である。それはおよそ従來の國民の頭の中に描かれていた主権者の神聖さには比べるすべもないほどの違いであらう。もともと天皇のようないつくしみ深い人格を主権者に仰ぐことになつた人間、それについて全然知らない人々ならば論外である。しかしわれわれ日本人はそうではなかつた。口にいわずとも、もし人間らしいまともな良心がありさえすれば、この主権者の質の変化の上に大きな疑問が投げられてよいはずである。選挙権の行使が主権の行使だといわれても、選挙権の行使は前からあつたし、別に取り立てて新しく、主権者らしい待遇を受けたことは少しもない。多少とも違つたことといえば、國民が主権者だということになつてから、選挙のときに立候補者が、腰を低くして「お願いします」ということが、度を増したことと「主権者の皆さま」

と云って、われわれに呼びかけるときに「主権者の」という言葉がついたくらいのもものではなからうか。要するに一億分の一の主権者たちは、主権者になってはみたものの、主権者らしい変化は、身辺に少しも起こっていない。ましてや天皇がその地位にあられることによって、その身につけておられた人徳や人格を学んで、その一億分の一でも身につけようと修業している国民が、何人いるであろうか。終戦前の主権者といまの主権者は、本質的内容を異にする。このことは何を意味するか。国民の素ほくな心の中には、自分たちも主権者であるが、それと違った内容のものとして、主権者らしい天皇がいつも心に写っているのではなからうか。二種の主権者を認めるといふのは誤りであろうが、何かそれに類する雰囲気がないとはいえない。国民自体の中に、天皇のような修業と人徳が生まれ出る見込みがないからである。自己の限界と天皇のお人柄との違いは、いまさらどうすることもできないことを知りはじめているからである。

こういう状況にあるのが、主権者の変化の実体である。また主権の行使の面で見ると、戦時中天皇は、主権者であらせられながら、総理大臣に勝手な政治をされてしまった。しばしば戦況の予想を誤って奏上した首相、陸海相もいる有様であるから、天皇が大権行使のご判断に迷われたのも無理はなかった。輔弼ほひつの責に任ずべき各閣僚が、その責を果さなかったからである。そして敗戦の責任は、主権者であられた天皇が一身をもって負うと表明された。これに対して戦後はどうかといえ、主権者である国民は、選挙の時だけの主権者であり、それは戦前、戦時中、表面的には、総理

任命の時だけ天皇が主権者らしかったのと似ている。そしてこんども総理や大臣や議員たちが、主権者たる国民の黙しつづつ国を思う名もなき民の思いを掬みとることのあまりにも少ないのは、かつての総理や軍人が、天皇のお心に副うことができなかったのと同様である。そしていまも政治に誤りが起これば、それは主権者たる国民の責任ということになっている。主権者というのは昔も今もわりの悪いものらしい。とにかく現実の政治をみれば、主権者から委託されたなどは到底思えないお手盛り法案が成立しているのも、むかしの比ではなさそうである。とにかく戦前も戦後もそれぞれ主権者であるはずの天皇と国民は、為政者たちに全くしてやられていたかっこうである。

そこでこれらの観点を総合してみると、どういふことになるであろうか。

まず第一に、国民は主権者ということにはなつたが、一億分の一の主権というのは、感覚的にはほとんど零に近い感じである。主権者となつてから、とくに目ぼしい身辺の変化がないこともあつて、実感的には、天皇から離れた主権なるものは、いっこうに国民の身についていないということ、中心のない、よりどころのない国民生活が送られているということである。

第二に、長い間主権者が、一人の立派な人格と結びついているのを見慣れており、その主権者に仕えることに生命的喜びを感じてきた習慣のために、中心を失ふことは、同時に自分自身を見失ふことのような気がしてくる。そこで、天皇は昔の天皇とは違うものだと聞かされ、そう思いながらも、やはり昔に変わらぬいつくしみ深い天皇のお姿に対して、人間的尊敬と敬愛の情を感じ、主権

者であるとかないとかにはかわりなく、天皇を敬慕する心持が、自然に新しい形で生まれつつある。もちろん戦後天皇が国民に近づかれるようになったことも、その原因の一つかもしれない。

第三に、国家のかなめである総理大臣が、戦前とは比較できないほどの強大な権限をもって、国政を処理しているために、主権在民がピンときていない国民には、なんとなく総理が、主権を代行しているようにみえてくる。ところがいまみるところの歴代の総理は、天皇が天皇としての君徳培養に心を尽くして修業せられ、君徳を身につけて国民に臨まれておられるのは正反対に、人徳をみがく心がけどころか、いつ党内の反対派に足をすくわれはしないか、いつ反撃されてその地位から引きずりおろされはしないか、と戦々きょうきょうたる有様である。従って四六時中党内工作にきゅうきゅうとしており、ただわが世の春の長かれと画策するだけで精いっぱいである。総理になって有徳の人になるどころか、逆に人相さえ悪くなりかねない。主権在民時代を国民にしみじみと感じさせるためには、最高権力者である総理大臣には、さすが総理なるかなと、万人に感じさせる徳が備わっていないければならない。だが残念ながら、いまのままでは何年たってもそのような総理の出現は、望めそうにない。

しかし天皇は、国民の期待に応えられて、つねに君徳をみがいておられる。このため逆にあまりかんばしくない人物でも総理がつとまっているともいえる。どうせ国民の中から選んだ総理は、大体その人柄もそのくらいのところであろうという寛大な気持が、国民に徹底しているからでもある。

り。ともあれ天皇は主権者ではあらせられないが、君徳をみがかれ、人格を高められるようご努力を続けられておられる。総理に対する国民の不満は、天皇のおいでになることよって、実質的には霧消させられてしまっている面がないとはいえない。要するに総理が人格的に欠けていても、その地位におさまっていることができるのは、天皇のお蔭であるように思われる。もし私のいうことがおかしいと思われるならば、天皇が全くおいでにならない状態を想像して、総理が主権者たる国民の前で、また国会で、お世辞たらたら答弁している姿を思い浮かべてみられればいい。必ずやわれわれは、日本の国はこんな品のない国になってしまったのかと、つくづく嫌気がさしてくるに違いない。しかし、逆に天皇がおいでにならない場合には、総理たる者は、その人格その徳風について、国民からはるかに厳格な選定を求められるに違いない。

第四、以上三点を取りまとめると、国民は天皇制を廃し、天皇を主権の座からはずしてはみたくの、天皇が主権を持っておられるということは、はたしてどういうことだったのか。それは民主主義と比較できるほど、簡単なものであったのだろうか、いろいろな反省しはじめているようにも思われる。天皇などはこの世から消えてしまえという共産主義者を除けば、心の中では天皇とは一体なんなのだろうか、という疑問を持ってきている人が多くなっているのかもしれない。

第五、天皇についてのこれらの問題は、結局日本国民が自主的に解決すべきことであって、外来のイデオロギーや主義主張とは、全く別に取り扱われなければならない。従って、西欧的民主主義

や共産主義などからする天皇批判は、これに深く介入させる必要はない。天皇とともにあった経験は、外国人には全くないし、それらの問題を考える機縁にも恵まれていなかったのであるから、こればかりは別である。

しからば、われわれが、天皇の問題をいかにして自主的に解決するか。私は天皇親政を直ちに復活すべきであると主張するものではない。天皇制政治形態が、きわめて高度の人間性に立って作り上げられてきたことは、その政治機構を政治学的に検討すれば納得できるし、今日いわれている民主主義の理想を果たし、なおそれに不足するものを補うだけの政治形態であることを私は説明できる。しかし天皇制を最高の政治形態とするには絶対必要な条件があり、その条件が整う可能性があるかどうかが大いに疑問である。おそらくここ当分それは到底整いそうもないと思われる。なぜならば、意識するとならないにかかわらず、国内に天皇を悪用しようとしている人間のいる限り、それは不可能である。まして戦時中や戦後のごとく、政権の座にあるものが、行政権の行使に当たって、人間的徳性に欠け、権力の座を私物化する限り、天皇制形態は、国家を覆滅する危険性を包蔵する。私は、いまの世論とは違って、このような立場からこの問題をみているが、ここに詳しく述べる時間の余裕を持たないことを残念に思う。だが、私は天皇に関して、天皇制論議よりもはるかに大切なもう一つの問題があることを、ここに指摘しなければならぬ。それは、天皇が政権を掌握されようと、そうでなかりと、国民は天皇という地位にあった方々、またいまおられる方の、

そのお心の内容は、どういふものであるかについて、深く知る必要があると思う。長い日本の歴史の中では、政権をもたれた天皇はさして多くなく、幕府政治の時代もあれば、武家政治の時代もある。また古くは藤原時代などさまざまである。にもかかわらず、天皇の地位が守られ、連綿として伝えられてきたという事実は、一体何を物語るものであろうか。それに心に留め、さらに進んで天皇の地位につかれた方は、どのようなお心の方であったかということまで十分知る必要があると思う。そうしてはじめて天皇を理解する糸口をとらえることができると思うのである。天皇を知ろうとすることは、天皇制問題とは別である。天皇も一人の人間であられるし、そのお心を知ろうと努力することは、日本国民の一人一人に課せられた問題でなければなるまい。現憲法においてすら、第一条に「天皇は日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は主権の存する日本国民の総意に基く」とある。天皇を知る努力が国民によってなされ、天皇を敬慕し、敬愛する心を国民の一人一人が、みずからの胸中にいだいていなければならないのは、いまの憲法によつても当然のことである。

そこでこの課題に取り組むために、歴代の天皇が詠まれ、今日にまで残されている天皇の御歌について申し述べよう。きのう津下教授も「詩歌はありのままの人の心が流露しあらわされている」と示されたように、天皇の和歌を通じて天皇のお人柄を知ることが、国民のだれでもできるきわめて気楽な方法である。東大名譽教授の久松潜一博士が天皇の御歌を帝王調という表現でいわれたこ

とがある。しかし、博士のいわれる帝王調の意味は、広く国民の上に立たれているいづくしみ深いご自覚が、御歌の中ににじんでいることに對する表現であつて、従つて帝王調といわれた言葉の中には、專制的君主の意味は全然含まれていない。人の上に立たれ、人々の幸福と平和を心の底から祈られるお心、それが歴代天皇の御歌に一貫して見られるということは、なんとという有難いことであらうか。それは、一たび御歌を読まれば、直ちにくみとることが出来る。それが日本文化史上「しきしまのみち」として、和歌の道すなわち人の道、国の道として伝承されて来たところのものである。そこに人の心の指標を、また国民古来からの精神を看取し求めることができる。日本語による独特の平和と文化探求の道である。（詳しくは亜細亜大学教授夜久正雄氏著「歌人・今上天皇」（明治

書院刊）を参照せられたい）

いま、明治天皇御製についてこれをみると、われわれの青少年時代、戦時中によく耳にしたものは、道徳律のような堅苦しいものが多かった。しかし、改めて御製集をひもとくと、芸術的に香り高いしらべに触れるものがきわめて多い。私は和歌の道にはあまり素養を持たないが、国民の一人としての所感を申し述べてみたい。

「紅葉」という題で詠まれたものに

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな（明治四十四年）

「散らむ」の次に「と」「す」「なる」と、三つの語が重なって、まさに散らうとする状況がきわ

めて、強く表現されている。色が移り変わって、いまにも落ちようとしている真紅のみみじ、いますぐにも散ってしまおうとする運命、人の世のさだめを、その紅葉にお感じになったものであろうか。散っていくのみみじの葉を、とくに悲しむでもなく、美しいなあ、ただ美しい、とだけ思ったという表現の中には、人間的思考にとまどって、散っていく紅葉を理屈づけたり、生と死を論理的に分析するなどというゆとりもなく、あるがままの姿を、みたまま素直に詠まれていた。そこに自然の中とけいっていく作者の、人間としての素直な、直接的な、やさしい心があふれでている。またそこには宗教的解脱ともいえるものが、きびしい人生を統一しているようで、人間としての大いなる姿が見受けられる。

雨後眺望

雨雲の風にきえゆく山のはにあらはれそめぬ松のむらだち（明治四十四年）

虫声非一

さまざまの虫のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは（明治四十四年）

虫声欲枯

かれ／＼になりぬる庭の虫のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり（明治四十四年）

天皇の地位を権力の座とみているのは、あさましいわれわれの心の迷いであって、これらのお歌、そのしらべは、権力の座を意識する君主であったならば、到底詠みいだすことは不可能ではなから

うかと思われる。天皇が和歌を「しきしまのみち」として、われわれ日本人の間に、まことの歌、高いしらべの歌を希求されたのも、決してゆえなきことではなかったと思われる。いらだたく、わずらわしい人の世、権力と金力のあやなすこの世にあって、どのようにして広く深い人の心のやすらぎが求められるか、人間生活の平和と安寧をみずから求め続けられたためでもある。国の象徴たる天皇とは、このようなお心の方々であったのである。外来思想が天皇を封建的遺物といおうとも、日本の国民は、もっと自信を持ち、自主性をとり戻し、その伝統的国民感覚によって、日本を見直し、天皇を把握し直したいものである。明治天皇が

きゝしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞ことばの高きしらべを（明治四十三年）

と詠まれ、また

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな（明治四十五年）

と歌われたのをみても、コトバに対する天皇の一生をかけてのご探求のきびしさを知ることができると思う。われわれはコトバのもつ意義をきわめ、国語を語る国民生活の独自性に改めて心を注ぎたいものである。コトバを同じくする人々、それが国民というものであってみれば、コトバを正しくすること、コトバを栄えさせることは、取りもなおさず日本が世界文化に寄与貢献するための大きな要素に違いない。

それゆえに、明治天皇が

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも（明治四十五年）

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ（明治四十年）

おもふことうちつけにいふおぼえ幼児の言葉はやがて歌にぞありける（明治四十年）

と詠まれたこれらの御製の中にも、言葉に対する嚴肅な関心が見受けられ、しきしまのみちとして
の歌道を、趣味道楽の類とみるべきでないことを示されている。日本歴史の上で第二期の外来文化
輸入の時期が、このような指導的人格に導かれたことを、ふたたび深く考えたいと思う。とにかく
歴代の天皇はそれぞれ性格も違うが、それがそのままそのお歌の調べに見出されるのである。そ
れだけに歴代御製を学ぶことが、政治学としての学問の一つの大きな課題にとりあげられる必要が
あると思う。その時こそ日本文化の研究は、はじめて軌道に乗る時期を迎えると確信する。

七、国民性の中に継承せられてきた平和的気質

さて、一國が敗戦に至るのは、内部にそれだけの欠点があつてのことである。第二次大戦で日本
は完敗の浮き目にあつたが、戦争に日本が参加したこと自体に罪悪があるのではない。（これは開
戦についての米國側の記録をみてもわかる）しかし長期の見通しを立てることなく、開戦したこと
は大きな過失であつたと解すべきである。もし現在の國民が、第二次大戦に参戦したことを罪過を
犯したように考えたいならば、それは日本の祖先に対し、日本の長く良き伝統に対して、祖国を傷

つけたことを罪過として謝すべきであって、断じて対戦国や諸外国に対して謝罪を考えるべきものではない。なぜならば交戦国であった諸外国は、最後には日本を完全に占領し、勝手に領土を分割し、占領下では思うままの施政を実行し、あまつさえ日本の国体を破壊し、日本の教育を根底から変革したからである。このようにして日本の開戦に対するとがめは、具体的に現実に日本の上に加えられ、すでに完結しているからである。勝者と敗者は、おのおのその分に応じた運命をそこに経験し、それだけで一切は完了しているはずである。それゆえ勝者に対して敗者が齒を食いしげってあやまらせられるということはあつたであろうが、しかし占領も解かれ、形式的であろうとも独立を認められてからは、毅然とした自信をもって諸外国に相對すべきである。いつまでもそれらの諸国に罪過を謝すというような態度で、大戦の回顧を繰り返すことはもつての外である。ましてや学生生徒や青年に日本の歴史を教え、過去を知らせる国民教育の場であつて、それに類した教え方がなされていたり、国旗や国歌を尊敬することを教えないなどという、占領下の遺風を温存しているのは、愚劣な誤りである。それは、敗戦にまさるとも劣らぬ罪惡的行為でなくてなんであるか。

それはともかく今日われわれが、日本の伝統的な美風を歴史上のどこに求めるかについては、大いに心を用いる必要がある。すくなくとも敗戦直前や、それに近い年代における国民感情や、文化的遺産に頼るべきではなからう。それはいずれも直接、間接に敗戦を生んだ原因を構成しているか

らである。敗けるような戦いはもともと戦わず、やむなく戦って祖国の危急を救ったような時代、また、そのような日本を作った背後の長い伝統の中から、それを探求していくのが正しいと思う。このように歴史をたどり、伝統にさかのぼるにも、長い年代の中から求めることができる日本国民は、どれほど諸外国の人々に比して恵まれているかわからない。古い歴史を持つということは、長い年月にわたる祖国の足跡の中から、すなわち広範な対象の中から現代に生きる生活原理や、生活態度を思うままに引き出すことができるからである。

そこで私は、古い時代あるいは明治時代と、敗戦を導いた終戦前の時代との相違が、どのようなものであったかについて、二、三例をあげて述べてみたいと思う。同じ愛国心であってもまた情意のあり方についても、心理的にどちらがより人間的であり、より人生的であったかを知ることができると思うからである。

終戦前、すなわち戦時中には、「滅私奉公」という言葉が流行した。私を思う心を減し、抹殺してしまつて、公すなわち、国のために一切を捧げようというスローガンである。ひどいことには、この言葉を印刷したピラが、街角の電柱にまでベタベタとはられ、電車に乗れば吊り皮やドアにまではりめぐらされるほどであった。戦時中の個人生活が、食料と生活物資の窮乏に苦しんでいたことは別としても、個人生活の感情的表白や、精神的いこいについても、それが「私を主張する私を捨てていない」という理由のもとに、さらには「それゆえに非国民的行動である」という理由のも

とに、一切が抑制され、禁圧に近い措置が取られていた。従って個人生活における恋愛も、肩身の狭い思いをさせられたし、出征に当たつての親子の別れも、いとしい妻子との訣別も、涙を流すことが恥とされるような風潮になっていた。

なぜ泣けてならない親子の生別に、泣けるだけ泣くことが許されなかったのであろうか。いとしい妻と再びこの世で会えないかもしれない出征に、妻を思う切ない思いを歌に託し、詩に詠ずることが正々堂々とできなかつたのであろうか。そこに人間精神をまともに素直に取扱うことのできなかつた時代の誤りがあり、敗戦につながる大きな問題があると思う。「万葉集」巻第二十の防人の歌と比較対照してみたい。防備の任を受けて、東の国あづまから遠く九州の果てに出征する人たち、名もない国民たちの歌である。

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

忘れようとしてもどうしても父母が忘れられない。自分をこれほどいとおしみ今日まで育ててくれたあの慈愛深い父母。自分が出征するまでに成長したことを喜んでくれたながらも、生きて再び会えぬかもしれない。そう思って悲しい表情をしていたその心中を察すると、どうしてあの時の父母の顔を忘れることができようか。その真実のそして切実な思いを、そのまま歌に表現したのが、この歌であろう。思うことを、だればばかることなく、思うままに歌いあげたことよって、この防人の心は、きつと開かれ、救われていったに違いない。征旅に死ぬいまわのきわもなお、父母を恋

しく思うその思いの切なさが、同時に身を捨てて勇ましく戦いぬく迫力を生み出す源泉となつていたと感じられる。この防人は父母と自分の名譽にかけても、戦場で女々しい振舞いをする事はあり得ない。必ずや比類なく勇敢に戦つたであらう。

葦垣の隅所に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ

出立のまぎわ、葦の垣根の片隅に立つて、着物のたもとの袖が、びっしょりぬれるほど別れを泣き悲しんでいたわが妻、その妻の姿は、遠くにくるにつけて、いよいよ思い出されてならない。ああ妻とはなんといいとおしく、人の世、人生とはなんと悲しいものであらうか、という意味であらう。

万葉集のこの巻には、すばらしい和歌が数多く残されている。それは遠い時代から現在につながる日本人の心の響きを伝えている。そのしらは、永遠に日本人の心に、そして外国人の心にも感じし続けるに違いあるまい。ここに説明を略して数首を引用して置くが、どうかこれらの和歌を朗読して、その中にこもる素直で、悲しくも雄々しいしらべを味わっていただきたいと思う。

吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむ我が妻かなしも

我が母の袖持ち撫でて我が故に泣きし心を忘れぬかも

我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れえず

道の辺の荆の末にはほ豆のからまる君を離れか行かむ

丈夫の鞆取り負ひて出でて往けば別を惜しみ嘆きけむ妻

白浪の寄せる浜辺に別れなば甚もすべなみ八遍袖振る

津の国の海のなぎさに船装ひ発し出も時に母が目もがも

旅と云ど真旅になりぬ家の妹が著せし衣に垢つきにかり

韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして

こうしたうたのなかに生まれ出たのが、あの有名な

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

の一首であり

霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は来にしを

の和歌であった。この勇ましくみえるうただけを流行させて、同じ書物の同じ巻の中にあるこのよ
うな数々のすばらしい和歌を見落し、味わう余裕のなかった時代、人の心の表裏を合わせて認め合
う素直で謙虚な人間感情を忘れていた時代、それが終戦前の日本の偽わらざる姿、堅苦しくて、人
間精神が躍動しなくなるように仕向けられていった時代の様相であったのである。これらは、いず
れも専門の歌人ではなかったに違いない。この作者たちは、深刻な哀情と歓喜をいつまでも心に留
めて忘れようとしなない。それをいつまでも心に残し得るその情意生活の弾力が、実に尊いと思われ
るのである。歌の内容がいかにか個人的であろうとも、いな個人生活の深奥に徹し切っているがゆえ
に、その歌のしらべは雄々しく、たくましい防人の姿を、その言葉のリズムの中に奏でている。私

はこれらのうたを、実に平和な香りの高い歌であると思う。平和を求めることがこれほど切実であつてこそ、祖国の急に一身を捧げることができるとはなからうか。そこには敗戦前の日本が、前述したようにひからびた「滅私奉公」のスローガンを振り回していたのとは、全く本質的に違つた人間関係の把握がみられる。人を信ずること厚い上代の姿であるといい切るには、あまりにも惜しい祖先の足跡である。それはこの華やかな文明の時代にも、人の心の持ち方いかんによつては、決して喚び戻すことのできない世界ではない。為政者が国民の心を信ずることができなかったところに、日本の敗戦の原因があつた。国民に過度の精神的緊張を求めた当時の為政者たちは、どのような過失を犯していたことになるであらうか。

人間は常に緊張状態を保ち続けることは不可能である。ある一瞬ないし一時期に、緊張の状態にその身心を置くときには、そのあとで必ず心の中に弛緩を伴うものである。その緊張と弛緩の交替こそが、あるがままの人生の実相であつて、緊張の持続を要求するような施政は、自由の名のもとに放任と無秩序を放任する能力のない無信の施政と同じように、それ自体人間性を理解しない無暴さを持つている。それは同時に不可能を強いているのと同じであるから、それが続くときは必ずゴマカシが生じてくる。しかしそれでもそのゴマカシは、人の心がゆとりをとり戻し、笑いと夢とに息づくための休息を意味しているかも知れない。もともと「滅私奉公」というのは、人間が深刻悲痛な人生を、個を断ち切れぬ思いを胸にいだきながら、公のために見事に捧げ切るその最後の姿を

客観的にとらえた表現であるから、それは生ける者に、死せる人の最後の姿を常時継続的に要求することとなってしまい、全く人間心理の正常な過程を忘れたものであった。それは日本古来の美風だと宣伝されていたが、全くの偽りである。日本には、古来からもっと人間的な姿がみちみちている。それゆえにこそ、日本が今日に伝えられ、滅びざる国であったのではなからうか。人間性を失う政治のもとでは、国家は敗れ去るほかはなかったのかもしれない。

質疑、休けいの時間的余裕もなく、木下、森、小田村三講師の講義が連続して行なわれた。参加者たちは、ようやく一つにとけ合った空気の中で、連日の疲労も忘れ、それぞれ熱心にメモし、あるいは真剣なまなざしで、講師の顔を凝視しながら講義に聞き入っていた。講師にはもっと訴えたい、また訴えねばならぬ多くのものが残っていた。一方学生たちも今日の時代に対して、また帰ってゆく学園生活に向かって何かしら叫ばずにはいられないものを、それぞれの胸中にいだいてきた。しかしいまとなってはそれらの思いを心ゆくまで語り合う時間がない。時は刻一刻と過ぎてゆく。しかもこの会場は当初からの約束で午後二時ごろまでしか使用できない。主催者側も参加者たちも、最終日のこの時ほど、時間のないことを残念に感じたことはなかった。

昼食後、感想文をしたためて合宿の最後の行事、閉会式に入る。鹿児島大学助教授の川井修治氏が、国民文化研究会を代表して簡単に閉会のあいさつを述べ、続いて別府大学学長の花田大五郎氏が大学教官有志協議会を代表してあいさつを述べられた。

あいさつ「国民同胞感のもとに」

川井 修治 講師

私たちは力を出し切った。その間不手際もあつた。そしてまたある時は、不信と不安の念を起こさせ、まことにザンキに耐えない。しかし私たちは国民同胞感と一体感のもと、心新たに問題と取り組む勇気を与えられた。この合宿で提起された問題は、すべて事実^{じじつ}に立脚したものであつた。「事実」を謙虚に受け入れてゆく態度の中に、共通の広場も生まれよう。願わくは心を開いて、この上ともこれらの事実と真剣に取り組んでいこう。

あいさつ「氣宇を扩大到」

花田 大五郎 講師

老齡の私も、来年まだ生きておれば再び元気な皆さんにお目にかかりたい。どうぞそれまで皆さん方は健康な身体と心を養っていただきたい。熊本の横井小楠^{よこなん}(幕末の開国思想家)という人は「大義を世界に布く」という広大な氣宇をもって勉強した。新渡辺^{にわたべ}稲造(明治から昭和初期にかけて活躍した国際的教育者)は「ドイツ人は知識をタンスに入れる。イギリス人は大体をつかむ」ということをいつている。大体をつかむイギリス人は、大きな発見をする。スミス、ニュートン、ダーウィンみなしかりである。老いのくりごとになるが、どうか若い皆さん方は、日本の先人を思い、世界のすぐれた人たちを思い、氣宇を大きくしてがんばっていただきたい。老境に入った私として、今は若い皆さん方だけが頼みのツナである。

最後に全員国歌「君が代」を斉唱。ほとんど大部分の参加者は、緊張した面持で頬をこわばらせている。こ五日間にわたって、講義と討論の連続にきびしく明け暮れた講堂に、いま流れる壮重なメロディが、参加者の複雑な思いを統一してゆくようである。思えばこれまでこのように厳肅で真剣な雰囲気込まれて国歌を歌ったことがあっただろうか。後ろの方にいた女子学生の中には涙を浮かべているものも見受けられた。阿蘇の山々は、遠い太古の時代そのままの威容を示しながら合宿最後の営みを見守り、外輪山の山肌も、激しかった合宿の精神的苦闘を象徴するかのようになり、あざやかな濃淡を示していた。

初秋をしのばせる雲が、外輪山の上にかげを落していた。式終了後直ちに旅装を整える。まことの友情とは何か。まさに帰りゆく学園に、職場に、農村に、国民同胞感を現成し、それを全国に広げなければならぬ。決意と自信にみちた、顔、顔、顔——。それは「合宿教室」によってめざめ、立ち上がった若き青春像であった。いまはもう別れ難い気持が胸いっぱいこみあげてくる。参加者たちはそれぞれ堅い握手を交わして三々五々別れてゆく。

主催者一同は玄関先まで出て、この「合宿教室」から国民同胞感、一体感を感得しつつ帰ってゆく人たちに手を振り続ける。名残りを惜しみながら「さよなら」「お元気で」「しっかりやろうぜ」と呼び交わす声は、昼下がりの阿蘇山麓にいつまでも聞こえていた。

はしりがきの感想文から

——これは閉会式三十分前のあわたたしい時間
間をさいて、参加者全員にしたためてもらった
感想文の中から抄録したものである。第四
日の「意見発表会」（二六一ページ）と対照
して読んでいただければと思う。——

真心を語り合う体験

僕はこの合宿に何かしら虚偽がありはしないかと思いつながら、先生方の講義や指導員の説明を聞いていた時もあった、ということ素直に告白したい。しかし僕はこの合宿の中に、現代の日本に欠けているもの、現代をより正常な方向にもってゆく力のあることを認めざるを得なかった。指導員とも話した。壁がないのを感じる。おおらかな空気が漂っている。班別討論もなごやかで楽に話せるようになった。それまでは僕自身の方で心をとざすことが多く、そのようなことでは真の友情も、国民同胞感も確立できないことがハッキリした。このことを体験できたことは、なんとしてもうれしい。これがこの合宿での第一の収穫であった。(九州大学法学部学生)

精神的バックボーンの基盤

この合宿で私を得たものは何か、それはよき友、心の中をさらけ出して語り合える友を見出すことができたとしたことである。何という喜びだろうか。人の世に生きる至上の喜びとは、このようなものであろうか。いま静かに合宿を振り返ってみる心のゆとりはないが「班別討論」は楽しかったの一語に尽きる。「楽しい」というのは精神的内面的な「豊かさ」といったものである。私はここで友情という言葉のもつ実内容「心の触れ合い」「魂の通い合い」を身をもって経験した。欲をいえば、班別討論にみられたような暖かく、しみじみした雰囲気も講義にもほしいような気がした。「民族精神」といい「日本国民の精神的バックボーン」とい

い、かかる友情の土台の上に築きあげられねばならぬと思う。(福岡大学法学部学生)

清らかな民族精神の中に

私はこの合宿で、学校の教壇からは一度も聞いたことのない講義を系統的に聞くことができた。祖国とか、天皇とか、学園生活の中では、ほとんど聞かれぬ言葉にも接した。はじめのうちは、それらの言葉にとまどい、講義内容にも疑問をいだいた。卒直にいつてこれではとてもついていけないという感じが強かった。しかし私の考え方を根本的に変えさせたものは、やはり諸講師と班指導員の真剣さとまごころであった。合宿で行なわれたような講義が、学園になかったと同様、そのような真剣さとまごころも、私の周辺にはなかった。あれだけの信念と確信をもって述べられる諸講師の講義に、ひそむものは一体何か。なんらかの意図をもって、このような講義をされているのかどうかという疑問もあった。だが私は諸講師の真剣さに直面して、少なくとも謙虚に耳を傾くべきであると思った。遠慮なくいわしてもらおうと、私たちには、諸講師の講義はとつきにくく、十分理解し難い点もあった。もっと平易に、私たちにもわかるような言葉で、話していただけたらと思うこともしばしばだった。それにもかかわらずやがて私が、そこに見出したものは、講義に裏づけられた深い人生体験、学問に対する正しい態度と情熱であった。

私はこれまで、天皇とか、祖国愛とか、情意生活とかは、学問の対象外であると思っていた。日本民族の統一を持続してきた国柄——国体を否定して顧みないなどということは、冷静な学問の態度ではないことを知っ

た。また概念思弁のほかに心の通い合う「精神交流」の世界のあること——私が頭の中で求めていたものが、観念の世界でなく、現実には日本の国土に、私たちの祖先から一貫して受け継いできた、清新な民族精神の中にあることをはじめて知ることができた。この意味で私を「開眼」させてくれたのがこの合宿であつた。（中央大学学生）

国民としての自覚が収穫

こんとんとした思想生活を送っていた僕にとって、画期的変革とまではいかなくとも、大きな示唆を与えられたことは確かである。参加者のファイトに圧倒され、いままでの僕のき（籠）弁を思い起こしてみると、赤面せざるを得ない。これで過去の僕のあいまいさが、ますます赤裸々にされた。今後僕はあらゆる問題と取り組み、僕自身を確立するとともに、この感激を周囲の友人に訴えてゆきたい。僕はこの合宿で日本国民の一人であるという自覚を持つことができた。これが最大の収穫である。しかし「日本国民」という観念にとらわれ過ぎると、国民意識過剰となり、それが高まって孤立するようになりはしないかという懸念が、どこからともなく湧いてくる。だからこの意味で、合宿が国民意識過剰という印象を与えないように、こんご一段と工夫していただければ、もっと広範な層の支持共鳴を得られるのではないかと思う。（長崎大学文学部学生）

雄々しく継続的なたたかいを！

規律ある団体生活、真剣な班別討論、豊かな心と人生体験のにじみ出るような諸先生の講義、楽しかったコンパなどの思い出は、いつまでも忘れることはできないであろう。わずか四泊五日の短期間ではあったが、あたかも十年の知己のごとき先輩、友人の得られたことは、何にもかえがたい喜びであった。

精神生活の最も高度な表われは、宗教生活と芸術生活にある。しかもそれは国民的な歴史伝統の中にある。個人の生命ははかないけれども、真に永遠の生命は民族的精神の中にある。究極するところ、それは国民同胞の、過去、現在、未来を通ずるつながりの中に生成発展する。これらのことを私はこの合宿で教えられた。

現在、世界の二大陣営の一方を指揮する国際共産党は、階級的唯物史観に立ち、歴史の「鉄の如き必然性」を妄信しつつ、われわれにたたかいをいどんできている。国民の同胞同信生活を分裂に導こうと働きかけてきている。われわれは断じてこれに打ち勝たねばならない。雄々しく継続的なたたかいをわれわれはたたかい抜かねばならない。このような真の内なるものとのたたかいの過程において、やむを得ずなされる外とのたたかいこそ、最も威力あるたたかいに違いない。友よ、たたかい、たたかい進もうではないか。(早稲田大学学生)

感動を形あるものに

僕の心はいま喜びではち切れそうだ。それはいままで孤独の悲哀をなめてきた僕にとって、炎となつて燃えはじめた喜びである。僕は夜班室に寝ている隣の友人を起こして、ともどもにその喜びに浸りたいと何度思っただかしのれない。合宿は、僕の魂を気の狂いそうな感動で包んだ。僕の心はいま燃えているため、これからどうしようというところまでまだ見きわめられない。天皇も、国家も国民同胞感もこれから一層研究しなければな

らぬ。そして諸先生の教えを胸に、この限りない感動を形あるものに現わしてゆきたい。僕は日本人の心の中に流れる共通の魂をつかんだ。僕はいま、僕のすべてに素晴らしい転換、奇蹟が起こったことを感じている。(福岡大学学生)

生きた思想を形成するもの

私にとってこの合宿は、まことにかけがえない機会であった。マンネリズムに墮した日常の学生々活では体験し得なかつた充実した五日間であった。そしてその心の張りを、われわれの今後の学生々活の中に、ひいては国家生活全体の中に生かして行かねばならないと思う。

諸先生の講義は、いずれもわれわれが、学校で聞く概括的、抽象的な講義と違って、明確な立場から発せられた鮮烈な所論であつたという点で、大きな刺激を受けた。——もちろん、全部を理解し尽くしたとはいえないのであるが——。それに比べてわれわれが日ごろ学校の研究会や討論会で発言する言葉は、実に概念的、表面的な知識のやりとり過ぎなかつたことを改めて痛感した。たいてい他人の知識の借り物であり、その解釈の上に、解釈を重ねて行くだけの空しい論理の遊戯であつたことを、つくづく反省させられた。合宿におけるわれわれの討論も、最初のころはそのような傾向を免れなかつたが、指導員の方々の懇切な指導によって、次第に、お互いの心の核心に触れ合うきざしが現われてきたように思う。私自身もそのような反省にとらわれて、思うように発言することもできなかつたのであるが、終わりのころには、何かそうした卑小な自己のある

がままをさらけ出し、私の心の最後の叫びである「同じ日本の青年として、みな手をとり合って進もうではないか！」という意味のことを、絶叫したい気持ちに駆られたほどであった。しかし、私のためらいから、ついにそれができなかったことを、いまにして後悔している。

ともあれ、生きた思想、切実な体験に発する言葉を自分のものにしようというのが、友らともども話し合った結論であった。そうした点で諸先生の話は、祖国の精神伝統に対する愛着とどうけい(憧憬)を強めてくれた。そしてそのような情意の中からこそ、真に生きた思想が形成されると思うのである。日本人としての精神的支柱を何に求めるか、という合宿のテーマの解答は、抽象された国民性や社会条件の分析からではなくて、このような憶念と、それに発するきびしい奮闘の生活の中からこそ生まれ出るものであらう。(鹿児島大学学生)

階級闘争理論を越えて

現在の政党、政治家、学者先生に心ひかれるものはない。いまの日本には青年、学生を奮起させる何物もない。希望も夢も、ひとかけらだにない。僕は階級闘争理論が至上のものと思っではいなかった。しかしマルキシズムとその革命理論(革命そのものの内容にはいろいろ問題はあるとしても)には青年、学生の心をとらえてはなさない何物があると信じてきた。階級差をなくし、一切の社会悪を除去した理想社会を実現するために、身を投げ出すことが、われわれの使命であると思っっていた。(全学連の運動に直接参加していない学生でも、このように考えているものが少なくない)その僕がこの合宿で階級闘争の誤りを知ったのは、講義の中に

盛り込まれていたマルキシズム批判ではない。僕にとつては「諸講師は、異質のもの」を講義している、聞かないでいた方がいい、聞くと胸くそが悪くなる」という反発の気持で一杯だった。だが国際情勢の分析や日中関係はじめ、戦前、戦後の教育方針の変革などの講義を聞いてるうちに、もっと自分の足元をみつめる必要があることに気がついた。僕は班別討論でかなりハッキリした立場から発言した。班指導員が当惑していたこともわかっていて、ところが、ある指導員が「君の誤った考え方は年長者である私たちの責任だ」と発言された。いままで見ず知らずだった人から僕の誤りを、自分の誤りとする切実な責任感。僕はその言葉に強い感動を受け、しばらくの間一言も発することができなかった。本当に生まれてはじめての体験だった。階級闘争理論では割り切れないものがこの合宿の中にある。階級闘争と政治機構のからみ合いを越えたもの——全国民が外的な差異を越えて、信じ合い、協力し合ってゆく道のあることを、講義からくみとることができるようになったのは、それからのことであつた。誤つた理論の中に育ってきた僕の胸に、芽生えつつあるように感ぜられる国民同胞感、一体感。僕はこんごそれを大事にして進んでゆきたいと思う。もちろんそのためには、マルキシズムと取り組んで勉強した時以上の努力を必要とするであらうけれども——。(福岡学芸大学学生)

国民生活のヒナ型は各人の心に

心知る友とかたれば心なごみながるるなみだとどめかねつも

四泊五日間の合宿を振り返って、この一首の和歌が、私の心をしつかりとらえたようである。日本人として

の誇りをいだかない日本人はないはずである。悪人といわれる人の心にも、響くものがあれば心は通うのである。右とか左とかの問題ではないのではなからうか。理想的な国民生活のヒナ型——それはまず各人の心の中に築かれねばならないと思う。私もこの合宿のもつ深い意義に心打たれている。来年もまたこんどの友だちのほかまだ見ぬ新しい友だちとめぐり合って語り合いたいと思う。(福岡学芸大学女子学生)

女子学生もたくましくありたい

諸講師のお話は大変むずかしいものだった。班別討論で意見を求められても、最初は自分の意見を述べるゆとりもなかった。女同士はもう少し身近な問題について話し合いたいという意見もだが、この身近なことの中には、安易なという気持ちが多分にあったと思う。私たちはもう少し広く大きな問題に関心を持ち、次代を背負う者としてたくましくありたいと思う。これを機会に今後の自分の生活も変わったものになってゆくと思う。合宿に対する感想というより、つくづく自分というものを考えさせられた四泊五日であった。(熊本大学薬学部女子学生)

学生生活への再出発を決意

合宿に参加する前、僕は自分と同じ年代の人々は、日本の国のことを考えているのだろうかという疑問を持

っていた。だが、この合宿に参加して、みんな心の底では本当に日本の将来を思っていることが、ハッキリした。環境や立場はおおの異なる、目的や手段、方法は違っても、日本の国を愛し、日本の現状を憂い、どうすれば日本をよくすることができるかを考えている青年、学生がここにいる。僕がこれまで考えていたことが恥ずかしくなるくらい真剣な青年、学生がここにいる。最終講義で「心知る友と語れば……」の歌を聞いたが、お互いに意見が合わなくてもほんとに気持よく話しあえる、お互いに日本人同士だということを痛感し、学生生活への再出発を決意している。(北九州大学学生)

参加者の心を結合させた班別討論

まずこの合宿の長所をあげてみよう。

一、講師と指導員の方々が非常に熱心であった。それは真剣な求道心と豊かな友情を求めるにふさわしい熱心さだった。私の班担当の指導員は、食事も休み時間も学生とともに過ごされ、そのうえ討論中の態度もまじめで、自分が講義でとくに感じた点をきちんとメモしておき、詳しく補足説明していた。このような態度がグループ内の空気を真剣なものにした。

一、参加学生の熱心さにも驚くべきものがあった。大体が大学の一、二年生であっただけに討論の議題は決して高度なものではなかったが、お互いの意見交換は討論中だけではなく、絶えず続けられた。たとえば一つの講義を聞いたあとも、時には部屋の片すみに、あるいは廊下にと、その講義をめぐって討議し合っている真

剣なグループがあちこちにみられた。企画面では、班別討論で班ごとに班員の気持が統一されたこともよかった。班員との親睦、および班指導員の接触が非常な効果をあげ、百六十名の参加者の心をうまく結合、統一した。

一、講義内容はさらに検討を要すると思われた点もあつたけれども、とくに偏向するところもなく、政治、経済、文化、哲学など全般にわたり班別討論に好材料を与えていた。

次に短所をあげてみよう。

まず講師はじめ主催者側が、熱心さのあまりスケジュールに無理を生じた点が指摘されよう。講師個々人をもみても熱心さと、親切さが逆に弊害となつて表われた面もあるようだ。また外出、玉突き、テレビなどを禁止したことは、はじめ厳格過ぎるという感じがしたが、これはいま考えてみると、見知らぬもの同士の間でも、話し合わねばならない羽目になつて、自然親しさを深める結果になつた。しかし一日一時間ぐらひは、近所のグラウンドで団体競技をさせるようなことでもしないと、不必要な反発をつくることになりはしないか。要するに指導員は、学生の本質をつかんで、司会、指導することが何よりも必要であらう。(班友Ⅱ青山学院卒業)

時代の断層の深刻さに驚く

一 私はわれながら真剣に、問題と取り組んでいると意識していたつもりであつたが、いつの間にか妥協点の発見にのみ気を使つてゐることに気づかせられた。

二 予想以上に時代の断層の深刻なことに驚いた。これは当然理解してもらえると考えて発言したことが、学生諸君の反発にあい、あらためて、よって立つ基盤の相違に気づいた。今後の子弟教育に大きな示唆を与えられた。

三 学生諸君の純真さと、直理探求のきびしさに頭が下がる思いがした。「今どきの若い者などと軽蔑致すまじく候」という言葉が思い起こされた。(岡山、農業)

先入観を捨てて青年学生と接しよう

一 講師諸先生の話に少しも抵抗を感じないで、共感感銘した。

二 一方学生諸君がいちいち抵抗、反発を感じることを知り、時代のズレをしみじみと感じた。

三 自己の精神的動脈硬化について戒心し、幅と柔軟性を持つとともに、先入観を捨てて、素直に若い人たちに接してゆかねばならない。先なるものと後なるものと、二つの世代を結びつけるために全力を尽したいと思う。

四 参加者名簿の作成をお願いしたい。それによって若い人たちと連絡協力の道を見出してゆきたい。(熊本、農業)

地 熱

山 田 輝 彦

峠みち越ゆるたちまち真向ひに天そそり立つけぶり噴く山

見はるかす目路のかぎりの碧瑠璃へきるりの空に靡なびけり阿蘇のけぶりは

若き日の友みな逝けりおのがじし燃ゆる思ひを胸に抱きて

わがはたちともに時世を嘆きつる汝が面輪いままなかひに見ゆ

大阿蘇の燃ゆる地熱のとしへに汝が雄ごころの消ゆと思へや

(作者は班指導員、若松高校教諭)

あとがき

花だよりによると、阿蘇山麓は、いま菜の花ざかりだという。春が過ぎ、夏がくると、なつかしい友人や青年、学生たちと再会することができる。ことしの合宿地は雲仙、合宿準備はすでに九州の友らによって開始されている。(この夏の雲仙合宿に対する問合わせは、鹿児島市山下町一一七番地 鹿児島大学官舎内、川井修治鹿大助教あてにお願いしたい)

阿蘇合宿の報告書ともいべき本書は、志を同じくする人々のあたたかい激励と期待の中に、いまようやく世に出ようとしている。しかも名の通った出版社から刊行、市販されることになり、今日の時代に深憂をいただく多くの方々に、読んでいただくという長き日の念願が、実現されたことは何よりも喜ばしい。

本書は、昨年夏の合宿終了後、岡山で原稿の収集、整理が行なわれ、東京に届けられた。十月京都で編集委員四人が会合、編集方針を打ち合わせた。その後東京の編集委員が、出版社との交渉をはじめ表紙および表題決定、構成、原稿執筆、校正などを担当した。アジア大学教授今田竹千代氏から「理想社」を紹介していただき、同社からの出版が本決まりとなったのは、ことしの一月上旬であった。これを世に出すため編集委員は、幾たびとなく慎重な検討を重ね、二月から三月にかけて

ほとんど全身心をこれに没入した。(三月上旬最終原稿を仕上げ、これと前後して最初の校正を行なった) こうして本書は、生まれ出ずるものの苦悩をいやというほど味わいながら、陣痛、難産のすえやっ とでき上がった。われわれは一人でもいいから、この編集、出版にかかり切りになれる。『専従者』 があつたらと、こんどほど切実に感じたことはない。時間の関係で、校正その他に周到を期す余裕 もなく、従つてそのできばえについては、編集委員自身決して満足すべきものと思つていない。最 後に本書の出版に当たつて、理想社の佐々木社長と井上智行氏のご協力をいただいたことを、全国 の友らとともに衷心から謝意を表したい。

なお本書は、内閣告示による新当用漢字および新送りがなで統一した。新送りがなについては、われわれ の間でも反対の意向が強いが、若い世代の数多くの人々に読んでいただくため、それを採用した。また同じ 目的から、当用漢字以外のものについては、かな書きまたはかなを振つて読みやすくしたが、不体裁の点は 切にお許し願いたい。

昭和三十五年三月二十五日

編集委員

第三版あとがき

四月三日に初版を、五月五日に再版を、そしていまつづいて三版を世に送ることになった。本書が予想外の好評をうけたことは、ご推薦くださった各位のご声援に負うところで、深く謝意を表したい。

しかしこの同じ時期に、全学連のすぎまじい政治デモが連続して繰り返りひろげられたことも、本書の売れゆきと無関係ではなかったようである。六・四スト、羽田のハガティー事件、さらに六・一五国会構内騒乱にいたっては、世相はまさに赤色革命前夜を思わせる混乱を呈した。大学生たちの上に、また大学教授たちの指導の方法に、世人の驚きに似たような注目があらためて集まったのも当然である。大学の学園はどのような方法と識見によって、そのあるべき姿に立ち返ることができるのか。その日の一日も早いことを祈ってやまないのは、国民共通のねがいであるとおもう。

昭和三十五年六月三十日

編集委員

昭和三十五年四月三日 初版発行
昭和三十七年十月十日 四版発行

定価 五〇〇円

〒 八〇円

〔国民同胞感の探求〕

— 第一編 —



落丁・乱丁のせつはい
つでもお取換えします

編者

大学教育有志協議会
国民文化研究会

編集委員代表

小田 村寅二郎

東京都港区赤坂青山南町四の二一

発行者

佐々木 隆彦

東京都新宿区赤城下町四六番地

東京都新宿区赤城下町四六番地

発行所

株式会社 理想社

電話東京三四一局 七〇〇六番
振替 東京 七八三〇三番

印刷 株式会社新榮堂・製本 山崎製本所

